
一色

相原ミヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一色

【Nコード】

N2341X

【作者名】

相原ミヤ

【あらすじ】

世界は色で満ちている。全ての生き物は己の色「一色」を持つ。色は力であり、色の力を発揮する色の石が存在する。色によって力が異なり、国は色を使って覇権を争う。ここは火の国。火の国には赤を司る色神紅があり、紅の生み出す紅の石によって豊かな国を作り出している。紅の石は赤色の力を発揮することができ、赤の力は熱を基本としたエネルギー。紅の石を使うことが出来る者を術士という。火の国の住民は皆、石を使う適性検査——選別を受けることが義務付けられている。術士に憧れを抱く十六歳の悠真であったが、

術士の才覚に恵まれず小さな漁村で生活していた。しかし、色神紅に敵対する官吏の争いに巻き込まれ、悠真の人生は大きく変わる。美しい色神紅と彼女を守る術士たちと出会い悠真は自らの色に気づいていく。

始まりの赤（1）

世界は色で満ちている。

八百万の色。

全ての生き物は己の色「一色」を持つ。

同じ色の無い一色。

それは人も然り。

色は力。

色は時に心さえ操る。

悲しみの色。

強さの色。

慈しみの色。

世界は色で守られている。

最も美しいのは何色か。

色たちは覇権を奪い合う。

決して終わることの無い色の戦い。

色は人を選び色を与え色神に変えた。

色神は石を生み出せる神に等しき存在。

色神が守る国は豊かとなる。

ここは海に浮かぶ島国。

火の国。

火の国には色神様がいる。

色神様は、司る色の石を生み出す。

火の国は、赤い国。

色神様の名は紅。

紅様は紅の石を生み出す。

紅の石は不思議な力を持つ。

火の国で最も偉大で、最も尊い紅。

この国で最も尊き色は赤。

潮の匂いが心地いい。波は砂浜に打ち寄せ、下がる。浜辺に木の船が上がり、甲板には魚が跳ねる。小さな漁村には何も無い。海岸に沿った家と、船乗りたちに道を示す灯台。山の子供が海に遊びに来て、手習いを教える塾は賑った。住まう人は温かい。捕れた魚を市街へ売りに行き、米や野菜を手に入れる。海岸沿いは山が連なり、畑を作るのには適さないが、豊かな里山は木の実や山菜の恵みを漁村にもたらず。時には、罨に猪がかかった。飼っている鶏は卵を産む。ここは、何も無いが恵まれた漁村。漁村には下緋がいる。下緋は、紅の石を使うことが出来る術士のこと。小さな漁村に、普通はいない術士。術士がいるのは、この漁村に灯台があるから。灯台が船に道を知らせるから。

紅の石は、強大な力を生む。光を生み、熱を生み、動力を生む。

紅が生み出す色の石。その石があるから、色神が国にいるから、火の国は豊かだ。外国も侵略することが出来ない。小さな島国が豊かさを続けることが出来るのは、一重に紅様のおかげなのだ。

悠真は漁村で生まれ育った。漁師の息子らしく、海で泳ぎ、山野を駆けた。ふんどし一枚で海に飛び込み、草履を脱ぎ捨てて砂浜を駆けた。洗いざらしの紺の着物に、結わえるのが面倒だからと髪は短く切っていた。悠真の祖父は漁師だ。父も漁師だったらしいが、悠真は父のことを覚えていない。悠真が三歳の時に海に吞まれて死んだのだ。祖父は悠真に言った。海の神の元へと帰ったのだと。だから海を恐れるなど。悠真の母は、悠真が五歳の時に死んだ。母が死んだ時のことは覚えている。母は風邪で寝込み、そのまま死んだ。こうして悠真は祖父と二人きりになった。

父と母がおらずとも、悠真は平気だった。祖父と一緒に海に出て

魚を捕る日々。読み書きも出来た。元来器用な悠真は、字が美しいと褒められた。年の近い女の子から声をかけられれば嬉しい。子供たちの相手をするのも楽しい。何より、酒を飲み上機嫌になった祖父の話聞くのが楽しかった。上機嫌になった祖父は禿げた自分の頭を撫でながら、悠真の知らない父や母の話をした。悠真の中の父や母の記憶はそうにして作られていった。そして、祖父と一緒に酒を酌み交わすのは、灯台を守る術士だった。

灯台を守る術士の名は「惣次」という。五十歳ほどの男だ。二年前に、この村に配属されてから、悠真は時間があれば遊びに行った。十六歳になる悠真にとって、紅の石を使うことができ、紅に近い存在に興味があったのだ。そして、色神紅が生み出す紅の石にも興味があった。紅の石を使うことが出来る術士になるには、生まれながらの才覚を要す。火の国に生まれた子供は、数え年が十になると否応なしに適性検査——選別を受ける。紅の石に見定められるのだ。残念なことに、悠真に術士の才覚は無かった。

惣次が悠真に話すことはとても興味深いことだった。紅を守る軍を朱軍、朱軍をまとめる將軍を朱将と言う。紅の護衛を朱護と言う。術士は緋の字を与えられ、術士の頂点に立つただ一人の存在「陽緋」。陽緋について、灯緋、大緋、中緋、小緋、下緋と続く。惣次は、術士の中でも最も下の下緋だ。しかし、悠真に下緋を侮ることは出来ない。術士の大部分が下緋であり、火の国全土に散らばるのも下緋なのだ。

「いいなあ、惣次は、術士になれて」
悠真は口癖のように惣次に言った。

「ここに配属前は、紅の石を憎んだもんじゃ。普通の生活をしてえ、術士の大半はそう思っておる。もしかしたら、紅様もそげえ思うところかもしれんの」

口癖のように術士にあこがれる悠真に、惣次は諭し続けた。

「この村は平和じゃから、この村にずっとおるのがええ」

悠真は惣次の言葉の本意が分からなかった。惣次が首に紅の石をか

けていることを、しっかりと見ていた。紅の石は、赤く輝き、灯台の明かりをつける。それは、摩訶不思議な光景だった。

世界は色で満ちている。赤、青、黄、燈、黒、白、紫……それぞれの色にも濃度があり、透明度があり、二つとして同じ色は存在しない。八百万の色。悠真は赤い太陽が好きだ。青い海が好きだ。薄青の空が好きだ。木々の緑が好きだ。黄土色の砂浜が好きだ。白い雲が好きだ。黒い夜空が好きだ。

幼い頃から、悠真は色が自分を見ているように感じていた。それは、色が力を持っているからかもしれない。赤い色は力を持つ。この火の国で最も高貴で、最も強い色。誰もが赤を讃え、赤を身に付けることは許されない。人の命は赤で動き、赤は熱を持つ。下緋の惣次は紅の石を持っている。力を持つ赤を身に付けている。悠真は、術士に憧れた。色の力を引き出し、色の力を制御できるから。

始まりの赤（２）

その年の梅雨は雨が多かった。幾つもの嵐が訪れ、海は荒れ、何日も漁に出ることが出来なかった。嵐なのに風はさほど無く、尋常じゃないほどの雨が降り続いた。砂浜には、流木や千切れた海藻が打ち上げられた。雨になると祖父の体の調子が悪くなる。悠真の祖父は年のためか、痛む膝をさすり、梅雨時期だというのに囲炉裏に火を入れていた。歩くのすら間々ならなくなった祖父を見て、悠真は胸が痛み晴天を望んだ。

嵐は、何日間も村の上に留まり続け、下緋の惣次は、灯台に籠り船が難破することを恐れていた。悠真が惣次に握り飯を届けた時、惣次は灯台から海を見ながら悠真に言った。

「嫌な感じじゃ」

惣次の言葉に、悠真は首をかしげた。

「紅の石が反響しておる。野江に勝つほどの力か……」

惣次が海を見る目に迷いは無かった。

惣次の目は、悠真に不安を与えた。多すぎる雨が地に帰ることなく山肌を流れ落ちてくる。大地が悲鳴を上げていた。

「非難しよう山が崩れるかもしれない。じっちゃんや村の人を呼んでくるから」

悠真が掃除に言うと、惣次は頷いた。

雨の中、悠真は走り、村の家の一軒一軒の扉を叩き、灯台への非難を勧めた。嵐の中では笠も蓑も役に立たない。風に耐えて、悠真は高い波が打ち寄せる海岸を走った。首を横に振るもの、悠真の言葉に耳を傾ける者、反応は様々だった。

「逃げれるもんから先に連れて行き」

祖父がそう言うから、悠真は逃げることに賛同した村の人を連れて灯台へ走った。子供を抱き、肩を貸し、何度も、何度も灯台と村を往復した。灯台の中は非難した人で溢れ、誰もが下緋である惣次を

頼っていた。非難をすることを決めた者の中で、残るは、悠真の祖父と数人の老人だけとなった。必然的に、老人が最後になるのは、散ることの美学を持つ火の国独自のことも知れない。田舎のこの村には、その精神が強く根付いている。

「もう一回行ってくる」

悠真は再び嵐の中、外へと出た。

灯台は海へせり出した高台にある。高台から石の階段を降りて砂浜を目指した。嵐の勢力が弱まることはない。夕方だというのに、外は夜のように暗く、雨は冷たく悠真の体力を奪い、海は大きな音を立てて唸る。地の底から響くような音。その音に、悠真は足を止めた。何か、大きなものが迫ってくる恐怖を覚えた。

直後だった。悠真は息を呑んだ。海岸に面した里山の大半が崩れ落ち、悠真の家を呑み、学び屋を呑み、船を呑み、村の大半を呑み込み、土砂が川のように流れ、微かな明かりに照らし出されるのは、茶色い世界。流れる土砂が大地を揺らし、全てを洗い流す。祖父が生きている可能性は皆無。土砂は思い出を刻んだ家を、両親が生きた証を、全てを洗い流す。迫る音。唸る地面。この世の光景でない。地獄絵図のような情景。

「そんな……」

悠真は言葉を失った。ごつごつした祖父の手の感触が未だに残っている。船の舵を操る逞しい腕も、禿げた頭も、酒を飲んで上機嫌に語る声も、父と母の位牌に手を合わせる後姿も、全てが鮮明に思い出される。その祖父の姿が瞬く間に茶色い土砂に呑み込まれた。二度と見ることが出来ないのだ。何かが悠真の中を通り過ぎた。茶色い色が、流れる緑の木々が、悠真の胸に迫った。

——果てしない孤独

悠真が感じたのは「孤独」だった。この広い世界でたった一人残されたような気がした。悲しみも絶望も感じない。何も考えられないのだ。世界の色が消えたような気がした。

「悠真」

悠真の名を呼んだのは惣次だった。惣次の手が悠真の肩に乗せられた。惣次の手の重みが、悠真の世界に赤い光を取り戻した。赤に導かれるように、少しずつ色が戻ってくる。

——色を憎んでは駄目よ

誰かが悠真に言ったような気がした。それは愛した村が消えた日の出来事だった。

「誰も生きておらん。紅の石が言うとする」

惣次はそう言うと、流れる土砂に手を合わせ、深く頭を下げた。

悠真たちは、灯台で身を寄せ合い朝を待った。その数、三十人ほど。村の人口の半分にも満たない。子供が泣き、眠りに落ちる。大人だけが不安を抱え、手を合わせる。無事に朝を迎えられるのかという不安。これからの生活に対する不安。下緋である惣次が持つ紅の石が淡く輝き、人々のやつれた顔を照らしていた。赤が人々に安らぎと勇気を与える。

「何も心配することない」

言ったのは惣次だった。

「今の紅は、とても聡明で優しい子。あの子に任しておけばいい」
惣次が言うから、悠真は未だ見ぬ紅のことを思い描いた。男なのか、女なのかも分からない。年も分からない。けれども、紅という存在だけは、火の国に生きるもの全てが知っている。もちろん、悠真も知っている。

「今の陽緋の野江は歴代最強の術士。美しく、術だけでなく剣技にも優れる。あの子だったら、多くの術士を束ねていける」

惣次は続けた。

「今の朱将の都南は、剣士としても、策士としても優れている。術は使えぬが、柴の鍛えた刀が補っている。多少荒っぽいところもあるが、不器用なだけ。他者に気遣いの出来る子だ」

惣次はそこまで言うと、村人たちを見渡し微笑んだ。

「紅を守る朱護頭の義藤は、若くて頑固だが頭の切れる子だ。術に優れ、剣技に優れる。子供の頃から紅を守るために戦い続けてきた。

生まれながらの才にも恵まれ、努力も惜しまない。数年後が楽しみな子だ」

惣次は紅を守る方々の名を知り、気安く呼んでいる。それは、今までの惣次の印象からは考えられないことだった。惣次は弱くて年をとった下緋で、それ以上でもそれ以下でもない。下緋は、術士の中でも最下の存在。紅に近づけるような立場でない。なのに、どうして惣次は知っているのか。そんな疑問を悠真は持ったが、それを問い詰めることは出来なかった。惣次の言葉が悠真を始めとし、村の人々に希望を与えているからだ。絶望的な状況でも、紅が守ってくれる。そういう希望が満ち始めた。火の国で生きる民にとって「赤」は希望の色なのだ。

「他にも学者の佐久やからくり師の鶴蔵、加工師の柴や、数え切れない子たちが紅を信賴し、支えている。何の心配も要らない」

惣次の言葉も田舎臭さが抜けている。噂でなく、惣次自身が紅を知り、紅の回りの優れた術士たちを知っている。悠真はそんな疑問を覚えたが、紅の話を聞いて心が和んだ。紅は色神であり、悠真たちが崇拝できる存在だから、紅という存在が疲れ果て、希望を失った悠真たちに光を与えた。赤い色を与えた。身を寄せ合い、濡れた体を乾かし、うつらうつらと悠真は夜を過ごした。祖父が死んだという実感はまったく無い。朝日が昇る頃、再び嫌な予感を覚えた。嵐は弱まることを知らず、再び地鳴りが響く。突然、惣次が人々を掻き分け、年齢を感じさせないほどの勢いで駆け出した。直後、高い波が灯台に迫った。大量の海水が窓を押し破り灯台の中へ入り、惣次の紅の石が輝き、風を巻き起こし水を防ぐ。しかし、それは一時のこと。紅の石の輝きが弱まった直後に、鋭く剥がれた木の柱が惣次の胸に突き刺さった。惣次の赤い血が飛び散り、悠真の頬につき、地鳴りが響き、山も崩れ始めた。紅の石はまだ水を防いでいる。それが、長く持たないことは明らかだった。一刻の猶予も無かった。

悠真は惣次と同じように人々を掻き分けて駆け出した。強い風と雨が悠真を阻もうとしたが、悠真は止まらなかった。悠真が惣次に

駆け寄ったとき、彼は息も絶え絶えの状態で、空を見たままの目に輝きはない。助かる見込みはない。悠真は何も出来ない。術士である惣次が何も出来ないのだ。悠真に何かが出来るはずがない。しかし、悠真は何かをしたかった。悠真の後ろには、生きることを切望している村の人たちがいる。親も祖父も亡くした悠真にとって、村の人が家族だった。

惣次の紅の石がそこにあった。

「……悠真、お前なら出来る」

惣次は倒れ、目を見開き悠真を苛烈な目で見据えた。駆け寄った悠真に、惣次は血で汚れた手で紅の石を差し出した。燃えるような赤。赤は美しい色のはずなのに、血の赤は少しも美しく思えなかった。残酷で、恐ろしい色のような。それでも、悠真は赤にすぎた。今の悠真を救えるのは赤だけなのだ。

——力を……

悠真は思った。手に紅の石を握り、願った。

——紅の石は、守る力があるはずなんだ。力を……

悠真の脳裏に死んだ祖父の姿が見えた。祖父と酒を酌み交わす惣次の姿が見えた。

——力を……

直後、悠真の視界が赤く染められた。赤い色が鮮やかに輝いた。体の中を熱い何かが駆け抜けていく。赤、青、黒、白、黄、橙、緑……。数え切れないほどの色が悠真の身体を駆け抜け、赤だけが、鮮烈に強く輝いた。

そこには風も雨も冷たさも無い。悠真は赤い光の中にいた。振り返れば、身を寄せあう村の人たちがいた。悠真の手の中の紅の石が輝き、強い力を発していた。

「ありがとう」

悠真は言った。それは、本来術士としての才覚がない悠真に力を貸してくれた、紅の石への礼だった。そして、村の人を守るために命を懸けてくれた惣次への礼だった。

「ありがとう」

悠真の頬を涙が流れた。助かったという安堵が悠真を包み込み、気づけば、惣次の紅の石は、色を失い砕けていた。それは惣次が死んだからなのかもしれないが、詳細は術士でない悠真には分からない。悠真は、紅の石に相應しい存在でないのだから。

赤との出会い

数時間後、長く降り続いた雨は止み、雲の間から太陽の光が差し込んだ。それと同時に、悠真の意識は遠のいた。助かったという安堵と極度の疲労がもたらしたのだ。

海之音が心地よい。潮の香りが心を満たしていく。しかし、体は燃えるように熱い。熱で節々が痛み、体が重く感じた。世界は赤く、熱い。赤い。赤い。燃えるように赤い。

——悠真

遠くで母の声がした。記憶の中に残された母の声は、いつまでも若いままだ。赤い世界の中で、悠真はもがいた。体が石のように重く動かない。目を開いても赤い色しか見えない。

——色は力を持つ。

惣次の声がした。

——紅の石は赤い色の力を引き出す。強大な力を引き出す。破壊しか出来ないと思う輩が多い中、よく守ったもんじゃ。

そこで悠真はゆっくりと思い出した。嵐が村を襲い、祖父が死んだ。惣次が死んだ。村は消えた。悠真は紅の石を使った。重く熱い体は、それが原因なのかもしれない。

赤い色は高貴な色。赤を纏える者は限られている。赤い色。赤い色。

——のお、小猿。

女の声がした。高圧的で、強い声。気高く、赤く響く声。悠真は辺りを見渡した。辺りは赤い世界。高貴な赤い色の世界。

——わらわの色に染まれ。小猿。赤が小猿を守るぞ。赤こそ、最も気高く美しい色じゃ。

赤い世界。赤い声。悠真は声の主を探した。気づけば、声の主は悠真の目の前にいた。赤い髪、色白の肌に赤い唇が栄えている。襟元

を大きく開いた着物は赤い色。赤い瞳。高貴な赤は彼女の色なのだと、悠真は悟った。

「色神紅」

悠真は彼女が紅だと思った。火の国の色神。この火の国は赤い色を司る色神紅を有している。強大な力を持つ赤い色は火の国の色だ。悠真が彼女を紅と呼ぶと、彼女は、けらけらと笑った。

——誰が紅じゃ。わらわは赤。色神ぞよ。紅はわらわの色を使い、わらわの色の石を生み出すだけ。わらわが赤。小猿、わらわの色になれ。他の色になるな。赤がもつとも強く美しい色じゃ。

赤と名乗った色神は悠真の顎に指をかけた。細い指はとても強かった。

——赤が小猿を守る。今度こそ、赤が世界を取る。悠真は彼女が何を言っているのか分からなかった。

——お下がりなさい。赤。まだ、この子は色を選んでいないわ。一つ、声が響いた。悠真は声の主を探した。澄んだ、無色な声。

——五月蠅い色じゃ。赤を選ぶのは時間の問題じゃと言うのに。赤はすつと悠真から手を引いた。

——この国は赤の国ぞ。赤い色を守る国。この国で生きる以上、赤の力を必要とするはずじゃ。いつでも貸すぞ。赤を選ぶのならの。わらわの色を選べ。

赤は悠真に言った。そして、美しく身を翻した。

——一つだけ。小猿がわらわの色を使い、他の色も小猿の存在に気づいたはずじゃ。ぐずぐずしておつても、他の色に狙われるだけじゃ。よう覚えておけ。色は動き始めた。

赤の大きな帯が優雅に揺れた。結い上げられた赤い髪。細い首のうなじが美しい。悠真は赤に心を奪われかけていた。

——悠真。

無色な声が悠真を呼んだ。

——容易く選んではいけないわ。赤は力の色。平和と戦いを生み出す。色が悠真を狙ってくるわ。火の国の外から全ての色たちが。大

丈夫、悠真が選ぶまで、私が悠真を守るわ。

何色でもない無色な声。悠真の心に住んでいるのは、何色でもない。悠真は色を持たない。それが分かった。赤い世界が無色な声に掻き消されていった。無色透明の、少し冷たい世界。熱された世界が冷えていく。とても心地よく感じるのは、それが悠真の色だから。

——色神紅に会いなさい。復讐とは関係なく。今の紅は優れた人だから赤に唆されることは無いでしょう。無防備なまま他の色に狙われるのなら、赤に身を寄せるのも良いでしょう。既に、私の色は動き始めたのだから。

その声は悠真を守る声。世界は動き始めた。田舎で平穏に暮らしていた悠真の世界は動き始めた。それが分かった。

赤の術士

「術士でないのに、術を使ってよく無事だったものね」

高く穏やかな女性の声が聞こえ、冷たい手が熱い悠真の頬に当てられた。すると、熱い体が徐々に熱を下げていく。先ほどの夢が嘘のようだった。悠真は夢を思い出した。よくもまあ、あれほどの想像を膨らました夢を見たものだ、と悠真は己に感心した。感心しながらも、悠真は目を開くことを拒んでいた。目を開けば、辛い現実が待っているに違いない。

「面白い子ね。——目をお開きなさい」

その言葉に惹かれるように、熱い体も冷えていく。強い力に引き上げられるように、悠真は目を開いた。夢が消えた。目の前には現実が待っている。

赤い羽織が風になびく。目を開いた悠真が見たのは、限られた者しか身に付けることが許されない赤い羽織だった。少なくとも、田舎で見る事が出来る羽織でない。悠真は赤い色の布を初めて見たのだから。悠真を覗き込んでいるのは、赤い羽織を肩にかけた女性だった。その手は悠真の頬に当てられている。

「陽緋様。村人はどちらへ？」

悠真の知らない男が、赤い羽織の女性に声をかけた。陽緋とは、最も強い力を持った術士を指す。「緋色」を与えられた術士の中の頂点。下緋の惣次よりも遥かに上の存在。

「市街へ誘導なさい。紅様への報告と官府へ復旧の要請を」

陽緋の指示に、陽緋よりも年は上だろう男が深々と頭を下げた。悠真は陽緋が腰から下げた刀に目を留めた。鞘も柄も、全てが朱塗りの美しい刀。赤を許された存在、それが陽緋。悠真は重たい体を必死になつて起こした。そこは灯台の中だった。崩れた壁と、布のかけられた惣次の亡骸——。村の人たちは、外へと出たようだった。起こした体が重く痛んだ。

「もう大丈夫ね」

陽緋は微笑むと、赤い羽織を翻して立ち上がった。赤い色が、胸に迫った。

惣次は陽緋を知っているように話していた。歴代最強の術士。剣技にも優れた存在。それが、目の前の彼女だとは信じられなかった。陽緋は惣次の遺体の前にしゃがむと、手を合わせ、深く、深く頭を下げた。尊敬する者の遺体に手を合わせているようであった。惣次の遺体に手を合わせていた陽緋は立ち上がり、身を翻した。陽緋に声をかけることは恐れ多いことだ。許されることでもないかもしれない。それでも、悠真は尋ねたかった。惣次が違和感を覚えた嵐の理由を、そして術士の中で頂点に立つ陽緋が、こんな田舎まで足を運んだ理由を。

「待つて」

悠真は陽緋の赤い羽織をつかみ、陽緋は首をかしげた。

「どうして、術士がここに……」

それは悠真の率直な疑問だった。陽緋は術士の中で頂点に立つ。都の紅城で、術士の指揮をとり、紅を守るのが仕事のはずだ。そんな陽緋がどうしてこの村にいるのか。

「それは、あたくしが術士の筆頭、陽緋であることを指しているのかしら。陽緋がここにいます。それを疑問に思っているのなら、返答は簡単よ。正体不明の何者かが、他者の紅の石を使った。そう知らされて、術士の筆頭のあたくしが出向いたまで。それだけのことよ」田舎者の悠真とは違う言葉遣い。細い手足に、萌葱の着物。深緑の袴。足元は悠真が初めて見た輸入物の長靴だった。下ろされたままの長い黒髪も目に留まる。何より目を引くのが、赤い羽織。もし、許されない者が赤を身に付けたのなら、それは厳しい罰則の対象となる。目の前の女性は、間違いなく陽緋だ。

「俺は……」

悠真は言葉を探した。悠真は紅の石を使うことが出来ないはずだ。術士の才覚には見放されていた。どうして、自分が紅の石を使えた

のか分からない。

「全ては紅が判断されることよ。あなたは下緋である惣次を超える力を使い、人々を守った。術士としての才覚に見放されたはずの、あなたがね」

そこまで言つと、術士の一人が陽緋に駆け寄った。

「佐久様より連絡が。分かり次第、状況を伝えて欲しいとのことですよ」

陽緋は静かな口調で言った。

「紅様と朱将と佐久に伝えなさい。間違いなく、青の石の力でしようね。誰かが青の石を使い、雨を降らせ続けた。あたくしたちの進入を阻み続けた者が犯人でしょう。朱が動く必要があるかもしれないわ。そして、惣次の死についても、紅様へ報告を」

術士が深々と頭を下げた。

——犯人。

悠真はその言葉を聞き逃さなかった。

「待てよ」

相手が陽緋であろうと無かろうと関係ない。悠真は聞き捨てなら無い言葉を陽緋の口から聞いたのだ。陽緋は怪訝そうに振り返り悠真を見た。

「犯人ってどういうことだよ。青の石って何だよ」

陽緋に苛立つのは間違っていることぐらい、悠真にも分かる。それでも、込み上げる感情を抑えきれない。消化不良の気持ちが込み上げてくる。

「嵐じゃないのかよ。雨嵐じゃないのかよ。犯人ってなんだよ」

それは自然の嵐のはずだった。雨の多い梅雨で、雨嵐がきたまで。多すぎる雨で、海岸沿いの崖が崩れたまで。「犯人」、「青の石」。それは、嵐が人災であるという発言。人災である以上、祖父も惣次も殺されたのだ。なぜ、二人は死ななくてはならなかったのか。なぜ、村は土砂に押し崩されなくてはならないのか。平和な漁村にどんな罪があるのだ。なぜ、村の人たちは死ななくてはならなかった

のか。一体、この村が何をしたというのだ。

「どういうことだよ！」

愚かな行為だと分かっているが、悠真は抑えることが出来ず陽緋に飛び掛っていた。

天と地が入れ替わった。非力な悠真には、何が起こったのかさえ分らない。振り上げたはずの悠真の手は、陽緋につかまれ、悠真は水溜りの中に倒れていた。陽緋は左手で悠真の手をつかみ、右手は朱塗りの刀に伸びていた。陽緋は、紅の石を使わずとも、容易く悠真の命を奪えるのだ。悔しくて涙が溢れた。祖父も惣次も死に、村は滅びた。悠真が愛した全てが無くなり、父と母の思い出も消えた。悠真は一人になった。悔しくて、哀しくて、悠真の目に涙が溢れた。そんな悠真を見たからか、陽緋が刀の柄にかけた手を離し、服が汚れることを厭わず、悠真の隣に腰を下ろした。

「泣きなさい。そして、前に進みなさい。紅の石のことも、今回のことも忘れて。あなたは、十歳の選別で才覚を見出されなかった。術士になる必要も無いわ」

陽緋の言葉は温かい。悠真の中の陽緋の姿は涙で歪んで見えた。悠真は元来、意志の強い性格。簡単に引き下がることも出来ない。

「知りたいんだ」

悠真は言った。目から溢れる涙は止まらない。

「どうして、こんな事になったのか。俺は、引きさがれない」
陽緋は困ったような表情をした。

「あなたは、紅の石を使っただ。それも、他人の紅の石を。術士が持つ紅の石は、持ち主にしか使用することができないように加工されているはずなのに。他者の石を使用できるのは、紅だけのはずなのに。もし、望むのなら紅城へ連れて行くことが出来るわ。あなたが惣次の紅の石を使ったという理由を付けて。けれども、よくよくお考えなさい。紅城へ足を運ぶということは、術士になるということです。今までのような生活は送れないわ。考えなさい。犯人を捜すのは、あたくしたちの仕事。あたくしたちは、必ず犯人を捜し出し罪

を償わせる。それでは、あなたの気は晴れないのかしら？」

陽緋は悠真を連れて行くことを避けたいようだった。惣次も言っていた。術士になっても、楽しいことは無いと。逃げることは容易い。現実を忘れ、新しい生活を始めることは容易い。そう思うと、目の前に変わり果てた惣次の死体が浮かんだ。なぜ、惣次は死ななくてはならなかったのか。なぜ、祖父は死ななくてはならなかったのか。今、新しい生活へ逃げたところで何も変わらない。生涯、二人の死に追いかけられるのだ。

「紅城へ……紅城へ連れて行ってくれ。俺は、犯人を見つけれ。だれが村を滅ぼしたのか、正体を突き止め、自分の手で復讐するまで、俺は生きることが出来ない」

——色神紅に会いなさい。復讐とは関係なく。

無色な声に唆されたのではなく、悠真は己の意志で陽緋に懇願した。陽緋は一つ息を吐いた。

「紅城へ連れて行くわ」

悠真の人生は大きく動き始めた。赤い色が悠真を包んだ。まるで、悠真を染めようとするように。

赤の術士（2）

陽緋は十人の術士を連れていた。そのうち九人が村人の誘導と救援、そして現場の確認に残り、一人が陽緋に従った。悠真は陽緋に連れられ、田舎では決してお目にかかれない、からくりを見た。術士が使うからくりは、普通の物と異なり、紅の石の力を動力にして動くのだ。陽緋は最も優れた術士。だから、陽緋が使用するからくりはとても強大なものだ。陽緋に連れられた悠真が見たのは、木造の船だった。大きさは中船ほどだが、船の側壁に翼のようなでっぱりがある。その船は土砂が崩れた山の上にあつた。陽緋が持つていること、そして山の上に船があることから、それが希少なからくりであることが分かった。

「この、空挺丸で紅城まで行くわ。お乗りなさい」

陽緋は身軽な動作で船に乗り、悠真は空挺丸から落とされた縄にしがみつかながら必死によじ登った。

陸に打ち上げられた船には、中央に小さな木箱が置かれていた。

悠真は甲板の隅に腰掛けた。陽緋は首にかけた紅の石を木箱の中に入れて蓋を閉じた。

「つかまっていなさい」

陽緋が言い、悠真は船にかけられた麻縄をつかんだ。直後、陽緋の紅の石は赤の光を放ち始めた。赤い色に呼応するように、共鳴するように船が振動を起こし始め、次第に赤の光は強まり、ゆっくりと、確実に宙に浮き始めた。

「浮いている……」

悠真は絶句した。紅城にはからくりを作る職人がいるという。紅の石の力を引き出し、紅の石の強大な力を制御する。有効に使う。陽緋の紅の石の強大な力を、からくりが制御し、宙に浮いているのだ。「すぐに着くわ」

田舎者の悠真が空飛ぶからくりに驚くのを見て喜ぶように微笑んで、

陽緋は言った。

火の国で空を飛ぶことは不可能だとされていた。それを可能にしたのが、強い力を持った陽緋と稀代のからくり師だ。悠真のような田舎者でも知っている。現在の陽緋が歴代最強と呼ばれる力を持っていることを。惣次も言っていたから間違いない。歴代最強という呼び方は、彼女の存在を蔽つたものに変わる。現に悠真も、現在の陽緋は、蔽つく渋い中年の男だと思っていた。しかし、目の前にいるのは、長い髪美しい女性。色白で細い手足は、華奢な印象を与える。悠真が瞬く間に地に伏されたことから、彼女が優れた武術の使い手であることは明らかだが、見た目からは想像できない。現に、風を切って進むからくり空挺丸を操作する彼女が、赤い羽織を脱いで、朱塗りの刀を置けば普通の女性。火の国では紅の石を使えるだけで、運命は変わる。紅の石が使えれば、必然的に将来は術士と決められる。悠真が懂れた特別な存在「術士」だ。

昨日までの雨が嘘のように空は晴れ渡り、眼下に広がるのは緑の山々と小さな村。そして田植えの始まった田。野菜を植えている畑。小川には水車が回り粉を引く。牛や馬に荷物を乗せた行商人が小道を歩く。漁村で育った悠真が知らない世界だ。

「あなた、名前は？」

陽緋が悠真に尋ねた。

「悠真」

答えると、陽緋はふわりと微笑んだ。

「悠真ね……。あたくしは野江よ。そもそも、あたくしの名を呼ぶ人など少ないのだけれど」

言われて悠真は思った。陽緋とは、称号である。彼女の名でない。それと同時に、惣次の言葉を思い出した。

——野江に勝つほどの力か……

惣次は知っていたのだ。陽緋の名が「野江」であることを、そして陽緋がここに足を運んでいることを。下緋は術士の中で最下の存在。その惣次が、陽緋の名を知り、陽緋が足を運んでいることに気づい

ていた。悠真は惣次という存在が分からなくなり始めていた。

「ねえ、野江」

悠真は惣次について尋ねようと野江の名を口にすると、陽緋野江に従う術士が刀の柄をつかんだ。その術士の刀は黒色だ。野江のような美しい朱塗りの刀ではない。

「陽緋様の名を気安く口にするな」

苛立つ術士を陽緋が制した。

「気にしないで。悠真は術士でないのだから。けれども、お気をつけなさい。紅城に住まう者の中には、頭の固い輩も多いから」

野江は風を含む髪を押さえながら言った。野江は気安いけれど、高貴な人だ。風になびく黒い髪も、権威を象徴する赤い羽織も、全てが野江を美しく見せている。

「どうして、俺を連れて行ってくれるんだ？」

悠真は野江に尋ねた。野江は悠真に対して、とても親切にしてくれる。

「あの村の下緋に、惣次といたでしょう。彼はあの村を、そして悠真にとても感謝していたからよ。でも、覚えていなさい。復讐に走ると身を滅ぼすわ。紅城に着いたら、大人しくしていなさい。それが、悠真の身を守るころになるから」

陽緋のその言葉が、悠真の胸に残った。野江の口から惣次の名が出る。確かに惣次は術士として野江の知る人であるのだ。悠真の故郷を愛してくれた惣次は、陽緋の知る存在なのだ。それがとても誇らしく思えた。

空挺丸は、風を切りながら空を飛んだ。

数時間飛び続け、開けた場所へと出てきた。そこは、家々が立ち並び大きな道は馬や人が往来していた。悠真は自分が田舎者と呼ばれる理由が分かったような気がした。想像していたよりも、市街はずっと都会だった。大きな建物も整備された道も、行き交う人々の活気も、悠真の故郷と異なる。ここが同じ火の国なのかと、悠真は思わず息を呑んだ。

「あれが紅城よ」

陽緋が指差した先には、赤い瓦と朱塗りの柱が美しい城が見えた。名の通り「紅城」である。火の国を守る赤い色を司る色神紅。紅が住まう城だから、赤い色が許されている。しかしそれは、悠真が想像していたよりもずっと荘厳で、悠真が想像していたよりもずっと赤が輝いていた。

野江が操る空挺丸は、紅城の庭の一角に降り立った。紅城は高い朱塗りの堀に囲まれ、降り立った庭には白い砂利が敷き詰められていた。目の前に迫る城は大きく、幾重にも重なる屋根が印象的だった。空挺丸が舞い降りると、人が走りよってきた。

「陽緋様、御任務お疲れ様でした」

走りよってきた数人の人は、地に膝をついて深々と頭を下げた。野江よりもずっと年齢の上の者たちが、深々と野江に頭を下げるのだ。当然ながら野江は陽緋。悠真たちが否応なく尊敬する術士の頂点に立つ存在。気安く話しかけることができる存在ではない。

「こちらの変わりには？」

野江が尋ねると、先頭に膝を折った者が答えた。

「大事ありません。紅様がお呼びです。一刻も早く来るように、とのことです」

野江は空挺丸から飛び降りた。赤い羽織がひらりと風に舞う。音もなく美しく着地した野江は、空挺丸に残る悠真を見上げて微笑み、すぐに視線を膝を折る者に戻した。

「分かったわ。すぐに参りましょう。——空挺丸の整備と、悠真のことをお願いするわ」

すると、先頭に膝を折った者が言った。

「それが……紅様よりのご伝言では、陽緋様が拾ってきた小猿も一緒に連れて来るように、とのことですよ」

野江は苦笑した。

「何でもお見通しなのだから。悠真、一緒にいらっしやい」

悠真は野江に言われるがまま、空挺丸から飛び降りた。紅城の地に

足をつけると、体に赤が染みこんでいくように思えた。確かにここは、赤の色神のいる場所だ。何よりも赤が輝いている。悠真はそう思った。

赤の城

紅城は天守閣を持つ大きな城。朱塗りの柱に白い壁が美しい。板張りの長い廊下は塵一つ落ちておらず磨き上げられている。障子の隙間から見える部屋は、一面畳が敷き詰められ、部屋の中で書物を広げて仕事をする人の姿も見えた。悠真は、高価な畳を見たのは初めてだった。幾重もの階段を上り、廊下を進む。そこは張り巡らされた策のように複雑で、紅を守っているようだった。悠真は粗末で泥だらけの着物を着ていることが恥ずかしく、穢れた自分が歩くことで城を汚しているような気がした。すれ違う人々は、野江に深々と頭を下げていくが、悠真は自分が笑われているような気がした。「悠真は自分で紅城へ足を運ぶことを決めたのでしょうか。前を向きなさい。あなたは、思ったまま走り出す。そのほうが自然であなたらしいわ」

野江の言葉は的を射ていた。

上へと昇り、窓の外に広がるのは壮大な景色。長い廊下の先に一つの木枠の扉があり、扉の前には若い男が座っている。片膝を立て、野江と同じ、柄も鞘も赤い朱塗りの刀を立てて持っていた。年齢は野江より下。悠真よりは上だろう。藤色の着物に、やはり赤い羽織が印象的だった。赤い羽織を着ていることから、扉の前の若い男も紅に近い存在だろう。そして、高い地位を持っている。若い男の目が、じつと悠真を見ていた。

「調子はどうかしら？義藤」

野江は若い男を義藤と呼んだ。野江が気安く呼ぶから、悠真は彼が野江とも近いのだと感じた。そして、惣次の話からも義藤の名が出てきたことを思い出した。惣次は、今、悠真の目の前にいる男のことも知っていた。ますます、惣次のことが分からなくなった。同時に、悠真は目の前の男が恐ろしく感じた。まるで、抜き身の刃。鋭く、近づくものを傷つける。悠真は喉元に刀を突きつけられたよ

うな錯覚を覚えた。

「それは俺に対してのことですか？それとも紅に対してのことですか？」

悠真は義藤の言葉に戸惑った。彼は、紅を呼び捨てて呼んだ。ここは、陽緋の野江の本名を呼ぶだけで睨まれる場所。そんな中で紅を呼び捨てにすることは、ありえないこと。悠真の目の前にいる男は、色神紅と近しく、色神紅を呼び捨てにできる存在なのだ。

「大仕事を終えて戻ったあたくしに、労いの言葉の一つも無いのかしら？」

野江は立ち止まることなく前に進んだ。

「俺は、その小猿を信用できないので」

義藤は鞘に入れたままの朱塗りの刀を差し出し野江の行き先を阻み、野江はその行為に不機嫌さをあらわにした。悠真は自分が信頼されていないことは、紅城へ足を運んでからずっと感じていた。誰もが見せる敵意と不信感。ただ、野江と一緒にいるから野次を言われることも無く、取り押さえられることも無いというだけだ。術士の筆頭陽緋である野江は、それだけの権威を持っている。そんな野江に逆らうのは、命知らずの愚か者のすること、もしくは野江と同等の立場にある者のすることだ。抜き身の刃のような義藤はおそらく後者だ。隠し切れない品の良さを義藤は持っている。田舎者の悠真とは異なる品の良さが彼にはあるのだ。

「この子をここへ招いたのは紅よ。軽率な真似はお止めなさい。それに、あたくしの目を疑うつもりなのかしら？」

野江の声色はいつも同じだが、言葉の端々に苛立ちを隠していた。「どんな理由で、小猿を招いたのか分からない。俺は朱護だ。紅を守る」

義藤は、まっすぐな人のようにだった。陽緋の言葉にも意見を変えようとしない。そんな義藤がおかしいのか、野江が苦笑した。

「悠真は惣次の石を使ったわ。不思議よね。他者の紅の石を使えるのは、紅だけのはずなのだから」

義藤は一度悠真を睨み、再び野江に目を戻した。

「ならば、なおのこと紅には近づけられない」

もちろん、悠真も敵意を向けられることに苛立った。義藤は悠真を害のある敵だと認識しているのだ。敵だと認識される覚えは悠真にない。なぜなら、悠真は家族を失い、故郷を失った。被害者であり、復讐者なのだ。感情は混乱し、苛立ちは隠せない。紅城という権威ある場所に足を運び、赤い羽織を許された立場のある人々に直面しても、怯むことは許されない。

「ちよつと待てよ」

悠真は足を踏み出した。このまま斬り殺されるかもしれない。それでも悠真は構わなかった。あの嵐の日に、失いかけた命だ。未来は土砂に流され、未来は祖父や惣次と共に死んだ。この場に己の血を流し、紅の顔に泥を塗りたかった。一歩足を踏み出した悠真と同じように、義藤も軽く腰を浮かせた。

「おやめなさい、悠真」

野江が悠真の前に手を出し、行く手を阻んだ。

「あなたもよ。刀を引きなさい、義藤」

野江に従うのではなく、彼自身の意志で義藤は刀を下げた。義藤は、本当に悠真の命を奪おうと思えば、野江の制止に従うはずがない。悠真に強い敵意と殺意を向けつつ刀を下げる。何を考えているのか分からない人だと悠真は思った。悠真には、義藤の行為が、紅が悠真を試している一貫のように思えるのだ。そんな悠真の気持ちを知ってか知らずか、野江は小さく微笑み、廊下に膝をついた。

「座りなさい、悠真。紅の前よ」

野江に言われて、悠真は慌ててその場に正座をした。汚れた服の土が、廊下に汚れを落としていく。野江と義藤が深く頭を下げるから、悠真もそれに習って頭を下げ、ゆっくりと流れるような所作で義藤が襖を開いた。

赤の色神紅（１）

むせ返るほどの香の匂いが、襖を開くと同時に辺りに漂った。悠真の心臓は嵐の海のように激しく脈打っているのに、頭は晴天の空のように冴え渡っていた。紅は色神。この火の国の頂点に立つ。紅に面通しを行うことは、普通の人生ではありえない。誰もが感極まるはずだ。なのに、悠真は紅に対して尊敬の念は抱いていない。故郷を、家族を奪った存在をどうして尊敬することができようか。悠真はそれほど大人でない。頭を下げたまま視線だけを上に上げてみると、朱塗りの部屋が見えた。それ以上はどんなに視線をあげても何も見えない。それが、自分と紅との間にある長く、果てしない距離のように思えた。

「野江、よく戻った。どうだった、惣次が最期の人生を生きた村は？」

穏やかな男の声が響いた。その声はどこか悠真に惣次を思い出させた。

「壊滅していました」

野江が答えた。悠真は声の主が紅なのと思った。紅は色神だ。通常は紅が男なのか女なのか、若いのか老人なのか知らない。ただ、その穏やかな声の主は色神の印象とは異なった。この部屋に満ちる鮮烈な赤い色と穏やかな男の声は印象が異なるのだ。不思議な気分だった。何より不思議に感じたのは、その声がとても惣次に似ていたからかもしれない。穏やかさが、大きさが、包み込むような広がり、祖父と酒を酌み交わしているときの惣次と同じだったのだ。むせ返るような香の匂いも、男とは不釣り合いだ。

「そうか……惣次は死んだんだな。最期まで紅の石を使い続けるとは、惣次らしい」

僅かに男は苦笑していた。紅であろう男は言った。その声がとても哀しげで、色神が下緋の惣次を案ずることが意外だった。

「はい。そして、惣爺の石をこの子が……」

野江が悠真を指した。悠真は頭を下げたまま、二人の会話を聞いていた。耳だけで部屋の中の様子を感じ、部屋に満ちる鮮烈な赤を全身で感じようとしていた。その二人の会話に割り込むように、気高く高貴な声が響いた。

「遠爺、わらわにもしやべらせよ。義藤、野江、顔を上げよ。よう戻ったな、野江」

それは、女性の声のようで、少年のような、不思議な声だった。確かなのは、その声が発せられると部屋に満ちる鮮烈な赤が一層強まるということだ。赤い声が花開き、赤い声が部屋の空気をすべて変えていく。

「気遣い痛み入ります」

野江が答えた。悠真は紅に顔を上げることが許されていない。何も見ることが出来ないから、悠真は耳で必死に辺りを探った。この部屋には惣次と似た声の男と、高圧的な女性がいる。どちらが紅なのか、悠真は想像がついていた。このむせ返るような香の匂いも、目を逸らしたくなるような存在感も、赤に相応しいのは彼女だ。悠真は赤を感じていた。襖が開いたときから感じた色。包み込むような大きく鮮烈な赤が目の前にあった。

「わらわに分からぬことなど、何もあらぬ」

悠真は彼女が紅であると思った。高貴な香の匂いがそれを示していた。香の匂いも、気高い言葉も、全てが彼女は紅であると示していた。

「あら、そうだったわね」

野江は苦笑していた。

「どうであつた？」

一言、彼女は言い、野江は答えた。

「漁村は壊滅です。生存者は三十余名。降り続く雨に山が崩れましました。山が崩れるまで、あたくしたちは中に入ることが出来ませんでした。外部からの進入を阻みつつ、内部で雨を降らせていました。」

隠れた術士がいるのでしょうか。それも、強大な力を持った。先代前の紅の石を隠れ持つ者は限られています。おそらく官府の仕業かと――一言、付け加えるのなら、村を破壊して相手を殺してでも止めろと言われればできなくともありませんでした……」

まるで自らの実力を伝えるような野江の発言に、苦笑する紅の声が聞こえた。

「分かつておる。野江はわらわの自慢の、歴代最強の陽緋じゃ。野江の力は信じておる。しかし、相手も相手じゃ。わらわを引きずり出すために、そこまでするとは。愚かな奴らよ。したところで、わらわは要求を呑まぬのに」

その言葉で、悠真の中の何かが結びついた。祖父が死に、惣次が死に、村が滅びた理由が結びついた。全ては、紅に関すること。紅が何かの要求を拒否したから、村は滅び、悠真は大切な者を失った。悠真の中の何かが沸々と沸き起こった。憎しみ、絶望、全てを巻き起こし大きな波を作り出していく。村を滅ぼしたのは、紅だ。間違った矛先を向けていることは理解している。けれども、自分を抑えることが出来なかった。

「あんたが……」

村が滅んだのは、紅のせいだ。悠真は顔を上げた。叱責され、処罰されるのは覚悟の上。今の悠真は、それを考える余裕がない。目の前に広がるのは、朱塗りの壁が鮮やかな小部屋。畳みの緑色が朱塗りの壁の鮮やかさを際立たせ、小窓から光が差し込み、部屋の中を照らす。一段高くなった奥にかけられた簾は半分開けられ、ひじ置きにもたれかかるように、しどけなく横たわっているのは、紅色の着物が鮮やかな女性。黒髪は結い上げられ、紅い簪が美しい。赤が高貴とされる火の国では、唇に紅をさす人はいない。鮮やかな口紅と、紅く線が引かれた目元がとても魅力的だった。妖艶で、儚い。悠真は彼女以上に化粧が似合う人进行い浮かべることが出来なかった。間違はなく、それは紅。誰よりも鮮烈な赤を持っている。紅は夢に現れた赤とどかがと似ていた。高圧的な雰囲気と同じだ。紅の

横に控えるように、惣次と似ている男が座っている。惣次と似ているが、惣次とは異なる。赤く美しい羽織が二人の違いを示していた。惣次は死んだ。同一人物のはずがない。それに、下緋の惣次と赤い羽織を結びつけることが出来なかった。

——赤は美しい色じゃろ。

夢に現れた赤の声が悠真の脳裏に響いた。憎いはずなのに、悠真の目は彼女を見つめ、心は彼女を捉えていた。とても美しい人。赤が鮮烈に悠真の心に刺さる。赤が視界に煌く。

紅は赤い煙管を口にくわえていた。煙管を持つ指先の爪は紅く塗られ、身を預けるひじ置きの際には火鉢と香立てが置かれていた。

「あんたが滅ぼしたんだ！」

愚かな行為だ。悠真は、感情に任せて紅に飛び掛った。野江の隣を駆け抜け、義藤の隣を通り抜けようとした。悠真は野山を駆けて育たなかった。筋肉が躍動し、心臓が高鳴る。強い緊張の中、復讐心だけが、悠真を突き動かしていた。何もしなければ、悠真は物と同じだ。再び生きるため、夢を見るため、現実を走るため、悠真は目の前の紅を憎んだ。紅を守る義藤が体を起こす。世界がゆっくりと動き、悠真の耳に自分の呼吸の音が響く。

「うわあああ！」

悠真は己を奮い立たせるために大声を上げ、何かに取り付かれたように、悠真は義藤の隣を駆け抜けようとした。しかし、相手は紅を守る存在。火の国でも卓越した力を持っている。

「愚かな」

一言、耳元で響いた。荒立つ悠真の感情とは逆に、義藤の声は静かで、水の上に生じた小さな波紋のようであった。

白刃を首に突きつけられ、悠真は身動き一つとることが出来なかった。義藤は悠真を容易く制し、格の違いを否応なしに感じさせられた。抜刀した義藤が悠真と紅の間に割って入り、悠真に白刃を突きつけるのに要した時間は一瞬のこと。野江に地に倒された時と同

じように、悠真は何が起こったのか分からないのだ。

「わらわが何を滅ぼしたと？」

紅がゆつくりと体を起こした。紅が動いたたびに、鮮やかな赤い色が動く。そして、悠真の喉に白刃を突きつける義藤に言った。紅の声は赤く輝く。

「義藤、案ずるでない」

そして紅は悠真に言った。

「そちは、生き残りとな」

紅の持つ煙管から、白煙が上がっていた。紅の動きの一つ一つが優美で、悠真の心を惹き付けた。歩く姿が気高い。流すような横目が美しい。あまりに高貴で、あまりに気高い。それが紅なのだとしていた。彼女以上に、赤が似合う存在はこの世界にいない。憎い。紅が憎い。赤が憎い。なのに、美しさから目を離すことが出来ない。「わらわに何の罪があると申すのか？」

紅は優雅に微笑み言った。赤い口元がほろりと綻ぶ。

「野江。小猿を連れてくると決めたのは野江じゃ。何が野江を動かした？」

紅の持つ煙管が野江を指した。紅の白く細い手が持つ煙管がゆらゆらと白い煙を上げていた。朱塗りの下地に金の装飾が施された、美しい煙管だ。

「まあ良い、ここへ小猿を招いたのはわらわじゃ。小猿の村が滅びたのは、わらわに要求を吞ませようとした者に違いない。そこに惣次がいると知っておったのじゃろう。わらわたちが惣次まで見捨てるとは、相手も思っておらんじゃったじゃろうな」

悠真は紅の口から下緋である惣次の名が出てきたことに疑問を持ったが、何も問うことが出来なかった。何も問えない自分。無力な自分。目の前には、紅がいる。果てしない怒りが込み上げてきた。紅は知っていたのだ。要求を吞まないことが、村の滅亡につながることを。紅だけでない。野江も、義藤も知っていたのだ。知っていて、見捨てた。紅は高貴な存在だ。色神であり、火の国を支える唯一無

二の存在。だからと言って、悠真にとっては見知らぬ人だ。村の方が大切だ。村を見捨てた彼らが許せなかった。

「だから、あんたが殺したんだ！」

悠真の感情が爆発し、色が悠真を包んだ。一つ、赤い色に悠真は心の中で手を伸ばした。

——わらわの色を貸そうぞ。

赤が悠真に言った。悠真は赤の声に心の中で頷いた。

赤の色神紅（２）

祖父は悠真が幼い頃から口癖のように「心を平静に」と言っていた。悠真はそれが出来ず、小さな頃は、年上の子供に食って掛かった。喧嘩をして、負けたことは無かった。負けず嫌いなのは、悠真の性分だ。誰かに自分という存在を否定されたり、踏みにじられたくない。

（そうやっておったら、大事なもんを見落としてしまう。色は力を持つ。その色を支配するものは、どれだけの力を持つんかのう……誰もが、己の一色をもっており。同じ赤を持つ人であっても、色が異なると。負けず嫌いで喧嘩っ早い悠真の色は、どんな色かのう？）悠真が一度、悠真に言った。感情に任せて、殴り合いの喧嘩をした後のことだった。

（色は力を持つんじゃ。その中で赤は強い力を生み出す。赤は強い色じゃ。強い分、己を守り、相手を傷つける。赤い色がなければ、生き物は生きられん。命は赤で支えられておる。悠真の体にも赤は流れ、植物は緑で満たされ、空は青で輝く。色の中でも赤は強く、美しく、残酷な色じゃ。だから人は赤を敬い、赤の力を知らねばならん。この紅の石は、色神紅が一日ひとつだけ生み出す石。原石がさらに力を発揮し、むしろ術士が使えるように加工師が加工する。強い術士ほど強い石を持つ。だから術士は忘れてはならぬ。その力は、命を奪うほどの力であることを。悠真が術士であったとして、悠真は命を守る術士になるのか？命を奪う術士になるのか？）

惣次は紅の石を撫でながら赤い色の力を悠真に教えてくれた。赤い色は強い力を持ち、命には赤が流れている。そもそも悠真は、術士の才覚に恵まれず選別から落ちた。どれほど術士に憧れを抱いても、術士になる夢はかなわない。だから、悠真は惣次の話をあまり聞いていなかった。

目の前に赤い色が迫った。赤は力だ。相手を傷つけ、憎むものを

遠ざける。だから悠真は赤を求め、復讐の力となる赤を求めた。探すまでもなく、目の前には、義藤の紅の石があった。その紅の石が鮮やかに輝き、色が迫り、強い光と熱が辺りを包んだ。悠真は義藤の赤になる。

——おやめなさい、悠真。

無色な声が悠真を制した。しかし、悠真は止まらない。己を止めることが出来ない。己の体に赤が広がっていくことを感じながら、悠真は赤に身を浸した。

——赤

——赤

——赤

高貴な赤い色が目の前に迫った。

「お止めなさい！」

野江の声が響いたが、悠真は抑えることが出来なかった。溢れ出る力を制御できない。義藤が首から下げていた紅の石は強大な力を発し、紐は切れ、義藤が吹き飛ばされて壁に叩きつけられた。

「お止めなさい！」

振り返れば、野江が紅の石を使い、悠真を押さえ込もうとしていた。畳みが剥がれ宙に浮く。野江の言葉で冷静に戻った悠真は止めようしたが、止めることが出来ない。溢れ出る力がそこにあるのだ。野江の紅の石の力と、悠真のせいで暴走した義藤の紅の石の力がぶつかり合い、渦を巻いていた。

「悠真！」

野江の声が響いたが、悠真の世界は赤で埋め尽くされていた。義藤の紅の石が悠真に力を与えているのだ。赤い世界。渦を巻く力。

「他人の石を使えるとは。やはり、連れてこさせて良かった。遠爺も同じ意見だろ」

その声は間違いなく紅の声。悠真の赤の世界に、紅色の着物を着た紅が入ってくる。歩き方はしどけなく、それでも美しい。強大な力が渦巻く中、どうして紅が普通でいられるのか分からない。紅の周

困だけ、赤い色が弱まり、彼女は足を進め、紅の着物を引きずりながら、ゆつくりと簪を引き抜いた。長い黒髪がはらりと落ちる。力が渦巻く中でも、紅だけは別世界に存在しているのだ。紅が紅の石の力を収束させていく。

「私は、紅だ。私以上の紅の石の使い手なんているはずが無いだろ。術士は色の力を引き出すことしか出来ない。けれども私は色神紅。紅の石を収束させることができ、いかなる紅の石も使用することが出来る。加工された石であってもそれは然り。赤は、私の色だ。――

――赤、なぜ小猿に力を貸す」

紅が簪を地に捨て、悠真の手をとった。色白の細い手は、少し冷たかった。

「俺は、俺は……」

悠真に満たされていた赤が少しずつ収束されていた。どんな赤い色であっても、色神紅の前では逆らえないようであった。憎しみの赤を、紅が慈しみの赤へと変えていく。紅の持つ赤い色は誰が持つ赤よりも美しい。

「村を壊滅に追い込んだ者は、必ず捕らえてみせる。お前が手を汚す必要もない」

紅は断言し、微笑んだ。赤い色が綻び落ち、悠真の心を和ませた時、悠真の体の力は抜けた。思い起こせば、悠真は赤い色の牢獄にいたような気分だった。全ての感情が憎しみの赤に染められていき、そこから紅が救い出してくれたのだ。安堵と疲労と虚脱感で悠真は立ち尽くしていた。

赤の色神紅（3）

紅の部屋は元の形を保っておらず、部屋の端で義藤が倒れていた。野江が慌てて義藤に駆け寄り、体を起こしていた。紅の石の暴走の最も近くにいた義藤が無事だとは思えなかった。

「遠爺、大丈夫か？」

紅は振り返り、控えていた惣次似の男に言った。男は先ほどの騒ぎが嘘のように、整然と座り、赤い羽織にかかった埃を払っていた。

「問題ない。まだまだ現役だ。それで紅、お前は思う？惣次の石を使った子供は、義藤の石まで使った。これは加工が悪いという言い訳は出来ないぞ。義藤の石は、柴が加工したんだろ。柴が加工を誤るはずが無い。紅、お前だけのはずだ。他人の紅の石を使えるのも、他人が使った紅の石を収束させることが出来るのも……。それは色神の特別な力のはずだ」

紅は頷き、苦笑しながら悠真に言った。

「紅の石は、持ち主に合わせて作られている。誰の物でもない石ならば未だしも、義藤のために加工された石を使うとは、どういう体の仕組みをしているんだ？実力者義藤のために、我が国最高の加工師の柴が加工した石だ。小猿、お前は私と体等の力を持つつもりか？」

第一印象のような、他者を見下す高圧的な仕草は無く、そこにいたのは普通の人。親しみやすく、人の中心にいるような存在。それが今の紅。悠真の不信感を察知したかのように紅は言った。

「ああ、あれは理想の紅像、その一だな。他にもその二、その三と続くから、いつか見る機会があるかもしれないな。——それで、野江、義藤は？」

紅は振り返り、野江に言った。

「問題ありません。今は気を失っていますが……」

紅は一つ息を吐いた。義藤の無事を知り、心底安心したらしい。

「義藤には、いつも悪いことをしているな、私は。本当に良かった」
紅が安堵したように微笑み、野江が苦笑していた。

「それなら、義藤に迷惑や心配をかけるのをお止めなさいな」

すると、紅は困ったように俯き、話題を変えようとしているように悠真に言った。

「それで、義藤の石を返してもらおうか」

悠真は逆らいがたいものを感じて、義藤の紅の石を紅に手渡した。

騒ぎの音を聞きつけてか、人が走ってくる音が聞こえ、紅は廊下の先を見て言った。

「野江、悪いが対処してくれないか？佐久と都南以外は入れるな」
「分かりました」

野江は紅に一度、頭を下げて廊下へと駆け出した。

状況が整理できず、身動き一つ取れない悠真を横目に紅は義藤に歩み寄り、容易く膝を折ると、義藤の肩を揺すった。その姿が、色神紅の印象とかけ離れていた。彼女は紅のはずだ。赤い色に愛されている。彼女が放つ赤い色は、誰よりも美しく、力強い。そんな紅が使用人の義藤のために容易く膝を折のは、とても意外な光景だった。

「義藤、義藤。大丈夫か？」

義藤は小さくうめき声を上げて、慌しく体を起こした。義藤は抜き身の刀のような顔立ちをしている。目も、声も、仕草も品が良い。義藤は良家の息子かもしれない。荒々しいのに品が良いのは、彼の育ちでなく生まれが良いからだろう。

「紅！」

そして義藤は素早い動作で刀をつかんだ。

「義藤、問題ない。悪かったな、危険な目にあわせて。協力してくれてありがとう。ほら、義藤の石。騒ぎは野江が対処している」

言って紅は、義藤の石を彼に返した。義藤が心底安堵したように、深く息を吐いた。

「信じられない、俺の石を使うなんて」

警戒の色を隠しきれない義藤を紅が止めた。

「信じられないから、ここまで連れてきた。そして、試したんだ。柴が加工した義藤の石を目の前に出して。義藤も目の当たりにしただろ、自分の石を使う様子を」

紅が言い、義藤はそれ以上何も言わず、彼女は立ち尽くす悠真に言った。

「私だって、好き好んで村が滅びるのを受け入れたわけじゃない。最善の策を練り、全力を尽くした。それが、この悲惨な結果だ。名前は悠真だったな。私は野江から報告を受けた。惣次の石を使い、村人を守った者がいると。だから、私は野江に命じたんだ。その奇妙な力を眠らせておくか、自らの意志でここへ来るか決めさせるとして悠真はここに来た。その力も証明した。安心しろ。野江が情報を持ってきた。必ず犯人は見つけ出す」

義藤は不審そうに悠真を見たが、何も言わなかった。彼にとって、紅が全てであるようだった。

「紅、それよりもどうやって誤魔化すつもりだ？騒ぎ立てられるぞ」悠真に対する警戒を解いていない義藤は散らかった辺りを見渡した。

「そうだな、義藤。後は任せた」

紅は優雅に微笑み、呆れているのは義藤だ。

「まったく、あなたはいつも無茶をする。小猿の力を試すとか言つて、わざと苛立たせるようなことを言つて……」

不満を口にする義藤を紅が一喝した。

「義藤、黙っている」

二人の間に、色神と護衛以上の親密さを悠真は感じた。

義藤は慌しく部屋を片付け始めた。畳を元の場所に戻し、壊れた物を小部屋のさらに奥へと押し込めていく。同時に、新しい物と次ぎ次と出していく。誤魔化しきれない場所は、物を動かし器用に隠していく。慣れた動きが印象的だった。

「紅、すぐに片付けられないところは、後で佐久と都南と一緒に片付ける」

紅は部屋の中央に座り、慌しく動く義藤を見ており、悠真は相変わらず、部屋の片隅で立ち尽くしていた。

しばらくして野江が戻ってきた頃には、部屋はすっかり片付けられ、野江は片付けられた部屋を見て苦笑した。

「義藤、あなた片付けるのが上手になっているのね」

義藤はむっと押し黙っていた。もしかしたら、義藤は片付けに慣れているのかもしれない。

「野江、悠真を連れて行ってくれ。村を滅ぼした犯人は、必ず再び動き出す。今度は、私を狙ってな」

紅は不敵に笑った。

「それよりも、遠爺。惣爺が死んだ。休んでも構わないが？」

紅は黙って控えていた惣次に良く似た男に言い、男はゆっくりと口を開いた。

「惣次は二年前に死んだ。今更、何も変わらない。ただ、惣次の便りに書かれていた美しい村が滅び、気の良い海の民が死に、気の合う子供が無茶をする小猿になってしまったことがとても虚しいだけだ」

男は惣次と良く似た顔で、惣次と良く似た声で、惣次と良く似た口調で言った。悠真は男と惣次の関係が気になった。男は惣次と便りを交わす仲だ。悠真の知らない惣次を知っている。なのに、惣次が死んだことに涙一つ見せず、平然としている。それがとても機械的で、無感情のように思えた。

「野江、最初に小猿を連れて来ることを決めたのは、野江だ。相手をしている」

惣次と良く似た男は、悠真のことを「小猿」と呼んだ。惣次と似ているからこそ、無性に悲しくなった。

赤の仲間（１）

悠真は野江と共に紅の部屋から退室した。義藤は退室するのも気に留めず、さらに片づけを続けていた。どうやら、義藤は生真面目な性格らしい。悠真と共に退室した野江は悠真を連れて歩いた。泥だらけの悠真は、野江の命令で風呂に押し込められた。田舎物の悠真が初めて見る大きな風呂場だった。初めて使う大きな石鹸と麻布で体を洗い、湯船を使うと体が温まり、心がほぐれた。湯に入っていると、先ほど会った紅の姿が悠真の脳裏に浮かんだ。理想の姿その一と呼んだ、第一印象。赤色が誰よりも似合う存在。強く何者も恐れないような第二印象。赤色が鮮烈に蘇り、心を赤色に染めていく。

「赤、赤、赤……」

悠真がつぶやくと、風呂の中で大きく反響した。

——のう、我が器は美しかる。

同時に赤の声が響いた。突如、湯煙が赤く染まり、湯の上に赤が座っていた。赤い着物に赤い髪。赤い瞳が悠真をしかと見つめる。

「あんた、いったい何者なんだよ」

悠真は赤に言った。赤はにいつと笑い、赤い扇子を開き口元を隠すと、けらけらと声を出して笑った。

——まさか、小猿が義藤を上回るとはの。紅も想像しておらなんだったじやろ。紅の慌てる様子と言ったら……

赤は嬉しそうに笑っていた。

——赤。それが我が名じゃ。我が器の紅は美しかる。我が色に染まれ。

言った赤の目は鋭く悠真を見据えた。

——赤が小猿を守ろうぞ。我が紅も小猿を守ろうぞ。我が色に染まれ。さすれば、赤が小猿を守ろうぞ。されど、小猿が赤を選ばぬのなら、我は小猿を守らぬ。何ゆえ、我が利益にならぬ小猿を守るの

じゃ。ゆめゆめ忘れるでないぞ。我が色の力を欲するのなら、我が色に染まれ。

赤は鋭く言い放つと、ゆっくりと向きを変えた。

——機会があれば、また会おうぞ。

赤が言うつと、赤い世界が消えた。そこには、白い湯煙があるだけだ。

赤との対話からのぼせはじめた悠真は湯から出ると、用意された着物を纏った。汚れ一つ無い仕立てられたばかりの着物を、着て出ると、そこには紅城の使用人の女性が待っていた。仕立てられた着物は染み一つなく、田舎者の悠真は新しい着物を初めて着た。

「陽緋様がお待ちです」

待っていた使用人が悠真に言った。誰も野江を名前で呼ばない。つまり、悠真はとても失礼なことをしているということだ。それと同時に、陽緋などのように感じているのか不安になった。誰も本当の野江を見ていない。もし、悠真が野江の立場からきつと辛く孤独に感じるだろう。使用人に連れられて歩く廊下は、野江と歩いた廊下と違って見えた。陽緋野江も赤を持っている人物だから、野江が一緒でない廊下は紅城の中の色を殺風景にしまうのだ。紅城は人の気配に乏しく、悠真は誰にもすれ違うことなく紅城の一室に案内された。

部屋の片隅で野江が座っていた。背筋を正し、正座をする野江はとても赤が似合った。物の少ない部屋には、小さな書卓と積み重ねられた書物が置かれていた。

「見違えたわね」

使用人は、悠真が部屋に入ると何も言わずに下がった。

「お座りなさい」

野江が言い、悠真は戸に近い隅に座った。戸に寄りかかっていると、すぐに出口がある安心感があつた。悠真の考えに気づいたのか、野江は笑った。

「紅に会ってどうだったかしら？」

野江の言葉に引き出されるように、悠真は脳裏に強烈に焼きついた、高貴で高圧的な紅の姿を思い出した。

「印象と違ったでしょう？紅は賢い子よ。生き残るための術を知っている。だから、理想の紅像その一、その二と作り出し、いくつもの紅を演じられるのよ。それに、義藤のことを嫌いにならないでちょうだいな。義藤は、若いけれど有能な子よ。天性の才能に加えて努力を惜しまない性分なの」

野江の言葉の一つ一つが、悠真の中で大きな波紋を作り出していた。紅を思う野江の気持ち、そして野江が義藤を信頼していること。彼らは、強い絆で結ばれている。

悠真が野江に返事をしようとしたときだ。悠真が寄りかかっていた戸が突然開いたのだ。

「野江！」

入ってきたのは、二人の男。野江の名を呼んだ一人が悠真の存在に気づかず、悠真に引つかかって派手に転び、悠真は上に押し掛かる重みで身動き一つ取れなかった。悠真の上に倒れた人物も起き上がるうと必死にもがいているようだったが、それが上手くいっていない。どうして、人の上から起き上がるだけで、苦労するのだろうかと思議に思うほどだ。

「どけ、どけ。どけよ」

悠真はもがく男の下で、必死に言ったが、重みで思うように声にならなかった。失礼かもしれないが、悠真と彼らの面識はなく、遠慮をする必要もない。赤い羽織が視界の端でひらめき、彼らも悠真が容易く言葉を交わすことが出来ない存在なのだと教えられた。

「野江、これが義藤を吹っ飛ばした小猿だな」

二人のうちの一人、転ばなかった方が悠真の上に押し掛かった男に手を貸しながら言った。入ってきた二人とも、赤い羽織を纏っていた。彼らも、紅に信頼される存在なのだ。野江を名で呼んでいることから、彼らの立場が分かる。

「佐久は相変わらずだこと」

野江は転んだ男を見て笑っていた。悠真は笑う野江を初めて見たような気がした。

「話を誤魔化すなよ。俺たちを差し置いて、楽しい話を進めているみたいじゃないか」

手を貸した男が言った。手を貸した男は長身で浅黒い肌が印象的だった。その強い目に見られて、悠真は思わず目をそらした。まるで強い獣を目の前にしたような気分だ。目を引いたのは、帯刀した朱塗りの刀。野江や義藤がもっている朱塗りの刀より大きく、力強かった。

「それよりも、悠真を起こしてあげてちょうだいな」

野江が言い、男は悠真にも手を貸した。男の手は、漁師の手のように厚く大きく、力強かった。

「紹介するわ。彼が都南。紅の持つ軍である朱軍の將軍。朱將の都南よ。剣技や馬術、あらゆる武術、そして策略に優れているわ。術士の才覚を持たず、朱將になったのは都南以外に存在しないわ」
どうも、と手を貸した方の男が言った。そして彼は野江を睨んだ。

「野江、その紹介は術を使えない俺に対する嫌味か？」

長身で日に焼けた肌が快活そうな男だ。この紅城に、術を使えない人がいることに悠真は安堵した。紅城は赤い空気で満ちている。使用人も紅の石を首から下げている。悠真は今まで、一人だけ術士でないことに不安を覚えていた。だから、都南が術士でないことに安堵し、同時に術士の才覚を持たない彼がどのようなにして朱軍に入り、朱將にまで上り詰めたのか不思議に思った。濃紺の着物に、赤い羽織が美しい。野江と同じくらいの年齢だろう。落ち着いた大人の印象だった。都南の目は獣のように鋭いが、今は穏やかな表情を浮かべていた。

「僕も忘れないでおくれよ」

言ったのは、派手に転んだ男だ。小柄で希少な眼鏡をかけている。優しそうな印象。薄青の着物に、やはり赤い羽織が栄えている。都

南と親しげで、同年齢ほどだろう。

「あちらは佐久。主に研究や分析を担当しているわ。術士としても、灯緋の力を持ち、あたくしに次ぐ術士。他色の石を紅の石と同じく、らいの威力で使用できる数少ない存在よ。他国の情勢や歴史に詳しく、歩く書物のような存在ね。唯一の欠点は、壊滅的なほど運動能力が低いこと」

どうも、と佐久は眼鏡を直しながら言った。

「野江、僕に嫌味は効かないよ。全てを受け入れているからね」

柔和な顔つきをした彼は、楽しそうに笑った。他人を怒鳴ったり、憎んだりすることに縁遠い存在のようだ。紅は仲間を持っている。悠真が出会ったのは、きっと一部だろうが、赤が似合う人たちばかりだった。

赤の仲間（2）

術士は五つの階級に分けられる。最も強い力を持った存在が陽緋。術士の中でも一人だけしか名乗れない。陽緋に次ぐのが灯緋。そして、大緋、中緋、小緋、下緋とつながる。大部分が下緋だ。小緋以上は、幹部地位である。まるで仏のような笑顔をしている佐久は灯緋、とても優れた存在なのだ。

「そうだったわ、悠真には義藤のことも、紹介していなかったわね。義藤は紅の護衛を担当する朱護の筆頭、朱護頭。あの若さで朱護頭なのだから、行く末が恐ろしい術士ね」
都南が笑いながら言った。

「ずいぶん義藤を買っているんだな。義藤には嫌味の一言も無いのか。数年後には、陽緋の地位を奪われるかもしれないぞ。歴代最強の陽緋と言えど、その上がいないという保障はないんだからな。義藤は努力を惜しまぬ天才。その才は紅城へ足を運んだ瞬間から明確だった。最近、体が鈍っているんじゃないか、陽緋殿？」

まるで、先ほどの仕返しをするかのように、都南は笑い、白い歯が浅黒い肌に栄える。野江は動じることなく切り返した。野江の方が一枚上手だ。

「あたくしの心配をしてくださってありがとう。でも、数年後には朱将の地位を奪われるかもしれないよ。今は若い義藤も、いずれ成長するわ。剣技だけでなく、知識や判断力も兼ね備えるでしょうからね。お気をつけて。術を使えない朱将都南様。紅が義藤を陽緋に任ずるか、朱将に任ずるのか、まだ分からなくてよ。あたくしの心配はご不要よ」

一番笑っているのは、佐久だった。

「底知れぬ嫌味合戦だねえ。朱将も陽緋も短命なんだから、変な冗談はよしなよ。まあ、朱将と陽緋が別人でなければならぬ、という決まりはないんだから、どちらも地位を奪われるかもしれないよ。」

でもね、きつと紅はそんなことしない。二人がその職を続けたいと願っているうちはね」

佐久が笑いながら二人に言った。穏やかな表情をした佐久が最も腹黒い存在なのかもしれない。

悠真は不思議に思った。野江も都南も佐久も、とても親しげにしてくれる。彼らが悠真に敵意を向けていないことは明らかだ。都南が小さな台を出し、陽緋が箱から茶道具を出し、茶を淹れてくれた。さすが陽緋ということだろう。湯を沸かすのも石の力で瞬く間だった。このように、生活場面で石の力を使用するにはからくりが必要だ。悠真はただの鉄箱にしか見えないものに紅の石を入れることで、鉄箱が竈の代わりをすることが信じられなかった。彼らは悠真のことを気にすることなく談笑していた。些細な甘味も出された。田舎者の悠真が口にしたことのないような甘味。佐久は何食わぬ顔で、都南の甘味をつまんでいた。どうやら、佐久は甘味に目がないらしく、都南と佐久は親しいようだ。まるで、都南は佐久の保護者のようだ、悠真は感じていた。

彼ら紅の信頼する人たちは、立場のある人なのに使用人を使わない。彼らは、彼ら仲間の世界を作り出しているのだ。まるで、他人を警戒しているようであった。他人を警戒しているのに、悠真に警戒することはない。この場に最もそぐわない田舎者の小猿を、彼らは当然のように受け入れている。それは紅にも言えることだが、とても奇妙で不思議なこと。

「どうして…… どうして俺に警戒しないんだ？」

耐えることが出来ず、悠真は紅から信頼を得ている彼らに尋ねた。すると、佐久が笑った。敵意のない、優しい笑いだ。

「当然だよ。悠真君は、惣爺が認めた人で、惣爺が信頼した人だからね」

悠真は不思議に思った。どうして彼らは、只の下緋である惣次のことを知っているのだろうか。彼らにとっては、惣次は足元の存在のはずだ。術士の世界で年齢が関係あるとは思えない。関係あるのは、

力だけのはず。若い野江が陽緋であることが一番の証拠だ。

「惣爺が信頼した人に、悪い人はいないってか」

都南がお茶を一口、口に含んだ後に言った。

「どうして、惣次のことを……」

悠真は分からなかった。都にいる彼らが下緋の惣次を知るはずがない。野江は柔らかに微笑んだ。

「当然のことよ。惣爺は、あたくしたちの戦いの師匠。灯緋としての力を持ち、先代の、そして先々代の、そのまた前の陽緋の師匠でもあるわ。あたくしも、佐久も、もちろん義藤も、惣次に術と剣技を教わったのよ。あら、都南は剣技だけで、佐久は術だけだったわね」

野江は思ったより嫌味が多い。美しい彼女に似合わず、悠真は笑いそうになった。しかし、その内容に戸惑って野江の嫌味に触れることはできなかった。惣次が野江たちの師匠。術に優れた存在である。その内容はにわかに信じられなかった。野江は紅の石を触りながら言った。

「紅だって、惣爺を慕っていたわ。惣爺と……悠真も会ったでしょ。惣爺と双子の遠爺。あたくしたちは、惣爺から戦い方を学び、遠爺から学を学んだわ。二人は、紅城の両腕。あたくしたちは二人に守られて育ったわ。二年前に惣爺が戦いで深手を負い、術士として十分に戦うことが出来なくなるまではね。惣爺は戦えなくなっただわ。だから、惣爺を守るために、別の生き方を渡したのよ。それは、数十年にわたり紅城を支え続けた、二人の夢。一足先に、引退した惣爺が新しい人生を手にした。誰も反対したりしないわ。だって、それが惣爺への、せめてもの礼なのだからね」

悠真は惣次の姿を思い浮かべた。祖父と酒を酌み交わし、高らかに笑う惣次。その惣次が彼らの師匠だということは、容易く信じることなど出来ない。野江たち彼らは赤い羽織を許された存在。悠真が容易く言葉を交わすことは許されない。そんな彼らと惣次を結びつけることが、悠真には出来なかった。しかし、彼らが、紅が、悠真

に対して警戒しないのは、悠真が惣次と親しいから。そう思うと、
全て納得がいく。

——術士はいいことばかりでない。

惣次の言葉が悠真の胸に響いた。惣次は優れた術士であり、紅を支える存在を多く育ててきた。その言葉は重く、悠真にのしかかった。同時に悠真は惣次がとても遠い存在のように思えた。気安く、誰よりも信頼していた惣次。その惣次が悠真に隠し事をし、遠くにいる嫌な気分だ。そして、遠次という男と惣次は双子だから似ていて当然だ。

「惣爺が信じた。それだけで、俺たちには十分な理由なんだ。きっと、義藤もそれを分かっている。そうでなきゃ、顔を合わせた瞬間に殺されない程度に斬られているさ。紅が止めようと、関係ない。義藤は紅を守る存在。そして、あいつは、強いからな」

都南が言った。都南も野江同様、義藤を認めているのだ。

美しく強いが嫌味の多い野江。術の使えない朱将の都南。術と知識は一流だが体を動かすことが極端に苦手な佐久。抜き身の刀のような強い存在義藤。彼ら若い実力者に知識を与えて守り育てた遠次。そして、彼らに戦い方を教えた死んだ惣次。ここには紅を守る赤の仲間たちが集まっているのだ。

赤の真実（１）

赤の仲間たちは笑い、一人笑みを浮かべた佐久が言った。眼鏡の奥の佐久の目が優しく、そして強く輝いた。

「それで、どうして悠真君は紅城に来たんだ？殺されに来たようなものだよ。僕たちでも、必ず守りきれるとは言えない。ここは決して安全な場所と言い切れないのだから。今なら間に合うかもしれないよ。自分の身を守る術を持たないのなら、どこか、故郷と離れたところに逃げた方がいい」

悠真はどうして、そんなことを言われるのか分からなかった。悠真には帰る故郷も、家族もないのだ。これから生活をする糧も基盤も、悠真には何もない。故郷を失った小猿が生きるには、どこかの名家に奉公に出るか、低賃金で働き続けるか、盗賊になるしかない。「帰る場所はない。俺にどうやって生きろって言うんだ？俺は、生きる場所も、生きる道も奪われたんだ。だから俺は、復讐するまで諦めない。あの嵐が、誰かの手によって起こされたものだと思ったときに決めたんだ。じつちゃんを、惣次を殺した奴をこの手で捕まえるまで、絶対に帰らない」

悠真が言くと、都南がぱちと手を叩いた。その表情からは何も読み取れない。浅黒く日焼けした肌に、白い歯が印象的だった。なのに、少しも笑っているように見えない。怒りだけが伝わってきた。獣の目に鋭さが満ちてゆく。

「立派な決意だが、とても愚かな小猿だな。お前は何も分かっていない。紅には敵が多く、その敵はとても強大な力を持ち、常に紅の命を狙っている。だから俺たちは、この命を懸けて常に紅を守る。先代の紅も殺さ時のことを、俺は忘れられない。もつと、力があればと何度悔やんだことか……。二年前の戦乱のことを、今でも夢に見る。俺は、今の紅を失いたくないんだ。紅は象徴でなく、一人の命だ。決して誰にも代わりを務めることなんてできないのだから」

それは信じ難いことだ。紅は色神だ。赤を司る色神であり、紅の石を生み出すことが出来る唯一無二の存在。誰もが紅を紅と崇め奉る。その地位は絶対的なもので、紅は神と同格だ。紅に従う者は多い。人民の大半は紅の味方だ。

「そんなはずは……」

悠真が思わず言った。すると、佐久が言った。穏やかだけれども、強い意志が込められていた。

「そんなことがあるんだよ。悠真君、色神がどのように生まれるか知っているかい？」

悠真は首を横に振った。すると佐久は一つ息を吐き続けた。

「悠真君は、惣爺が信頼した人だ。だから、僕たちも君を信じてこれを話すよ。いいかい、色神は普通の人間だ。誰にだって色神になる可能性がある。色神が命を落とすと、最期に生み出した石が、次の色神を選ぶんだ。紅だって、元は只の人間。義藤とは幼馴染だった。言っていたよ。紅は十歳の頃に色神になった。今から十年前の話だ。その頃のことは、僕たちも覚えているよ。僕と都南は十八だった。野江だって、十九だ。僕らは着実に力を付け始めていた時期だからね。僕と野江と都南の三人で陽緋と朱将と朱護頭の地位を取り合っていたんだ。先代の紅は、気の優しい男性でね、僕らは彼を父のように慕っていたよ。今の紅とは対照的な。平和を愛し、子供を愛していた。それは、先代が紅になって十三年目のこと。当時、官府と先代は、他国との関わりでもめていたんだ。官府は他国と協力して、一国を攻めようと考えていた。火の国は小さな島国でね、広大な大地は夢のような話だ。けれども、それは他国の人を殺し、火の国の人を殺す大きな戦いだ。先代の紅は反対したさ。そして、殺された。紅が反対していたは、民が従わない。だから、殺したんだ。僕たちはとても無力で、守れなかった。遠爺も惣爺もだ。官府は先代の紅を殺し、次の言いなりになる紅を生み出そうとしたんだ。先代が殺された後、今の紅は誕生した。今の紅は若いが聡明で、微力ながら僕たちもいる。義藤がいる。だから、十年もの間、紅とし

て生き延びてきたんだよ。官府に従うこともなく、官府の怒りを買うこともなく、綱渡りをするようにね」

悠真は佐久の話が信じられなかった。先代が命を落とした時のことは、悠真も微かに記憶している。誰も海に出ず、喪に伏した。その死がなぜ生じたのか、死んだ紅がどのような人だったのか誰も知らない。そして、すぐに忘れられた。村の人は紅が死ぬのは珍しくないと話していた。そんな話をすると、罰当たりだと表立ってしないが、誰もが声を潜めて話していた。紅は神だが短命だ。

——紅は生まれて、命を削って石を生み出す。死した後は、再び生まれる。

そんな噂が流れるほどだ。紅がただの人間だと誰が信じるだろうか。民にとって、紅は唯一無二の色神なのだ。汚い言葉で言えば、紅が誰であるうと関係ない。死のうと生きようと関係ない。生活を支える石を生み出してくればそれで良いのだ。その考えは悠真にもあった。今日、紅と出会い、あの鮮烈な赤色を見るまでは、紅に興味もなかった。十年前に死んだ紅も、同じように美しい赤を持っていたのだろう。世間上では紅が火の国の頂点に立ち、官府は紅に従っているはずだ。しかし、現実が違うのだ。紅は綱渡りをするように、必死に生きているのだ。

悠真は何も言えなかった。静かな動きで都南が赤い羽織を正した。「俺たちがこの赤い羽織を着ているのは、紅への忠誠の証だ。この羽織は、官府と敵対する証。紅に忠誠を誓い、最優先で紅の命に従う。紅を裏切る行為があれば、親兄弟一族を差し出す覚悟。紅の槍となり、紅の盾となる。色神として誕生した紅が、信頼できる者を選別し、赤を差し出す。俺たちは今の紅から赤を授かった。遠爺も同じだ。遠爺に関しては、先代からも赤を授かっていたらしいがな。小猿の知っている惣爺は二年前の戦いで深い傷を負い隠居した。その戦いも、紅を殺そうとした何者かとの戦いだ。紅はそれだけ命を狙われている。これが、民の知らない真実。この羽織は重い。紅と

命を共にするという決意の表れだからな」
都南の話を、悠真は信じる事が出来なかった。紅は色神だ。民は讃えている。そんな紅が命を狙われているわけが無い。そう思ったが、悠真は自分も紅を象徴としか思っていないかった。紅が命を落とすとして、次の紅に代わったとしても、あまり気にしない。紅は存在するだけでいい。誰が紅でも関係ない。そういう考えが、歴代の紅を危険にさらしてきたのだ。悠真は動揺を隠しきれなかった。あの、高貴で鮮烈な赤を放つ紅が、命を狙われることが信じられず、赤の仲間たちが命をかけて、強い覚悟をもってここにいることが信じられなかった。

赤の真実（２）

紅が命を落として、次の紅に代わったとしても、あまり気にしない。紅は存在するだけでいい。誰が紅でも関係ない。そういう考えが、歴代の紅を危険にさらしてきたのだ。悠真は動揺を隠しきれなかった。悠真も同じ罪を持つ。そんな罪深き悠真に、佐久は言った。「官府は今、紅に一つの要求を突きつけている。紅はその要求を拒否し、悠真君の村は壊滅に追い込まれた」

深刻な目で、三人が悠真を見ていた。それでも悠真は己の覚悟を捨てることは出来ない。多くの人の命と、悠真の故郷よりも重要なものがあるだろうか。誰もが教わるはずだ。命よりも重い物はないと。どんな金銀財宝も命よりは軽いと。

「俺の故郷よりも、大切なものがあるのかよ。人の命よりも大切なものがあるのかよ」

悠真は言い野江が返した。

「紅だって、容易く拒否したわけじゃないのよ。要求を拒んだときから、何かをされると感じていたわ。それを回避しようと全力を尽くしていたことは事実よ。紅は最善を模索し、悩みながら決断した。その責任を己の肩に背負う覚悟をしてね。悠真、お聞きなさい。官府はね、石の監視を止めるように申し出てきたのよ。正確に言えば、石の監視をする力のある紅の石を差し出すように申し出てきたの」

「石の監視……？」

悠真はその意味が分からず、佐久が教えてくれた。

「紅はね、一つ希少な石を持っているんだ。それは、紅が誕生して最初に生みだす石だよ。生み出した紅が命を落とさない限り決して色を失わず、どの石よりも強い力を持つ。その石は、己が生み出した全ての石を監視することが出来る。いつ、どこで、どのように、どの程度の力が使われたのかをね。紅の石は無限に使うことができる」

るわけじゃない。紅が長命になればなるほど、紅の監視から逃れることが出来る石は少なくなる。それを快く思わないんだろうね」

佐久が置いた湯飲みが、小さく音を立てた。そのまま、佐久は続けた。

「いいかい、悠真君。監視が出来ないということを考えてごらん。

誰かが、紅の石を欲望のまま他者を傷つけるために使用したとする。それが分からないんだ。紅の石は、強大な力を生み出すことが出来るでしょ。その力を個人の思うように使わせてはならない。だから紅は、己の使った石がどのように使われたのか、誰が作り出したのか監視をしている。紅の石の力を悪用されれば火の国を滅ぼしかねないから、紅は石の監視を止めることができない。つまり拒むしかできなかったんだ。石の監視が、紅の石の悪用を防ぐ唯一の抑止力なんだ。けれども、官府の要求を拒むことに対して紅も悩み、野江を派遣して警戒していたんだ。悠真君の村が狙われたのは、きっと惣爺の存在に気づいたからだよ。あの村に惣爺がいるから、狙われた。惣爺は紅が信頼する人物の一人。二年前の戦いで、紅を守って力の大半を失ったのだから」

悠真の脳裏に優雅な紅の姿が浮かんた。煙管を持ち、紅色の着物を着た彼女が、葛藤を抱えているとは思えなかった。彼女は何も恐れるものがなく、揺るがない自信があるように思えたのだ。誰にも屈しない高貴な存在。高貴な赤色を司る色神。それが紅なのだ。

「俺にとつては、村が一番だ」

悠真が言くと、野江は着物の袖口で口元を隠した。嫌なものを避けるような仕草だった。

「そうでしょうね。人の命より重いものは無いのだから。それでも紅の石を自由に使われてはいけないのよ。官府が勝手に他国と戦争を行わないようにするためにね」

野江の言葉が悠真の胸に重く残ったが、悠真は「しかたなかった」

「紅も苦しんでいる」「最善の選択をした」と己を納得させることは出来なかった。今の悠真は復讐心で動いており、憎む気持ちを捨

ててしまつたら何も出来なくなる。全てを失い、廃人となつてしまふ。己が己で無くなる恐怖。自分の生きる道標を失う恐怖。それらが悠真を頑なにしていた。紅を憎まなければ、己が生きる意味を失つてしまふ。紅は、悠真が憎むべき相手。時に他者を憎む気持ちは、何よりも強い生きる糧になるのだから。

妙な沈黙があつた。紅に忠誠を誓う人たちの中に紅を憎む悠真がいる。それは、奇妙な状況。妙な空気を打開するように、それはそうと、と口を開いたのは都南だつた。

「それはそうと、野江。俺に小猿を預けてみないか？」

都南の唐突な言葉に、悠真は息を呑んだ。都南の強い目が一直線に悠真を見て、悠真は何も出来なかつた。獣に睨まれた兎のような気分だつた。野江が言つた。

「あら、朱軍にでも入れるおつもりかしら？物騒ね」

野江は小さくお茶をすすつた。小猿「悠真」は、彼らの話題の一つではない。

「じゃ、術士にするか？陽緋殿」

都南が豪快にお茶を口に含んで言つた。止めなよ、と静止したのは佐久だつた。

「二人とも止めなよ。どうして、朱将と陽緋という立場になると仲良く出来ないんだ？二人が喧嘩するなら、悠真君は僕が連れて行くよ。悠真君はまだ石を持っていないから、術士とか朱軍に入る必要はないからね。紅もそれを望んでいるよ。厳しい野江と一緒にいるのも、粗暴な都南と一緒にいるのも疲れるだろうからね」

野江と都南の二人が佐久を睨んだ。第三者である悠真が緊張するほどの緊迫感なのに、佐久だけが平然とし、甘味をつまんでいた。

「そんなに怒つたつて無駄だよ。僕に任せなよ」

佐久が湯呑みの中のお茶を回していた。佐久の眼鏡の奥の目が優しく見えた。温かいけれど、とても強い目。悠真は不思議だつた。赤い羽織は、紅と命を共にする証。赤い羽織を着ているだけで、紅と同類とされて暗殺されるかもしれない。陽緋や朱将ならば、赤い羽

織を着る必要も分かる。部下の信頼を集めるためにも、自身の長が紅からの厚い信頼があると思わせる必要がある。赤い羽織は重い。

佐久は術士としては灯緋としての実力があるとはいえ、陽緋や朱将のような大きな役職を得ていない。なのに、どうして彼は赤い羽織を着ているのだろうか。赤い羽織を着ているのは、彼の力を示すと同時に、彼自身が紅、陽緋、朱将から大きな信頼をもたれていることが分かる。穏やかで優しい目の奥に、隠された強さがある。

「好きになさい」

根負けしたように野江が言った。

「好きにしる」

都南が憮然として言った。佐久が笑った。まるで子供のような笑い方だった。

「ありがとうね。悠真君も良いね？」

佐久に言われて、悠真は頷いた。赤い羽織を着た三人に囲まれて、拒否することなど出来るはずもない。

「それで、佐久は今日、自邸に戻るのかしら？」

野江は佐久に尋ねた。

「いいや、官邸に残るよ。青の石がどこから運ばれたのか調べないと。それに、野江の行く手を阻んだ紅の石を使った人を特定しないといけない。悠真君は官邸に泊めるよ。武術が駄目な僕でも、官邸だったら守りきれる」

佐久が言い、都南が苦笑した。

「一人で走るな。お前は壊滅的に身体を動かすことが駄目で陽緋になれなかったんだ。一人で抱え込むな。俺も一緒に泊まるう。どうせ暇なんだ」

都南が気安く佐久の肩を叩いた。悠真は、朱将はそれほど暇なのかと感心した。一つ溜め息をついて、野江が言った。

「また、あたくしを仲間はずれにするのね。いいわ、あたくしは、あたくしの好きにするから」

野江は残っていたお茶を一気に飲み干した。高貴な雰囲気野江と

は思えない、荒々しい行動だった。

赤の茶会（１）

悠真は赤い羽織を着た人たちは、なんとも変わった人たちだと思った。悠真の前を、陽緋の野江、朱将の都南、そして佐久が歩いている。目の前を高貴な色である赤が、ゆらり、ゆらりと揺れている。初めて赤い羽織を見た時、とても美しい色だと思った。しかし、今は違う。赤い羽織が意味する重み、若い彼らが背負っている重み、紅が敵か味方か、悠真は何も分からない。そんな中で、赤い羽織を着た人たちは、なんとも平然としているのだ。大きな責任と重圧の中で、紅を守ろうとしている。悠真にとって、紅は敵である。彼らは紅を守ろうとし、悠真も守ろうとしている。赤い羽織を着た人たちは、なんとも変わった人たちだ。彼らにとっては、紅城で復讐に息巻く悠真が、とても変人に見えることだろう。赤い羽織は神の力である炎のようで、命の源である血のようで、人々に希望を与える太陽のようであった。悠真が出会った、赤い羽織の人たちは五人。野江、都南、佐久に遠次、義藤を加えた存在だ。紅の周りには若い人たちが多い。悠真は彼らの話から、それぞれの年齢を推察していた。遠次の年齢は不明だが、野江は二十九、都南と佐久が二十八、義藤が二十二ぐらいのはずだ。若い彼らが、紅を支え、火の国を守ろうとしている。

紅城は、紅の住まう大きな建物を中心に数十の建物で構成されている。悠真は、これが、紅の重臣が与えられている官邸なのだと理解した。

佐久は、何も無いところで何度も躓き、その度に都南が支えていた。長身の都南と小柄の佐久の間には大きな身長差がある。その身長差を、悠真はじつと見つめた。何も無いところで、佐久が五度目に足を取られたとき、突如として悠真の後ろで声が響いた。いきなり空気のように生じ、背後に赤い色が揺らめいた。

「ほら、またこけた。もう少し身体能力が高ければ、いや人並みに

動ければ、陽緋候補として野江に並べたのにな。なんせ、佐久は紅の石以外の色の石を容易く使うことができる。他色の石を使わせれば、野江を越える。身体能力だけの都南と術だけの佐久。足してちょうど良い」

悠真の耳元で、囁くような声が響いた。赤い色が広がっていく。その声に、悠真の前を歩く、赤い羽織を着た三人が同時に振り返った。慌てて、焦ったように。振り返った拍子に、再び佐久が足を取られ、都南が佐久を支えた。

「ほら、まただ」

赤い声はけらけらと嬉しそうに笑っていた。悠真は振り返ることさえ出来ない。濃厚な気配が後ろにあるのだ。誰よりも鮮烈な赤い色が悠真の肩に手をかけていた。佐久が足を取られるたびに、嬉しそうに笑うその声が赤く響き、悠真は振り返ることが出来ない。

「ああ、ばれてしまったな。怒らないでくれよ」

悠真は何も言えない。動けない。そこにいるのは、間違いない。間違はなく紅だった。声が同じだ。濃厚な気配が同じだ。香りが同じだ。鮮烈な赤い色が同じだ。紅を思うと憎みがこみ上げて来る。悠真の村を守れたのに、守らなかった。紅が滅ぼしたのだ。紅の境遇を知っても、悠真の憎しみは変わらない。なのに今、紅に対して怒りをぶつけることが出来ない。梅雨時のじめじめした空気を吹き飛ばすような、そんな赤に惹かれていたのだ。

「どうして、こんなところにいるのですか？」

慌てたように野江が言った。

「また、義藤を困らせたんだろ。悪いが、俺たちにまで迷惑をかけないでくれよ。義藤に怒られるからと、俺たちを盾にするなよ」
都南が言った。

「僕はそこまで運動音痴ではないけれど」

佐久が言った。悠真の後ろの気配は、嬉しそうに笑った。声が赤く花開く。

「だってさ、ずっとあそこにいると息が詰まるだろ。心配するな」

気配はゆつくりと悠真の隣を通り過ぎ、前に躍り出た。高い位置で髪を一つに束ね、着物に紅は含まれない。化粧をしていない顔は、野江ほど華が無いが、不思議と心を惹かれた。女物の着物を着ているが、質素な着物からは紅の姿を想像できない。あの、高圧的で高飛車な雰囲気は感じられないのだ。彼女は悠真の隣を通り過ぎ、そして振り返り悠真を見つめた。

「この顔、誰か知っているか？」

彼女は無邪気に微笑んだ。

「どうして……」

悠真は言葉を失った。憎んでいるのに、目の前になると怒りをぶつけることが出来ない。

「楽しそうなことをしているみたいだからな。私だけを仲間はずれにするなよ」

彼女は微笑んだ。

「こっちへ来い」

都南が彼女の腕をつかみ、引きずるように歩いた。

「おいおい、乱暴に引っ張るなよ」

紅はけらけらと、笑っていた。赤い笑いが辺りに輝いた。野江も佐久も都南を追いかけて歩いていた。悠真も赤い羽織の人たちと、赤を司る色神を追いかけて歩いた。

赤の茶会（2）

たどり着いたのは、官邸の一つ。部屋の主に断りを入れることなく、都南と野江は足を踏み入れ、部屋の主であるはずの佐久は時々足を敷居に取られてつまづきながらたどり着いていた。そこは、難解そうな書物と埃で溢れ、三部屋あるうちの一つは書物で溢れ、一つは仕事部屋と寝室のような場所になっていた。最後の一つに食卓や来客用の茶具が置かれて、日に焼けた畳が紅城の内部にある官邸にそぐわず、この部屋の主は、栄華や人目を気にしない存在と示していた。佐久の人と柄が、部屋の様子から伝わってきて、悠真は思わず佐久を見つめた。佐久はとても優しい。狭く散らかった部屋は、失った悠真の実家を思い出させた。紅城の中では異質なほど散らかり、生舎者の悠真は肩が凝るのだ。紅城の中では異質なほど散らかり、生活感が溢れるこの部屋は、悠真にとって温かく感じ、同時に自分が紅城に似つかわしい田舎者なのだと感じた。そして、悠真とは別の意味でこの部屋にふさわしくない存在が悠真の目の前にいた。彼女から溢れ出るのは眩い赤色だ。鮮烈で、温かくて、鮮やかで、強く、儚い赤色。野江に攻められ、彼女は小さく笑った。

「ご自分の立場を分かっていらっしゃるのですか？」

官邸の扉を後ろ手で閉めた野江が彼女に言った。

「分かっているよ。私は強い。そうだろ」

自信溢れる口調は、第一印象の紅そのもので、紅は不敵な笑みを浮かべた。

「この火の国に、私以上の紅の石の使い手はいない。そうそう恐れるような事態にはならないさ」

紅はひらひらと手を振った。まるで、紅は自らに護衛がついていることを無駄なことのように態度で示していた。そんな紅に対して不快感をあらわにし、眉間に深くしわを刻んだのは都南だった。

「義藤はどうした？」

都南が彼女に言った。

「ああ、義藤は出来る奴だから、私の人形を護衛しているさ。私が出ているのを知っているのか、知らないのか……。まあ、どっちでも良いけどな。義藤は私が抜け出したことを知っていても追ってこない。あいつは知っているのさ。敵の大半は義藤がいるところに私がいると考えている。だから義藤は追ってこないのさ。この姿の私に義藤がついていると、私が紅だと知られるからな。それに、私は一人で行動しているようで、一人じゃない。私を守ろうとしているのは表のお前たちだけじゃない」

紅の言葉に、佐久が溜め息をついた。

「確かに、紅は火の国で一番の石の使い手だよ。そんな紅に護衛がつく時点で間違っているのかもしれない。でも、忘れないで。紅は護衛が必要な存在なんだ。体外的にも、本当の意味でもね。二年前のような事態に陥ったときに、微力な僕らの護衛はきつと役に立つはずだよ」

紅は小さく笑った。不敵で強い笑み。己の目下の存在だと、相手に知らしめるような笑みだ。悠真は今まで、紅以上に強い存在に出会ったことがなかった。それは、紅の石を使う力などではなく、紅は心が強いのだ。自らに対し大きな自信を持ち、自らを肯定している。迷う必要はない。自分を信じる。紅は自らに言い聞かせているようだった。

「その、羽織を渡すときに言っただろ。私は籠の中の鳥じゃない。私を閉じ込めておこうなんて、官府のようなことを言うな。私は赤を司る色神。赤は強く美しい色。私は、赤のように強くなければならぬ。私は赤のように、何者にも汚されない美しさを持たなくてはならない。誇り高く、強く、美しい赤を持たなくてはならないんだ」

その言葉があまりに強くて、悠真は一步後ろに下がった。正直なところ、紅が恐ろしかったのだ。紅は赤い着物を身に付けていないのに、全身に赤色を纏っているのだ。赤色がこれほど恐ろしいとは思

わなかった。

「義藤を呼びましょう。紅が仲間はずれにして怒るのなら、義藤だってかわいそうよ」

野江が言った時、声が響いた。

「私も入れてもらおうかな。若い者たち」

声が響き、扉が開いた。そこには赤い羽織を羽織った男がいた。見た目は惣次と同じだが、惣次ではない。惣次のような親しみやすさが無く、厳格で、他者より少し上に立っている。それは、彼の年齢のせいであり、優れた術士たちを育ててきたせいであり、師としての威圧感のせいであった。

「げ、遠爺」

あからさまに紅が身を引いた。紅は火の国で最も高貴な存在。赤が選んだ存在。紅の隣に立つ者は誰もいない、とても孤独な存在。紅の背負うものを、誰も分かち合うことは出来ない。強いけれど、少し華奢な紅がとても弱い存在に思えた。高貴なのに、内実は親しみやすい存在だ。歴代の紅を悠真は知らない。けれど、今、悠真の目の前にいる紅はそういう存在だ。高貴な存在であるはずの紅は、さまざまな表情を見せる。威厳高く強い存在。親しみやすく表情豊かな存在。

「どうした、紅。何か後ろめたさでもあるのか？」

紅に対して物怖じすることなく、遠次は足を進め、迷うことなく腰を下ろした。その横顔は惣次と同じだったが、堂々とした仕草は惣次とは異なった。

「そんなのあるわけないだろ、遠爺。私に後ろめたいことなんて何もないさ」

紅は笑って誤魔化し、手をひらひらと振り、足を投げさして座っていた。その姿は高貴さとかけ離れ、田舎者と同じ仕草だった。

赤の茶会（3）

不思議なもので、紅がそこにいると言うだけで空気が変わる。埃臭い部屋の中に、高貴な空気が色濃く満たされていく。高貴な香りが満たされていく。赤が満たされていく。佐久が埃を払いながらお茶を淹れ、野江が窓を開いた。差し込む光は、紅だけを照らしているようだ。

「佐久、お菓子は何？」

まるで子供のように、落ち着きなく紅は部屋の中を歩き回り、勝手に物を引っ張り出していた。佐久も都南も、もちろん野江も何も言わなかった。紅という立場が許しているのか、彼女の人柄が許しているのか分からなかった。

「あった！」

紅は小さく笑い、棚の中を覗き込んだ。佐久は相当の甘党らしい。思い出せば、先ほども都南の甘味をつまんでいた。紅は悠真が見たこと無いほどの大量の甘味を佐久の部屋の棚から出した。

「やっぱり佐久はお菓子を隠し持っているんだな。えっと、栗饅頭に、葛餅に、醤油煎餅に、甘納豆に。あった、あった。あ、この甘納豆は栗を使っているんだな。珍しいな」

紅はとても嬉しそうに、楽しそうに甘味を出し、遠次だけが陰しい目で紅を見ていた。台の上に甘味を並べた紅から守るように、佐久が甘味を抱きしめた。

「紅、あんまり食べないでくれよ。最近、僕が甘味を食べ過ぎると言う人が多くてね、厨房でも甘味をくれないんだ。買出しに行く時間は無いし。紅が食べると、僕の分が減るでしょ。食べすぎは体に悪いとか言うけれど、頭を動かすには甘味が一番なんだから。紅は良いじゃないか。自分でもらってくれば良いでしょ」

悠真は佐久が甘味に固執する様子が可笑しかった。大人なのに、その仕草は子供と同じだ。

「いいじゃないか。お前は食べ過ぎだ」

紅が佐久から甘味を奪い取ろうと、台の上に身を乗り出した。わずかな拍子で佐久は腕を滑らせて姿勢を崩し、それを隣に座っていた都南が無言で支えた。都南と佐久は何とも言えない阿吽の呼吸で繋がれているようだった。都南に支えられながら身を乗り出した佐久は、焦り交じりの口調で紅に言った。

「駄目。僕から甘味を取ると、何も残らないよ。僕の身体は甘味で動いているんだからね。僕の動きが止まったらどうするの？」

佐久と紅が甘味を取り合っていた。二人の奪い合いを止めるように、一つ、野江が言った。

「二人とも、いい加減になさいな。紅も紅よ。佐久が甘味にこだわるのは知っているでしょう。いい加減になさい。紅、お座りなさい」

——それで、甘味を奪い合うのは止めて、そろそろ教えていただけませんか？何をなさりに足を運んだのですか？なにか、用事があったのでしょうか？」

ああ、と紅は言い、座布団に腰を下ろした。紅は台に肘をつき、片膝を立てて、そつと悠真を覗き込んだ。男勝りの姿も紅らしい。

「ああ、それはな。これを渡そうと思ったんだ」

悠真の前に差し出されたのは、長い紐の先についた紅の石。紅の細い手が紐を持ち、下で紅の石が揺れている。

「それは……」

都南が言った。微笑んだのは紅だ。

「そう、これは惣爺の石だ。それも、惣爺が隠居前に使っていたものだ。隠居してから渡した紅の石は、限度に達し色を失ったからな」

紅の石は、色濃く輝いていた。

悠真は惣次の名を聞いて、とても嬉しかった。確かに惣次はここで生きていた。誰の口からでもなく、紅の口からその言葉を聞くと安心できた。故郷を、とても素晴らしいと言った惣次が、ここで生きていたという証を見たような気がしたのだ。惣次は、謎に包まれた人だった。今まで惣次がどのようにして生きていたのか、どのよ

うにして泣いていたのか、悠真は知らない。祖父と酒を酌み交わす惣次の名が、紅の口から語られる。それだけで、惣次が存在したという何よりの証拠なのだ。ただ、なぜ紅が惣次の石を悠真に差し出したのか、その理由は皆目見当がつかなかった。

「どうしてそれを持ってきた？」

遠次が紅に尋ねた。紅は惣次の物だという紅の石を台の上に置いた。「惣爺は死んだ。これは惣爺のために加工したものだから、他の誰も使えない。——小猿は使えるだろ。義藤の石が使えたんだ。惣爺の石も使える。そうだろ？」

紅の笑みは、悠真の心を惹き付けた。不敵で美しい笑みだ。その紅が悠真に言うのだ。

「惣爺が隠居前に使っていた紅の石は強いぞ。その野江や佐久の持つ紅の石に匹敵する力を持っている。我が国最高の加工師、柴が加工した石であるしな。上手く使いこなせよ」

異論を許さないような口調で紅は悠真に言った。しかし、都南が勢いよく台を叩き身を乗り出すと鋭い剣幕で紅に詰め寄った。

「分かっているのか？石の力は脅威だ。未熟な小猿に、惣爺の石を渡すということは、みすみす暴走することを許すようなことだぞ。刃を持つには、それなりの技量が必要だ。その刃が己や守るべき者を傷つけることだつてあるんだ。未熟な小猿に、優れた術士である惣爺の石は重すぎる」

息巻く都南を制すように、そつと遠次が手を差し出し、都南を止めた。そして、深い目で紅と悠真を見比べて言った。

「紅、どうしてそれを小猿に渡す？」

紅は苦笑し、台に置かれた惣次の紅の石を指ではじきながら答えた。「小猿に適した石を渡すということは、小猿を術士にするということだ。せつかく、選別を逃れたのに、術士にするのはかわいそうだ。生半可な石を渡せば、小猿の力が勝ってしまう。義藤の石を使ったときに、小猿の力は証明された。術士の力と石の力は釣り合わなくてはならず、弱すぎる石を持つことも、強すぎる石を持つこと

も許されない。この石がちょうど良いんだよ。どうせ、加工された石は私以外、誰も使えないんだしな。私は自分の石があるから、それ以上の石は必要ない。ならば、誰がこの惣爺の遺品を使うんだ？兄弟であっても、遠爺は使えない。このまま眠らせておく必要もない」

悠真は、小猿な上に子供で田舎者だ。紅は小猿「悠真」が術士にならないように配慮してくれている。自分に適した自分の石を授けられ、悠真は真正正銘の術士となる。苦悩と苦難と戦いと緋を負う術士となる。紅は、悠真に緋を負わせないために、惣次の石を差し出したのだ。それを受け取るのか、受け取らないのか、どうすれば良いのか悠真は分からない。村の人や惣次、そして祖父の死に対する復讐を果たすには力が必要だ。惣次の石があれば、悠真は力を手にすることが出来る。直接、己の石を手にしたわけでないから、術士のように紅の配下として縛られることも無いだろう。海で自由に泳ぐ魚のように、野山を駆ける獣のように、悠真は自由の身のまま力を手にすることが出来る。惣次の石に大きな魅力を感じたが、それは許されないことだと思った。赤い羽織を纏った人たちに、許されないような気がした。何よりも、都南から発せられる殺気に悠真は萎縮し、蛇に睨まれた蛙のようになっていたのだ。

「受け取りなさい」

言ったのは、野江だった。小さな音を立てて、都南が動いた。その手が刀の柄を持っていたことを、悠真は見逃さなかった。

——殺される。

悠真は直感した。都南は悠真が惣次の紅の石を受け取ることに反対をしているのだ。義藤が悠真に向けた殺気とは少し異なり、都南の方が義藤よりも荒々しい。

——殺される。

都南が朱塗りの刀に触れ、悠真は身を固めた。

赤の茶会（４）

――殺される

悠真は直感した。辺りを見渡すと野江も刀の柄を握り締めていた。悠真の存在と、紅の突飛な振る舞いが赤の仲間たちを混乱させ、混乱した彼らは、互いに刀に手を伸ばした。日ごろから戦いの中に身を置く彼らだからこそ、行動に迷いはなく、己の信念を貫くために命を懸けるのだ。

術士でなく、術士の選別で術士の才覚を見出されなかった田舎者の悠真。この紅城で悠真の目的を達成するには紅の石の力が必要だが、紅の石は強大な力を持つ剣であるからこそ、赤の仲間たちは悠真に紅の石を与えることに反対するのだ。野江が何のために刀に手を伸ばしたのか分らない。朱将を力で止めるには、陽緋の野江が動くしかないが、野江が悠真の味方である保障もないのだ。この場にいる実力者たちが、混乱しているのは事実で、悠真は混乱を抑える力である唯一の存在であるはずの紅に目を向けた。紅は苛烈な目で都南と野江を見ていた。どうやら紅は野江が刀に手を伸ばしたことに気づいているようだった。

「そんなことが許されると思っているのか？術士でもない小猿を信賴し、強大な力を与えるのか？」

都南の声はとても低い。その声は苛立ちを隠しきれていなかった。苛立ちは、悠真に紅の石を受け取るように言った野江に向けられていた。

「あたくしは見たわ。破壊された村を、死んだ惣爺を。復讐が許されるのなら、あたくしが手を下してやりたいくらいよ。術士でないなら、いずれ術士になれば良いということ。悠真には力が必要なの。生きるために、己の道を示すためにね。都南に言われずとも、あたくしは紅の石の力を知っているつもりよ」

野江の言葉も強い。悠真は身を縮めることしか出来なかった。無鉄

砲に走り出す隙さえなかった。彼らは戦いの才を持ち、平和な火の国の中で命を危険にさらしながら最前線で戦っている。野江も都南も強い力を持っている。その二人が苛立ちを露にしているのだ。

「二人とも、牙を抜きあうのなら、それなりの覚悟をしてもらおうか」

二人を制するように遠次が言った。彼は紅の石や朱塗りの刀に手を伸ばすことはしなかったが、発する言葉の一つ一つに深い威厳が含まれていた。遠次は彼らの中でそのような立場にいるのだ。赤い羽織を着た彼らを導く。守る。それが遠次。惣次もこのようにしていた。思うと、惣次がとても遠い存在に思えた。優れた人たちを一喝する。惣次もそのような立場にあったのだ。思い出せば、惣次は怒らせると、とても怖いと子供たちが噂していた。遠次は赤の仲間たちの父のような存在なのだろう。彼らに確かな道を示す存在なのだ。

そんな険悪な雰囲気の中、悪気なく、場の空気を読まないように紅が笑った。

「いい加減にしないか、野江も都南も。遠爺の言う通りだ。こんなところで、そんなくだらないことで刀を抜くな。二人が争ったところで、私の前では何の意味も成さないぞ。私はお前たちよりも強いからな。都南、おとなしく聞け。お前たちと同じように私も惣爺には返しきれないほどの恩がある。惣爺がいたから、私は紅として身を守るだけの強さを手にすることが出来たし、二人だって陽緋と朱将になれただろ。滅多なことは起こらない。惣爺の目と、私を信じないか？」

紅は続けた。

「お前たちの言いたいことは分かる。惣爺が認めた小猿を信頼するのと、石を渡すのとは違うということだろ。そんなこと、分かっている。それにな、惣爺の石は限界に近い。もう数回使えば、色を失い、力を失う。小猿が石を持って逃げたところで、何の悪さも出来ない。小猿の身に危険が近づいたときに、小猿を守る力をくれるぐらいさ。惣爺の石は私の時代の石だ。小猿が悪さをしたところで、

私は気づくことができる。いつ、どこで、どの程度の力が使われたのか、がな。小猿がどこにいるのか分かるのさ。だから、なにも案ずるな。私を信じろ」

紅が笑い、同時に紅から赤い色が零れ落ちた。人は皆、己の色を持つと言われている。悠真は赤の仲間たちを見比べた。皆、赤い色に近しい色を持っているが、それぞれに個性がある。その中で、紅の赤は最も鮮烈で、最も強く、最も美しい赤色だ。悠真の前に現れる「赤」と同じ赤色を持っているのは、紅が色神だからだろう。

官府は紅に、紅自身の石を差し出すように要求してきた。それは、紅の石の監視を止めること。悠真の目の前にいる紅が、色神となつてから十年が経ち、先代の紅が生み出した石は減ってきたはずだ。現に、赤の仲間たちの紅の石は、すべて悠真の目の前の紅が生み出した石だ。紅の石は強大な力を持つからこそ、悪用しないように監視が必要なのだ。悠真はそれを理解した。

赤の茶会（5）

紅は台の上に置き、指ではじいていた惣次の紅の石を掴むと、悠真の手をとった。紅の手は悠真の手より小さく、細い指が印象的だった。少し冷たい紅の手が、戸惑う悠真の手を開くとその中に惣次の石を押し込んだ。

「村が滅び、お前の家族や惣爺が死んだ責任は私にある。だからこそ、遠慮をするな」

紅が微笑み、悠真に惣次の石を握らせた。直後、微笑む紅の表情が翳り、彼女は深く頭を下げた。

「悪かった。本当に……。私が何かを誤らなければ、村は滅びなかったかもしれない」

紅のその声は震え、紅は肩を落とし片手を擦り切れた畳の上につき俯いている。悠真は紅がとても小さく見えた。先刻まで、悠真は紅を憎んでいた。その憎しみは深く、処刑されることさえ厭わず紅に飛び掛ろうとしたほどだ。紅が官府の要求を拒否したから、悠真の村は滅びたのだ。つまり、紅が悠真の祖父を殺し、紅が惣次を殺し、紅が悠真の故郷を破壊したのだ。だから悠真は心から紅を憎んでいた。なのに、紅がそんな言葉を口にするから、紅の声が震えていたから、悠真の中の紅を憎む気持ちは薄れていく。今、目の前にいる紅は、悠真が憎もうとしていた紅ではない。色神として君臨し、田舎者の命を塵のように扱う紅ではない。紅が村人の死を悼むようなことを言うから、悠真は混乱するのだ。紅は強い人のはずだ。第一印象の高圧的な言動も、年上であるはずの野江たちをあしらう様子も、自分の力に絶対の自信を持っている雰囲気も、全て紅が強い人だと表していた。なのに、今の紅からは強さを感じられない。村が滅びた責任を、その小さな体全てで受け止めて、今にも押しつぶされそうなのに、その弱さを誰にも悟られないように必死に隠し、強い紅を演じている。紅の持つ一色が、悠真の胸に鮮やかに彩った。

火の国で赤を統べる色神は、美しく、強く、そして小さな存在。誰もが色神を讃え、誰もが色神に奇跡を期待する。「色神」と呼ばれるから人々は色神を本物の神と勘違いしてしまうが、色神も人間色に選ばれ、色の石を生み出す器となっただけだから、奇跡など起こせるはずがない。紅の石をどのように使うのかは、術士や権力者たちに委ねられている。色神が出来るのは、抑止力として石の監視をすることだけなのだ。色神が奇跡を生み出すのでない。奇跡を生み出そうと色神である紅は戦い、紅を守ろうと赤の仲間たちが戦っているのだ。

「悠真君」

佐久が悠真を呼んだ。悠真が佐久を見ると、佐久の眼鏡の奥の目が、とても強く輝いて見えた。それまでの、悠真の中の佐久の印象は優しく知的な人というものだった。穏やかで、刀とは縁遠い。しかし、その考えを改める必要があった。もしかしたら、彼らの中で怒らす一番怖いのは佐久かもしれない。そう思ったほどだ。肩を落とした紅を見て、再び佐久に目を向けると、穏やかな口調とは裏腹な目をした佐久がまっすぐに悠真を見つめて言った。

「もし、紅に牙を向けたのなら、僕は君を殺すよ。君がどんな理由でここに来て、どんな決意があるかなんて関係ない。僕らにとって、紅に勝るものなんて無いのだからね。忘れないで。僕は君を守るつもりであるけれども、それは君が紅を傷つけない前提だよ。きつと野江も都南も義藤も同じだよ。忘れちゃいけない。僕たちは君の味方なんじゃない。紅の仲間なんだ」

その言葉が嘘でないことくらい、悠真でも分かっていた。野江も都南も否定しない。遠次も何も言わない。穏やかで、優しく、悠真を敵視しない彼らにとって、悠真より紅の方が大切な存在だから悠真が紅に牙を向けた瞬間、悠真は殺される。赤の仲間は悠真よりも遥かに強い力を持ち、紅を守るために悠真の命を奪うことに躊躇いはない。赤い羽織は嘘をつかないのだから。

野江が悠真の首に、引退前に惣次が使っていたとされる紅の石を

かけてくれた。その石がとても重く、重みの分だけ、紅の存在が儚い存在のように思えた。紅の石は火の国を守り、火の国を豊かにし、火の国の民の生活を支え、他国が火の国に進入してくることを防いでいるのだ。この石があるから、悠真たち火の国の民は生きていける。この強い力を持つ恐ろしい石があるから、生きていけるし、争いも生じるのだ。

「覚えておきなさい。紅の石を持つということの重みを」

野江の言葉はとても深みがあった。この石は惣次の石だから悠真は術士でない。けれども、悠真は憧れていた術士に一步近づいた。一步近づいたのに、嬉しい気分にはならなかった。昨日までの悠真だったら喜んでいたのに、術士の苦悩を知り、紅の姿を見たから悠真は素直に喜べないのだ。色神になったために紅が背負った苦難を、紅を守るために戦い続ける赤の仲間たちの苦難を、悠真は知ってしまったから。

——小猿は我が色をどのように使うつもりじゃ？

赤の声が悠真の脳裏に響いた。

——人殺しに使うも、大切な者を守るために使うも、生活を豊かにするために使うも、全ては術士に委ねられる。我が赤色は、他色と異なり使い方が自由じゃ。小猿は我が色をどのように使うつもりじゃ？

赤が楽しむように悠真に語りかけていた。赤の言葉も、悠真への警告の言葉だった。赤の力「紅の石」をどのように使うかは、悠真に委ねられている。悠真は、どのように強大な力を使えば良いか分からなかった。同時に、どのようにすれば紅の石が持つ赤色の力を引き出すことが出来るのか、それさえ分からないのだ。それは術士と呼ばれる存在などではない。

赤の決意（１）

「こんなに、楽しい茶会に義藤がいないのは可愛そうね」

紅が悠真に惣次が使っていた紅の石を渡すという、突飛な行動をとるから、茶会は静まりかえっていた。悠真も首からかけられた紅の石の重みを感じ、赤の仲間たちの強さに押されて完全に萎縮していたのだ。その空気を打開するように、野江が微笑んだ。

「そうだね、義藤も呼んであげなきゃ。義藤は僕らの仲間だからね」
佐久が甘味をつまみながら言った。

「義藤の奴、一人残されていることを知らないのかもしれないな」
都南が渋く言い、遠次が続けた。

「紅に振り回されて、義藤も苦勞が絶えぬ。呼んでやれ」

誰もが義藤に期待をかけ、義藤を大切にしているようだった。努力を惜しまぬ天才。と赤の仲間たちが義藤を認めていたのは、先刻のことだ。もちろん、悠真は義藤のことがあまり好きではない。あの抜き身の刃のような顔立ちと表情が嫌いだった。

数刻後、義藤が荒々しく引き戸を開いて入ってきた。義藤を呼ぶと言い、使用人を走らせたすぐ後のことだった。義藤の首には数刻前に悠真が暴走させた紅の石がかけられている。悠真は、紅の石がどれだけの力を持ち、どのような可能性を秘めているのか分からない。しかし、赤は紅の石の使い方は術士に委ねられていると言った。紅の石は使い方次第で、武器にも役立つ道具にもなるのだ。手にした色をどのように使うのか決めるのは。人間なのだ。

「ああ、義藤。ようこそ」

まるで自分の部屋のようにくつろいでいる紅に、先の儚さは見えなかった。悠真はどれが紅の本当の姿なのか分からなかった。高圧的で高飛車な雰囲気、弱く儚い雰囲気、気さくで強い雰囲気、紅が全てを演じ分けているのなら、紅は火の国一番の役者だ。日ごろから演じることが必要な立場であるのなら、紅はとても辛い境遇にある

と言える。本当の紅は、どれなのか。紅に心が休まる時はあるのか、悠真はそれが気になっていた。それだけ、悠真の中に「紅」という存在が大きく居座っているのだ。憎む相手でない。尊敬する相手でもない。紅は、人の心を惹きつける魅力があるのだ。

「やはり、小猿の相手をしていたんだな」

義藤は開口一番にそう言った。

「相変わらず振り回されているな、愚痴ならいくらでも聞くぞ」

都南が気安く片手を挙げて義藤を出迎えた。部屋の主である佐久も微笑んだ。

「ようこそ、義藤。遠慮しないで入りなよ」

佐久が手招きをし、義藤は廊下に膝を折った。

「失礼します」

義藤が流れるような所作で部屋に入り座った。やはり、義藤の動作は品良く、紅が嬉しそうに義藤を出迎えた。赤い羽織も、朱塗りの刀も、義藤の力を証明している。

「渡したのか？」

義藤が紅に問うた。その一言で、悠真は義藤が言った言葉の意味が分かった。義藤の目は、悠真の首にかけられた紅の石に向けられている。この紅の石をめぐって、野江と都南が刀を握ったのは、先ほどのことだ。

「その話なら、俺たちの間で済んだ。かき乱すな」

都南が言った。悠真も義藤が激昂することを覚悟した。悠真の印象では、義藤とはそういう人のはずだ。しかし、義藤は小さく苦笑した。

「俺は反対なんてしませんよ。紅が言うのなら」

悠真は義藤が、紅の石を小猿に渡すということを認めたことが信じられなかった。義藤が紅を信頼していることは明らかだが、紅の行動全てを受け入れるはずも無い。義藤は紅の身に危険が生じること避けるはず。ならば義藤は、彼自身の意志で悠真を認めたと考えられる。都南は紅の安全のために反対をした。野江は滅びた村を見

たから悠真に力を与えようとした。ならば、義藤は何を思つて紅の石を悠真に渡すことを認めたというのだ。そう思うと、義藤がとも図りがたい存在に思えた。そんな義藤は背筋を伸ばし、悠真を見た。目は強く美しい。もしかしたら、義藤は良い奴かもしれない。悠真がそう思つてしまうほどだ。

「——小猿は俺の石を使った。それでいて平気な顔をしている。と言うことは、小猿の力は大緋に匹敵するということ。その上、力を制御できず、ただ暴走させているだけ。暴走させる上に他人の石を使えるとなると、想像以上に危険な存在だ。官府に渡れば、利用されかねない。ならば、ここにいてもらつたほうが小猿も安全で、官府に利用されないように俺たちが守ることが出来る。小猿自身が身を守るために紅の石を手にするのも当然のこと。術士でない小猿に紅の石を渡すことの全ての危険要素は、小猿が紅城にすることで排除できる。ここなら、この目で小猿を見張ることが出来て、何かあればすぐに止めることが出来る。小猿の力が暴走してめつたなことが起きたりしない。俺も、二度も負けたりしませんよ。負けても、野江や都南、佐久が何とかしてくれるでしょう」

はつきりした。悠真は義藤から信頼されていない。義藤は悠真を危険な存在として見ているのだ。悠真は、やはり義藤はいけ好かない奴だと、思った。悠真は危険な奴だから監視しやすいようにここに残る事を許され、危険な奴だから官府の手に渡らないように守られている。そういうことだ。

「義藤も言うね。本当に、数年後はどちらかが立場を奪われているかもしれないよ。何せ、都南はそこまで考えられないし、野江だって同情で認めたようなものだからね」

佐久が拍手をし、野江と都南が悔しそうに目を背けた。悠真は赤の仲間たちが義藤の力を信頼していることが分かった。義藤は、歴代最強の陽緋と、優れた朱将に認められている。彼らの立場を取って代わるほどの天才。義藤は野江、佐久、そして都南を見渡し言った。「まだ、引退なんてしないでくださいよ。俺は、生涯朱護でありた

いんですから。まだまだ、頑張ってください」

抜き身の刀のような義藤が、丁寧な言葉を口にしたことに悠真は戸惑った。やはり、義藤は良い奴かもしれない。無骨な言葉も、抜き身の刀のような行動も、全て紅を守るため。野江は言っていた。義藤は紅が色神になり紅となる前からの知り合いだと。もし、彼女が紅となったから、紅を守るために強くなったのなら、義藤は強い心を持っている。全ては、大切な人を守るため。やはり義藤は良い奴だという結論に至った。悠真は必死に義藤の品定めをしていた。野江たち優れた術士が認める存在が、どのような人なのか気になったのだ。

赤の決意（２）

悠真は義藤の品定めをしながら、赤の仲間たちに目を向けた。赤の仲間たちを見れば見るほど、紅は素晴らしい人たちに囲まれていると思うのだ。彼らは紅の仲間なのだ。突然、そうだな、と口にしたのは佐久だった。

「悠真君、ここに泊めると言っただけで、やっぱり義藤のところに泊めてもらうといいよ。年も僕たちよりは義藤に近いし、気を使わないで済むでしょ。僕ね、こう見えても人を見る目はあるつもりなんだ。義藤と悠真君。きつと仲良くなれると思うんだ」

悠真は言葉を失った。正直なところ、悠真は義藤が苦手だ。悠真の必死の品定めの結果、義藤が良い奴だとしても、義藤の行動は紅を思うが故とはいえ、義藤はあまりに怖かった。白刃が目の前に迫った恐怖を簡単に忘れることは出来ない。ならば、佐久と一緒にいたほうが安心できた。野江が獅子なら都南は虎、義藤は狼といったところだ。佐久だけが普通だ。安全なのは佐久と一緒にいることなのだ。

「無茶言うのは止めてください。俺は今日、泊りなんで」

佐久の突然の申し出に、あからさまに義藤が拒否をし、もちろん、悠真も同感なので胸をなでおろした。良い奴だとしても、義藤の第一印象は最悪だった。義藤の家に泊まるのなら、床下で寝たほうがましだ。恐ろしい人の近くで休めるはずがない。小さく笑ったのは紅だった。

「分かった、今日、義藤は泊まりだ。佐久と都南、野江も一緒だ。小猿も来ればいい」

紅は誰もが反対することを容易く口にするから、空気を赤く染めていく。そんな無茶苦茶な、と佐久は言ったが、紅の決定を覆すことなど出来ない。

「嫌な予感がするんだ。官府が動き始める、そんな予感。犯人は、

惣爺を殺しても、私が動かないことを知り、次はどんな手で出てくるのか分らない。過ぎた警戒ならそれでいい。私の命が奪われるくらいならそれでもいい。下手をしたら、私をはじめ、お前たちも殺されるぞ。石の警告はあたる。私が殺され、お前たちも殺されるようなことがあれば、次の紅を誰が守る？紅が死んでも次の紅が現れ、紅に代わりはいるが、紅に忠義を尽くす優秀な術士や将軍、技術者に代わりはいないのだからな」

紅は、紅の石を取り出した。赤の仲間は紅を守ろうとし、紅は赤の仲間を失わないようにしている。その関係は悠真には理解しがたい。「これは、私の石だ。私が色神紅となり、最初に生み出した石。私以外に使用することが出来ず、決して色を失わない石。全ての石がどこで使用されたのか分かる。この石を官府に渡すことは出来ない。この石が警告している。だから、今日は危険なんだ。こうやって、私が小猿を気にかける理由、分かるだろ」

紅は立ち上がった。

「赤影も動かすのか？」

義藤が言った。「赤影」が何を指すのか悠真には分からない。ただ、赤影が強い存在であることは、会話の流れから理解できた。

「必要があればな」

紅の強い言葉に、義藤は苦笑した。

「紅は、紅の代わりは現れると言うが、俺はそうは思わない。俺は、お前じゃなきゃ共に戦うことはしない。忘れるなよ。紅は色神の前に、一人の存在なんだ。きっと、赤丸も同じさ。お前が紅だから、命を賭して守るんだ」

義藤はまっすぐに紅を見つめていた。赤の仲間たちは言っていた。義藤は彼女が紅となる前から面識があると。義藤は色神紅を守ろうとしているのではなく、彼女を守ろうとしているのだ。義藤はゆっくりと続けた。

「それほど紅が危機を感じているのなら、紅は野江のところに身を寄せるといい。赤と都南、佐久に護衛を任せて。俺は、紅の人形で

も守っているから。その方が、官府の目も誤魔化しやすいし、官府も俺が紅から離れるとは思わないから、俺のところに官府をひきつけられる。何か事態が生じれば、紅は逃げやすくなる」

悠真は義藤の言葉に戸惑った。義藤は誰よりも紅の近くにいることを望むと思ったのだ。なのに、義藤の申し出は、彼が一人で危険な場所で囷になることを望んでいる。紅の警告は義藤が本気になるほど当たるから、義藤は自ら囷になると言ったのだ。確かに、紅の直属の護衛である朱護の義藤が、あの紅の部屋に残れば、敵は紅がそこにいると思うだろう。守るために、危険な状況に平然と足を踏み入れる。義藤には命を賭しても紅を守るという強い決意があるのだと、悠真は感じた。

赤の決意（3）

紅はいくつもの表情を見せる。その中で共通しているのは己の力に自信を持っているということだ。そもそも、色神として生きる以上、自分に自信がないといけないのかもしれない。自分に自信のある紅が警戒し、仲間と一緒にいることを指示したことは、紅が強い危機を感じているということ。紅が危険を感じているから、義藤は困になると申し出た。命がけで紅を守ろうとする義藤に野江が言った。

「確かに名案かもしれないけれど、下手をすると義藤……あなた死ぬわよ」

野江の言葉は遠慮がない。何かを包み隠すようなこともない。

「そう簡単には負けません」

義藤に迷いは無い。すると都南が楽しそうに言った。

「まさか、義藤が自分から紅と距離を置くようなことを言うなんてね。義藤が紅の隣を離れて、どうするんだ？お前が紅を守るんだろ」

「赤丸が動くなら紅の護衛は問題ありません。彼は、俺以上に強いから」

義藤も頑固だ。佐久が身を乗り出して言った。

「まるで、赤丸を知っているようだね。確かに、赤丸は強い存在であるけれど、赤影の正体や赤丸の正体を知っているのは紅だけですよ。紅も絶対に話したりしない。赤影や赤丸は裏の存在だからね」
義藤は何も言い返さなかった。「赤影」や「赤丸」が何を指すのか分からないが、紅を守る存在であること、そして誰も正体を知らないことは分かった。紅がけけらけらと笑った。

「赤丸のことを探るな。赤丸は、野江とも都南とも、もちろん佐久や義藤とも異なる存在だ。表の世界のお前たちが、裏の世界の赤丸を知る必要はない。——義藤、私の警告は当たるぞ。止めておけ。今回の敵は、村一つを壊滅に追い込み、外部から野江の侵入を阻む

ことが出来るほどの力を持つ。下手をすると、本当に死ぬぞ」

紅は笑っているのに、その言葉に冗談は無く、返した義藤の言葉も冗談を含まない。

「だからだ。大きな敵ならば、紅を守りきれないかもしれない。歴代の紅のうち、何人が暗殺された？ 運が良かっただけでは生き残れない。二年前だって、下手をしたら紅も死んでいたかもしれないんだ。紅、赤丸を動かすほど警戒しているんだろ。逃げているだけじゃ、何も始まらない。惣爺もそう言ったんじゃないのか？ 惣爺を殺して、村を一つ滅ぼした奴を野放しには出来ない。もっと大きな被害が出る前に阻止しなければならぬ。どんな危険があっても、どんな犠牲を払っても。その犠牲が俺であっても、紅は犯人を捕らえて罪を明らかにしなきゃいけない。本当は、分かっているんだろ」

しばらく沈黙が続いた。義藤の思いがけない言葉に、誰も何も言えない。もちろん、義藤を苦手としている悠真であっても、義藤の言葉は受け入れがたい。目の前にいる人物が、死ぬかもしれないということを容易く受け入れることなど出来ない。罔になって確実に死ぬわけじゃない。そう分かっているとしても、この場の雰囲気がそう告げていた。歴代最強の陽緋野江。朱将として朱軍を率いる都南。陽緋に匹敵する力を持つ佐久。そして、次の陽緋とも朱将とも呼ばれる義藤。彼らが揃っても、面と向かって敵と戦い勝つことは出来ない。田舎者の悠真には分からない政治的戦略や、工作があるのだろう。

「紅、それしかないよ」

佐久が一番に口を開いた。佐久は義藤の申し出を、紅に受け入れるように言ったのだ。そしてゆっくりと佐久は続けた。

「紅、聴くんだ。もし、今日を乗り越えたとするよ。それでどうなる？ 僕たちはいつまでも敵の尻尾をつかめないんだ。次は、どんな犠牲が出る？ どんなことをされる？——確かに危険だよ。義藤一人では手が足りないかもしれないし、下手をすれば義藤が命を落とすかもしれない。それでも、これしかない」

誰も否定しない。紅たちは敵の正体を知らない。誰も知らない。悠

真は一体何をするために紅城に来たのだ？悠真は、祖父を、惣次を、村の人たちを殺した人に復讐をするために紅城までやってきた。田舎者と避難されても、小猿と馬鹿にされても、紅を憎むことになっても、悠真の信念は揺るがない。義藤は一人で敵と会う。それは千載一遇の好機。無力で何の伝手もない悠真が、強大な敵の正体を知る好機。悠真の復讐の相手が紅でないならば、本当の敵の正体を悠真は知らなくてはならない。

赤の決意（４）

義藤は紅を守ることを決意し、悠真は復讐を決意した。義藤が囃となり敵と接触するのなら、悠真が敵と接触する好機はその時にある。悠真が己の決意を口にする時を探っていると、ずっと黙っていた遠次が口を開いた。

「紅を守るために一人で囃になり、死すことも厭わずとは……。義藤、お前の願いは、赤丸を再び表舞台へ引き出すことか？」

遠次の言葉に野江たちが不審な表情を見せた。そして、義藤は言った。

「俺は行きます。赤丸が動くのなら、赤丸が身を呈してでも、必ず紅を守る。赤丸を表舞台に引き出せるかどうかは、俺には分かりません。それは俺じゃなくて、紅や赤丸自身が決めることでしょう」

遠次は小さく笑った。

「お前は時々わしの想像を超える行動をする。十年前の子供とは別人だな。——弟の義藤は強いが優しい。お前の父が言っていたのを出す。とても嬉しそうに、誇らしそうに、お前の父は話していた。お前の父はお前に会ったことが無かったが、母が伝えていたのだろ。お前の母は、死すときまで子供の成長を願っていたに違いない。二人の息子は母が願い名づけた通り、紅に忠義を尽くす。行け、義藤。紅を守るのはお前の仕事だ。必ずや、お前の両親が紅と義藤を守ってくれる」

遠次が義藤の後押しをしていた。

「遠爺と義藤が俺たちに隠し事とは。遠爺は、赤丸の正体と義藤の両親を知っているのか？」

都南が言った。

「他人の過去をあさるものじゃない。お前だって、触れられたくない過去があるだろ」

遠次がぴしゃりと言い、その言葉に萎縮して、それ以上は誰も何も

言わなかった。

「分かったよ、遠爺。それ以上は何も言わない。俺は義藤が行くことに賛成だ。義藤じゃなくて、俺が囮になりたいが……義藤でなければ意味が無いだろうな。紅、それしかない」

都南が言った。佐久と都南が義藤の申し出を肯定した。紅を守るためだけじゃない。正体を見せない敵の正体を知るために必要なのだ。そして、悠真にとっても必要なことだ。

「分かった。危険を恐れていては、何も手にすることは出来ない。

義藤、死ぬなよ」

紅が義藤の顔を覗き込んで言った。それに対して、否定したのは野江だった。

「お待ちなさい。みすみす義藤を死なせるおつもり？義藤は必要の人よ。簡単に命を落としてはいけないわ」

野江が強く怒りで震える声で否定した。

「安心してください。俺は死にません。たとえ死んでも、もう一人の俺が現れますから」

義藤が野江に告げた言葉の意味が悠真は分からなかった。もちろん、他の人たちも同じだ。ただ一人、紅だけが不快感を露にしていた。遠次も何かを知っているらしい。それでも、無表情を演じることが出来るのは、年の功だ。悠真は自分の意志を告げる機会を探った。義藤が囮になって、官府の敵の正体を探る。それは、悠真の望んだことだ。

「ならば、私は誰かのところに泊めてもらうとするか」

紅が不満げに言った。

「俺も」

悠真は言った。義藤と一緒にいき、復讐の機会を探りたかった。好機を逃す理由はない。

「そうだな、義藤のところに泊めてもらえないから、やっぱり佐久のところ泊めてもらうといい。都南より佐久の方が気安いだろ」
紅が言った。それは、悠真の望むこととは違う。

「違う。俺は、義藤と一緒に行く。俺は、村を滅ぼした敵の正体を探って復讐するために紅城まで来たんだ。引き下がれない」

紅が苦笑した。

「言っただろ。義藤でさえ危険なんだ。小猿が行ってどうする？」

「分かっているさ、そんなこと。それでも、俺は紅城まで来たんだ」
悠真は何を言われても考えを変えるつもりは無かった。そのためにここまで来た。そのために、生き延びたのだ。

「せっかく生き延びたんだ。なのにこんなところで死ぬつもりか？」
紅の言うことは最もで、悠真は自分の命の重み知らない愚か者だ。無鉄砲。他者に迷惑をかける。それでも、諦めきれない。ここで諦めては、自分が何のために生き延びたのか、なぜ生きているのか分からなくなるのだ。

赤の決意（5）

悠真は復讐の相手を探り、復讐をするために義藤と一緒に行かなければならない。悠真は諦めることは出来ない。選別で落ちた自分が紅の石を使える。村の復讐をすることが生き延びた理由のように思えるのだ。

「ここで諦めたら、俺は生きる意味を失ってしまう」

それが本心だった。危険でも足を踏み入れなければならない。

「小猿は愚かな上に馬鹿者だな。話を聞いていなかったのか？実力者義藤一人でも危険だというのに、小猿が行ってどうするって言うんだ？」

紅は悠真を止めようとしたが、悠真に止まるつもりは無かった。それは紅に飛び掛ったときと同じだ。このまま生きていても、悠真は何も感じることも出来ないのだ。村が滅びて、祖父と惣次が殺された復讐をすることもなく、笑うことなんて出来ないのだ。

「俺は下がれない。俺は、戦わなくちゃいけないんだ」

悠真は再び反対されることを覚悟した。しかし、何を思ったのか紅は一つ息を吐きゆつくりと言った。

「義藤、小猿の守を頼めるか？」

義藤は小さく笑った。

「断ったところで、どうにもならないだろ。紅が小猿を守るというのなら、俺は必ず小猿を守る」

諦めたような義藤の言葉が印象的だった。

「そんな無茶苦茶な」

野江が言ったが、悠真を止めることが出来ないことを感じたのかそれ以上は言わなかった。同じように紅を大切に思う都南が言った。

「小猿のことは義藤に任せよう。俺たちだって、黙って隠れているわけにはいかない。敵が襲撃するとすれば、義藤のいる紅城の最上階だろう。万一、勘良く紅の本当の居所を知れたのために、紅

は野江と一緒にいる。もちろん、赤丸を動かすのを忘れないでくれよ。義藤の言葉を借りるわけじゃないが、赤丸がいる限りよほどのことは生じないだろう。赤丸は、俺たちを超える実力者に違いないからな。俺と佐久と、野江と紅は三つに分かれて紅城を囲む。それで良いな」

野江が続けた。

「敵はきつと、闇に紛れて来るはず。義藤、あたくしたちが、あなたを援護するわ。あなたを死なせたりしないわ」

野江が静かに笑い、悠真に目を向けた。

「悠真、あなたは強くおなりなさい。大切な者を守るには、それなりの力と覚悟が必要なのよ」

野江の言葉に嬉しそうに笑ったのは紅だった。

「野江、都南、佐久、そして義藤。私の自慢の仲間たちだ。小猿も羨ましく感じるだろう。小猿が本意を成し遂げ、それでも、紅城で生きることを選ぶのなら、小猿に合わせた石を渡そう。私の自慢の仲間の下で学ぶことを認めよう。それまで、小猿は術士にならず、逃げ道を残しておけ。どんなに過酷な現実を知っても、この城で生きることを選ぶまでな」

紅の言葉に赤い羽織を着た面々は深く頭を下げた。年齢も関係ない強さも関係ない。紅は誰よりも上に立つ強さを持つ。悠真も彼らの中に加わりたいと思った。それは、彼らの強い一体感に憧れた。彼らは何があっても紅を中心にまとまっていく。どんな困難も紅がいれば乗り越えられる。決して孤独にはならない。家族を失い、故郷を失った悠真にとって、その一体感は憧れであった。復讐を果たすと息巻く自分は、復讐がなければ孤独に押しつぶされてしまう。誰も悠真のことを知らない。誰も悠真の心配をしない。悠真が他人を思うこともない。復讐が無ければ、悠真がいるのは孤独の海。ふと疑問に思ふのだ。本意を遂げたところで、悠真はどうなるのだろうか。孤独から逃れるために、悠真は彼らに加わりたいと願うのだ。加わりたいと願うと同時に、惣次や野江、そして紅の言葉を思い出

すのだ。

——普通の生活をしてえ、そう思うのが普通じゃ。もしかしたら、紅もそげえ思っとるかもしれんの

——よくよく考えなさい。紅城へ足を運ぶということは、術士になるということ。今までのような生活は送れないわ。

——それまで、逃げ道を残しておけ。どんなに過酷な現実を知っても、この城で生きることを選ぶまでな。

彼らは幾度と無く悠真に忠告した。術士になることを望んではない。術士になっても、待っているのは過酷な現実。それでも悠真は言った。

「俺は、強くなりたい。強くなって復讐するために」

すると、紅が悠真の前に刀を差し出した。それは、普通の黒塗りの刀。

「もって行け。むやみやたらに石を使うな。力を守ると同時に他者も傷つける。未熟な小猿はなおさらだ。小猿は今、義藤に身を委ねた。義藤に習え。義藤は強いぞ」

今の悠真に躊躇いは無い。迷うことなく刀を受け取った。目の前に敵が迫っている。村の人たちが命を落としてから、一日も経っていない。忘れることが出来ない。呆然とすることも出来ない。悠真を駆り立てているのは、強い憎しみと復讐心だけだから。

赤のからくり師（１）

義藤の決意と悠真の決意に茶会は不思議な局面をきたしていた。緊張からか悠真はお茶をたくさん飲み、気づけば湯のみは空になっていた。それに気を使った佐久がお茶を入れようと立ち上がり、当然のように足をとられて転倒しそうになるから、当然のように都南が支えていた。

「お茶なら、俺が淹れますよ。危ないので、座っていてください」
義藤が流れるような所作で湯を沸かすからくりの手を伸ばし紅の石をからくり仕込んだ。悠真は気遣いをする義藤がどこか気に入らなかった。義藤が気遣いをするとうあつても、彼が良い奴だという結論に達してしまうからだ。術士である義藤は当然のように紅の石の力を活用し、からくり師が作り出したからくりで湯を沸かそうとする。悠真が紅の石で湯を沸かす瞬間を見ようと目を細めたとき、
「おや」と義藤は手を止めた。

「からくりの調子が悪いんじゃないですか？」

義藤はからくり仕込んだ紅の石をはずした。

「このからくり、使わない方がいい。以前、鶴蔵に言われたことがあります。からくりは生き物と同じだと。無理をさせない方がいいです。からくりは、鶴蔵にとって子供なのだから。俺は鶴蔵に叱られたくありませんからね。このからくりは使わない方がいいですよ」
義藤は労わるように、からくりに触れていた。困ったように佐久は頭を抱えた。

「分かっているんだけど、どうも忙しくてね。僕が使うとどうしても落としたり、蹴ってしまったり、踏みつけたり、僕にそのつもりが無くて荒い使い方になっちゃうからね」

けらけらと笑ったのは紅だった。

「佐久が壊してしまうことは、鶴蔵も承知済みさ。ちょうどいいじゃないか。鶴蔵も呼ぶといい」

言つと紅は懷から小さなからくりを出した。それは車輪のついた小さな車だった。

「おや、珍しいからくりだな。鶴蔵の新作か？」

都南が興味ありげに身を乗り出した。

「先日、鶴蔵がくれたんだ。紅の石の力で動き、迷うことなく鶴蔵のところまでたどり着く。鶴蔵のところまで行くと、使用した術士の所まで戻るらしい。——鶴蔵がくれたときにな、体を動かすのが苦手な佐久に渡す、と言っておいたのさ。佐久は鶴蔵のところまで行く段階で怪我をしてしまうからな。佐久、お前が使える。私が使うよりお前が使ったほうが鶴蔵の反応が面白いはずだ」

紅が笑いながら、小さなからくりを佐久に渡した。

「紅、鶴蔵をからかうのは程々にしておけ」

遠次が紅に苦言をしていたが、紅は一向に気にせず笑っていた。

「いつも私から逃げる鶴蔵への仕置きさ」

紅が笑いながら、からくりを佐久に手渡した。

「仕方ないね。紅が言うなら、僕が使うよ。鶴蔵は僕が持っているって思っているんですよ。いやあ、鶴蔵が便利だからくりを作ってくれるから、助かるなあ」

佐久がからくりに自分の紅の石を仕込み、仕込まれた紅の石は赤い光を放った。紅が膝を立てて、嬉しそうに笑った。

「佐久、少しは体を動かせ。からくりは、お前が怪我をしないための補佐でしかないんだぞ。しっかりしろ。私はお前にじつとしておけなんて、一言も言っていない。体を鈍らせるな。安全な範囲で動け、と私は言っているはずだ。鶴蔵がお前のために作ったからくりだってあるんだからな」

困ったように佐久は俯き、紅はけらけらと笑っていた。

「分かっているんだよ、紅。僕だって動かなきゃいけないことぐらいね」

体を動かすことが極端に苦手な佐久が苦笑していた。

佐久が紅の石を仕込み使用したからくりは動き始め、佐久は紅の

石を取り外した。紅の石をはずされても動き続けるのだから、このからくりの制度の高さが証明されている。からくりは車輪を回転させ、障子の隙間から外へと出て行った。

それからしばらく経ってからのことだった。

「佐久はん、入ります」

障子が開き、外には前髪の長い男が頭を下げていた。ぼさぼさの髪に、よれた着物。張り詰めた空気を和ますような場違いな男。着物の形は甚平と近い。長い前髪で目は見えない。汚れた赤い前掛け。彼も紅に近しい存在のようであった。鶴蔵を呼んでいるのだから、目の前の男がからくり師鶴蔵のはずだ。

「待っていたよ、鶴蔵」

佐久が身を乗り出した。ぼさぼさの髪の男が顔を上げ、悠真たちを見渡した。長い前髪に隠れて目は見えないが、小さな生き物のような仕草が怯えた印象を与えた。そして、体を縮めて慌てて障子を閉めた。

「す、すみません。あつし、出直しますんで」

人に会うことに照れているような雰囲気。現在、優れたからくり師がいることを悠真は知っている。野江が使う空挺丸を作り出し、紅の石から独立して動き、目的地まで辿り着くからくりを作り出した。紅の石は力であるが、使用方法は術士に委ねられている。術士が使用すると大半は戦いに利用されかねない。紅の石を動力として動くからくりがあるから、紅の石の使用幅は広まるのだ。これが、稀代のからくり師なのだと、悠真は小動物のようなからくり師「鶴蔵」を見た。

赤のからくり師（２）

小動物のように隠れてしまった稀代のからくり師を連れ出そうと、佐久が腰を浮かせた。

「ちょ、ちよつと……」

佐久が立ち上がり、大股で歩き、悠真の前を横切り、義藤と遠次の間を通り障子を開いた。

「鶴蔵、待つて」

佐久が障子を開くと、そこには散らばった荷物を慌てて道具箱に入れている男がいた。ぼさぼさの髪に、櫛を通したのはいつが最後ののだろうか。田舎者で汚い悠真は、どこか親近感を覚えた。

「すみません、改めて来ますんで」

鶴蔵と呼ばれた男は、慌てて荷物をまとめていたが上手くいかず、慌てれば慌てるほど、手から道具が滑り落ちていく。使い込まれた道具が外廊下に散らばり、彼は道具を汚れた風呂敷に入れようとしていた。

「鶴蔵、お前のことも紹介するから入れ」

膝を立てて座った紅が言い手招きをしたが、鶴蔵は深く頭を下げて信じられない速さで首を横に振っていた。

「あつしには、紅様と同席する資格がありませんので」

極度の緊張家なのか、照れ屋なのか、悠真には分からない。鶴蔵はぼさぼさの頭をぐしゃぐしゃにし、掻いた頭からは埃が落ちた。

「鶴蔵、また私を紅様と呼んだな。赤い前掛けを渡すときに言っただろ。お前は私の信頼できる仲間の一人だと。いい加減、赤を持つ覚悟を持て。紅を支えるのは術士だけでないんだぞ。学者がいて、師がいて、加工師がいて、お前のようなからくり師がいる。だから私は紅として立っていける。誰が欠けることもならないんだ。周囲に恵まれているのが、私の幸運だ」

紅は子供のように頬を含ませて、頬杖をつき、鶴蔵は怯えたよう

に身体を縮めた。

「紅も鶴蔵を怖がらせないでよ。気にしないでいいよ。からくりの調子を見て欲しいんだ。ほら、鶴蔵、入りなよ」

佐久は鶴蔵の腕を掴み立たせようとしたが、それでも佐久らしく足を滑らせた。佐久に手を貸したのは、入り口の隣にいた義藤だ。

「気をつけてください」

支えた義藤が一言、佐久に言った。

「ごめん、ごめん。義藤。助かったよ」

佐久は照れたように歪んだ眼鏡を直した。佐久は再び鶴蔵を中へ引き込もうと試みていた。

「ほら、鶴蔵。入って」

「あつしは遠慮させていただきやす」

鶴蔵を立たせようとして、佐久は何度も足を踏み外し、そのたびに近くにいた義藤が支えていた。

「あ、義藤。ありがとね」

佐久はそんなことを言いながら、小動物のようなからくり師鶴蔵の中に入れようと必死になっていた。義藤は困り果てたように溜め息をつき、助けを求めるように都南に助けを求めている。都南は逃げるように目をそらせていた。紅は手を叩いて笑っていた。

佐久と鶴蔵の押し問答を部外者の悠真は見ている。赤の仲間たちは生き生きと生きている。

「いい加減にして！」

大きな声を上げたのは野江だった。野江は彼女らしくない歩き方で紅や悠真たちの前を横切った。困ったように肩をすばめたのは、都南だった。

「鶴蔵、紅が入れて言っているでしょ」

野江は彼を「鶴蔵」と呼び、乱暴に彼の腕を掴んで部屋に引き入れた。彼はばらばらと道具を辺りに散らばせて、遠次と義藤の間に座った。義藤がそつと鶴蔵の背中を叩いていたのを悠真は見逃さなかった。

「紹介するわ。彼は鶴巳。通称鶴蔵。空挺丸を作り出した、稀代のからくり師よ」

鶴蔵は困ったように頭を掻いた。埃がばらと畳みに落ちた。

「あつしは鶴巳。鶴蔵と呼ばれています。はい。鶴蔵って言うのは、あつしが紅城へ雇用されるときに名前を鶴三と間違えて書類に書いて、それで字が変わって鶴蔵です。はい。今じゃ、鶴巳と呼ぶんは野江だけです。どうか、鶴蔵と呼んでください」

鶴蔵は口ごもりながら話し、怯えるように畳に額をつけた。拍子に台に頭をぶつけ、鶴蔵を起こすように義藤が手を貸していた。鶴蔵の声は耳をそばだてなければ聞こえないような声。それが鶴蔵の話し方。間違いなく鶴蔵は小さな生き物のような存在だった。野江が溜め息をついた。

「鶴巳は稀代のからくり師よ。からくりの道ならば、右に出る者はいないわ。湯をわかすのに便利な、このからくりも鶴巳が発明したものなの。鶴蔵がいるから各地に散る下緋たちは、安全に職務をこなすことが出来ているのよ。もちろん、中央に残る術士や、あたくしたちも同じ。からくりが、紅の石の使い方幅を大きく広げて、あたくしたちの生活を支えているの」

野江は、まるで自分のことのように鶴蔵を説明していた。悠真は野江だけが鶴蔵を鶴巳と本名で呼ぶ。それが二人の距離を示しているように思えた。思えば、鶴蔵のことを話すとき、野江の雰囲気がつもと異なる。落ち着いた大人の雰囲気、心なしか崩れるのだ。けらけらと紅が楽しそうに笑った。

「野江は鶴蔵のこととなると、自分のことのように話すなあ」

野江をからかって楽しんでいるようだった。

「紅、いい加減にしてください。あたくしを怒らせないでくださいな」

野江が紅に答えて、席に戻ろうとした。

「すみません、すみません。また、野江に迷惑をかけてしまったっす。すみません」

鶴蔵が頭を掻きながら、お辞儀をしていた。鶴蔵は野江のことを気安く名で呼ぶ。佐久にはきちんと敬称を付けていたにも関わらずだ。

「そんなに頭を下げないの」

「すんません」

鶴蔵は頭を掻きながら俯いた。鶴蔵の目は長い前髪に隠されているが、そもそも俯くことが多い鶴蔵の顔を見ることは難しい。

「頭を掻かない」

「すんません」

鶴蔵は体をすぼめて、出来るだけ小さくならうとしているようだった。この場の邪魔にならないように、己の存在を消し去ろうとしているようだ。

「小さくならない」

「すんません」

鶴蔵は困り果てたように、畳を見ていた。

「ちゃんと前を見て」

「すんません」

「謝ってばかりじゃない」

「すんません」

野江と鶴蔵はそんな会話を続けていた。野江の言葉は厳しいようで、少しも鶴蔵を傷つけるような語句を含んでいない。鶴蔵もさほど気にしていないようで、二人の間では当然の掛け合いらしい。悠真はそれを感じながら、野江と鶴蔵を並べてみる事が出来なかった。品の高い野江。ぼさぼさ頭の鶴蔵。「月とすっぽん」とはこのことだ。

「続きは後でしてくれ」

遠次が一つ呟き、野江は照れたように何も言わずに俯いた。

赤の手合わせ（１）

紅城の人々は、個性豊かな人たちだ。いくつもの顔を持ち、氣さくに振舞う紅。上品なのに嫌味が多い陽緋の野江。術が使えない朱将の都南。運動音痴で甘味に目が無い佐久。人見知りのからくり師の鶴蔵。彼らを包み込むように見る遠次。彼らは大きな責務を負い、火の国の核となる人たち。本来なら、悠真のような田舎者が言葉を交わすことなど許されない。なのに、言葉を交わすと、彼らも悠真と同じ人間なのだと実感させられるのだ。紅と共に歩むことを決めた赤の仲間たちは、常に紅を氣遣っている。きっと、鶴蔵も同じはずだ。

「鶴蔵、いい加減私に慣れる。お前は先代紅の頃から、この紅城にいるんだろ。出会ってから十年。いい加減慣れるよ」

紅が遠次の甘味をつまんでいた。全ては紅の立場と人柄が許される行動なのだろう。

「紅も、色神となって十年。もう、子供じゃないんだ。いい加減落ち着きを持ったらどうだ？」

遠次に甘味に再び手を伸ばした紅の手を、遠次が軽く叩いた。紅は手を引つ込め、頬を膨らませた。

「良いんだ。私は十分がんばっているからな」

まるで子供のように紅は振る舞い笑った。しかし、直後まじめな顔をして悠真を覗き込んだ。

「さて、ふざけるのはこの辺にしておこう。小猿、よく聞け。私には敵が多い。敵が多い私が赤い色を手渡しているのは、紅城に数人いる」

紅がゆつくりと口を開いた。悠真は辺りを見渡し、赤を許された人たちを見た。

「そこにいる遠爺、野江、都南、佐久、義藤。そして鶴蔵。他にも、加工師の柴もいるが、奴は今頃どこにいるのやら。紅城にいるのは

彼ら五人。この広い紅城で私が心から信頼できるのは、この五人。小猿、他の人について行くなよ。他の人に一人でついて行って安全だという保障を私はしない」

紅は微笑んだ。赤は美しく、強く、孤独な色。孤独な人たちが身を寄せ合い、仲間となっている。紅たちは互いの孤独を赤で繋げているのだ。

——赤じゃ

一瞬、悠真の視界が赤に包まれた。赤の世界で、夢で会った赤い女性が生かんだのだ。

——赤になれ

赤の音が響き、そして消えた。悠真は不気味な感覚を覚えた。赤が悠真を捕らえようとしているように思えたのだ。悠真の一色を赤に染めようとする。

——駄目よ。赤に染まっては駄目。

そのたびに、無色の声が悠真を止めるのだ。赤の仲間は優しく魅力的だけれど、赤に染まると言う。悠真はその真意が分からなかった。

赤の色神紅が信頼を寄せる人物が悠真の目の前にいた。彼らは何を思っているのか、悠真には何も分からない。

「夜まではまだ時間があるなあ……」

場の空気を敢えて読んでいないだろう紅が両手を頭の後ろに組み、そのまま畳の上に寝転んだ。そもそも広くない佐久の部屋。多くの人数が集まり、窮屈な部屋の中で紅が寝転ぶから、赤の仲間と悠真は体を縮めるしかなかった。最も怯えているのは鶴蔵だった。

「お止めなさいな。はしたない」

野江が紅を叱責したが、色神紅は何も気にする様子も無く台を蹴りながら足を伸ばした。

「仕方ないだろ。真面目な話をして疲れたんだ。少しぐらいくつろいだって良いだろ」

悠真は紅を見て、それが火の国の色神なのだということが信じられ

なかった。今日、紅に合うまで、色神は高貴な神だと思っていたのに、目の前にいる紅は男勝りで大雑把だ。この人が、色神だと知れば火の国の民の大半は信じる道を失うだろう。そもそも、色神が普通の人間だったということさえ思えば、紅が男勝りで大雑把なのは仕方ないのかもしれない。彼女はそういう性格なのだろう。

一つ、溜め息をついたのは義藤だった。紅よりも義藤の方が品が良い。

「野江、都南、一つ頼みがあります」

「何だ？」

義藤の申し出に、都南が訝しそくに目を細めた。

「きつと、今日俺は戦います。その前に、一度手合わせを願えませんか？真剣勝負でお願いします」

義藤が畳に手をつき、浅く頭を下げた。

「それだ、面白そうだな」

紅が手を叩いて喜んでいた。

赤の手合わせ（２）

義藤が野江と都南に手合わせを願い出て、紅は手を叩いて喜び、体を起こすと胡坐をかいて座った。そんな紅を野江が叱責した。

「紅、けしかけるのは、お止めなさい。義藤も義藤よ。なぜ、今日に手合わせをするの？」

野江は紅に世話をやく姉のようだった。

「野江、義藤に負けることが怖いのか？」

都南が嫌味をこめて言い、野江は強い口調で返した。

「都南、あたくしの心配は結構よ。義藤もいい加減になさい。手合わせなら、いつでもしてあげるわ。今日以外の日ならね」

義藤は困ったように首をかしげ、続けた。

「今日でないと意味が無いんです。俺は今日、死ぬかもしれませんが死ぬとしたら俺が弱いからでしょう。ですから、自分に言い聞かせたいんです。己は少しずつでも強くなっていると」

義藤の言葉に悠真は驚いた。悠真の守を言った義藤は、己の死さえ見据えているのだ。自分が死ぬかもしれない。復讐に息巻く悠真は自分の死を考えることが出来なかった。復讐という目的を果たすまで、己は無事だという根拠の無い考えがあるのだ。それはまるで、子供のような浅はかな考えだ。己の死を見据えて、己の実力を確かめるために手合わせを願う。それは、一般人の悠真には理解しがたい考えだった。そんな義藤に野江は首を振った。

「あなたは強くなっているわ。あたくしは知っているもの。義藤は忙しい業務の間、毎日鍛錬をしていたわ。あたくしたちは義藤の力を認めているの。いつの日か、あなたに追越される日を待っているの」

野江は真面目な性格なのだろう。今夜、義藤が死ぬ可能性があるから、気を使っているのだ。陽緋野江の威圧感言葉では表現しがたい。野江に萎縮され、都南さえも口を止めてしまった。その沈黙を

破ったのは紅だった。

「良いじゃないか。相手をしてやれ。ただし、今回は都南だけな」
紅が笑い、続けた。

「まず、黙って私の話を聞け。いいから、怒るなよ。今回の義藤との手合わせは都南だけだ。野江はおとなしくしておけ。——理由はな、今回の手合わせは紅の石の力を使わずにするからだ」

言うと、紅は身を乗り出し義藤が首から掛けている紅の石に手を伸ばした。

「小猿の暴走に当たって、義藤の紅の石の色が弱っている。義藤がこの石を使い始めて二年。本来なら、まだまだ色が失われるような時期ではないが、なぜか弱っている。今夜、戦うのなら、今使わない方がいい。一応、後で新しい紅の石を渡すが、柴が加工した石でないから、義藤の力に新しい石がどこまで耐えられるか分からない。だから今日は、術を使わない都南との手合わせにしておけ」

紅は義藤の紅の石を握ると、手放した。悠真には、義藤の紅の石に生じた変化など分からない。紅の石の変化を感じることが出来るのは、紅が色神であり、紅の石を生み出す唯一の存在だからだろう。

紅の言葉に間違いはないはずだ。野江が目を見開き、紅に抗議した。
「紅の石が色を失う可能性があるのなら、なおのこと義藤が困になるのは……」

紅の石の力は無限に使うことが出来るわけではない。紅の石には使用期限があり、酷使すると色を失う。どのくらいの周期で色を失うのは術士でない悠真には分からないが、加工師の加工の腕にもよると聞いたことがある。義藤は術士だ。剣術も優れていることながら紅の石を戦いの術として利用するはずだ。紅の石が色を失うことは、義藤が戦うことに対して大きな不安要素となる。

「野江、黙っておれ。その話はもう終わった」

一喝したのは遠次だった。遠次の年齢と立場と貫禄で野江だけでなく赤の仲間たちは皆、身を縮めていた。紅は困ったように頭を掻きながら野江に言った。

「小猿の力を試そうと、義藤の石を小猿の近くに差し出すように仕向けたのは私だ。私だって困っているさ。まさか、義藤の紅の石の色が急激に弱まるなんて、思ってもいなかったからな。新しい紅の石を用意するように手配はしている。質の良いものを加工師に渡しているが、加工師の腕がな……。柴の奴が戻ってくるなんて、都合のいいことが起こるはずもないから、今は義藤の紅の石の力を使わないようにするのが、一番なのさ」

義藤は首からかけた己の紅の石に触れて笑った。

「紅、何の心配も無い。俺は、剣術の鍛錬も積んできたからな」

義藤の言葉は温かく、紅を思う気持ちで溢れていた。紅には何の否もない。全ては己が決断したことだ。と義藤は態度で示していた。悠真は、義藤が良い奴に見えて、どこか腹が立った。都南が台を手の平で叩いた。

「分かった。義藤、外に出ろ。朱将の都南が手合わせをしよう」

都南が朱塗りの刀について腰を浮かせた。

「ありがとうございます」

義藤は一度頭を下げると、流れるような所作で赤い羽織の袖を正しながらゆっくりと立ち上がった。

赤の手合わせ（3）

手合わせを願った義藤と、それを受け入れた都南は草履を履いて中庭に下りた。紅たちは縁側にでると胡坐をかいて座り、悠真は紅たちの後を追った。障子を開くと、白い玉砂利が敷き詰められた中庭があり、そこに都南と義藤は立っていた。義藤は丁寧な仕草で赤い羽織を脱ぎ、都南は荒々しい動きで赤い羽織を脱ぎ捨てた。義藤は赤い羽織を手早く畳むと、縁側にそつと置き、都南は赤い羽織をぐしゃぐしゃに丸めると縁側に置いた。

遠次と紅は縁側に座り、鶴蔵は状況に怯えるように障子の影に隠れていた。佐久は紅の少し後ろに座っていた。

「何かあったら、あたくしが間に入るわ」

野江が縁側から草履を履いて中庭に降りた。居所の分からない悠真は部屋の中から出れずにいた。すると、紅がにゅと笑い、手招きして悠真を呼び寄せた。

「小猿、こつちに来い」

紅が呼ぶから、悠真は四這いのまま、恐る恐る紅の横に座った。紅の隣に座ると、彼女の持つ赤い色が鮮やかに輝き、部屋に満ちていた香の匂いが放たれていた。

「都南は強いぞ。剣術ならば、右に出るものはいない。紅の石を使わずに戦うということは、義藤にとつてかなり不利だな」

紅は義藤を見て言うと、自慢げに語った。

「私の自慢の仲間たち。術の腕は佐久が一番上だ。剣術ならば都南が一番上だ。そして、術と剣術を兼ね備えるのが野江だ。義藤も、術にも剣術にも秀でる存在。剣術で都南に並びたいと思うのは当然の心理だろうな。義藤が狙うのは、剣術の頂点都南と、術士の頂点野江。術を使う力自体は佐久の方が上だが、佐久はあの通り。実際場面で戦うならば野江だろうな」

遠次が咳払いをして、口を開いた。

「義藤をからかうのは止めておけ。あいつは、紅が思っている以上に必死なのさ。お前が考えている以上に、あいつは己を鍛えている。努力を惜しまぬ天才よ」

遠次も義藤を高く買っているのだと、悠真は理解した。

都南と義藤は互いに朱塗りの刀を抜いた。都南の刀は義藤のそれよりも一回り大きく、太く長かった。不思議なことに、都南の刀は刀身まで赤く作られていた。それは、まるで紅の石だ。

「都南の刀は、我が国最高の加工師柴が作った刀。あれは刀と呼ぶより、紅の石と呼ぶほうが正しい。柴が紅の石を加工し、刀に鍛え上げたんだ。二年前から、都南はあの刀を使っている」

紅が解説するように悠真に教えてくれた。加工師柴のことを悠真は知らないが、柴の加工の腕が群を抜いていることは感じていた。加工師柴が紅の石を加工し刀にした。その刀の存在が、術を使えない都南が朱将として立つことが出来る秘密なのだ。紅の石で鍛えられた刀が、都南を支えている。

義藤が抜いた朱塗りの刀は、白刃の刀だ。刀匠が鍛えただろう刀は、光を反射して美しく輝いた。流れるように義藤は刀を構え、両手で刀を持った都南も赤い刃を義藤に向けた。

「真剣の勝負なのか？」

思わず悠真は紅に尋ねた。悠真は術士にも剣術にも縁遠い存在だが「手合わせ」は竹刀で行われるものだという常識はあった。仲間同士で真剣を向け合うなど常軌を逸している。

「当然だろ。あの二人は今から本気で殺しあう。互いを敵だと思って、寸止めなんてありえない。大丈夫、案ずるな。そのために野江がいるんだ。傷をつけそうになったら、野江が紅の石の力で止める。もし、野江が間に合わないなら、佐久もいるし私もいる。今まで、怪我をしたことは一度も無い。特に、今回は紅の石も使わない、剣術だけの手合わせだ。滅多なことは生じないさ」

紅は当然のように言い、悠真は都南と義藤を見た。都南と義藤がもつ赤い色が強まった。二人の持つ一色は、似てるようで違う。一色

とは、万人が持つ己の色。同じ色は存在しない。悠真は義藤の色に見覚えがあり、目を細めて思い出した。

——赤、赤、赤……

悠真はどこかで義藤の一色と同じ色を見たのだ。悠真が色を見るとが出来るようになったのは、今朝から。義藤と出会ってからの間も浅い。そのとき、悠真は理解した。紅の石にも色の個性があることと、紅の石の色の個性が術士とまったく同じであることを。悠真が義藤の一色を見たのは、悠真が義藤の紅の石を暴走させた時。義藤の紅の石と、義藤の一色は同じなのだ。義藤の紅の石と野江の紅の石の色は異なる。元来は、色神紅が生み出した同じ色のはず。紅の石に個性が出るときは、加工の時としか考えられ名い。つまり、紅の石の加工とは、紅の石が持つ赤い色を術士の色と同じ赤にすることなのだ。誰もが一色を持つ。一色と紅の石の色が同じであるときに、術士は紅の石の力を引き出すことが出来る。

——小猿は色を見る良い目を持つておるのお。

赤の声が悠真の脳裏に響いた。声の方向に目を向ければ、紅の後ろに赤が立っていた。

——紅の石の力は加工によって左右される。我が赤色は強大な力を持つ色じゃ。されど、紅の石は、加工をしなければ大した力を発揮することは出来ぬ。火の国の民は器用な民での。我が色の力を発揮するため加工という技術を見出して、加工によって、己の持つ一色と紅の石の色を近づける事で、紅の石の力を発揮させるのじゃ。通常、加工には紅の石と本人の力を比較して極力色が同じになるように近づけていく。されど、それは色に差が出やすく、差が出るほど紅の石は脆くなりやすいから、野江や佐久、義藤と言った優れた術士ではすぐに石をだめにしてしまうのじゃ。されど、紅が認める柴は違う。柴は己の目で色を見ることが出来る上、元来術士である柴は色を引き出すことにも長けておる。小猿は、柴に並ぶ良い目を持つておるが、術士として未熟ゆえ、加工師には向かぬの。

赤は都南と義藤を見て、けらけらと笑った。

——義藤の石が色を弱めたのは、小猿が赤に染まらぬまま使ったからじゃ。か弱い人間どもが、強くなろうと足掻いておるぞ。我が紅が信頼を寄せる二人が本気で戦うぞ。

赤は嫌味な言葉が多い。しかし、火の国の民を思っているということとは感じられた。赤がいるから、火の国は守られている。

——小猿、見ておれ。あれが、優れた術士の姿じゃ。

赤が言うから悠真は都南と義藤に目を向けた。

赤の手合わせ（４）

向き合う都南と義藤はゆっくりと刀を構えた。二人の間の色が強まり、悠真の隣に座る紅が不敵に笑った。まるで、その笑い声を合図とするかのように、都南と義藤が同時に駆け出した。

悠真は「手合わせ」を始めてみた。それは遊戯のようで、遊戯のような笑いは含まれていない。剣術に縁遠い存在である悠真でも、二人が優れた剣士であるということは理解できた。

駆け出したのは二人同時だった。都南は右手に刀を持ち替え、義藤は左から都南に斬りかかった。着物がはためき、刀と刀の擦れ合う衝撃で小さな火花が散った。

「出だしは都南の方が余裕だな。義藤は焦りすぎだ」
紅が頬杖について悪態をついたが、悠真には何故何なのか分からなかった。

最初の接触は一つの火花と同時に義藤が手早く身を引いた。義藤が身を引いた直後、都南が速い動きの転換で義藤のいたところを切れいていたのだ。一步遅ければ、義藤は真つ二つになっていただろう。都南は片手で刀を持っている。まるで、都南と義藤の間には大きな実力さがあるようだった。

都南と義藤は円を書くように間合いを保っていた。都南が一步前に進めば、義藤が一步後ろに下がる。義藤が一步前に出れば、都南が一步後ろに下がる。都南は無防備に歩いているようで、隙の無い動きをしていた。都南と並ぶと、義藤が剣術で劣っているように見えるが、義藤は悠真の喉元に容易く刀を突きつけた存在。義藤の実力を考えると、都南が計り知れないほど優れた剣術の使い手なのだと証明されていた。

「義藤も腕を上げたね」

佐久が後ろから義藤を褒めていた。

「当たり前だろ。義藤は忙しい仕事の合間を縫って、毎日、毎日、

一人で鍛錬を続けていたんだからな」

紅が笑っていた。

「手合わせ」と言うからに、悠真は二人が激しく打ち合う様子を想像していた。しかし現実とは違う。二人は互いに見合わせる時間の方が長いのだ。二度目に二人が打ち合ったのは、しばらく経ってからだ。二度目の打ち合いで先に駆け出したのは都南だった。都南は義藤に向けて踏み込むと片手で持っていた刀を両手に持ち直し、下から上へと斬り上げた。義藤は後ろに飛び跳ねて交わすと、着地と同時に足を踏み変え都南の懐目指し、刀を突き刺した。

瞬きをするよりも短い間に、都南と義藤の攻防は続いていた。義藤が都南を突き刺すために突いた刀の先を都南は左に交わしながら刀で払い落とした。払い落とされながらも引かぬ義藤は、刀と刀を擦らせながら刀を押し払っていた。刀と刀で強い押し合いが行われていた。

「腕力では義藤に勝ち目は無いな。都南に腕っ節で勝てる男は滅多にあらん」

遠次が言った直後、義藤は跳ねるように後方へ飛び、二人は再び間合いを計った。遠次が言ったように、都南と義藤では腕力が違うらしい。見た目からも想像できるが、都南の方が義藤よりも体が大きい。浅黒い肌をした都南と、少し色白な義藤では、誰が見ても都南の方が強いということだろう。義藤は腕力で勝てないことを知っているかのように、身を引いたのだ。引いた義藤を見て、都南が笑った。

「おいおい、義藤。お前、腕を上げたな。冷静な判断も磨きがかかっている。腕力もかなり上げたんじゃないか？」

都南が額を着物でぬぐいながら言った。一方の義藤は肩で息をしていたが、その目はまっすぐに都南を捉えていた。

「俺は強くならなくちゃ、いけませんから」

義藤の額から汗が流れていおり、都南は笑っていた。

「だが、俺はまだ抜かされるつもりはないぞ」

都南が言い、再び刀を構えた。

「いつの日か、抜きます。あなたも、野江も、佐久も……。俺は、強くならなきゃいけないから」

義藤も言い、再び刀を構えた。

三度目の打ち合いは、二人同時に駆け出した。上から刀を振り下ろすのは都南。下から迎え撃つのは義藤だった。刀から火花が散った。今度は二人とも後ろに下がることをしなかった。義藤が力ずくで刀を振り上げたが、都南は後ろへ交わした。義藤よりも都南の方が一枚上手だ。直後、義藤が態勢を立て直す前に都南が刀を横に振りぬいた。

悠真は義藤が斬られると思った。都南の腕は義藤よりも長く、都南の間合いは義藤よりも大きい。都南の刀は義藤の刀よりも長い。力任せに都南の刀を振り払った義藤に、態勢を立て直す余裕は無い。義藤の色と、都南の色が激しくせめぎ合い、悠真の横に座っている紅が身を強張らせるのを悠真は感じた。

白い玉砂利が二人の足元で音を立てていた。都南が横に振りぬいた刀、義藤が地に沈み込む。

——怪我をすることは無い。

悠真は紅の言葉を信じていた。目の前で誰かが傷つくところを見たくなかった。悠真が声を出すよりも早く、悠真が目を閉じるよりも早く、義藤は地に沈み込み低い位置から都南の間合いの外へと抜け出した。剣術など知らない悠真は、何が起こったのか分からなかった。義藤が体をかがめて都南の刀を交わし、屈んだまま転がるように間合いの外へと抜け出したのだ。

「小猿、義藤が斬られたかと思ったのか？」

紅が笑いながら言った。

「言っただろ、義藤は天才だ。まだまだ、都南には及ばないがな。めずらしく都南が本気になるぞ。あいつは、紅の石を使わずとも術士以上の力を持つ存在。今の義藤に勝ち目は無いさ」

紅が真面目な目をして、都南と義藤の手合わせを見るから、悠真は

紅の視線の先を追った。

四度目の打ち合いは、都南の一方的な攻撃だった。都南は何度も何度も刀を振りぬき、義藤はそれを受け止めていた。悠真は目で追うのが精一杯だった。刀から小さな火花が飛び散り、義藤は防戦するばかりだった。悠真が視線を動かすと、紅の石を持った野江が、打ち合う二人に一步步寄っていた。野江が手合わせを止める間合いを計っているのだ。

赤の手合わせ（5）

都南の義藤の手合わせは終盤を迎えていた。右に左にと、刀を振り義藤を追い詰める都南と、必死に防戦する義藤。都南が一方的に義藤を攻め、朱将としての実力を義藤に示していた。

「追い詰められてから、長く食らいつく。強さを願う義藤らしい」
遠次が小さく笑っていた。

火花が散るほどの勝負の中、悠真は紅を守る赤の仲間たちの力をまざまざと見せ付けられた。これが、術士の力なのだ。もし、紅の石を交えた戦いになるのなら、彼らの戦い方はもつと変わるはずだ。これほど優れた力を持つ義藤が、今夜死すことを覚悟している。悠真が復讐をしようとしている相手は、計り知れないほど遠くにいて、悠真には手が届かない。悠真に復讐が果たせるのか、その確証はなく、悠真自身も己の命を愚かな方法で捨てようとしているのだ。

白い玉砂利を踏み荒らしながら、都南と義藤は手合わせを続けていた。二人が激しく打ち合ってから一分もたたない間に、義藤は後方に大きく姿勢を崩した。後方へ大きく姿勢を崩した義藤は、倒れながらも片手を地面につき地に横たわる前に転がり都南の横側に抜け出した。義藤の身体能力は悠真よりも遥かに高く、真剣を目の前にしても恐れることなく戦う、その強い意志が悠真よりも遥かに上だった。

義藤は片手で跳ねるように立ち上がると、寸分の間もなく都南の懷に飛び込んだ。玉砂利が大きな音を立てて踏み荒らされ、刀を構えて飛び掛る義藤からは鬼気迫るものを感じた。都南も飛び掛る義藤に刀を向け、都南の刃の先は義藤の首を捉え、義藤の刃の先は都南の心臓を捉えていた。都南が一步後ろに下がるも、義藤は止まらない。

「あいつ！」

紅が小さく強く悪態をつくと同時に、赤が辺りを満たした。

赤の閃光は白い玉砂利を敷き詰めた中庭を満たし、赤の閃光が巻き起こした旋風が中庭を駆け巡った。悠真の頬を強い風が撫で、障子が大きく音を立てた。複数の玉砂利が飛び、障子に穴を空けた。悠真に玉砂利が当たることが無いのは、紅が紅の石の力を使い悠真たちを守っているからだ。悠真が横にいる紅に目を向けると、彼女は不満そうな表情を浮かべながらも、強い目を赤の閃光の中に向けていた。

赤の閃光が収まると、そこには弾き飛ばされて地に倒れた都南と義藤がいた。伏せて倒れる義藤はもがくように身体を起こし、壁にもたれるように倒れる都南は倒れながらも手放さない刀を杖のように立てて立ち上がった。紅の石の力を使い、都南と義藤の間に割って入った野江は乱れた髪を整えるように自らの髪を撫でていた。

「気に入らないな」

紅が立ち上がり、遠次が紅の着物の袖を掴んで止めた。

「紅、おとなしくしている。全ては紅を思うが故の行動だ。この手合わせで、紅も義藤の覚悟が分かっただろ」

紅は不愉快そうな表情を見せると、視線を都南と義藤に戻し強く言い放った。

「都南、義藤、勝負はついた。戻って来い。野江もこっちだ」

身体を起こした二人は紅の下に足を進めた。不満そうな表情を浮かべているのは紅だけでなく、野江も都南も同様であった。悠真が後ろを振り返れば、佐久が怯えたような表情を見せていた。

「紅、おとなしくしている」

遠次が紅を止めていた。紅が激昂していることは、紅と付き合いの少ない悠真でもはっきりと分かった。

紅のところへ歩みよった三人。義藤だけが目を伏せていた。怒りを露にした紅は、歩み寄った義藤に飛びかかり、胸倉を掴んだ。

「義藤、お前、何を考えているんだ！」

義藤は何も言わず、ただ目を伏せていた。

「紅、お止めなさい」

野江が紅を義藤から引き離そうと、二人の間に入ったが紅の怒りは収まらない。

「義藤、分かっているのか。今の手合わせ、お前、相打ちに持ち込もうとしたな。己の命を捨てれば、格上の存在に勝てる。お前、分かってやったな」

紅は義藤にすぐる様に叫んでいた。赤の仲間たちが紅を思うように、紅も赤の仲間たちを思っているのだ。義藤はゆっくりとした動作で紅を引き離すと、乱れた襟元を正した。

「紅、立場を忘れるな。俺は紅を守るための存在だ。そのために強くなり、そのために戦う。紅は踏み越えて行かなきゃ行けない。俺が倒れても、俺を踏み越えて紅は進まなくちゃいけないんだ」

義藤が言うから、紅は荒々しくその場に座った。

「相打ちに持ち込んだところで、己が死ねばそれは負けだ。義藤は最早強い存在。実力者義藤に、敵は命がけで挑んでくるぞ。己の死を覚悟しているのは、お前だけじゃない」

そして紅は苛烈な目で都南を見た。

「それは都南も同じだ。今回、相打ち覚悟で飛び込んだ義藤が悪い。だが、敵が相打ち覚悟で飛び込んできて、そのまま倒されるようではどうする？死を覚悟でお前に挑むものは多い。正攻法でお前に勝てないことぐらい、皆知っているからだ。朱将として、どのような敵であっても、どのような覚悟と事情で敵が飛び込んできても、お前は勝たなきゃいけない。覚えておけ」

紅の声と口調と態度が、彼女の怒りを表していた。

赤の涙（１）

紅の激昂で場を収めた都南と義藤の手合わせに、締めくくりの言葉を告げたのは遠次だった。

「若い者たち、一度落ち着く事を覚えろ。紅の言葉にも一理ある。敵は様々な事情と覚悟を持って紅の命を狙ってくる。その理由は、お前たちに刀を振り下ろすことを躊躇わせることもあるだろう。だが、お前たちは戦わなければいけない。お前たちにも紅を守るという強い信念があるからな。死すことを覚悟で挑む者は強い。その事実は義藤の行動で証明された。敵も死すことを覚悟して挑んでくるのなら、お前たちは苦戦を強いられるだろう。二年前のように、多大な犠牲を支払わなくてはならないかもしれない。二年前のように、多くのものを失い、傷つかなくてはならないかもしれない。二年前のように、未来を閉ざされ、運命を捻じ曲げられるかもしれない。それでも、お前たちは今夜、紅のために戦うことを決意し、二年前に紅を守るために戦い、傷つき、多くのものを失った事を後悔していないだろう。わしも後悔しておらん。惣次が死んだことも、受け入れておる。それが、我らが歩む道なのだ。——そして紅、覚えておけ。わしらはお主を守る。命を失うことを厭わずにな。野江、都南、佐久、鶴蔵、そして柴もお主のために戦い続けるだろう。それはお主が色神だからではない。なぜ、抽象的な存在に命をかけねばならぬのだ？ わしらが戦うのは、お主が色神だからだ。色神がお主という愛しい存在だから、色神に命を捧げようと思うのだ。わしらはお主の幸せを願っているのだ」

遠次は柔らかに微笑んだ。その微笑は、紅という人物を心から慈しんでいる微笑であった。微笑んだ遠次はそつと紅の髪を撫でた様子は、まるで父が愛する娘に愛を示しているようであった。

「紅、聞くんた。わしは多くの紅に仕えた。いけ好かない紅を守ろうとしたこともあった。先代の紅のように、尊敬し守りたいと願い

つつも守れぬ紅もいた。わしが紅に仕えるのは、きつとお主が最後だ。心から尊敬していた先代の紅を守れずに死なせてしまい、わしと惣次は生きる意味を失った。だが、お主が紅となった。十歳の幼い娘が紅となり、苦難を強いられた。お主は生きるために足掻き、生きるために強くなろうと願った。お主に命を託す赤の仲間を守ろうとし、新たな紅という存在を作り上げた。――紅、お主は火の国を変えることが出来る。火の国を変える力を持つ赤の仲間たちが、お主に忠誠を誓っておる。紅、落ち着け。お主は必要とされているんだ。紅という肩書きを抜きにしてな」

遠次の手は髪か紅の頬に移り、そつと紅の頬を指で撫でた。同時に紅の目から涙が零れ、彼女は肩を震わせ、震える声で告げた。

「頼むから、命を失わないでくれ。頼むから、私を一人にしないでくれ。頼むから、私の近くにいてくれ。頼むから私と一緒に生きてくれ」

紅の目から、次々と涙が溢れた。

「私は、皆が命を賭けて守るような存在じゃない。私は、ただ石を生み出す力を持っているだけなんだ。私は、何も出来ないんだ。小猿の故郷を壊滅に追い込み、恩ある惣爺を守れず……私は何も出来はしない」

ゆつくりと口を開いたのは野江だった。

「あたくしはね、先代の紅に助けられたわ。天童として、術士の道を強いられ、孤独に苛まれていたとき、先代の紅は鶴巳を紅城に受け入れてくれたわ。あたくしはね、先代の紅を父のように慕ったわ。そして、先代の紅が命を失った後に、あなたに出会ったの。あなたに出会って、あたくしはもう一度決めたわ。今度は、愛おしい存在を守って見せるとね」

都南が言った。

「俺は、二年前の戦いの後に紅城を去る覚悟を決めた。術の使えない俺に、紅城での居場所は無いからな。俺は十の頃から紅城で生きていた。親や兄弟も何をしているのか分からない。俺は、紅城から

追い出されることが怖かった。紅、お前はそんな俺を受け入れた。もう一度、朱将として立つ覚悟を決めさせたのはお前だったんだ。俺はお前を守りたい。その気持ちでここまで来たんだ」

佐久が言った。

「紅、僕も都南と同じだよ。二年前の戦いで、僕は術士としての未来を閉ざされてしまったから。でも、そんな僕に紅は未来をくれた。僕を叱咤し、もう一度立ち上がる力をくれた。勉強が好きな僕のために、僕にしか出来ない立場を作ってくれた。きっと僕は紅城の中でないと生きていけない。歩くことさえ苦手な僕が外の世界で生きていけるはずが無いからね。僕はね、紅を守るよ。僕の未来をくれたのは紅だからね」

鶴蔵が続けた。

「あつしは、紅様が好きです。はい。紅様は先代の意志を引き継ぎ、先代と同じようにあつしを受け入れてくれやした。あつしは、紅様と紅様の仲間のために、からくりを作り続けやす。はい」

小動物のような鶴蔵が、しっかりと意見した。最後に言ったのは義藤だった。

「俺は色神が嫌いだった。術士になるつもりも無かったし、紅城へ足を運ぶつもりも無かった。その俺が、ここに立っているのは、お前を守るためだ。俺は、先代の紅のように、お前を死なせたくないから術士になり紅城へ来たんだ」

紅が遠次から離れ、赤の仲間たちを見渡した。そんな紅は涙の中笑った。

「私は歴代紅の中で最も恵まれている」

悠真はその笑顔を中心に刻んだ。仲間に対し信頼を示し、仲間のために涙する紅の表情、行動、言葉、声、紅を構成する全てのものが悠真を惹きつけていた。

赤の涙（２）

紅は重圧の中生きている。自分を守るために誰かが命を失うかもしれない。それが大切な人だとしたら、なんとも辛いことだ。義藤がそっと手を伸ばし、紅の肩に手を乗せた。

「大丈夫、ずっと一緒にいる」

義藤の言葉は温かい。義藤は何も言わず、懷から布を取り出し紅の頬に流れる涙を拭いた。その様子は、優しい兄のようであった。義藤と紅の間には、悠真が割って入ることが出来ない空気が流れている。それは、赤の仲間たちも同様であった。紅が色神となる前から、二人は一緒にいる。紅が色神になったから、義藤は紅城へ足を運んだ。義藤は色神を守っているのではなく、悠真の目の前にいる女性を守っているのだ。その間には誰も入ることは出来ない。悠真の横で小さく笑う野江の声が聞こえた。

「さあ、あたくしたしは少し休みましょう」

野江が都南の背中を叩き、草履を脱いだ。野江の行動は紅と義藤に気を使っているようであった。

「お、おう」

都南も野江の後を追ひ、草履を脱ぎ、くしゃくしゃに丸めて投げ捨てた赤い羽織を手にとると佐久の部屋に足を踏み入れた。

「わしも休むとするか」

遠次が言い、部屋に足を向けた。

「ほら、佐久、鶴蔵。行くぞ」

遠次が立ち尽くす佐久と鶴蔵の肩を叩き、佐久と鶴蔵も部屋へと下がった。当然のように佐久は足を滑らせ、今度は鶴蔵が佐久を支えた。

「佐久はん、気をつけてください」

佐久を支えることに赤の仲間たちは慣れているようだった。赤の仲間たちが佐久の部屋の中に入るから、悠真は居心地が悪くなり赤の

仲間たちの後を追った。義藤が紅を守ろうとしているから、悠真が義藤に行っている品定めが終わってしまいそうだった。一人の女性のために強くなり、一人の女性を守るために命を賭して、一人の女性を支えるために笑い続ける。義藤を良い奴と決めなくなかったが、悪い奴とも決めなくなかった。悠真は一度、紅と義藤を振り返り佐久を追った。泣く紅の背を義藤がさすっていた。その光景は悠真の心にしこりを残すには十分であつた。

佐久の部屋の中に座った時、都南が室内で遠慮なく服をはたき始めた。部屋の中に埃が舞うが、佐久も大雑把な性格なのか、あまり気にする様子は見せなかった。野江が不快感を露にし、一つ咳払いをした。

「都南、外ではたいていただけじゃないかしら？」

都南はわざと野江の前で着物を叩き言った。

「今、外に出るほど俺も野暮じゃないさ。いいじやにか。部屋の主が気にしていないんだ」

野江に都南も負けていない。都南の口調は強く、悠真に紅の石を渡すことに反対し朱塗りの刀に手を伸ばしたときと同じような一色の乱れがあつた。

「お茶に入るでしょ。都南はあたくしに喧嘩でも売るつもりなのかしら？早く、羽織を着なさいな」

野江がお茶を指しながら不満を言い、押し負けた都南はくしゃくしゃに丸めた赤い羽織を羽織った。野江の口調も荒い。どうやら野江も苛立っているようであつた。二人の苛立ちは辺りに静寂を与え、悠真が周囲に目を向けるには十分の時間があつた。悠真は都南が赤い羽織をまとうのをじっと見ていた。そして思うことは、赤い羽織の布は良い布なのかもしれないということだ。都南が乱暴に丸めた羽織には皺の一つも残されていなかった。もしかすると、赤い羽織は絹なのかもしれない。悠真は、隙があれば誰かの赤い羽織に触れてみようと思った。田舎者の悠真にとって、絹はとても珍しいもので、どのように絹を赤に染色するのか興味があつた。赤が高貴な色

とされる火の国では、絹を赤に染色することはあまり無い。赤の源は何なのだろうか。悠真には分からないことばかりであった。

赤い羽織をまとい、皺がついていないか確認するような素振りをした都南は口を開いた。一時の感情の乱れなのか、都南の口調からは先ほどのような苛立ちは感じられず、一色も平静を取り戻していた。

「どうも気が立つのは、義藤の奴が気が立っているからだろっな。あいつの感情の乱れは分かりやすいから、俺たちにも伝染する。別に野江に喧嘩を売るつもりは無いさ」

都南が平然と言った。誰も否定しないということは、赤の仲間たちは同感だということだろう。しかし悠真はそうに見えなかった。悠真には、義藤は平然と落ち着き払っているように見えたのだ。都南と同じように平静を取り戻した野江がお茶を入れながら続けた。

「そうね、二年前のことを思い出しているのかもしれないわね」

悠真は二年前に何が起こったのか知らない。知っていることは、二年前に惣次が紅城から出て行くきっかけとなった戦いがあったということだ。これまで優れた力を持っていた術士が、術を満足に使えなくなるほどの戦い。紅たちが思い出す二年前の戦いに悠真は興味があったが、それを聞き出す勇氣は無かった。先ほどの話では、二年前の戦いの後、都南や佐久までもが紅城を去ることを考えたと話していた。

——二年前。

悠真は二年前に思いを馳せた。二年前、悠真は何をしていただろうか。少なくとも、火の国を支える色神紅や、紅を守る優れた術士たちが傷ついたとは夢にも思っていなかった。佐久が笑った。

「僕は今日、義藤が都南と手合わせをして良かったと思うよ。義藤は頑張り過ぎなんだよ。真面目で、礼儀正しくて……義藤は紅城に来た十年前からまっすぐに走り続けてきた。僕はね、さつき義藤の素が出てきたみたいで嬉しかったよ。大丈夫、二年前のような事態には決してしない。僕たちは、二年前より強くなっただけだからね」

遠次がゆつくりと口を開いた。

「紅は細い糸の上に立っておる。今にも切れそうな糸の上に。お前たちが、紅が足を踏み外さぬように支えるのだ」

赤の仲間たちは遠次に深く頭を下げた。悠真は赤の仲間たちを見つめ続けた。彼らは何を思い、どんな未来を描いているのか。悠真はそれが知りたかった。

赤の傷（１）

赤の仲間たちは二年前のことを強く意識し、今日これから生じるであろう戦いを二年前と重ねていた。赤の仲間たちは二年前のことを強く引きずっている。赤の仲間たちはとても優れた術士たちであるから、彼らを感情を掻き乱す出来事はどのようなことなのか、悠真には興味があった。悠真は赤の仲間たちとの距離が着実に縮まっていると信じており、残された距離をさらに縮めるには二年前の出来事を知るしかないと思ったのだ。

「ねえ」

悠真が声を出すと、赤の仲間たちが悠真に目を向けた。

「ねえ、二年前って……」

悠真が口になると、その場の空気が豹変した。野江が睨むように悠真に目を向け、佐久が一つ咳払いをした。感情を隠そうとしない都南は、あからさまに不快感を示し、鶴蔵は怯えたように身体を縮めた。遠次までもが、苛立ちを露にしていた。

「それは、あなたが口にすることじゃないわ」

今まで悠真に対し友好的だった野江が、初めて冷たい言葉を投げかけた。もちろん、悠真は術士でないし、紅から赤を許された赤の仲間でもない。それでも、惣次を架け橋として赤の仲間に近い近づけたつもりだった。あからさまに拒絶されたことは、悠真にとっても辛いことだった。いつも悠真の味方でいてくれた野江が悠真を否定し、悠真は野江から仲間でないと言われたように感じた。

「ご、ごめんなさい」

悠真は謝るしか出来なかった。同時に、心に冷たい風が吹き込んだ。赤の仲間たちが持つ赤色がとても遠く感じ、悠真は自分自身を見た。悠真は赤を持っていない。十歳の選別で術士の才覚を見出されることなく、十六になる今日まで故郷で平凡に暮らしていた。術士でない。赤の仲間たちは十歳の選別で術士の才覚を見出され、それから

長い年月紅城で紅を守り支えるため生きてきた。下緋ならば地方に派遣され「術士様」として崇められることもあるだろうが、中央の紅城で生きる赤の仲間は違う。紅の命を狙う者と戦い、官府との政治的工作に加わり、知恵を絞り、強さを求め、時に命を賭して紅を守る。紅は紅城の一室で生きる「籠の中の鳥」と己を称していたが、赤の仲間たちも似たような存在だ。赤の仲間からすれば悠真は異質な存在。悠真と赤の仲間は何の共通点があるというのだろうか。どうして、悠真は彼らと仲間になれると思ったのだろうか。仲間になりたいと思うことさえ間違っているのに、なぜ彼らと仲間になれると思い込んでしまったのだろうか。紅が惣次の石を悠真に手渡してくれたから、赤の仲間が悠真が惣次の紅の石を持つことを認めてくれたから、紅の本当の姿を垣間見たから、優れた存在である赤の仲間たちが苛立ち言い争う場所に悠真はいたから、それは赤の仲間たちが優しいから、赤の仲間たちが輝いているから。赤の仲間たちが互いを思っているから、故郷を失い孤独な存在となった悠真は彼らの一員になりたいと願ったのだ。強い一体感を持つ彼らの一員になるには二年前を知るしかないと思ったのだ。田舎者の小猿ば、紅城で紅を支え守る赤の仲間になれるという思い自体が間違っているというのに。

「ごめんなさい」

赤の仲間たちは悠真を責めない。二年前のことを知られたくないという思い以外は、悠真を否定するつもりは無いらしい。都南と義藤の手合わせの場にも同席させてくれた。紅の涙を隠そうともしなかった。なのに受け入れられなかったことが、悠真をとても孤独にさせた。

「いいのよ、悠真」

野江の声は優しくだったが、悠真の孤独は消えなかった。一体感を覚え始めていたからこそ、孤独だった。赤の仲間たちは平然としているが、悠真の心中は複雑だった。このまま消えてしまいたい。彼らの前にいたくない。そう思うほどの衝撃だった。

「俺、厠に」

いたたまれない気持ちになって、悠真は席を立った。悠真と目が合った鶴蔵は、怯えるように肩をすくめた。

「厠なら出て左の突き当たりだよ」

佐久が身振り手振りを交えて教えてくれた方向に、悠真は逃げるように外に飛び出した。

術士に良いことは無い。特に紅を守る赤の仲間たちは命を賭して紅を守り、支えている。それは紅を慈しみ、紅を愛しているから。悠真に赤の仲間と同じ気持ちはあるだろうか。紅の命を狙う敵から彼女を守るために命を捨てることが出来るだろうか。その覚悟が来て、それを実行できない限り悠真は赤の仲間になんか近づけることが出来ない。二年前の出来事を隠されたことがそれを証明し、悠真は赤の仲間の傷を知ることが出来ないのだ。

赤の傷（２）

障子を開いて外に飛び出した悠真は、外廊下に立ち尽くした。都南と義藤の手合わせと、野江が二人を止めるために使った紅の石の力によって、中庭は先ほどまでの高貴な静寂さを失っていた。中庭まで、義藤が片付けていることが、微笑ましく見えた。

覗き見をするつもりは無い。けれども、紅と義藤が悠真の存在に気づかないから、悠真は彼らを覗く形になってしまふのだ。紅は中庭の岩に座り、義藤は熊手を使って白い玉砂利を均等に敷き詰めていた。悠真が紅の石を暴走させたときも、義藤は手早く部屋を片付けていた。どうやら、義藤はそういう立場らしい。義藤が生真面目なことは、義藤と出会ったばかりの悠真でも分かるほどだ。それに加えて、赤の仲間の中で最年少という立場が、義藤をそのような役回りにさせたらしい。豪快な都南が片づけをすることも、身体を動かすことが苦手な佐久が片づけをすることも、上品な野江が片づけをすることも、想像するに難しい。義藤が後片付けをするから、近寄りがたい義藤がとても人間味溢れる存在に思えるのだ。抜き身の刃のようなのに、冷たさはなく紅を思う気持ちを隠しきれていない。「もう、十年になるんだな」

紅が義藤に声を掛けていた。十年。というのは、今の紅が色神になってからの年月だ。紅がしみじみと語っていた。きつと、十年の間、紅と義藤は一緒に歩んできたのだ。悠真には埋めることが出来ない年月だ。

「そつだな、もう十年になる」

義藤は手を止めることなく紅に返した。

「義藤は真面目だから、十年間、一度たりとも私の真の名を呼ばないな。私の真の名を知らぬ野江たちならまだしも、義藤は私の名を知っているのに」

紅は頬杖をついていた。義藤は小さく笑ったが、その手を止めよう

としない。白い玉砂利に目を向け、熊手を動かしながら話した。

「あの名を持つ人は、死んだことになり埋葬されているんだろ。両親も、娘は死んだと思い込んでいる。名を呼ぶだけ、寂しくなるだろ。二度と帰ることが出来ぬ生活なんだから」

義藤は紅が色神となる前からの知り合いだ。紅は色神となる前は普通の人間であつたのだから、親がいて、名前があるのは当然のことだ。色神となることで全てを失い、これまでの自分は死んだことになる。それは、色神が歩む辛い人生だ。

「義藤は強いが優しいな」

紅が笑いながら言い、義藤は手を止めることなく苦笑した。

「俺は強くないさ。紅、今でも俺は思うんだ。俺は、こうやって紅の横にいて良いものか、と。二年前、紅を救つたのは赤丸だ。赤丸は強い存在だから、赤丸が表の存在になり、紅を守つたほうが良いのではないかと、ずっと考えているんだ」

すると紅は立ち上がり、義藤に歩み寄つた。

「赤丸は強いさ。赤影は、色神紅が持つ刃で赤影の頂点に立つ赤丸は色神紅が持つ最も鋭い刃だ。朱護や朱軍は色神紅が持つ盾だから根本的な存在意義が違つんだ。——赤丸、そうだろ」

紅が空に向かって声を掛けた。人影は見えないが、そこに赤い色が満たされるのを悠真は感じた。

「ほら、赤丸は私の近くにいます」

満たされる赤は、赤丸の持つ色だ。その赤は、己を押し殺している色だつた。己を押し殺すことに長けているのか、一色の特徴はあまり感じられない。義藤は何も見えないのか、空を見上げて紅に言った。

「今夜、何があつても赤丸を近くから離すな。俺が囹になると決めたのは、紅の近くに赤丸がいるからだ。赤丸は誰よりも強い存在だから。赤丸がいれば、紅は安全だ。大丈夫、敵の正体を掴んで追い詰める。火の国の民を守るには紅の石を有効に使う必要があり、紅の石を有効に使うには紅の命を狙う正体を掴み、正面から追い詰め

なくてはならない。紅、何があっても焦って踏み誤るな。正面から敵の正体を掴み、証拠を突きつけるんだ」

義藤の声は強く、揺ぎ無い石が溢れていた。そこで悠真は義藤の真意を知ったような気がした。悠真は義藤が囷になるのは紅を守るためだと思っていた。けれども、もしかしたら義藤はもっと深いところまで考えているのかもしれない。敵を殺すのではなく正体と証拠を掴み追い詰める。その根源まで辿ろうとしているのだ。官府がとかげの尻尾のように一部を切り落として逃れることが無いように、根源まで辿って証拠を掴んで正面から追い詰める。悠真は義藤の覚悟が恐ろしく感じた。その義藤の言葉が悠真の胸に残った。

「幼いころ、俺は沢山のことを憎んでいた。色神紅を憎み、自分の生い立ちを憎み、近くにある物だけを守ろうとしていた。でも、紅と出会って変わったんだ。紅は色神となる前から、世界を美しく見ていた。きっと、紅の目に映る世界は、俺が見ている世界と違う。世界は輝いているんだろう。そんなことを思っていたんだ。紅は昔から、俺たちが守りたいと思っていた存在。守りたい小さな存在。紅が色神とならなければ、俺は隠れ術士として生きていただろう。紅が色神となったから、俺は正規の術士として歩む道を得て、紅という色神を憎む気持ちを失ったのさ。野江たちが認める先代紅を、俺も認めることが出来た。そして、叶わぬことと知りながら、会いたいと願うほどだ。俺は今、紅城で生きることが出来て感謝している」

義藤を満たす赤色は、とても優しい色だ。強いが優しい色。紅が義藤のことを「強いが優しい」と称していた理由は、きっと義藤の色を見てのことだろう。人が持つ一色は、同じ色は存在しない。色は偽ることなく、その人の人柄を表現するから。

赤の傷（3）

紅を見ていると、悠真の世界が赤く染まっていた。きっと、悠真は紅に惹かれているのだ。紅の鮮烈な赤色に惹かれているのだ。多くの傷と涙を隠し必死で生きている紅が悠真の心を赤く染めていくのだ。

――我が紅は、美しかる。

気づけば悠真の横に赤が立っていた。赤い目がひたと悠真を見つめていた。

――いけ好かぬ紅もおった。わらわは色でしか紅を選ばぬからの。紅になった途端、態度を翻し横柄になる者もある。紅になった途端、仕える術士たちへの礼儀を忘れる者もある。歴代の紅は、平均して五年で入れ替わるのじゃ。短い者は一年と持たぬ。

赤は悠真のあごを掴んだ。

――無知な術士らは、紅を殺すのは官府だけだと思っておるようじやが、紅を殺すのは官府だけでない。わらわが、殺した紅も数しれず。我が色は強い色じゃ。我が器が下らぬ人間であれば、我が色が下らぬ色となってしまうじやる。だから、わらわが紅を殺す。

悠真は息を呑んだ。赤の言葉は真実に違いない。その声が強く、偽りを含んでいないことは鈍感な人間でも分かるだろう。色神紅を選ぶ人は赤だ。赤は色神紅を選び、赤色を強めようとする。赤の利益にならぬ紅を己の手で殺し、方や守ろうとする。悠真は義藤と言葉を交わす紅に目を向けた。

――されど、わらわが守ろうと願っても、愚かな人間の手によって殺される紅もおるのが事実じゃ。先代の紅がその代表じゃ。わらわが守ろうと願っても、わらわ一人では守れぬ。先代紅にわらわは何の不満も抱いておらなじゃった。されど、愚かな人間は先代紅を殺したのじゃ。先代紅が赤丸と共に死した時の哀しみが、小猿に理解できるか？小猿は我が紅を守ることが出来るのか？我が色に染まれ。

さすれば小猿は我が紅を守る力を手にする。二年前のような事態もおこらぬ。紅を守る力を持つ存在が傷つかずに済む。小猿、忘れるな。我が色に害なすならば、わらわは小猿を守らぬ。色は己の利益のためにしか動かぬのじゃからな。

赤が横柄に笑った。先代紅の話は何度も耳にした。遠次や惣次だけでなく赤の仲間たちは先代紅を思い、先代紅を守ろうとしている。官府が他国との戦争に強要し、戦争を反対し暗殺された先代紅。赤は先代紅を守ろうとし、守りきれず死なせてしまった。赤は方や紅を殺し、方や信頼する紅を守ろうとする。赤は己の意思で生きているのだ。二年前のことを悠真は知らないが、赤の仲間たちが隠そうとするほどの傷がとて深いものだ。悠真は感じた。悠真の目の前にいる紅も多くの修羅場を生き抜いてきた存在なのだろう。先代の紅に忠誠を誓っていた赤の仲間を己の仲間としたのは、彼女の人柄にあるはずだ。紅の人柄は悠真は垣間見てきた。紅が持つ赤色を悠真は見ていた。

——小猿も、己の色に殺されぬようにするのじゃな。

悠真は赤を見つめた。赤という色を計り知れずにいたのだ。赤色の本質が分からずにいた。赤が悠真の前に姿を見せ、悠真に語りかけ、悠真に力を貸してくれるのは全て赤自身のため。その赤が紅を守るうとしているように感じるのは、悠真が赤と言葉を交わしたからだ。強く、己に絶大な自信を持っているような赤が、紅を守るうとしている。赤は紅のために悠真に力を貸しているのかもしれない。

——おっと、小猿の色がわらわを追い出そうとしておる。小猿、覚えておくのじゃ。我が色に染まれ。わらわのためにならぬ存在を、わらわが守る義理もなく、我が紅や我が紅を守る力存在を危険にさらす必要もない。我が色に染まらぬのなら、わらわは小猿を守らぬ。わらわが、小猿を気に掛ける必要もあらぬ。

赤は身を翻して言った。

——小猿、忘れるでないぞ。わらわが小猿を守る理由。わらわが小猿に我が色を貸す理由をな。

赤の華奢な後姿は、どこか紅と似ていた。悠真が赤色に心惹かれるたびに、悠真を止める声がするのだ。

——駄目よ、悠真。駄目よ悠真。あなたは色を選んで駄目。赤に惹かれては駄目。紅に守ってもらいなさい。それでも、赤に惹かれては駄目。

悠真は自分が何なのか分からなくなっていた。悠真は術士の才覚に見放された田舎者の小猿だ。その小猿が故郷を失い、紅城に放たれて、その上夢か幻かも分からぬ赤に出会い、自分が何なのか分からなくなり始めていた。どうして急に色が見えるようになったのか、どうして赤が悠真の前に現れるのか、悠真を止める無色な声は何者なのか、悠真は何も分からなかった。その答えを誰かに聞きたかったが、それは許されないことのように思えた。悠真は大きな力の波に吞まれているのだ。その波からは抜け出すことが出来ない。後は溺れるのを待つだけなのだ。赤の仲間の一員にもなれず、故郷にも戻れない。大きな流れに吞まれて、悠真はどうしようもない気持ちになった。

——大丈夫、大丈夫よ。悠真。

無色な声が悠真を抱きしめた。声で、悠真を抱きしめた。その声は、何の色も持っていないかった。

赤の傷（４）

赤が悠真の前から去ると、赤で満たされていた悠真の世界は様々な色を取り戻していく。空の青、白い玉砂利、灰色の岩、茶色の外廊下、朱塗りの柱、紅が持つ鮮烈な赤色、義藤が持つ強いが優しい赤色。y悠真の世界に様々な色が満たされたとき、突然紅が振り返った。紅は赤く腫れた目を見開き、驚いたように口を開いていた。紅の様子に気づいたのか、義藤も悠真を見た。

「小猿……」

紅が口を開いた。悠真は立ち聞きたことを叱責されることを覚悟し身をすくめた。しかし、紅は責めるどころか目を見開き、心底驚いたように悠真に言ったのだ。

「小猿、いつからそこにいた？」

義藤が怪訝そうに眉間にしわを寄せたが、紅は悠真がいつからこの場にいるのかが気になるようで、腰掛けていた石から飛び降りると、悠真に歩み寄った。

「小猿、いつからそこにいた？」

紅の問いは強く、悠真は答えるしか出来なかった。

「紅と義藤が十年一緒にいるって辺りから」

悠真が呟くように答えると、紅はますます目を見開いた。そして、けらけらと笑ったのだ。義藤が心配そうに紅に歩み寄った。

「紅、どうしたっていうんだ？」

義藤の問いに紅は笑いながら答えた。

「私はずっと色を見ていた。たとえ、私の後ろに立とうとも、私は色で気配を感じることが出来る。特に先ほどは赤丸の気配を探ろうと、色に集中していた。——なのに、私は小猿がいたことに気づかなかった。いや、これまでもずっとそうだった。私は小猿の色が分からない。不思議だよな。全ての者は一色を持つというのに、私には小猿の色が見えない。小猿、お前は何者なんだ？私は小猿に興味

がある」

紅が義藤の背中を叩いた。

「義藤、悪いが今夜小猿を死なせないようにしてくれ」

言つて、紅は義藤の背を叩いた。

「義藤、二年前と比べてお前は強くなっている。だから私は決めたんだ。今回、惣爺を殺し小猿の村を壊滅に追い込んだ敵の正体を知り、証拠を掴み、敵を追い詰めるために義藤が行くことを許したんだ。義藤は強くなっている。自信を持て」

義藤が笑い微笑んだ。

「大丈夫、小猿も守るし、俺も生きて戻ってくる。二年前に先輩である野江、都南、佐久、遠爺、惣爺が戦い、困難に立ち向かう姿を見た。俺自身も生きる道を示された」

義藤は深く紅に頭を下げた。

「どんな困難にも立ち向かつてみせる。二年前に証明されたんだ。二年前に深い傷を抱いた野江と都南と佐久が立ち上がる姿を見て、俺は誓ったんだ。そんな傷を抱いても、どんな苦しみがあっても、己はそれを踏み越えていくのだと。痛みを超えて、苦しみを超えて、また強くなれると。戦う力も、心も、俺は強くなれると。強くなつて、あなたを守り続けると。俺に存在理由を与えてのも、俺に生きる道を示してくれたのも、全てあなただから。すさんだ子供だった俺の心は、あなたに救われたのだから」

義藤は頭を上げて羽織を調えた。義藤の言葉は優しい。他人から感謝され、必要とされているのなら、どんな苦難も乗り越えていけるだろう。

悠真が分かったことは、赤の仲間たちが秘密を抱えているということだ。品の良い義藤がすさんだ子供であるはずがない。優れた朱将である都南が紅城を去ろうとしたのは何が会ったのか。天童として紅城に招かれた歴代最強の陽緋野江はどのようにして陽緋になったのか。優れた術の力を持ちながらも、身体を動かすことが苦手で陽緋になれなかった佐久は、周囲からどのように扱われていたのか。

人見知りの天才からくり師鶴蔵は、紅城でどのような生活を送っているのか。そして、十歳で色神紅となった彼女は、どのように戦い、どのような苦難を乗り越えてきたのか。赤の仲間でない悠真は何も知ることが許されない。確かなことは、赤の仲間たちの持つ一色は美しく、温かく、強く、傷を隠し続けているということだ。

「さあ、野江たちのところに行こう」

義藤は微笑み、紅の背を押した。

「大丈夫、何も案ずるな」

義藤が抜き身の刃のような顔で微笑んだ。

悠真は赤の仲間に憧れた。赤の仲間の強い絆と信頼関係と、運命を共にするという一体感に憧れた。しかし、赤の仲間は多くの傷を抱えており、田舎者の悠真とは根本的な部分が違うのだ。

「そうだな。ほら、小猿も行くぞ」

紅が悠真に言った。紅の持つ鮮烈な赤色が、赤の仲間たちをまとめて導く赤色が、悠真を招いてくれるから悠真は赤の仲間近づけたように思えるのだ。

赤を護る者（１）

夜が来るまで、悠真は佐久の部屋で過ごした。紅と義藤は抜け出すことが他の朱護に知られないように、遠次と赤の仲間に一度挨拶をすると紅の部屋に戻っていった。紅がどのようにに部屋を抜け出しているのか悠真は興味が会ったが、二年前のことを尋ねて野江の拒絶されてから悠真は赤の仲間に嫌われないように口を噤むことを選び何も尋ねることが出来なかった。鶴蔵は部屋の隅でからくりの調整を行い、その様子は悠真の興味を惹いた。木造のからくりを分解し、それをくみ上げていくことで何が変るのか、そもそも、からくりはどのようにして紅の石の力に反応して動いているのか、悠真には理解できず術士しか使用できないからくりは魅力的だった。これからどのような便利なからくりを鶴蔵が作り出し、からくりを使って術士がどのようにに振舞うのか、悠真は未来を想像した。

赤の仲間たちは、遠次を中心として今夜の襲撃に備えた打ち合わせをしていた。紅と一緒に陽緋野江がいて、都南と佐久は行動を共にする。術の使えない朱将都南と、身体を動かすのが極端に苦手な佐久は互いに互いを補い合っている。

「今日、どんな敵がくるのかしら」

野江が不安混じりに言った。

「大丈夫、義藤は強いよ。同期だったら、恐ろしいほどにね。良かった、義藤より年上で」

佐久が笑った。彼らが佐久を認めているのは事実であった。都南が決意を固めるように膝を叩いた。

「赤丸もいるんだろ。二年前、結局紅を守り敵を撃つたのは赤丸だ。俺と佐久と惣爺が敗れた敵を最後に撃つたのは赤丸だ。赤影は俺たちが倒しきれなかった敵を影から倒し、赤丸は俺たちが破れた敵に勝利した」

都南が赤丸のことを口にした。悠真は赤丸の色を見た。赤丸は己を

押し殺している。紅は赤丸を裏の存在と話し、赤の仲間を表の存在と話した。赤影や赤丸を紅の持つ刃と称し、赤の仲間を紅の持つ盾と称した。赤影は己の存在全てを捨てて紅の刃となっているのだ。遠次がお茶を口に含んで赤の仲間を制した。

「赤影は強い。わしらは紅を支えるが、赤影は違う。紅を守るためなら己の命を容易く捨て、躊躇いなく人の命を奪う。先代紅と共に死んだ赤丸のことを、お前たちは知っているだろう。わしも知らなかった。先代紅を守っていた赤丸が、誰だったのか……。一度、紅が話してくれたことがある。先代紅を守る為に赤影の大半が命を失い、残された赤影が再度赤丸を立て再び紅を守っている、とな。赤影は存在しない人間たちの集まりだ。戸籍上で殺されるか、もともと存在しないはずの素質ある人間が赤影になる。よく聞け。紅を守るのはお前たちだけでない。赤影も然り。赤影も紅を守る存在だ。お前たちの仲間だ」

遠次の言葉に赤の仲間は軽く頭を下げた。都南が頭を上げた後、姿勢を正して遠次に言った。

「先代紅と共に赤丸が死ぬまで、俺は赤影のことも赤丸も対して興味はなかった。赤影は紅の持つ影の力であり、漠然と、暗殺をする存在と思っていたから。でも、現実が違う。先代紅は赤丸を暗殺の力として使わなかった。先代紅は知っていたのかもしれない。暗殺をしても何も始まらないと。赤影に罪を探らせ殺しても、何もならないと。正面から罪を明らかにして、正攻法で叩き潰す。そのようにしなければ何にもならないから。赤丸は先代紅を守った。まるで盾になるように先代紅の前に立ち、そして死んだんだ。あの戦いの後、身元不明の遺体がいくつか出てきた。その数十九。赤丸を入れれば二十。先代紅と一緒に死んだのが赤丸だという証拠はないが、あれはきつと赤丸だと俺たちは考えた。持っていた紅の石が俺たちが持っていた紅の石よりも遥かに強い力を持っていたから。当時、未来をもてはやされていた俺たちよりも、先代紅と一緒に死んだ者はずっと強かった。赤丸に違いはないだろ」

都南の話の後、佐久が続けた。

「身元不明の遺体が戦う姿を、僕は見たよ。彼は何人も敵と戦い、そして最後は相打ちに持ち込んだ。年齢は僕らと同じ二十前後くらいだったかな。僕はそれが、赤影の一員だとすぐに分かったよ。とても強い力を持ち、そして倒れていったから。彼を殺したのは敵じゃなくて僕だよ。僕と彼は一緒に戦った。僕は追い詰められ、斬られ、僕を助けるために彼は相打ちに持ち込んで戦った。僕が生きているのは、彼の命と引き換えにしたから」

赤影のことを語ったのは佐久だけでない。野江も続けた。

「あたくしも会ったわ。あたくしが出会ったのは先代紅と死んだ、赤丸とされている存在。あれは、先代紅が命を落とすずっと前。術士としてい厳しく育てられ、自分自身の存在理由を失っていたあたくしを先代紅は気に掛けてくださっていたわ。それでも、年頃になると悩むもの。そのあたくしの前に、姿を見せたのが赤丸だったわ。先代の紅はあたくしのことを気に掛け、あたくしに赤丸を差し向けたのね。あたくしの背中を押したのは、先代の紅と赤丸だったのよ。悠真は先代の紅の姿を思い描いた。戦争に反対し、官府から殺された優しい存在。今の紅を支える赤の仲間たちの幼い頃を知り、赤の仲間の成長を見守った存在。先代の紅には、野江たちのような存在はいなかった。野江、都南、佐久の三人はまだ若く、大きな力をもっていないかった。遠次と惣次が先代の紅を支え、赤影が紅を守ったのだ。先代紅と死んだ身元不明者は二十人。二十人の赤影が先代紅と共に命を捨てた。赤影は紅の刃であり、紅を護る存在なのだ。」

赤を護る者（2）

紅を守ろうと尽力する者は多い。その代表が赤の仲間であり赤影であった。佐久が言った。

「先代紅と一緒に、赤影の大半が命を落とした。若い者から、年齢の上の者までね。赤影は裏の存在。先代の紅を守るために全員が命を落としたわけでないだろうけど、その大半は命を失ったはず。残されたのは、きつと一握り。その一握りが新たな赤影を集めたところで、そう容易く集まるはずがない。きつと、赤影に入るには、子供の頃からの特殊な訓練が必要なはずだからね。赤影は強い存在であるけれども、今は万全の状態じゃない。二年前にも命を落とした赤影がいるはず。あの時の身元不明遺体は三体。だから今の赤影は本当に少ないはず。僕らは、赤影に頼らずに紅を守らなくちゃいけない。赤影は己を使い捨てのように戦うけれど、実際は違うはずだ。赤影も生きているんだ。先代紅と一緒に死んだ赤丸の死に様が、それを示していたから。先代紅と一緒に死んだ赤影たちが、それを示していたから」

紅は多くの人に守られている。赤の仲間と、赤影と、そして赤に。紅を守るために決意したのは義藤だけでない。赤の仲間たちも、紅を守るために命を賭している。紅の盾である赤の仲間は、紅の刃である赤影のことを思っていた。盾と刃が協力して紅を守れば、どんな敵でも弾き返せるはずだ。遠次が柔らかに微笑んだ。

「赤影は孤独な存在だ。己を殺し、己という存在を全て消し去って生きているのだから。裏の存在である赤影が、表の存在であるお前たちに認められたのなら、赤影にとって大きな意義となるだろうな。赤影は殺戮集団などではないのだから」

歴代の紅の刃となり続けた赤影、そして歴代の紅の盾となり続けた赤の仲間。相反する二つの力が歩み寄ったのだと悠真は思った。

夕方になると、義藤と紅が佐久の部屋に戻ってきた。赤の仲間たちは紅に負担をかけないように、強い決意を隠していた。それが、紅への優しさであった。紅が赤の仲間が傷つくことに恐怖を覚えているのは周知の事実だから。

戻ってきた紅と義藤を交えて簡単な夕食を摂り、悠真は紅城の最上階へと足を運ぶことになった。紅は気さくに話し、その様子はこれから起こるであろう戦いの不安を感じさせなかった。もちろんそれは、義藤や野江たちも同じであった。

悠真は自分が義藤と一緒に行って良いのか分からなかった。赤の仲間たちは命を失うことさえ視野に入れている。そこで、術士でない悠真と一緒にいるということは荷物でしかないはずだ。義藤は実力者だが、悠真を連れたことが原因で危険な目にあうことがあれば、悠真は取り返しのつかないことをしてしまったことになる。悠真が迷っていると、漁師だった祖父の言葉が蘇った。

（己の道を定めたのなら、信念を貫け。それが、わしが悠真に願うことじゃ。海に出たら一人きり。広い海に一人にいるときに、右に行くか左に行くか、その判断を途中でた躊躇うことはできない。海で生きるのならば、自分の信念を貫け）

悠真の背中を押す言葉は己の信念を貫けというものだ。復讐をするために紅城まで足を運んだ。ここに惣次の石もある。悠真は進むしか出来なかった。せめて、義藤の足手まといにならないように、それだけを願った。

食事が終わると義藤は平然と朱塗りの刀を磨いていた。義藤は落ち着き払い、これから囃として敵を引き付けることを恐れていないようであった。赤の仲間たちは皆同じだ。何も気にしていない。彼らの日常を知るわけではないが、彼らの平常を想像すると今のような状況だろう。狭い部屋で寄り添う赤の仲間たちの一員に、赤丸が加われば、と悠真は思った。

朱塗りの刀を磨いていた義藤は刀を鞘に戻すと姿勢を整え赤の羽織の袖を整えた。

「紅、そろそろ行ってくる」

義藤の言葉は、強さを持っていた。無駄な言葉を一つの含まない、義藤らしい言葉だった。

「気をつける。そうだ、これを渡しておこう」

紅も端的な言葉で返し、新しい紅の石を義藤に手渡していた。悠真が暴走させたために、色が弱ってしまった義藤の石が色を失ったときのための代用品だ。加工師柴が加工していないという一抹の不安のある新しい石。今、義藤が持っている紅の石が色を失わないことを悠真は願った。

悠真は後ろ髪を引かれるような気持ちだった。義藤に同行することとは、悠真自身が望み押し通したこと。自分で望んでいて、後悔をするのは間違っている。赤の仲間に迷惑をかけてまで、悠真は信念を押し通した。

「気をつけなさい」

野江が言い、同意するように都南が頷いた。

「明日、僕の取って置きのお菓子をあげるからね」

佐久が義藤を待っている、という意味を込めていた。

「行って参ります。紅のこと、お願いします」

義藤は丁寧な頭を下げると、躊躇いなく振り返った。

「行ってきます」

悠真はそそくさと義藤を追いかけた。

赤を護る者（3）

悠真は義藤に連れられて紅城を上った。野江と歩いた時とは見える景色が異なる気がするの、悠真の心境が変化したから。悠真は今、野江と一緒に歩いたときは違う目的で歩いている。他者の目にも気にならない。最上階に上ると中年の護衛が二人、紅の部屋の前座に座っていた。二人は不信そうに悠真を見たが、隣にいる義藤を見ると慌てて頭を下げた。この場所では年齢も関係ない。義藤は力で朱護の座についているのだ。そう分かれると、赤を許された人々は、気安く親しむことが出来ない存在なのだと改めて感じた。紅を支え、紅を守る存在。その存在は戦いだけでなく知的に優れ、政治にも深く関わっている。

「代わります。後は休んでください」

やはり、義藤は丁寧な口調で護衛たちに告げた。護衛たちは怪訝そうに悠真を見ていたが、赤い羽織の力は侮れない。赤は紅の権威なのだ。

「ご苦勞様です」

護衛たちは深く頭を下げて下がった。冷たい廊下に残されるのは、義藤と悠真の二人きり。

義藤は扉の前に座った。

「座れよ」

義藤に言われ、悠真も出来るだけ義藤と距離をとって扉の前に座った。義藤は悠真が初めて会った時と同じように、義藤は朱塗りの刀を立てて抱え、膝を立てて座っていた。日は暮れ、廊下には明かりが立てられ、小さな火に照らされた赤い羽織がとても美しく見えた。悠真は義藤の横顔を見ては、目をそらす。そんなことを続けていた。襲撃は確実にある。けれども、その実感は無い。思うのは、どんなに良い奴だとしても、悠真は義藤が苦手だということ。何を考えているのか分からない。

「悪かったな」

義藤が言った。そのことばの意味が分からず、悠真は戸惑った。

「刀を向けて悪かった」

悠真は息を呑んだ。やはり、義藤は良い奴でとても優しい人だ。声色が優しい。その声色は、紅に向けるものと似ている。

「それは……」

悠真は返答すべき言葉を探したが、何も思い浮かばなかった。義藤が悠真に刀を向けたのは、朱護として当然のことだ。義藤は紅を守る存在だから、紅を守るために危険な存在に刃を向けるのは当然のこと。それは強い義藤だから当たり前。しかし、義藤は優しい人だから、こうやって悠真を気にかけてくれるのだ。「強いが優しい」という義藤の人柄に悠真は気づき始めた。

「小猿が俺を恐れるのは分かる。だが、夜は長い。あまり気を張りすぎるな」

義藤はそう言うと、押し黙った。何を考えているのか分からない。悠真は辺りを見渡した。紅の住まう部屋の入り口は一つだけ。扉の前には護衛が詰めている。まるで、牢獄。紅は外へ出られない。

「一体、紅はどうやって外へ？」

悠真は思ったことを尋ねた。悠真は義藤に叱られることを覚悟していたが、義藤は笑った。抜き身の刃のような義藤の表情が柔らかく綻ぶ。

「まるで籠の中の鳥だ。歴代の紅は、外へ出ることなく生涯を終える。先代もそうさ。そんな現実を許さなかったのは遠爺と惣爺だ。二人は稀代のからくり師鶴蔵に隠し通路を造らせただ。その道は、先代紅の時代に完成した。紅が使う石にだけ反応する道。それを使って紅は外に出ているんだ。鶴蔵はあんな感じだが、優れたからくり師。隠し通路を造り、空挺丸を造ったんだから。良かったよ、紅は外を忘れることなく自由に生きることが出来るから」

義藤の言葉の端々から、紅への愛情が感じられた。

「義藤は、紅が色神になる前から一緒だったんだろ」

義藤は、息を吐いて天井を見上げた。

「まったく、彼らは口が軽い。確かに、俺は紅が色神になる前から一緒だった。もし、紅が色神にならなかったら、俺はまったく違う人生を送っていただろうな。赤い羽織を着ることもなかったし、そもそも術士になっていない。それはそれで、退屈な人生さ。こうやって尊敬する先輩方と出会うことも無かったし、強さに執着すること、目標に走り続けることも無かった。俺は何も後悔しじゃない。紅と出会って、俺の人生は色を持ったのだから」

義藤は紅のために術士になった。紅に人生を捧げているようなものだ。思うと同時に悠真は疑問に思った。義藤は術士としての才覚を持っている。なのに、紅が色神になれば術士として生きていなかったと話す。選別から落ちた悠真と同じ状況なのかもしれない。「義藤は、選別から落ちたのか？俺と同じように」

悠真が尋ねると、義藤は目を細めた。まるで、作り物のような横顔だった。義藤は努力を惜しまぬ天才だと、赤の仲間たちは称していた。その義藤が選別から落ちたということは想像しにくい、術士にならなかったかもしれない。ということは、選別で選ばれて術士になるという正当な道をとってきていないということだ。品の良い義藤からは想像できない。

赤を守る者（４）

義藤は品が良い。姿勢が良くて、動作が流れるようだ。言葉がきれいで温かい。全うな道から外れているようには決して見えない。

「今回の敵は、俺と同じような存在だろうな」

義藤がふと口にした。

「隠れ術士、って知っているか？」

唐突な義藤の問いに、悠真は首を横に振った。隠れ術士という言葉の意味が分からなかった。

「火の国の民は皆、例外なく選別を受けるだろ。事情があつて選別を受けないまま大人になり、術士として導かれないうまま術士の力を持つ存在だ。そのような存在は案外多い。俺は選別を受けていない。隠れ術士の大部分がそうだ。もしくは、術士の才覚があることが幼いうちに見つかり、戸籍上殺され実力者に金で売られてしまった奴隷のような術士か、どちらかだ」

術士は力だ。その術士の力を利用できれば、日常は変わるだろう。選別前に術士の才覚があることが発覚し、戸籍上殺され、親から金で売られて術士になる存在。それは、とても恐ろしいことだ。また、悠真はもう一つ疑問に思ったことがある。選別は戸籍にのっとり全ての民が受ける。それを受けないことは出来ないはずだ。もちろん、田舎者の悠真も選別を受けた。義藤が選別を受けなかったということは、ありえないことだ。

「だって、選別は……」

悠真が言いかけると、義藤は言葉を遮った。

「俺には戸籍がなかったんだ」

予想外の答えに、悠真は息を呑んだ。義藤は息を呑む悠真を見て、ゆっくりと続けた。

「俺には戸籍がなかった。それは、紅と出会った時も同じだ。俺の両親は決して子を持つことを許されない人たちで、俺と兄は、生ま

れてすぐに隠された。山の中にな。俺と兄は生まれるはずのない人間。存在するはずのない人間。だから、選別を受ける必要もない。俺みたいに孤児が術士の才覚を持ち、そのまま隠れ術士になる。それは案外多い話だ」

それは、悠真が知らない現実。悠真のような田舎者でも戸籍は持っている。そもそも戸籍を持たないことは、存在を国から認められないことと同じ。学校に行くこともなく、仕事に就くこともできない。悠真は、義藤を品の良い人だと思っていた。育ちが良いのでなく、生まれが良いのだと。育ちは粗暴だが、高貴な家の生まれだと思っていた。だから信じられなかった。

「気にするな。今は戸籍もしっかり持っている。紅と共に歩むと決め、術士になった時に遠爺と惣爺が用意してくれたから。気に病むことじゃない。それぞれの人間には、それぞれの事情と過去があつて今がある。ただ、それだけのこと。俺には俺の過去と歩んできた道があり、小猿には小猿の過去と歩んできた道がある。それは決して否定されるべきものでも、肯定されるべきことでもない。過去があつて、今があるからな。俺は自分の生まれを残念だと思ったことは無いし、両親を恨んではない。彼らがいたから俺は誕生し、こうして生きている。生きているということは、本当に素晴らしいことなんだ。自分が必要とされて、生きている。その喜びがあるから、俺は生きていける」

悠真は、義藤がとても大人な存在に思えた。義藤は頭が良い。悠真には出来ない考え方だ。悠真は自分のことばかり考えている、それは愚かで幼い考え。悠真は無力な田舎者。義藤のようににはなれない。「紅は恵まれている」

唐突に義藤が口にした。

「え？」

悠真が問い返すと、義藤は苦笑した。

「野江も都南も佐久も、優れた人たちだ。どんなに色神紅が優れていても、支えてくれる緋や朱、そして赤がいなければ優れた紅にな

ることは出来ない。紅一人では何も出来ないんだ。紅一人では大きな波に吞まれてしまうから。だから、紅は恵まれている。年齢も近く親しみやすく、先を見据えることが出来る彼らがいて。補佐してくれる存在が、紅を支えている。俺は小さな存在だ。彼らがいるから紅は立つことが出来る」

悠真は同じような言葉を聞いたことを思い出した。野江たちも、義藤のことを同じように言っていた。「若いけれど優秀な子」と称していた。義藤は野江たちを認め、野江たちは義藤を認めている。理想の関係。羨ましい限りの理想の関係だ。

「義藤がそう言うなら、俺はもっと弱い。復讐すると息巻いているけれど、結局は何も出来ない。じっちゃんや、惣次、村の人が死んだ復讐をする力も無い。こうやって、ここに来ただけで何をすればいいのか、何が出来るか分からない」

それは悠真の本音だった。とん、と悠真の肩に物が触れた。目を向けると、義藤の朱塗りの刀が悠真の肩を小突いていた。

「年はいくつだ？」

「十六だけど……」

答えると再び悠真の肩を義藤が小突いた。

「まさしく小猿だ。悩むな、これからだろ」

朱塗りの刀が悠真の肩を小突く。まるで、背を押されているような気分だった。

赤を護る者（5）

義藤は温かい。まるで、悠真の気持ちを感じ取ってくれているようであつた。

「一人になつたんだな」

義藤が俯き、そして言った。それは、悠真に投げかけられた温かい言葉だつた。

「え？」

悠真は義藤が、なぜそのようなことを言うのか分からなかつた。

「親もない。故郷もない。俺も同じだ」

悠真は義藤を見つめた。抜き身の刃のようで、それでいて優しい。義藤は刀を立てて、寄りかかり言った。少しくつろいだ風の義藤の仕草は、作り物のような義藤を人間に変えていく。義藤は一つ息を吐き、天井を見上げた。

「一人になると、心に風が吹き込む。今はまだいいかもしれない。復讐に息巻いて、強い信念があつて、一つのことに集中できて……。生きる目的が誰かを憎むことならば、それは長くは続かないんだ。忘れるな、一つの軽率な行動が全てを決定付ける。どうして、あの時に言葉を交わしておかなかつたのか、どうして優しさに気づかなかつたのかと後悔だけが残る。自分を責めて、苦しむ日々が始まるんだ」

悠真は義藤のことを考えた。義藤は一体何者なのか。義藤は悠真の心情を想像して話しているのではない。それは、義藤の過去に基づく言葉のようだった。子供を持つことが許されない立場の両親を持ち、戸籍を持たずに育った義藤。紅に出会い、隠れ術士でなく正規の術士の道を歩むことを決めた義藤。抜き身の刀のようで、品が良くて……。紅を守り続ける義藤のことが分からなかつた。

「義藤、俺は……」

義藤は悠真の肩をつついた。悪戯めいて、微笑む義藤は野山で駆け

ていそうな表情だった。

「俺に親はいない。会った記憶もなければ顔も知らない。言葉も交わしたこともないが死んだと知ったときは哀しく、とても孤独になった気がした。俺に父の死を伝えたのは風の噂で、母の死は紅が色神にならなければ知ることにはなかっただろう。俺の両親は、何も残さず死に、死んだことすら伝えなかった。それでも、俺には兄がいたから、平気だった。俺と同じ時を生きた唯一の兄がいたから、不安もなく、紅がいたから世界に色を見つけることが出来ていた。遠次は俺のことを、強いが優しいって言った。けれども、俺の兄に対しては優しいが強いと言った。だから、俺がここにいて、兄は死んだ。俺と違って、兄は強いから」

どうして、義藤がそのようなことを話すのは、悠真には分からなかった。ただ、義藤の孤独が伝わってきた。義藤は孤独で、強くて、そして優しい。憧れを抱く存在だった。それが、表から紅を守る義藤の本質だ。

「どうして、こんなことをお前に話しているんだろうな」

義藤はそう言うと言った。

「良く似ているんだ。兄が死んだ頃の俺とな。大丈夫、人は一人になることは決まってるんだから」

少し遠くを見て、哀しそうな義藤の表情が胸に響いた。そして、悠真は気づいた。己の身さえ守れるか危険な状況。そんな場所に無力な小猿を連れてくることを承諾した理由。紅の言葉だけでない何か、義藤を動かしたのだ。

「もしかして、俺を連れてきたのって……」

義藤は答えた。

「言っただろ、俺と似ているからだ。兄が死んだ時、俺は生きることに絶望し、兄が死んだ理由を作った者への復讐だけを考えていた。なのに、いくら探しても復讐する相手は見つからないんだ。兄は己の意志で死んだ母の後を継ぎ、二度と会えなくなった。兄は優しい人だったから、母が半端で終えた職を全うしようとしたのかもしれ

ない。俺は職に生きて、職に死んだ母を憎むしか出来なかったのに。俺でなくて、兄が生きていれば良かった。俺じゃなくて、兄がここにいたら紅を危険な目に遭わせることなんてないのに。俺は悩み、苦しみ、全てを失った気分だった。そんな中で俺は気づいたんだ。俺は一人だと思っていたのに、一人じゃなかった。近くには紅がいて、野江や都南や佐久や鶴蔵がいる。そして、俺をわが子のように育ててくれた遠爺と惣爺がいた。人は決して孤独になつたりしない」義藤の言葉は温かい。悠真の胸に重みを持って響き、温もりを広げていく。抜き身の刀のように思えるのは、表面上の義藤の姿で、義藤の本質はとても優しい。優しい一色。

悠真は色神紅のことを思った。彼女は色神としての重圧と戦い、火の国を守り続けている。たった一人で、戦い続けている。そんな紅を支えているのが、悠真の隣で無愛想に座っている義藤なのだ。野江、都南、佐久、鶴蔵も一緒だ。彼らは赤い色でつながっている。

赤を護る者（6）

悠真は義藤のことを良い奴だと決めることにした。

「ねえ、義藤のお兄さんってどんな人だったんだ？」

悠真は義藤に尋ねた。兄弟のいない悠真は純粹に興味があつた。

「兄が死んだのは十年前だが、同じ顔をしていたな。外見の違う双子も存在するが、俺と兄は惣次と遠次のように、外見はまったく同じだった。それは、多くの人が俺と兄の見分け方が分からないほどだった。でも、性格は違ったな。兄はとにかく優しい人だった。もし、俺じゃなくて兄が小猿と一緒にいたのなら、佐久のように気安く声をかけ続けるだろうな。兄は人を憎むとか、人と競うとか、そういうことに興味が無いみたいだった。頭が良くて勉強に優れて、それに、とても強かった。術の力を競ったことは無いが、兄の才能は本物だ。剣術も優れていて、子供のころの俺は一度も勝ったことが無かったさ。それでも、俺は兄に勝とうともがいて、もがいて、もがいて。兄は俺の生涯越えることが出来ない壁なんだ。俺がどんなに強くなっても、記憶の中の兄は俺のずっと先を歩いている。そうだな、俺は兄と喧嘩ばかりしていたが、きつと兄のことが好きだったんだ。俺は一人で生きていけると、ずっと強がっていたが結局のところは兄に頼りきっていたんだ。山から外に出て、市街に貰われた時も、強がっていたが俺は寂しかった。寂しくて、山に逃げ帰りたい気持ちばかりだった俺の隣に兄はいてくれた。兄がいて、紅と出会って俺は生きる道を見つけたんだ。兄はとても強い人だった。兄を超えたいと、兄と争うことは多かつたけれど、超えたいと思う時点で俺は兄に負けていたんだ。決して超えることが出来ない壁なんだから。それでいいんだ。兄は俺の上を歩いてくれれば、それで良いんだ」

兄のことを話す義藤はとても幸福そうであつた。幸せな思い出を蘇らせるように、義藤は微笑んでいた。

「ねえ、義藤のお兄さんってなんて名前なんだ？」

悠真が尋ねると義藤は笑って言った。

「忠藤」

義藤は床に指で「忠義」と書いた。

「俺と兄の二人を合わせて忠義。母はどんな思いで俺たちにこの名を与えたんだろうな。誰に忠義を尽くせという意味を込めたんだろうな。今は、この名に誇りを持っている。兄は死んだが、俺と兄が忠義を尽くす相手は見つかったんだ。俺は、紅に忠義を尽くす」

悠真は義藤の指の軌跡を見た。達筆な動きで「忠義」と書かれて消えた字は、悠真の心に何かを残した。義藤は紅に忠義を尽くしている。

「子供を持つことが許されない両親が、忠藤と俺を生むことを決めた。それに、俺は感謝している。山で育ったときも仲間はいた。山を出てからは、身分をごまかして紅の実家に仕えた。俺はそれで良かったと思っている。そうでなければ、本当に今の俺は無かった。俺は今の自分自身の境遇に満足しているのだから」

悠真は義藤が自分のことを話すことが信じられなかった。もしかしたら、義藤は悠真の孤独を見抜いているのかもしれない。悠真が孤独だから、決して孤独でないと教えてくれている。悠真が孤独だから、孤独な彼自身の過去を教えてくれる。

義藤は良い奴だ。疑問に思うことは、義藤のことだ。

——義藤は紅のことが好きなのか？

そんな野暮な質問をすることが出来ず、悠真は俯いた。義藤のことを見定めていた自分も、義藤のことを恐れていた自分も嫌いになりそうだった。

ふと、義藤の手が悠真の頭に寄せられた。その手が優しく、強く、悠真は何とも言えない気持ちになった。

「よく、忠藤がこうやってくれた。あいつは、俺と同じはずなのに少しも同じじゃない。人は皆違う存在で、思考も、体力も、判断も、未来も、そして過去も全てが異なる。俺は野江や都南たちのように

なれなければ、彼らの過去を背負うことも出来ない。もちろん、俺の過去を彼らが背負うことも出来ない。背負っていけ。小猿自身の過去を背負って生きていけ。誰も小猿の代わりは出来ず、小猿は唯一無二の存在なのだから」

自分は唯一無二の存在なのだ。当たり前のように、当たり前でない言葉を言われた言葉を渡されて、悠真は何とも言えない気持ちになった。紅城では特別な人たちが多くて、平凡な田舎者の悠真は自分がくだらない存在のように思っていた。

——小猿は唯一無二の存在なのだからな。

悠真はその言葉を心の中で反芻した。妙に嬉しく感じたのが不思議だった。

赤を護る者。

赤を愛する者。

その存在が悠真の横に座っていた。抜き身の刃のようで、作り物のような顔をして、丁寧な所作と言葉、他人を思う気持ちを持った優しい存在がそこに座っていた。

赤と異色（１）

赤を司る色神紅。そして彼女を守る赤の仲間と赤影。紅を守るために術士になった義藤。悠真は色神紅のことを思った。彼女は色神としての重圧と戦い火の国を守り続け、たった一人で戦い続けている。そんな紅を支えているのが、悠真の隣で無愛想に座っている義藤なのだ。野江、都南、佐久、鶴蔵も一緒だ。彼らは赤い色でつながっている。義藤が黙ってしまうと、悠真と義藤の間に会話はなくなってしまう。第一、悠真と義藤に何の共通点も無いのだから。悠真は思考の行き場に困り燃える灯りをじっと見つめていた。揺らぐ炎の赤も、一つの色であった。

「知っているか？」

唐突に義藤が言った。抜き身の刃のようで冷たいけれど、とても優しく、現に悠真が困らないように声を掛け続けてくれているのだろう。唐突で会話に流れが無いのは、きつと義藤が悠真に気を使い話題を探している証拠だ。そして、義藤はこのような状況になれていない。きつと佐久ならば、もっと脈絡のある話をするはずだ。

「何を？」

問いかけた悠真に小さく笑いかけ、義藤は廊下の先を見つめて答えた。

「色神は紅だけじゃないだろ。異国の話だ。火の国は他国との交流が殆どないから、普通の生活では外国に目を向けることもないが、石は色によって力が異なる。青の石は水を操る。緑の石は植物を育てる。燈の石は獣と心を交わす。黄の石は土壌を豊かにする。他にも沢山の色の石が存在する。それぞれの力を有してな。色は力を持っている。火の国には赤の色神がいて、紅の石があるからこのような生活を送っているが、他の色の石の力を持った国はきつと違う生活をしている」

悠真はいろいろな色を思い描いた。火の国は色神紅と、紅の石があ

る。色神を有さない国はどのような生活を送っているのか。他の色神が守る国はどのような生活をしているのか、悠真は想像が出来なかった。他の色の色神を有する国は、他の色を高貴な色としているのだろうか。赤を普通に身に付けることが許されるのだろうか。

「興味、あるだろ。この手のことは佐久が詳しいから、いつか聞いてみればいい。世界は広く気候も、土地も、動物も、植物も、火の国とは異なる。文化も、言葉も人の姿かたちさえ火の国とは異なるそうだ。海の間には異国がある。異国間に交流があるところもある。俺も見ることがない異国があり、赤でない色を高貴な色として讃えている。火の国は閉鎖的な国だから、誰もが勘違いしやすいんだ。他国に勝てると、他国より火の国の方が優れていると……。現実には、それが真実かも分からぬと言うのに」

義藤は悠真を見て小さく笑った。今の悠真はとても馬鹿みたいな顔をしているだろう。今まで、泳いでいた海の間には異国があることは知っていたが、異国に興味を持つことはなかった。義藤の話を聞いて、いつの日か、異国に足を運びたいと願うのは悠真だけだろうか。田舎者の悠真が異国と触れ合うことなどありえない。けれど、夢を見るのは自由だ。

「国力は国土と資源と石の力と民の力で左右される。火の国が持っているのは紅の石と民の力だけだ。国土も小さい。めばしい資源もない。こんな東の島国が豊かなのはひとえに紅の石の存在があるから。そして、紅の石の力を有効に使う術士と、術士を信頼する民がいるからだ。赤は強い色だ。異色から群を抜いているが最強の石ではない。他に力を持つ石は、北の大国、雪の国が有する白の石。そして西の大国、宵の国が有する黒の石」

悠真は義藤を見つめた。

「白の石と黒の石にはどんな力があるんだ？」

悠真の問いに、義藤は少し間をおいて答えた。

「白の石はどんな傷や病でも一つにつき一度だけ癒し、黒の石は一つにつき一度だけ、一日だけ存在できる不死の異形の存在を生み出

すと。どんな人でも命は愛しい。だから白の石は貴重だ。火の国は対面上鎖国を通しているが、唯一外交を取っている国がある。それは色神も石も持たない流の国。流の国は、色神を持たないが外交能力に優れた国だ。流の国の主は、行動力のある誠実な人柄らしく、火の国も流の国の主を信頼している。流の国に紅の石を渡し、代わりに白の石を手にする。それは青の石や黄の石も然り。けれども、黒の石を持っているのは佐久だけのはずだ。佐久が研究のために持っているが、基本的に火の国は黒の石を手にしていない。それは、火の国を戦乱の国にしないための計らいだ。どんな国でも不死の異形に襲われては勝てない。だから黒の石は戦争場面で貴重となる。宵の国は騒乱の国だが、現在の色神が強大な力と戦略で国を統一し戦乱を鎮めたと聞いた。今後、宵の国の色神が火の国を狙う可能性も高い。現に、何度も書が送られてきている。それは白の国だと同じだ。異国は火の国と紅の石の力を狙っている。外交面で誤り紅の石を他国に大量に渡してしまえば、その石の力で火の国は狙われてしまう。異国が狙うのは、火の国と色神紅。紅を支配下においてしまえば、紅の石を思うがままに使える。国内で争う暇などないというのに、官府は何も分かっている。紅の石は強い力を持つが最強の石でない。火の国が滅びないという保障はないのに――

睨みつけるように廊下を見つめる義藤の横顔が心に残った。

赤と異色（2）

火の国は平和だ。閉ざされた島国であり、他国からの侵略や領土争いもない。けれども、紅の石の力を他国が狙っているのは事実。火の国の平和は危うい均衡の上で成り立っている。他国から色の石を手に入れるのも、紅の石との交換が主になる。色の石は高い金のようなものだからだ。それは資源を手に入れるの同じだ。しかし、紅の石を他国に流失し続ければ、皮肉にも他国が手にした紅の石の力によって火の国が滅ばされてしまうかもしれない。

この平和は危ういものだ。火の国が異国の所有物となった時、悠真たちの生活はどのように変化するのだろうか。今のままだいい。紅たちは、国内の官府と対峙すると同時に、異国への警戒を続けているのだ。赤い色と火の国を守るために。

「愚かな官府は火の国を特別な国だと信じ、紅の石は最強の力を持った石だと思い込んでいるが、現実が違う。全ては石の使い方なんだ。どのように色の力を引き出すのか、どのように使うのか、それは政治家の力量であり、術士の才に左右される。紅の石は強大な力を持つが、その使い方は難しい。いわば諸刃の刀だ。紅の石はうまく加工しなければすぐに色を失う弱き石。紅の石はかくりを使わなければ、使用方法が限られる道の少ない石。強い力を持つとしながら時に異色に敗れる。例えば、佐久は青の石を使い水人形を作り出し自在に操り兵隊とする力を持っている。斬っても、倒れても、すぐに修復する水人形は恐ろしい敵だ。燈の石を使う力に長ければ、獣を使って自らの軍隊を作れる。獣は人間よりも身体能力が高く、環境の変化に強い。それは、それで最強の軍隊さ。色の使い方は様々で、どのように色の力を引き出すのか術士の力で決まる。使い方を間違つたいけない。俺たちは、色の中で生きているのだから」

紅の石の脆さについては、赤も口にしていた。そのことに、一般人は気づかないの義藤は気づいている。色の力は脅威であり、脆さで

あり、最も優れた色は存在しない。義藤はそのことを知っている。

色は覇権を取り合う。そのために人間を利用しているに過ぎないのだ。悠真はそんなことを思った。赤は赤色を頂点に立たせるために全力を尽くし、異色は己の色を頂点に立たせるために全力を尽くす。国が覇権を争うように、色も覇権を争っている。人と同じように他者を蹴落とし、頂点に立とうとする。色も人も本質は同じなのだ。なぜなら、全ての人は己の一色を持っているから。

「どの色が一番美しいかなんて、そんなこと決められないというのにな。そもそも、色の力を戦いに使おうと考えている時点で間違っているというのに」

義藤は笑っていた。異色と異国の存在。火の国は狙われている。

「ねえ、火の国は狙われているの？赤は他の色から狙われているの？」

悠真が身を乗り出して義藤に尋ねると、彼は微笑んだ。

「それが人の世の常だ。だから俺たちは戦い続けるんだ」

悠真が夢見る異国。それはどのような色に守られているのだろうか。

「火の国を一番狙っている国は？」

そんなこと聞いても何にもならないのに、悠真は義藤に尋ねていた。それはただの興味であつた。

「一番、というのは付けにくいが、脅威なのは雪の国と宵の国だ。

二国から攻められれば、火の国は間違いなく負ける。他国の支配下に置かれた火の国の状況なんて想像するに容易い」

悠真はさらに身を乗り出した。

「どうなるの？」

義藤は低く答えた。

「紅が死ぬことになる」

「え？」

悠真には話の意味が分からなかった。

「紅の石は脅威だ。火の国が他国から侵略された場合、残された道は唯一つ。囚われた紅が死ぬことだ。そうすれば、新しい紅が選ば

れ、新しい紅を軸に戦うことが出来る」

それはとても恐ろしい話であり、同時に義藤が言っていると現実味を帯びていた。不安になった悠真の背を義藤が叩いた。

「大丈夫。そんなことには絶対させない。そのために俺たちはいるんだ。大丈夫」

異色はとても恐ろしい。争いは火の国の中だけでない。紅と赤の仲間たちは異国と異色にも目を向けているのだ。

赤は美しい色だ。強く、残酷な色。火の国は赤に守られている。

しかし、気になるのはなぜ「赤」がこの島国を選んだのかということだ。火の国は偏狭の島国。気候は穏やかで、自然は美しい。しかし、土地の面積は小さく資源もない。なぜ、赤は色神紅を火の国に誕生させたのか。色の世界のことを悠真は知らないが、色が色神を選び色の力を与える。赤が紅を選んだようにだ。ならば赤は他国の人間に力を与えることさえ出来るはずだ。赤はなぜ火の国を選んだのだろうか。赤が力のある色ならば、それは不自然なこと。白は北の大国。黒は西の大国。なぜ、白や黒が狙う赤は小さな島国なのだろうか。悠真は思考をめぐらせた。

第一、色神が土地を選ぶということは間違っているかもしれない。白は雪の国を手にし戦争によって他国を吸収し拡大したのかもしれない。黒は、黒の石を使って他国を侵略し宵の国を拡大したのかもしれない。ならば、なぜ赤は他国を侵略しようとしなかったのだろうか。他国との戦争に反対した先代紅を守ろうとしたのか。悠真は色の世界のことからずいいた。

思うと同時に、赤が計り知れない存在に思えるのだ。

赤と異色（3）

悠真が赤を思うと、暗い廊下が赤色で満たされた。それは赤が姿を見せる前兆だった。

——色は覇権を争うのじゃ。

気づけば赤が悠真の前に座っていた。義藤は赤のことに気づいておらず、赤は楽しそうに手を義藤の前でひらひらと振った。その仕草はどこか紅と似ていた。もしくは紅が赤と似ているのかもしれない。

——義藤には見えぬ。わらわは色神じゃ。誰しも見える存在ではあらぬ。

赤は妖艶な口元に指を当て、悠真に黙るように言った。

——小猿が声を出せば、義藤に疑われるぞ。義藤は聡い若者じゃ。黙っておれ。

赤は妖艶に座りなおすと、赤く塗られた唇を動かし笑った。

——色は覇権を争うのじゃ。それはわらわも同じじゃ。わらわも色の覇権をとるために、色神紅を選び、紅の石を作らせ、紅の石を使わせる。

赤が赤く塗られた臉を細めた。強いのに、どこか儚いと感じるのは、赤と紅が似ているからだ。

——わらわは、わらわの色のために存在する。この世から赤という色が消えぬためにな。色の世界とは、小猿ら人間が思う以上に複雑じゃ。あまたの色が存在する世界。主力を握っておる色は数十の色。わらわの赤色も、主力の色の一つじゃ。されど、いつその座を失うのか分からぬ。いけ好かぬ黒や白の奴が、赤を狙い、火の国を狙っておる。それは他の色も同じ。

赤は小さく溜息をついた。

——少しずつ、少しずつ、わらわは朽ちてゆく。

悠真はその言葉の意味が分からず、思わず声を上げそうになった。その悠真に、赤は再び唇に指を当てた。

——そう、思うだけじゃ。悠久の年月を、色の世界の覇権を争うことだけに使い、主張を続けるとは何とも愚かなことのように思うのじゃ。人間は容易く命を失い、わらわを裏切る紅と、わらわが守ろうとしても人間ごときに殺される紅。異色は、色の世界だけでなく人間を使って己の色の主張を始めおった。愚かなことよ。そして、人間ごときに心掻き乱される、わらわも愚かなことよ。

悠真は赤の美しさに目を奪われていた。赤は優雅に笑った。

——小猿、義藤を死なせるでないぞ。義藤は紅のためにも、わらわのためにも必要な存在じゃ。小猿が我が色を受ければ、今日、いかなる敵が迫ろうとも義藤が命を失うことはあらぬ。赤は身を乗り出した。

——小猿、わらわの話、忘れるでないぞ。

赤は悠真の頬に触れると、そつと立ち上がった。

——敵は来る。それは間違いない事実じゃ。それも、強い術士じゃ。命を捨てる覚悟も持つておる。小猿、忘れるな。敵は必ず来るぞ。赤が断言した直後、赤い色は廊下から引いた。赤が引くと同時に赤の姿は掻き消え、そこには静寂な廊下があるだけだ。

「どうした、ぼんやりして？」

義藤が悠真に尋ねた。

「なんでもない。大丈夫」

悠真は答えた。赤がいた。そんなこと誰が信じるというのだろうか。本当にあれが色神「赤」なのかも分からない。紅を色神に選んだのか彼女なのかも分からない。結局は、悠真の妄想だと笑われるだけだ。現に、悠真自身も自分の目を信じていなかった。ただ、赤が悠真の知らないことを教えてくれることを教えてくれることは事実だ。色神とは、不思議な存在だ。もしかしたら、紅には赤の姿が見えているのかもしれない。悠真は赤と紅を並べて考えた。紅の理想の紅像の一つは、どこか赤と似ているのだ。強く美しい赤を紅は作り出していた。そのようなことを思うと、微笑ましい。

「それで、小猿の故郷はどんなところだったんだ？」

「え？」

思考の海に心を浸していた悠真は、義藤の問いで現実引き戻された。悠真の故郷は自然の美しい所。海で泳ぎ、魚が跳ね、裏山を駆け回った。悠真はそんな故郷で十六年間育ってきた。義藤が悠真に尋ねるから、悠真は故郷のことを話した。次第に悠真の言葉は熱をおびていく。美しい思い出。その思い出は土砂に吞まれていく。

「俺の故郷は、他にどこにもない。自慢の故郷なんだ」

悠真はそこまで言うと、言葉を詰まらせた。故郷はもう無い。悠真の熱弁を黙って聞いていた義藤が低く言った。

「悪かった」

なぜ、義藤が謝るのか分からないが、義藤が謝るから悠真の目に涙が浮かんた。故郷が滅びた事実を、惣次の身体から噴出した赤い血を、悠真は思い出したのだ。故郷が滅びたのも、紅城へ足を運んだのも、すべて夢であって欲しいと願った。目が覚めれば祖父が隣で眠っていて、に火を入れて食事の準備をする。そうあって欲しいと願った。願いが虚しいものと分かると、言いよつの無い気持ちで悠真を襲った。十六になって、情けないことだ。男は泣くな、強くあれ。祖父が生きていたら、悠真を怒鳴っただろう。怒鳴られても良い。祖父の声を聞きたかった。

「俺たちが何をしたんだ？義藤、教えてよ。どうして、どうしてこんなことになるんだ」

義藤を責めても意味は無い。分かっている、止められない。紅たちは何の罪も無い。

「なあ、義藤！」

悠真は思わず義藤の赤い羽織をつかんでいた。義藤は目を伏せた。そして、ゆっくりと悠真の手を覆った。義藤の手はとても温かい。

「俺には、言葉をかける資格はない。それでも、一つだけ願いがある。紅を信じて欲しい。紅は強く優しい人だ。それだけは信じて欲しいんだ」

悠真は何も言い返せず、義藤の赤い羽織から手を離れた。

——赤はともかく、今の紅は優れた人よ。
無色な声も悠真に言った。彼らは紅を信じている。悠真はどんなの
だろうか……。

赤い夜の戦い（１）

時は経ち、宵は深まった。義藤は身動き一つとらず一点を凝視し、悠真は腰や尻が痛くなつて何度も姿勢を直した。危険な状況だと分かつていても、悠真は強い睡魔に襲われた。目を開こうと、意識しても自然と瞼が閉じていく。世界がゆっくりと沈み、頭の重みで顔が沈んでいく。眠っては駄目だ。眠っては駄目だ。自分に言い聞かせて、必死になつて目をこじ開けて、必死になつて頭を上げて、悠真は起きようと全力を尽くした。悠真の必死な抵抗も義藤は見抜いているのだ。だから義藤は優しい。

「眠つてもかまわない。案ずるな。俺が起きている。これは俺の仕事だからな」

義藤が廊下の先を見つめたまま言った。

「疲れただろ。昨夜からずっと。見ず知らずの紅城に来て、初対面の人間と会つて緊張の糸を張り続けて、疲れるのは当然のこと。お前はまだ、術士でないのだから」

義藤が言った。言われる前から悠真は限界で、泣き疲れたのが正直なところだ。村が崩壊したのは昨夜のことで、野江と出会い紅城に足を運んだのは今朝のことなのに遙か昔のことにように感じる。今朝まで、紅を尊敬していた。村の崩壊の真実を知つてからは、紅を憎んだ。そして今は……。悠真はゆっくりと目を閉じた。夢は見たくなかった。見る夢は悪夢に違いない。平和な故郷の情景ならば、なおのこと悪夢だ。忘れてしまうのだからいい。何もかも忘れて、無の空間に落ちたかった。落ちて、落ちて、悠真は眠りに落ちていく。夢の中は黒い闇。

「起きろ！」

どのくらいの時間が経つただろうか。義藤の大きな声で悠真は目を開いた。眠っていた身体は硬直して上手く動かず、廊下で座つて眠

つていた身体の手足は冷えて冷たい。それでも、義藤の鬼気迫る声で、悠真は慌てて目を開いた。義藤は片膝を立てて中腰になり、刀を柄から抜きかけていた。

「来るぞ」

はらりと義藤の髪がなびいた。悠真が首にかけた紅の石は赤い光を放ち、義藤の顔を赤く照らしていた。

「石が……」

悠真が言うつと、義藤は悠真に目を向けることなく答えた。

「反響だ。強大な力を放つ色の石が、力を放ちながらこちらへ近づいてきている。気をつける。敵は、野江の力を跳ね返すほどの力を持つ、紅が把握していない術士だ。隠れ術士の中でも、小緋や中緋ほどの力を持つ。危険な存在だ。官府に雇われているのなら、官府の経済力を背景に持つ。もし、ここで術士を殺しても何にもならない。とかげの尻尾きりになるだけだからな。官府は知らぬ存ぜぬでしらをきるんだ」

ゆるりと義藤が刀を抜いた。朱塗りの鞘から抜かれた白刃が小さな灯りを眩しく反射していた。その直後、外で赤い光が輝き、強い力で壁が砕けた。

悠真は動けなかった。このまま死ぬ。悠真が身動きひとつ取れないほどの時間。その間に、義藤は身体をひねらせ立ち上がり、悠真が頭で考えるよりも先に、義藤が赤い羽織を広げ、悠真の上に覆いかぶさり庇ってくれた。小さな木の屑が、ぱらぱらと悠真の上に落ちてきた。義藤の微かな重みと息遣い、そして義藤が持った抜き身の刃が悠真の顔の横にある。

「義藤？」

悠真は身体の上に義藤の重みを感じた。当然の事ように、義藤は身を呈して悠真を守った。悠真は復讐するつもりだ。なのに、どのようにすれば良いのか分からない。強大な力もち、石を操る敵に対抗する術が分からない。義藤の重みが、悠真の不安を掻きたてた。悠真と義藤は同じ人間なのに、力は同じでない。

「隠れている」

耳元で義藤の声が低く響き、重みは急に消え去った。悠真は隠れるしか出来ない。息を殺し、身を隠し、義藤と敵の戦いを見つめるしか出来ない。

——何が復讐だ。

悠真はそう思った。紅の石の力で世界が赤く輝き、暗い夜に赤い明かりがともされていた。赤い空。赤い夜。赤い風。赤い夜の戦いが悠真の目の前で始まった。

赤い夜の戦い（２）

紅の部屋の前の扉も破壊され、紅の部屋の畳が露になっていた。乱暴に廊下に進入してきたのは暗闇に溶け込むような黒い服をまとった四人組みだった。義藤はその前に立ちはだかった。

「なぜ、紅の命を狙うんですか？すぐに陽緋たちが来ます。無駄なことは止めてください」

義藤は刀を抜き、四人組に言った。優しい義藤は四人組の敵に無駄な攻撃をやめるように忠告しているのだ。すると、黒い服の敵の一人が言った。

「問題ない。我々は強い。——出来るな」

低く響く声は落ち着き払っていた。出来るな、という言葉は黒い服の敵の一人に向けられていた。

「問題ないよ」

答えた一人が青の石を取り出し使った。まるで、その力を義藤に見せ付けるかのようなだった。青い光が輝いていたと思うと、辺りに水が溢れその水は人間の形をかたどった。使ったのは戦いなど無縁そうな優男。声が穏やかで争うことと縁遠いように思えた。悠真は義藤が話していたことを思い出した。佐久が青の石で水の人形を作り出し戦うと。優男は佐久の特技を真似たのだ。それがどれほどの脅威なのか、創造するに容易い。

最初に話した落ち着きのある声があった。

「先の朱護頭の佐久の特技だと音に聞いた。出来るのは佐久だけかと思ったか？答えは否。こちらにも利はある。ただの隠れ術士とあなどるな。行け」

重厚な声が響いたかと思えば、水の人形は次々と階下へ走り出した。水の人形だから窓から飛び降りても問題ない。水が次々と敵になっていく。悠真は「先の朱護頭の佐久」という言葉に引っかった。あの佐久が陽緋になれるとは思えなかった。

「まさか、それほどの使い手とはね」

義藤が苦笑していた。

「俺の人形は強いよ。たとえ、佐久であつても簡単には倒せない。それは現陽緋の野江であつても同じ。でも、あなたも強いでしょ。

義藤。あなたは強い。あなたは強い。あなたと違って、俺は得意なだけ。石を器用に使うことがね。先の朱護頭佐久と同じ。色との相性が良いのかな」

それは青の石を使った男の声だった。穏やかな話し方は少しも悪人に思えなかった。

「俺にもやらせるよ」

言つたのは最も身体の小さな存在。おそらく、子供だ。悠真より少し年下の子供。子供は黄の石を取り出した。黄の石は土壌を豊かにする石だ。つまり、大地の石。その石が何の役に立つのか、悠真は分からなかった。

「あまり力を使いすぎないようにしなさい。こちらの本命は、隠れている紅なのだから」

女性の声が子供を制した。四人の敵は、長であろつ男。青の石を使う優男。子供。そして女性。

「分かっているよ」

子供はふてくされたような仕草をしたが、そのまま黄の石を使った。すると、紅城の大地が生き物のように動き、紅城を覆い始めたのだ。悠真が始めて見る黄の石の力だ。大地を自在に操る力は黄の石が有しているが、このような使い方があるとは思えなかった。誰しもが一色を持っている。同時に、色との相性があるのだ。当然のようだが、火の国は赤との相性が良い民が多い。もちろん。義藤は赤との相性が良い。野江も赤との相性が良い。佐久は青や黄、燈と赤だけでない色との相性の良さを持っている。優男は佐久と同じだ。様々な色との相性の良さを持っているから、優男は佐久と同じように紅の石以外の石の力を大きく引き出すことができる。そして子供は、白との相性が良い。決して黄と色の相性が良いわけではないのに、強

大な力を引き出すことが出来る。その潜在能力は計り知れない。色を操る力が大きいから、相性の良くない石の力を使えるのだ。優れた力で色を引き出しているのだ。もし、子供が白の石を専属で使う術士になれば、それは歴代最強の陽緋野江に匹敵する白の石の使い手になるはずだ。

「外にいる陽緋たちは入ってこれない」

子供の声に悠真は息を呑んだ。義藤はこれから、この四人を相手にするのだ。四人は才能溢れた隠れ術士だ。年長と思われる男と女の色を操る力は未知数だ。今、色の石を使わないことを思うと術士というより、都南のような剣士に近いのかもしれない。幸いなのは外で戦う紅や野江たちが、色の石を使う二人を引き付けてくれていることだ。二人は優れた術士であるが、子供が作り上げた土の壁の外で野江たちと戦うには、二人が集中して術を使い続ける必要がある。二人に義藤と戦う余裕は無い。油断して、野江たちがこの場に踏み込めば元も子もないからだ。義藤は外にいる野江たちを信じている。

「問題ない。一度に大きな力を使うことは野江たちも長けている。

俺は紅を守り、少しの間時間を稼ぐだけだ。歴代最強の陽緋と、優れた朱将都南や佐久がいる。俺は、彼らを信じている」

義藤は少しも焦る様子を見せず落ち着き払っていた。その落ち着きが悠真に不安を与えた。強いが優しい義藤が消えてしまうような不安だ。

赤い夜の戦い（3）

倒れた灯りが木屑に燃え移り、赤く小さな火が燃えていた。悠真が辺りを見渡すと、義藤が刀を抜き赤い羽織を翻して夜闇へ向かって駆け出した。

赤い夜の戦いの火蓋は切って落とされた。

暗い空間で、義藤の赤い羽織だけが鮮やかで、義藤が刀を抜いた。迎え撃つのは代表と思わる男だ。義藤は火の国で最も優れた剣士である都南との手合わせで、その剣術の力を証明していた。もし、相手が悠真ならば一瞬で斬り伏せられるだろう。しかし、相手の男の腕も確かであった。義藤の持つ刀のきらめきを、黒い服を着た敵は受け止めたのだ。腕力も男の方があるのかもしれない。相手の腕力で義藤の身体が半歩後ろに下がり、散らかった床の瓦礫が音を立てた。腕力では義藤は男に勝てない。それを感じたのか義藤は身を回転させ、男の背後に回りこんだ。腕力では負けていても、状況判断力と、応用力は義藤の方が数段上であった。背後に回りこんだ義藤は男の背中に刃を向けた。が、義藤は刀を回転させ柄を向けたのだ。一瞬の思考。

――！

悠真は声を押し殺した。義藤の行動を見てはつきりしたことがあるとすれば、彼が優しい人だということだ。この状況で、義藤は男の命を奪わないような行動をしたのだ。男の背中を柄で殴り、昏倒させようとしたのだ。

悠真は剣術に精通した人間ではないが、分かることもある。刀を身近に感じる火の国であれば、誰しもが知っていること。

――己を殺そうと挑んでくる相手に、相手を殺さぬように勝つことは難しい。

それは昼に紅が義藤たちに話したことと似ている。命を捨てて挑んでくる相手は強い。それと似ている。敵は義藤を殺そうとし、義藤

は敵を殺さずに捕らえようとしている。それはあまりに無謀なことだった。

義藤は優れた剣士だ。そして、敵の男も優れた剣士だ。その剣術の腕が、敵の男より義藤の方が上だとしても、死を覚悟して挑む男に勝てるほど大きな差ではない。それに、敵は男一人ではない。そして、これは昼のような紅の石の使用を禁止した戦いではなく、剣術に紅の石の力を加えて規則なしの殺し合いなのだ。

敵は男一人ではない。後の三人が戦いに加わる隙を探っていたのだ。青の石を使った優男は、仲間が負けるはずが無いと信じているのか少し後ろで傍観していた。黄の石を使った子供は戦いに加わりたいたと、うずうずしているようだったが、青の石を使った優男が止めていた。四人の敵の中の唯一の女が、ひらりと刀を抜いたかと思うと瞬く間に義藤に向かって刀を振り下ろした。

悠真の中で色が光を持ち始めていた。女が義藤に刀を振り下ろしたのは、義藤が敵の男を殺さずに捕らえようと背後に回ったときだ。優れた剣士である義藤は戦いに加わった女の存在に気づき、すぐに身を翻した。最初に義藤と刃を交えていた男は姿勢を立て直し、義藤と間合いを取った。義藤も女に刀で押し勝つと二人と間合いを取った。

「殺さない戦いに勝ち目は無いよ。それで紅を守るつもり？」

女が義藤に警告した。彼らは上から義藤を見ている。彼らは一人ではない。互いに互いを補い合い、そして一つの力を作り上げている。おそらく、悠真の村を破壊したきつかけとなる雨を降らせたのは優男と子供だ。上の二人は野江の侵入を阻んでいたに違いない。

「俺はあまり術に優れた者ではないが、それなりに鍛錬は積んできた。守護頭義藤を相手といえど、容易く負けはしない」

男は刀を構えた。義藤も刀を構え、答えた。

「俺は負けるわけにはいかない」

義藤の声は強かった。強い決意と信念が義藤にはあった。

三人は同時に駆け出した。敵の男と女は寸分乱れぬ動きで一つの

意志で刀を振るっているようであつた。それを迎える義藤も軽やかな動きと瞬時の判断能力に秀でて二人相手に遅れをとっていない。義藤の赤い羽織がはためき、倒れた灯りの炎が木屑を燃やす小さな灯りが、鮮やかに赤を照らしていた。刀と刀擦れあいで、小さな火花が散っていた。女が横に振りぬいた刀を義藤は屈んで交わし、男が振り下ろした刀を義藤は横に飛んで交わした。義藤も寸でのところで交わすから、赤い羽織が刀に斬られていた。一人と二人の戦いで互角であつた。まるで、舞っているように、遊んでいるように、三人は刀を振りぬいていた。

「いい加減、遊ぶの止めるよ」

言つたのは、黄の石を使つた子供だつた。三人は間合いを取つて動きを止めた。

「俺が加勢してやろうか？」

生意気に子供が言つと男は苦笑した。

「お前は外の術士を止めている」

言つと、義藤の相手をしていた男と女は色の石を取つた。

赤い夜の戦い（４）

当然ながら、男と女は術士である。二人は火の国の民らしく赤との相性が良い。術の力は優男や子供のほうが上だろうが、術の力は強さだけではない。色を引き出す力と、いつ、どのように、どんな力を使うのか応用力も必要となる。悠真は義藤が術を使うことを見たことがない。けれども、義藤が術を使う力にも秀でていることは分かっている。術と剣術を織り交ぜること、これが術士の戦いなのだ、と悠真は戦いを見守った。

女が紅の石を使った。紅の石は赤い力を凝縮させ刃となり宙に浮いたまま義藤を狙った。義藤の紅の石は色を弱らせている。だからかもしれないが、義藤は紅の石の力で生み出された赤の刃を身を回転させて交わした。義藤が交わすから赤の刃が紅の部屋の壁を破壊した。その隙に男が再び刀を振り上げた。義藤は刀で受け止め、はじき返すと、次の瞬間には女が紅の石で風を巻き起こしていた。強大な風はうねりを上げ、それは交わすには不可能な力であった。

「しかたない」

義藤の声が悠真には聞こえたような気がした。義藤の紅の石は赤い色を放ち、女が作り出した風を相殺した。義藤の持つ紅の石と義藤の一色に寸分の違いもない。赤と相性の良い義藤が己の一色と同じ色に加工された紅の石の力を引き出す。元来、術士としての才能にも長けている義藤の力は、悠真が見た野江の力に追いつこうとするものであった。圧倒的な陽緋の力にいずれは並ぶだろう存在。その理由が分かった。同時に、加工の技術の高さだ。紅が赤を与えた加工師柴。悠真は柴と出会ったことはないが、その技術の高さと人柄は加工された石から感じられる。

「憎たらしい力だぜ。これが朱護頭の力かよ」

黄の石を使った子供が悪態をついていた。黄の石を使った子供も野江と同じ、圧倒的な才能の持ち主だ。

「いつでも手を貸すよ」

青の石を使った優男が言った。佐久が出来るという青の石での水人形作りをやったのける、この優男の術を使う才能は確かだ。佐久と同じ色との相性の良さと器用さの持ち主だ。二人が術の戦いで参戦すれば、義藤は勝てない。

「下がっていなさい」

女が二人を一喝し、再び石を構えた。同時に男も石を取り出した。

男が不満そうに言った。

「お前たちは外に集中している。陽緋たちが侵入してこないようにな」

言うと、男と女は刀を構えた。

敵はいくつも石を持っていた。色も様々であり、紅の石はじゃらじゃらと音を立てるくらい沢山の数がある。暗い闇の中で紅の石を始め、色の石が、鮮やかに輝いている。基本的に紅の石しか使用しない義藤は圧倒的に不利であった。

男が持つ青の石が青い光を放つと、辺りを水が覆った。水が意志を持ったように動き、義藤を包み、義藤が紅の石を使うと、水の塊が内部から破裂し、義藤は開放された。義藤はとても優れた術士だ。赤い羽織の義藤と、黒服の敵は刀で切りあい、ところどころで石の力も交えていた。これが術士の戦いなのだと、悠真は目を奪われた。昼の都南と義藤の戦いは、石の力を使わない刀と刀の戦いだった。今は違う。刀と刀の衝撃の間に、間髪入れず術の力を織り交ぜていく。紅の石の赤い刃は敵を打ち抜く矢となり、紅の石の赤い盾は敵の刃を防ぐ防壁となる。一瞬の思考と判断。義藤は考えるよりも早く動いているようだった。

唯一の救いは、青の石を使って水の人形を作った優男と、黄の石を使った子供が参戦していないことだ。義藤に挑む時間は徐々に減り、どうやら外の戦いも激化しているようであった。紅は強い。紅が持つ鮮烈な赤色を悠真は知っているから、外のことはあまり心配

していなかった。

野江は強い。歴代最強の陽緋の力は本物だ。

都南は強い。術の力を使えず朱将となった力、義藤との手合わせで見た力は本物だ。

佐久は強い。身体を動かすことは極端に苦手だが、術の力は本物だ。

赤丸。己の存在を押し殺す赤色を持つ赤丸。優れた存在のはずだ。悠真の目の前で戦う義藤。努力を惜しまぬ天才の力は本物のはずだ。

刀が触れ合うと同時に、小さな火花が散った。義藤は一人で朱塗りの刀と鞘で立ち回っていた。四人の黒服の敵の目に悠真は入っていない。攻撃してこないのが証拠だろう。戦う義藤の赤い羽織が、まるで舞うようにはためく。高貴な赤がはためき、命がけの戦いなのに、とても美しい。とても美しいのは様々な色が輝き、彼らが優れた力を持っているからだ。

赤い夜の戦い（5）

悠真は長い間戦う彼らを見ていたような気がしたが、実際は長い時間ではないだろう。紅城にいるのは野江たちだけではないはずだ。建物の中にいる朱護たちが紅がいるはずの場所に駆けつけてこないつまり、戦いはきわどい均衡で保たれたまま長い時間を経ているということだ。義藤の赤い羽織は所々切れ、握り締めた悠真の手には汗がにじんでいた。悠真は敵に気づかれないように、必死に息を殺すことしか出来ない。

——なぜ、ここへ来たのか。

——己の無力さなど知っていたはずなのに、どうして復讐すると息巻いたのか。

後悔したところで遅い。義藤の足手まといにならないように、悠真は物音を立てず動かなかった。悠真の存在が、戦いの均衡を崩さないように必死に願った。木屑は燃え続けているが、さほど大きな炎となっていない。部屋に煙が満ち始め、悠真は口元を手で覆った。主に戦っているのは長である男と女の二人。二人の剣術は確かで、二人は義藤と対等に渡り合っていた。徐々に追い詰められる義藤。悠真は祈った。どうか、義藤が傷つかないようにと。どうか、義藤が無事に朝を迎え、赤の仲間と再会を出来るようにと。

直後、黒服の敵が放った紅の石の力が鋭い刃となり、悠真のすぐ近くと通り過ぎた。自分に命中するかと思つて、悠真は身を固めた。声を出さなかったのは、悠真の小さな勇気の結果。しかし、そのかわばりが小さな木屑を動かし、小さな木屑が木の破片を動かし、小さな音を立てた。とても小さな音。なのに、その音は黒服の敵が悠真の存在を知るのに十分な音だった。

女が義藤から悠真へと駆け出した。彼女は悠真を紅だと勘違いし

たのかもしれない。義藤が守る存在がここにいる。義藤が守るのは紅だけ。暗い場所、悠真と紅を間違えるのは当然のこと。悠真が紅と勘違いされている。

——義藤が自分を見捨てればいいのに。

悠真はそう思った。そうしなければ、悠真は確実に義藤の足手まといとなってしまう。それだけは避けたかった。

女が紅の石の力が目の前に迫り、悠真は死を覚悟した。死ねば、黄泉の国で祖父や惣次、顔も忘れた父と母に遭えると願ったのだ。しかし、悠真を守ったのは義藤の紅の石の力。義藤は悠真を守ったのだ。

想像通り悠真の存在が、戦いの均衡を崩した。女が駆け出し、一人になった男の助っ人なのか、咄嗟に義藤に飛び掛った子供が義藤の刀の前に倒れた。その隙に、女が紅の石でなく刀で悠真に斬りかかり、義藤は再び紅の石で悠真を守った。義藤が危険にさらされている。なのに、当然のように義藤は身を守っているのだ。そして悠真は感じたのだ。紅が赤の仲間たちに死なないでくれ、と伝えた言葉の真意を感じたのだ。自分のために誰かが傷つくことはとても辛いことだ。

黒服の敵はようやく見つけた紅の存在に焦っているのか、その紅が偽者だとも知らずに執拗に悠真を狙っていた。女だけでなく青の石を使っていた優男も敵は紅の石や他の色の石で悠真を狙い、その石の力を義藤の紅の石が防いでいる。強い石の力のぶつかり合いで周囲は崩壊し始め、物は眼下の地へと落ち、露になった紅の部屋の畳みがはがれ宙を舞った。香台も倒れ、簾が引きちぎられた。義藤の紅の石の力が、悠真を守り続け、義藤は悠真を守りながら、残った一人と刀を交えていた。風が舞い、赤い光が暴れる。暴れた赤の光は刃となり生き物のようにうなっていた。それは広大な海の荒波であり、村を襲う嵐であり、嵐の空に轟く雷鳴であり、すべての力の根源のように思えた。赤の仲間の足音はまだ聞こえない。助けはまだ来ない。

満たされる赤。
暴れる赤。

敵の石が色を失い砕けた。紅の石は無限に使用できない。限界に達したのだ。嵐の夜、惣次の石が砕けたのと同じことだが、黒服の敵はいくつもの石を持っている。砕けては次の石を使い、そして砕けては次の石を使う。それを繰り返し、必要以上に悠真の命を狙ってくる。紅の石の力を、悠真を守るために使っている義藤は、刀一本で敵と渡り合い、敵の紅の石の力を交わし、刀で攻撃を繰り返していた。義藤は紅の石の力を節約しながら戦っている。義藤の紅の石は色を弱めてしまっているから、義藤は慎重に石を使っているのだ。

もし、義藤が紅の石の力を節約することなく使えば、義藤は優位はもつと優位に戦えるかもしれない。危うい均衡ではなく、義藤の力で相手に勝てるかもしれない。

危うい均衡で保たれている戦いの終焉は一瞬のこと。義藤の生命線であった紅の石が限界に達し色を失ったのだ。

砕けた石は透明で、色を持たない。

義藤の持つ紅の石の色は弱っていた。紅が心配し、次の石を手渡すほどだ。火の国最高の加工師柴が加工した紅の石は悠真を守るための赤い力を発揮した後、限界に達した。黒服の敵はいくつもの石を使い壊している。義藤の石が限界に達するのは当然のこと、むしろ弱っている石がよくここまで持ちこたえたものだ。それは、義藤が節約しながら紅の石を使っていたことと、加工師柴の加工の腕が確かなことによるものだろう。

義藤の守りが無くなり、悠真の目の前に赤い光が迫った。悠真は、再度死を覚悟して強く目を閉じた。

赤い夜の戦い（6）

目を閉じれば、世界は暗くなる。なのに、赤い光だけは消えない。鮮烈な赤い光は、目を閉じたところで消えることは無い。赤は最も高貴で、最も強い色。命の息吹も赤。火の国では、赤い色を失えば命は存在しないとされている。だから、生き物の血は赤い。赤い魚は神の使い。炎は神の力。人々の生活は赤に守られ、赤に作られる。赤は高貴な色。今、悠真の目の前は赤い色で覆われている。

——小猿、わわらに染まれ！

赤く響くその声で悠真は現実に取り戻された。悠真の前に義藤が立ちただけ、紅が今日くれた予備の紅の石で悠真を守っている。しかし、悠真は色の違いにすぐに気づいた。義藤が放つ一色と予備の紅の石が放つ赤色が異なる。色が異なるから、紅の石が悲鳴をあげていた。歪が大きくなり軋轢となる。赤が悠真の肩を揺すった。

——小猿、わらわに染まれ！

赤の細く強い手が悠真の肩を掴んでいた。爪が肩の肉に食い込むほど、赤の力は強かった。

——小猿！

赤が悲痛な叫びを上げたとき、赤手が何かの強い力で跳ね返された。悠真は何が起こったのか分からなかった。義藤の予備の紅の石は限界に近い。義藤の強大な力に叶わず、紅の石が悲鳴をあげているのだ。加工の重要性を悠真はようやく理解した。加工とは、紅の石を強めることにもなるのだ。何かの力で跳ね返された赤は、瓦礫だらけの床に倒れた。赤は半身を起こして、叫び続けた。

——ふざけておるのか！一時的で良い。小猿を我が色に染めろ！
取り乱した赤が再び悠真の肩を掴んだが、何かの力で再び跳ね返された。赤は叫んだ。

——そちは、小猿のために義藤を殺すつもりか！
赤が誰に何を言っているのか、悠真は分からなかった。

——小猿を守るために、我が紅を守る力を殺すつもりか！義藤をこの場で死なせるつもりか！

赤は揺らりと立ち上がった。

——そちは、義藤のことをしっておるのか！そちは、わが紅のことを知っておるのか！

赤の姿は恐ろしいほどの影を持っていた。赤色の全ての力が放たれていた。

——そちは、そちの小猿のために、わらわの愛しい紅を危険にさらし、義藤を死なせるつもりか！義藤を、小猿を守るための盾とするつもりか！そもそも、小猿がここに来たのはそちに責がある。そちの小猿を守るために、なぜ義藤が死なねばならぬ！黙っておらずに何とか言ったらどうじゃ！

あまりの剣幕に悠真は圧倒された。赤は一体、誰に叫んでいるのだろうか。

——何か言ったらどうじゃ！小猿のために、義藤を殺すのか！

赤は悲痛に叫び、赤は涙を浮かべていた。そして、力尽きたかのように両手を床に着いた。

——よもや、そちが義藤を見殺すとは思わなんだ。そちが小猿を愛しく思うように、わらわも紅が愛しい。そちの身勝手な心のために、義藤が死ぬのか！

そして赤はけらけらと笑い始めた。

——そうか、そちは紅が死なぬから良いと思うておるのじゃな。死ぬのは、わらわが器にしておる色神でなく、ただの術士の義藤だから良いと思うておるのじゃな。そちは、なにも知らぬ！そちは何も知らぬ！忠義の名を持つ者の正体を何も知らぬ！だから、義藤を殺すのだ！

赤は狂ったように笑いながら、涙を浮かべていた。

——そちがそうするならば、わらわは小猿に手を貸さぬ。二度と、小猿に手を貸さぬ。好きにしろ。好きにしろ！

赤はゆらりと立ち上がり、色の合わぬ紅の石と使い悠真を守る義藤

に歩み寄った。優雅に着物を引きずりながら、散らかった床の上を歩くとそつと義藤の背中に手を当てた。

——すまぬ、義藤。本当にすまぬ。

そして、頬を義藤の背中に当てた。

——義藤、大きくなったな。わらわは、そちの両親の代わりに見ておった。わらわにとつて、そちは愛しい息子じゃ。ここで義藤を守れねば、わらわはそちの両親に顔を合わせられぬ。そちの父に何と申せばよいのじゃ？そちの母に何と謝れば良いのじゃ？義藤、すまぬ。義藤、すまぬ。力及ばぬわらわを許してくれ。小猿に興味を持ったわらわを許してくれ。必ず、紅はわらわが守る。二度と、醜き人間に紅を殺させたりせぬ。わらわが守ってみせる。

そして紅は義藤から離れた。

——わらわに、そちを救う力はない。わらわは紅を守って来る。それだけは、信じてくれ。

何度も、何度も赤は義藤に謝罪していた。その声は義藤に届かないというのに、謝り続けていた。その叫びは人間の母のようであった。

赤はゆらりと歩くと、ひたと悠真を見た。その目は悠真を通り過ぎた何かを見ていた。

——また、わらわを愚かな女じゃと思うておるのじゃな。わらわは愛しい者を守るのじゃ。人間とかかわり過ぎて、また傷つくのも己の宿命。それで良いのじゃ。あの時より、昔よりわらわは何も後悔しておらぬ。それで己が傷つこうと、何も後悔したことはあらぬ。せいぜい、小猿を守ってみるのじゃな。小猿を狙うはわらわだけにあらぬ。腹黒娘の黒も、利己的な男の白も、皆狙ってくるぞ。そち一人で守ってみるのじゃな。わらわが力を貸すと思うでないぞ。その赤い目は無感情で、全てを諦めているようであった。すつと赤は姿を消した。

悠真は叫ぶ赤の姿に何も出来なかった。優雅で、高圧的な赤が悲痛に叫ぶの意外で、信じられなかった。高圧的な赤が愛に満ちているように思えるのだ。

赤い夜の戦い（6）（後書き）

次話より少し血生臭くなります。苦手な方はご注意ください。

赤い夜の戦い（7）（前書き）

この話より少し血生臭くなります。苦手な方はご注意ください。

赤い夜の戦い（7）

敵は三人がかりで紅の石を使い義藤を狙っていた。義藤は急ごしらえの紅の石で応戦していた。しかし、義藤の持つ一色と紅の石の色に徐々に歪が生じ、義藤が一步後ろに押されていた。

「小猿、伏せてろ」

義藤が振り返り言った。それでも悠真は動けない。諦めたのか、義藤は前に向きなおした。すると最後の力を振り絞るように義藤は力を強め、紅の石は合わない色を注がれて悲鳴を上げていた。色を失うまで残り時間は少ない。義藤が前に紅の石を押し出した。三人の敵が一步後ろに下がったとき、義藤は相手の色に打ち勝ち同時に、紅の石は色を失った。

赤が消えた一瞬の間。

辺りは暗闇に戻った。しかし、三人の敵は同時に紅の石を使い、世界は再び赤に戻った。

何も出来ない悠真の身体を何かが強く突き飛ばした。衝撃が襲ったが、強い痛みは無い。目を開くと、赤い羽織の義藤が悠真を突き飛ばしていた。赤の刃は先ほどまで悠真がいたところを刺し抜き、三人の敵は同時に悠真に向かって駆け出した。

義藤は慌てて身体を起こしたが、直後、黒服の敵の刀に倒れた。肩口を刀で貫かれ、腹の辺りを横に切り裂かれた。それは悠真を守る盾となったためによるものだった。

――赤

――赤

――赤

目の前に赤が飛び散った。全ての生き物が持つ赤。義藤も例外なく赤を持つている。義藤の赤い血が、悠真の頬に飛び散った。

「義藤……」

悠真は絶句した。義藤は強い存在だ。その義藤が倒れることが想像できなかった。しかし、傷を負えば誰でも倒れる。

義藤は糸の切れた人形のように音も立てず床に倒れた。床に手を着く悠真の手に生温かく粘度のあるものが触れた。独特の臭い。嫌な臭い。

崩れ落ちる義藤を見ても、悠真は何も出来ない。全ての責任は悠真にある。悠真が一緒に来なければ、義藤は自分を守るためだけに戦えた。他人を守ることはとても難しいこと。悠真が来なければ、義藤は都南たちが援守に来るまで、持ちこたえることが出来たはずだ。悠真が来なければ、義藤が負けることは無かった。義藤を助けるように叫ぶ赤の姿が脳裏に浮かんた。義藤の無事を願う紅の姿が脳裏に浮かんた。都南の姿が、佐久の姿が、そして野江の姿が次々と悠真の脳裏に浮かんでは消えていくのだ。彼らは悠真に何と言うだろうか。未来ある実力者を悠真が殺したのだ。彼らに責められることよりも、強いが優しい義藤が死んでしまうことが辛かった。

紅を守りたい、と笑う義藤。

強くなりたいと都南と手合わせをする義藤。

悠真を気遣い話しかける義藤。

良い奴義藤。

赤が守りたいと叫んだ義藤。

そして、悠真を守るために盾となった義藤。

悠真は義藤に生きて欲しかった。もう一度、笑って欲しかった。一緒にいて欲しかった。

——力を……

悠真は願った。惣次の紅の石に助けを求めた。なのに、紅の石は反応しない。赤の姿は見えない。義藤は崩れ落ち、畳がはがれ、板の間が露になった床に血が流れ出していく。赤は美しい色。なのに、少しも美しいと思えない。赤い色は残酷で、恐ろしい色だ。

「義藤……」

悠真は何も出来なかった。ただ、義藤の名を呼ぶことしか出来なかった。

「義藤、義藤！」

悠真は這って義藤に近づくと、彼にすがった。全てが嘘であって欲しかった。悠真の胸から様々な感情が込み上げた。男が泣くのは情けない。祖父は言っていたが、悠真の涙は止まらなかった。抜き身の刃のようで、とても優しい義藤。義藤が負けたのは、悠真のため。その現実が辛かった。

「義藤！」

悠真は叫んだ。義藤が目覚めることを願って叫んだ。誰かに助けを求めた。嵐の夜、に助けを求めたのと同じこと。悠真は助けて欲しかった。それは、自分の命を助けて欲しいのではなく、義藤の命を助けて欲しかった。きつと、田舎者の小猿の悠真より義藤の方が火の国に必要とされていると思うから。この火の国の平和を守るには、悠真が愛した故郷の数少ない生き残りの人たちを守るのは、悠真でなく義藤だから。

「逃げるぞ」

黒服の敵が言った。一人が倒れた仲間を抱え、一人が悠真を義藤から引き離し、力無い義藤を抱えた。そして一人は悠真を捕らえた。

「離せよ！」

悠真は身をよじらせた。悠真は特別に訓練を受けたわけでない。義藤と互角以上に戦った敵に悠真が敵うはずが無く、悠真は懷に拳を叩き込まれ意識を失った。

——義藤……

意識を手放すその瞬間まで、悠真は義藤を思った。

赤の謝罪（１）

振動が身体に響く。馬の足音も聞こえるのに、辺りは暗い。敵に捕らわれ、どうなってしまったのか。悠真は現状を把握しようと目を開いたが、辺りは闇が深く何も見えない。

「義藤」

悠真は目を開いた。今の状況がつかめなかった。それでも義藤の名を開口一番に口にしたのは、贖罪の念によるものだ。両手を後ろに縛られ、足も自由が利かない。もがきながら身体を起こすと、暗闇になった悠真の目は力なく倒れた義藤の姿をとらえた。義藤の傷は乱暴に縛られ、手当を受けているようだったが、きちんとした手当てでない。少しの間、命を繋ぎとめるための手当でだ。

「義藤」

悠真は義藤の名を呼んだ。しかし、義藤は動かない。

「義藤」

近くで見ると、かすかに義藤の胸が動いていた。何とか生きている。そういう状態だ。

悠真は義藤が生きていることに胸をなでおろした。同時に悠真の目に涙が浮かんた。どうして、義藤を残してくれなかったのか。生きていれば、紅城で紅たちが助けてくれるはずだ。きっと紅たちは流の国から白の石を輸入しているはずだから、白の石で義藤を助けてくれるはずだ。なのに義藤はここにいる。ここに在る限り、義藤は助からない。

悠真は記憶をたどった。悠真と義藤は敵の手の中にある。悠真と義藤は木造の箱のような部屋に入れられ、隙間から外を見ると、舗装されていない道を動いている。馬に引かせているのだ。この先、悠真と倒れた義藤に待っているのは絶望だけだ。

「なあ、千夏、秋幸。本当にあれは紅なのか？」

声が響き、悠真は壁に耳をくっつけた。それは、敵の声。長と思わ

れる男の声だろう。千夏、秋幸と言うから、それは残りの敵の名の
はずだ。

「義藤が守るんだ。紅に違いないよ」

もう一つの声が響いた。それは、青の石を使った優男の声。

「それにしても、危なかったね。義藤の石が砕けなければ、負けて
いたでしょ。たった一人で、私たち四人の相手をするんだから。次
に戦ったときは勝ち目がないだろうね。さすがとも言うべき力ね」
女の声も混じっていた。黒服の敵は、義藤が守る悠真を、紅だと勘
違いしたのだ。紅の容姿は誰も知らない。だから、義藤が守るか否
か。それが判断材料となる。義藤が身を呈して守った。だから、悠
真は紅と勘違いされたのだ。長と思われる男が言った。

「義藤は噂以上の存在だ」

それにかけて、青の石を使った優男の声がした。

「それで、千夏。冬彦の様子は？」

一人の男が言った。それは、青の石を使った優男の声だ。声から若
さが伝わってきた。

「秋幸、大丈夫よ。気を失っているけれど、すぐに元気になる。義
藤は優しいから、殺したりしない」

唯一の女が言った。つまり、秋幸とは優男の名だ。ならば、女が千
夏。悠真は敵を探った。冬彦の心配をするということは、黄の石を
使った子供が冬彦だ。

「それにしても、秋幸、千夏。紅とは小猿みたいだったな。色神が
小猿だったとは。無力で、きいきいと騒ぎ立てる。あれが紅だと知
れば、民は愕然とするだろうな」

男が言い、小さく笑っていた。

「春市、紅の石は奪ったんだろ？」

秋幸と呼ばれた男が言った。若い声だ。

「問題ない、秋幸。暴れられてたまるか。それでも、あの状態で石
を使わなかったんだ。使うつもりはないんだだろうがな」

悠真は必死に辺りを探った。敵は四人。出てきた名前を整理すると、

春市、千夏、秋幸、冬彦。まるで兄弟のような関係。悠真はもぞもぞと身体を動かし、義藤の近くへと移動した。黒服の敵に悟られないように小さな声で、それでも義藤の名を呼んだ。

「義藤、義藤」

悠真はどうして良いのか分からず、義藤の名を呼んだ。助けてもらいたいと思うのは間違っている。悠真が義藤を助けなくてはならない。それでも、悠真は誰かにすがりたかった。義藤の近くは濃厚な血の臭いが漂い、悠真は吐き気を覚えた。高貴で優美な赤がもつ、残虐な一面。

悠真が義藤を傷つけた。悠真が義藤を苦しめている。その罪から、悠真は義藤の名を呼び、謝るしかできなかった。

赤の謝罪（２）

どうして、こんなことになったのだろう。全ては紅たちの忠告を無視したための結果だ。野江は悠真が紅城へ足を運ぶことに反対していた。それを押し切ったのは悠真だ。紅は悠真が義藤と一緒に行くことに反対していた。それを押し切ったのも悠真だ。全て、悠真自身の意思で判断し、悠真の責任で決断した。全ての責任は悠真にある。この状況を作り出したのは悠真だ。

――復讐するため

その言葉で、悠真は忠告を無視し、結果、悠真を守るために、義藤は倒れた。自業自得と言えば容易い。けれども、そんな言葉では片付けられないほどの罪が悠真にはあった。泣きたいほど辛くて、自分の感情を抑えられなかった。

「義藤……」

何度その名を呼んだらう。自分の感情を整理するため、自分を奮い立たせるため、ひたすらに義藤の名を呼んだ。義藤の第一印象は最悪だった。けれども今は違う。義藤は紅を守るため強さを願い、その才能に甘んじることなく努力を続けた存在なのだ。一直線に、愚直に、義藤は生きていたのだ。その一直線さを恐ろしく感じたのは昼のこと。その抜き身の刃のような顔を嫌ったのは昼のこと。その一直線さを尊敬したのは強い決意を聞いた後。その抜き身の刃のような、作り物のような顔に親しみを覚えたのは悠真を氣遣って話しかけてくれた時。佐久は言っていた。悠真と義藤はきっと仲良くなれると。その時、悠真が義藤の優しさに気づかなかったのは、悠真があまりに子供だからだ。

悠真を守ろうとしてくれた義藤。村が滅びたことに頭を下げてくれた義藤。野江たちを優れた人だと称した義藤。彼は憎むべき人ではない。抜き身の刃のようで、それでいて優しく温かい。それが、義藤。そんな義藤が命を失うことが恐ろしかった。

「義藤」

悠真は義藤にすがった。両手と両足を縛られ、芋虫のように這いずり回っても、義藤から離れたくなかった。彼は死んで良い人ではない。紅が信頼しているから。赤の仲間が必要としているから。そして、悠真の友となってくれるはずだから。その思いはあるのに、無力な悠真は何も出来ないのだ。

「……落ち着け」

搾り出すような声が悠真の胸に響いた。その声は苦しみも含んでいなければ、後悔も含んでいなかった。ただ、優しく、ただ穏やかだった。

「義藤！」

悠真は義藤を見た。暗がりの中で義藤の目は開いていた。額には汗が浮かび、暗い中でも分かるほど義藤の顔色は悪い。白い唇が小さく震え、言葉を刻んだ。

「……落ち着け。仲間を信じろ」

義藤は小さく笑った。分からなかった。どうして、こんな状況で他人のことを心配できるのか。その笑顔が辛くて、痛くて、悠真はどうすれば良いのか分からず、誰でも良いから助けて欲しかった。悠真は自分でも驚くほど幼稚で、自分でも驚くほど無力だったのだ。

「ごめん、ごめん、義藤」

悠真は言った。自然と涙がこぼれた。

「大丈夫だ、自分を信じろ。お前は強い」

義藤は小さな笑顔を浮かべていた。悠真を安心させるように、落ち着かせるように、笑ったその顔は悠真を追い込んだ。悠真の罪は明らかなのに、それを義藤が否定してくれているから。

悠真は何度も、何度も謝罪した。謝罪したところで、義藤に届くか分からない。それに、謝罪しなくても、義藤は許してくれるはずなのだ。義藤とはそういう人だから。つまり、悠真は自分の心を許すために謝罪を続けているのだ。ふと、悠真の頭を何かが撫でた。慌てて顔を上げれば、義藤の冷たくなつた手が悠真の頭を撫でてい

た。

「怪我は無いか？」

小さく吐き出したその言葉が、悠真をさらに追い込んだ。怪我をしているのは義藤の方で、義藤は悠真を守ったのだ。

「なんで、そんな心配するんだよ。義藤の方が……」

悠真が言つと、義藤はそつと悠真の頭を叩いた。

「術士が人を守れぬとなれば、紅の顔に泥を塗ることになるだろ」
弱く、咳き込みながら言う義藤の顔を悠真が覗きこむと、その目は柔らかく優しくかった。当然のように悠真を気遣い、当然のように悠真を守る。義藤の言葉に悠真は涙が止まらなかった。

赤の謝罪（3）

悠真はこれからどうすればよいのか、皆目検討がつかなかった。

無力な田舎者の小猿は、泣き喚くだけで何の力も持っていない。義藤の色は今にも消えそうであつた。

「義藤」

悠真は義藤の名を呼ぶことしか出来なかった。そんな時、悠真の世界は赤に満たされた。赤を見ると、悠真は先ほどの、赤の叫びを思い出すのだ。義藤を助けたいと、叫ぶ赤の声が、今でも耳に残っている。

——義藤。

赤は狭い箱の中に現れると、そつと膝を折り義藤の頬に触れた。

——義藤、何も案ずるな。

赤は微笑むと、そつと義藤に語りかけた。

——忠藤は母に似ておるが、義藤は父に似ておる。双子でも異なるものじゃな。案ずるな。紅がそちを見捨てることはない。案ずるな。わらわが、そちを死なせたりせぬ。

悠真は赤の横顔を見つめていた。なぜ、赤が義藤にこだわるのか悠真には分からない。赤が色神でない吉藤にこだわることは分からなかった。義藤に赤の姿は見えていないらしく、義藤の目は空虚に空を見つめ続けるだけだ。

「赤」

悠真は赤の名を呼んだが、赤は悠真に目もくれず義藤を見つめていた。

——義藤、すまぬ。わらわが下らぬ小猿に興味を示したために、そちを傷つけることになってしまった。案ずるな。紅がそちを助けに来る。わらわも義藤を見捨てたりせぬ。

赤が悠真を否定しそのまま消えた。これまで赤は悠真を気にかけてくれていた。悠真に「染まれ」といいながら、様々なことを教えて

くれていた。しかし、今、悠真は赤に見捨てられた。赤が義藤に謝罪した理由は、赤が悠真に気をかけたため義藤が傷を負ったから。そう気づいたとき、悠真は赤の言葉を思い出した。

（小猿を守る理由はない）

悠真が赤の利とならない限り、赤が悠真に助力する必要はない。赤は彼女自身の色のために紅を守り、悠真に手助けをしているだけなのだから。けれども、赤が義藤を気に掛けるのは、紅のためだけではないように思えたのだ。赤は紅のためという理由でなく、義藤を思っているように感じるのだ。だから、こうやって姿を見せる。

悠真は赤に見捨てられてしまった。その理由は明らかだ。あの時、義藤が四人の敵と戦ったとき、赤は悠真に色を貸してくれようとしてくれた。だから悠真は、紅の石を使えるはずだったのだ。赤が色を貸してくれて、悠真が赤になれば、悠真は惣次の石を使った。義藤が傷つく必要もなかった。悠真が義藤が傷つく理由を作り、悠真が赤の力を使えなかったから義藤は傷ついた。つまり、すべて悠真の責任なのだ。

なぜ、悠真は赤の力を使うことが出来なかったのか。何に赤は拒絶されたのか。悠真は自分がどんな状況にあるのか分からなかった。何も分からず、赤に見放され、悠真はどうすれば分からなかった。都のことも、官府のことも何も分からない。政治とか、外交とか、術士とか、田舎者の悠真は何も分からない。けれども、この状況で義藤に助けを求めることは間違っている。

「ただ……」

悠真が義藤の顔を見ていると、義藤が小さく口を動かして何かを呟いた。義藤の意識は朦朧としているのか、義藤の目は空を見ている。「ただ？」

悠真は義藤が何を話そうとしているのか、義藤の白い唇に耳を寄せた。義藤は空を見つめたまま、独り言のように続けた。

「忠藤……」

義藤は死んだ兄を呼んでいたのだ。義藤の兄「忠藤」は死んでいるのに、義藤の目には死んだ忠藤の姿が見えているようであった。

「忠藤。どうしてここにいるんだ？俺を許してくれるのか？十年前、母を受け入れた忠藤を否定した俺を。あの時、忠藤は何かを言おうとしていたのに、あの時俺は忠藤の力になれたかもしれないのに。俺が忠藤を見捨てたようなものなのに。忠藤。すまなかった。本当に、すまなかった」

義藤は空を見たまま続けた。

「許してくれるのか。ありがとう、許してくれるのか。ありがとう」空を凝視した義藤の口元は微かに笑っていた。義藤の目には、何かが確かに見えているのだ。

「それより、今まで、何していたんだよ。十年も、何をしていたんだよ。今頃姿見せて……」

そう言うと、義藤は何もない空に血で赤く汚れた手を伸ばした。悠真はいたたまれなくて、その手を取りたかったが、両手足を縛られた芋虫のような悠真は何も出来ない。

「紅は無事なのか？そうか、良かった。紅は無事なんだな。良かった」

義藤が何を見ているのか分からない。悠真は何かを見ている義藤の姿を見ていることが辛かった。

「俺は大丈夫だから、忠藤は紅の近くにいろよ。俺は……俺は大丈夫だから」

大丈夫でない。悠真は思った。義藤は少しも大丈夫でない。濃厚な血の匂いが、震える白い唇が、少しも大丈夫でないことを示していた。しかし、義藤は大丈夫だという。それは、義藤が強いからだ。

「覚えているか？昔の約束を。忠藤と俺の二人で、あの子を守るって。そんな約束。俺が大丈夫だから、俺を気にかけるな。俺を……」義藤が笑うと、上げていた義藤の手は糸が切れたように地に落ちた。まるで、張り詰めていた糸が切れたようだった。

義藤は深く息を吐き、ゆっくりと目を閉じた。義藤は息をしている。大丈夫。悠真は覚悟を決めた。悠真に覚悟を決めさせたのは、義藤の姿だった。義藤の態度が、義藤の言葉が、義藤の覚悟が、悠真に覚悟を決めさせた。義藤の心を悠真は垣間見たような気がしたのだ。義藤は優しい人だ。そして、強がっているだけなのだ。ここまで来たのは、悠真の意志。決意。下がれない。義藤を助け、紅の命を狙う正体突き止め、村を壊滅に追い込み、祖父と惣次を殺した犯人を突き止めるまで、悠真は逃げない。

赤の敵（１）

悠真たちを乗せた馬車は、しばらく走り、止まった。

田舎者の悠真には、ここがどこ出るのか知る余地も無い。ただ、一度止まり、再び動き始めたことは分かった。扉が開いたのは、それからすぐ後のことだった。悠真は敵の陣中に連れてこられたのだ。「降りろ」

後部の木の扉が開けられ、悠真に命じたのは顔の半分を黒い布で覆った男だった。声からすると、春市のような人だった。

「千夏、紅を連れて行け。秋幸は冬彦を連れて行け。俺は義藤を連れて行く」

名と呼び方から彼は兄弟だろう。一人の男が前へ行った。おそらく、それが秋幸。様々な色と相性が良い実力者。そして、女性と思われる一人が悠真の足を縛った縄を切り、悠真を立たせた。彼女が千夏。悠真は身じろいだ。ここまで来たら、抵抗できるだけしなければならぬ。行動しなければ、好機に恵まれることもない。好機を待つだけではいけない。好機は自ら掴むものだ。昨日、野江に飛びかかったから悠真は紅城へ足を運ぶことが出来た。そして、形は違っても復讐する相手を見つけたのだ。

千夏が女性だからという考えが悠真にはあったが、それが間違いである。すぐに教えられた。身をよじり暴れようとした悠真の腕を千夏が締め上げた。腕の骨が軋んで音を立て、痛みで悠真は呻いた。「どこまでも愚かな小猿ね。これ以上は無駄なことよ」

すると、千夏は悠真の耳元に口を寄せ、小さく囁いた。

「義藤を助きたいのなら、おとなしくしていなさい」

それは意外な言葉であった。彼らにとって義藤は敵だ。敵だから義藤の命を狙うし、悠真の命を狙う。けれども、彼らは義藤を助ける

ような発言をしたのだ。その言葉を信じたわけでないが、悠真はなされるがままにしていた。諦めるわけにはいかない。千夏は義藤を助けるような言葉を口にしたが、それを鵜呑みにすることも出来ない。だから悠真は機を逃さないように、この場所はどこなのか知るために、全身でこの場の空気を探り辺りを見渡した。三人に命じた男――おそらく春市と思われる男が、軽々と義藤を抱えた。

悠真は引きずられるように歩いた。義藤を抱えた男、黒い服を来た仲間を抱える男、そして悠真を引きずるように歩く女性。彼らが紅を殺そうとした犯人だ。それでも、彼らだけでそれを成し遂げたとは思いがたい。官府が犯人だと紅たちは話していた。官府とは、実質的な政治を行う役所であり、紅と対等に渡り合う存在。ならば、政治的に強い権力を持つ立場にある者が犯人だ。おそらく官府の人間「官吏」だ。官吏は一般雇用と血統雇用の二種類が存在する。一般雇用は悠真のおよような民間人が学を得て、官吏になるための試験を経る道のり。血統雇用は血筋で雇用される。親が権力者である場合、子供にはその地位が約束されるのだ。この豪邸を見る限り、おそらく敵は後者だ。紅の暗殺という難題が彼ら四人だけでそれがなせるとは思えず、同時に目の前に経つ豪邸が彼ら四人の家だとは思えない。様々な色の石が、彼ら四人の所有物だとは思えない。色の石は容易く手に入れることはできない。紅の石は紅が一日一つ生み出す希少な石。今の紅の生み出した石は、紅の監視下にあるから容易く使用することは出来ない。つまり、彼らが持っているのは先代以前の石だ。今の紅が十年だから、十年前から紅の石を持っているということだ。そして異色の石を手に入れるのは更に難しい。火の国は鎖国状態だから、異色の石を手に入れるのは独自の道が必要なのだ。四人の隠れ術士を雇っている官吏は、強大な力を持った存在だ。権力という力に溺れた存在だ。

突然、彼らは足を止め、地に膝をついた。悠真も地に倒され、無

理やり頭を下げさせられた。砂利が頬に食い込み、悠真は横目で辺りを探った。来るのだ。四人の隠れ術士を雇っている赤の敵が来るのだ。

「紅を捕らえました」

春市が言った。広い庭園には松明が燃え、庭を照らす。悠真は目線だけを必死に動かして、相手の顔を見ようとしたが、見えるのは高価そうな着物の裾だけ。けれども、着物の柄から相手が年配であることが分かった。

「して、春市。誰が紅だと？」

年配の男は黒服の四人の頭のように、四人に命じているのはこの男だ。

この男が赤の敵だ。

赤の敵（２）

敵の本大将とも呼べる官吏は紅の姿を探していた。もちろん、悠真は紅ではない。もし、官吏が紅の真の姿を知らなければ悠真は紅といて殺されるかもしれないし、敵が紅の真の姿を知っていれば悠真は偽者として殺されるかもしれない。結局のところ、人質となった悠真に残された道は「死」のみであった。そして願うことは、どうか義藤に無事であつて欲しいということだ。

官吏に紅は誰だ、と問われて千夏が悠真を押し付ける腕の力が強まった。

「千夏が連れています」

義藤を抱えていた春市が言った。

「誰だ、こいつは……こいつが紅だと？品位の欠片もない小猿が紅だと？お前ら兄弟はこいつが紅だと思つたのか？愚か者め！」

悠真は息を吞んだ。やはり、敵はかなりの高官だ。紅の姿を知っていて、悠真が偽者であることに気づいている。自分が偽者だと知られて息を吞んだ悠真であつたが、息を吞んだのは悠真だけでなかった。隠れ術士たちも息を吞んだのだろう。悠真の頭を押さえつけていた千夏の手の力が緩んだ。悠真は身体をよじつて、相手の顔を見上げた。四人に命じた男は年配の高貴そうな男だ。ふくよかな身体は男が権力を持つ立場であることを示していた。そして、悠真は年配の官吏の一角を見た。不思議なことに、臆病者の色であつた。

臆病者の色は高圧的な年配官吏の見た目とそぐわない色であつた。しかし、色は嘘をつかない。悠真は色を見た。

年配の男は悠真の顔を見ると激昂し、春市の胸倉をつかんだ。

「愚か者め！誰が紅だと！」

男は春市の胸倉をつかんで投げ飛ばした。不思議なことに、春市は抵抗しなかった。義藤と対等に戦う隠れ術士だ。年配官吏を押さえつけることぐらい容易いはずだ。容易いはずなのに春市は少しの抵

抗もしない。それは悠真を押さえつける千夏も同じで、冬彦を抱える秋幸も同じであった。何もしない一方、千夏は紅の石に手を伸ばしている。千夏が春市を助けたいと願っているのは事実で、己の怒りを押し殺しているのも事実であった。

「紅は小娘だ。お前ら、何をしに行ったんだ！」

官吏は倒れた春市を蹴った。何度も、何度も蹴っていたが、春市は抵抗しなかった。他の兄弟たちも春市を助けようとしなかった。十数回、官吏は春市を蹴り続け、彼自身の息が上がった頃、動きを止めた。

官吏は倒れた義藤を見ると言った。

「赤い羽織か……それは、義藤だな。紅が真を置くとする朱護頭。調べたが、出生もはつきりしない者だ。どこの馬の骨とも分からぬ存在。そのような者に赤を与える紅の愚かさが片腹痛いわ。して、なぜ殺さない？すでに義藤は不要な存在だ。殺して、首を紅に届けてやれ」

官吏は言った。義藤は以前隠れ術士であった。戸籍を持たず、山に隠されて育った。もちろん、その出生は秘密に包まれている。戸籍を遠次や惣次が用意したところで、出生への疑問は権力者なら気づくだろう。赤の仲間たちは、そのことに対して何も言わない。もちろん紅も同様だ。赤の仲間たちは義藤の生まれではなく、義藤自身の人となりを見ているのだ。だから何も気にしていない。義藤が紅を守ろうとする気持ちは本物で、義藤の優しさは本物だから。官吏の男は違う。義藤の生まれだけを見ているのだ。

（義藤のこと、何も知らないくせに）

悠真はそう思った。義藤は良い奴だ。今なら断言できる。義藤の優しさの強さも知っているから。

春市は身体を起こし、言った。春市の口は切れ、赤い血が流れていた。

「義藤が身体を張って守ったのが、この子供です。義藤は紅を守る。だから、これが紅だと。それに、義藤は優れた男です。生まれは定

かではないかもしれませんが、実力は本物です。ここで殺すには惜しいかと。義藤は赤い羽織を着ている、紅が信賴している男ですから。朱護頭という、実力だけで手にした地位は本物です」

地に頭をなすりつけ、春市は義藤の命乞いをしているようだった。

春市は義藤の敵なのに、義藤の命乞いをする。信じられない行為だ。官吏は春市たちを見下ろして言った。

「なるほど、確かに義藤は紅が信賴する男だ。万一、こちらのこと
が紅に感づかれたとき、役立つかもしれない。それで、こちらの足
取りはつかまれていないだろうな」

男は春市に問うた。

「はい。万事ご心配なく」

春市は男に返答し、そして言った。

「一つ、申し上げたいことがあります。義藤との戦いで冬彦が負傷
しました。どうか、冬彦に休みを与えてください」

男は言った。

「愛情深い義兄弟だな。覚えておけ、次に失態を犯すようならば、
奴らより先に兄弟の死に目を見るかもしれないぞ」

春市をはじめとし、千夏、秋幸も深く頭を下げた。

「二人は牢に入れておけ」

男は四人に命じた。

赤の敵（3）

春市は義藤を抱え、千夏は悠真を引きずりながら進んだ。悠真はもがこうと身体をねじらせるが、その瞬間に千夏に押さえつけられてしまうのだ。丁寧に入入れされた庭園を抜け、悠真は建物の並ぶ回廊へと連れて行かれた。

冬彦を抱えた秋幸は、早々と立ち去った。傷ついた冬彦の手当てに向かうのだろう。

回廊の中の一つの建物に悠真を連れ入れられた。豪勢な屋敷の中は、紅城と同じように畳が敷き詰められていた。畳みが並ぶ豪勢さは、紅城と異なり冷たさを持っていた。冷たく感じるのは、この豪邸に赤い色が無いからだ。紅城を満たしていた鮮烈な赤は、強さと温かさを持っていた。この空虚な豪邸には色がなく、果てしなく広がる静けさがあった。悠真の背筋に汗が流れるのは、囚人となった恐怖ではない。色がない虚無の豪邸に、恐ろしさを感じたのだ。ここは田舎の自然とも紅城の輝きとも違う場所。君が悪いというのが正直な感想だ。

悠真は千夏に引きずられながら段を上がり、外廊下を通り、一つの小部屋に入った。小部屋の奥には隠し階段があり、床から階段が引き出された。春市は灯りに火をつけ、階段を地下へと下り始めた。背中に義藤を背負った春市は、少しも重そうに振舞うことは無かった。都南に比べ細身である義藤も、一人の大人の男だ。背も比較的高いから、重さはそれなりにあるはずだから、春市の力はかなりなものだ。術士より都南に近い存在だ。

春市は丁寧に義藤を扱っている。意識のない義藤が乱暴に扱われないことに、悠真はひとまず胸をなでおろした。もちろん、千夏に

連れられた悠真も一緒に降りた。地下室は階段の部分だけ木造りの壁であるが、地下に入ると石造りへと変わった。石造りの壁の地下室はとても湿度が高く、天井に空気口があるが、上には建物が立っている。天井を見上げて見えるのは床下だ。どうやってこのような穴を掘ったのか分からない。黄の石の力を使えば容易いものかもしれない。それさえも石の力の使い方だ。

春市が鍵を出し、牢を開けた。四畳半ほどの狭い牢の中には簡易の厠と、ござが敷かれていた。冷たさが先に立つ狭く暗い牢獄だ。

義藤を丁寧に扱う春市はござの上に義藤を寝かせると、義藤の赤い羽織を脱がせた。少し色の白い義藤の肌は彼の血で赤く染まり、傷を縛った布も血で汚れていた。

「千夏、手を貸せ」

春市が言くと、千夏は悠真を牢の隅に押しやった。春市と千夏の二人は、悠真を縛り上げるようなことはしなかった。悠真は両手を縛られたが、それ以上の拘束をされず、彼らは悠真が無力な小猿であることに気づいているようだった。悠真は無力だ。その無力さは誰よりも悠真自身が知っている。

「変な真似しないようにね」

悠真は千夏に威圧され、身を縮めた。もちろん、悠真は何も出来ない。千夏は義藤を囲むように、春市の向かいに座った。

「義藤に手を出すな」

悠真は二人に言った。勇気を振り絞った声は情けないことに震えていた。義藤は悠真のことを最優先に守ってくれた。その身をかえりみず悠真を守り、その結果今に至るのだ。そんな義藤は今、意識を失ったまま敵に囲まれている。悠真は義藤が二人に殺されてしまうと思ったのだ。

——このままでいいのか？

——どうするんだ？

——どうしたいんだ？

悠真は自分自身に問うた。このまま、義藤が殺されてしまったとして、己を許すことが出来るのか。その責を負ったまま、生きていくことが出来るのか。それは、故郷が滅びて一人で生きていくことよりも辛いこと。義藤が優しい人で、誰からも必要とされていると知っているからこそ、なおのこと己を許すことが出来ない。悠真は、義藤を守ろうと叫んだ赤の姿を思い出した。叫んで、叫んで、叫んで、赤は義藤のことを助けようとした。それでも助けられぬと赤は己を責めていた。

赤は色神だから、人の世に関わることはあまり出来ない。出来るのは、己の器を選び色の石を生み出させるだけ。その石を人間に使わせて国を繁栄させるだけ。しかし、赤は義藤のために叫んでいた。手が触れないなら声を。声が届かぬなら祈りを。赤は義藤にささげていた。

——己はどうだ？

悠真には手がある。足がある。声がある。人の世に存在する肉体がある。赤と違い、身体があるのに悠真は何も出来ない。いや、何もしようとしていないのだ。

——行け。

悠真は自分自身に命じた。己の全てをぶつけろ、と悠真は命じた。

赤の敵（４）

身を乗り出し、義藤の前に立ちはだかった。それが悠真の精一杯の抵抗だった。悠真の両手は縛られ自由が利かない。義藤は悠真を身を呈して守ってくれた。傷の痛みを恐れず、命を失うことを恐れず、会ったばかりの悠真を守ってくれた。それは悠真が惣次の知り合いだからなのかもしれない。けれども、悠真はそれだけでないと感じていた。

義藤はとても優しい人なのだ。千夏も、義藤は優しいから殺したりしない。と言っていた。義藤は冬彦の命を奪わなかった。強いけれど、優しい。抜き身の刃のようで、その刃は命を奪うことをしない。それに、春市と最初に刃を交えたとき、義藤は春市を殺さないように戦っていた。義藤は優しい人だ。強いが優しい人だ。悠真はそんな義藤を守りたかった。義藤を信頼し、尊敬していたから。

「案ずるな、小猿。おとなしくしている」

春市が悠真に言った。その声は低く落ち着きを持っていた。

「信じられるか！」

悠真は春市に飛び掛った。無力な悠真が春市に勝てるはずもなく、悠真は瞬く間に春市に投げられ、地下牢の壁に叩きつけられた。息が詰まり、口から内臓が飛び出そうだった。倒れた悠真の上に春市が乗りかかってきた。両手を縛られた悠真は何の抵抗も出来ない。ただ、春市に押さえつけられ何も出来ずに暴れていた。足を動かし春市を蹴り上げようともがき続けた。

「離せよ！離せよ！」

悠真はもがいた。もがいて暴れて、体のあちこちが地下牢の壁にぶつかった。なのに、一つも春市に当たらなかった。これほどまでに差があるとは思わなかった。悠真は野江や義藤たちの足元にも立っていない無力な愚か者。それでも、高ぶる感情を抑えられなかった。滅びた故郷が、死んだ祖父と惣次が、傷ついた義藤が、悠真の感情を

高ぶらせていた。憎むべき相手は誰か。それは分からない。隠れ術士として、官吏の道具となった春市たちなのか、隠れ術士を道具として紅の命を狙った官吏なのか。その答えは分からない。分からないが、誰かに感情をぶつけないければ悠真は理性を保てなかった。

「離せよ、離せよ……」

悠真は暴れながらも、力が欲しいと願った。そして、惣次の言葉の意味が分かった。術士の世界は辛いことばかりだ。

——普通の生活をしてえ、そう思うのが普通じゃ。

惣次は言っていた。惣次は紅の側近だった。そんな惣次も術士を嫌っていた。術士に憧れる悠真をたしなめたものだ。今なら悠真も分かる。術士の世界は、紅の生きる世界は、危険で辛い世界。己の情けなさを突きつけられる。無力さを痛感させられる。心が辛くて、痛い。心の痛みが涙を誘った。どうしようもなく、悠真は泣いていた。

これが術士の世界だ。

悠真が憧れていた術士の世界だ。

術士の世界は辛いことが多くて、何も楽しい事はない。

術士の世界は傷が多くて、己の無力さをまざまざと突きつけられる。

情けない。

穏当に情けない。

野江は悠真に何と言うだろうか。

（あたくしは言ったはずよ。術士の世界は良いものではないと）

紅城へ連れて行って欲しいと懇願した悠真を、連れて行くと決断してくれたのは野江だった。それからずっと野江は悠真の近くにいてくれた。歴代最強の陽緋野江は、どのようにして陽緋の地位に着いたのか。実力第一の術士の世界とはいえ、若い女性が上に立つことを快く思わない者もいるだろう。野江は実力で全てを黙らせている

のだ。野江の心労は計り知れない。

都南は野江に何というだろうか。

（小猿が何をいきがっているんだ。まず鍛えろ。それからだ）
都南は術を使わずに朱将までのぼりつめた存在。何でもありの術士の世界に、普通の人間が入り込んだようなものだ。普通の人間でありながら術士の世界で生きるため、都南がどのような道を歩んできたのか想像するに容易い。一朝一夕であれほどの剣術を会得するとは不可能だ。術士と同格の力を得るため、想像を絶する鍛錬を積んだに違いない。

佐久は何と言うだろうか。

（まずは強くなりなよ。全てはそれからだからね）
優しい佐久はきつと否定しない。悠真の弱さも情けなさも受け入れてくれるだろう。それでも強い佐久は妥協しない。佐久の術を使う才は確かで、様々な色との相性も良い。佐久は優れた術士でありながら、身体を動かすことが苦手で大きな地位を得ることは無かった。その時点で佐久自身に己の限界は突きつけられた。現実の頂上を見ても、佐久は逃げずに紅城にとどまった。それはどれほどの勇気が必要だろうか。悠真なら、きつと逃げる。

紅は何と言うだろうか。

美しく強い紅は何と……。

悠真は紅が何を言うのか分からなかった。

「ごめん、俺何も出来なくて、邪魔ばかりで。ごめん、紅。義藤がこんなことになって……」

悠真は泣きながら紅に謝罪した。紅の胸の痛みを想像すると、紅の鮮烈な赤が翳ることを想像すると、悠真は何ともいえない気持ちになるのだ。

赤の敵（5）

どうしようもなく、悠真は泣いていた。まるで子供のように、泣いていた。義藤の赤い血から逃げたかった。責められることから逃げたかった。春市は泣きわめく悠真を押さえつける手の力を緩めると、そつと悠真の頭を叩いた。軽く叩くその手は大きく、悠真は大きな力に守られているような気がした。

「安心しろ、これ以上傷つけたり、殺したりするつもりはない。おとなしくしている」

悠真はそれ以上何も言わなかった。言えなかったのだ。もし、義藤を助けられる存在がいるとすれば、悠真ではない。無力な田舎者の小猿ではなく、隠れ術士である彼らなのだ。彼らが信頼できるのか分らない。それでも、悠真はすぎるしかなかった。彼らの持つ一色を信じるしか出来なかった。春市は、義藤を殺さなかった。紅城で義藤を殺すことが出来たのに、殺さなかった。そして、悠真が紅でないと分かった今も、悠真を生かし続けている。殺そうとせず、生かし続ける。だから、悠真は信頼しようと思ったのだ。今はするしかない。

「助けてくれ、頼む。義藤は何も悪くないんだ」

悠真は春市に頼んだ。涙と鼻水でぐずぐずになった顔で、祈っていた。

「わめくな、おとなしくしている。義藤はこんなくだらないところで死んでよい人ではないのだから。義藤は生きなくちゃいけないんだ。俺たちとは違うんだ」

春市は悠真の頭を軽く叩いた。悠真は、大きな春市の手に「安心しろ」と言われたような気がした。

春市は懷から小さな刀を、千夏は小さな箱を出した。これから何が起こるか分からない。それでも悠真は祈っていた。

——どうか、義藤が助かりますように……

このまま義藤が命を落とせば、悠真は大切な人を失うことになる。昨夜は祖父と惣次が死んだ。これ以上、目の前で命が消えるのは見たくなかった。美しく強い赤色が残酷な色に豹変する場面を見たくなかった。赤が消えて、命が消える場面を見たくなかった。

——どうか、義藤が助かりますように……

祈るしか出来ない悠真は色に願った。義藤を助けることが出来る色は「白」だが、悠真は白を知らない。

春市が義藤の傷を縛っていた布を優しく切った。布は小さな灯りで見えるほど、赤く染まり、対照的に、義藤の顔色は悪く唇は白い傷口が露になると、悠真は思わず目をそらした。布を切ると、赤い血が再び溢れ出した。命は赤で生かされ、赤が消えると命は消える。それが辛く悲しい。赤が消えると命が失われるのなら、赤が残酷な色となってしまうから。本当は違う。赤はとても優しい色なのだ。

千夏が箱を開けると、針と糸、小さな刃物が入っていた。春市が片手で肩口の傷を抑え、反対の手で腹の傷を押さえていた。千夏が手早く針と糸を用意し、皮膚と皮膚を縫いつけ始めた。

「助かるか？」

春市が千夏に尋ねた。

「分からない。普通は助からないけれど、義藤は強いから。知っているでしょ。それに、そのうち私たちは紅に負ける。私たちは紅に負けて、紅はここに足を踏み入れる。紅がここに来れば、きっと紅は義藤を助けるでしょ。白の石を使ってね。だからそれまでは……。私たちが負けるまで、義藤が命をつなぐことが出来れば、義藤に未来は残される」

千夏がそう答えた。ござの上は赤い血で汚れ、悠真はその様子を見

ていた。二人は義藤を助けようとしてくれている。だから、二人は敵でない。ならば、なぜ紅に反旗を翻し、義藤に刀を向けるのか。悠真は理解できなかった。春市は苦笑した。

「確かに。つまり、義藤が助かるには、俺たちが負けるしかない。俺たちが死んで、義藤が助かる。皮肉な現実だな。せめて、お前たちだけでも助けてもらえば良いんだが」

春市の言葉に悠真は息を呑んだ。彼らは、殺されることさえ見据えているのだ。紅に殺されることを覚悟して、それでも紅を敵として戦い続ける。矛盾した行動だ。

「何を言ってるの？何があっても一緒だと決めたじゃない。秋幸や冬彦は私たちが信じているのよ。秋幸と冬彦も戦うと。義藤と戦ってもかまわない、と一緒に誓ったじゃない」

彼ら兄弟は、強い意志で紅に刃を向けることを誓ったのだ。

そもそも、どうしてあの男に仕えているのか。四人の真意はどこにあるのか。それでも、彼らが紅の命を狙ったのは事実であるし、強い力を持っていることも事実。彼らが、悠真の村を壊滅に追い込んだ一部であることも事実。悠真は混乱していた。彼らを受け入れるべきか、憎むべきか。憎むべき相手が義藤を助けてくれるのか……。

赤の敵（6）

憎むべき存在だった紅は、多くの重圧の中で耐えて、最善の選択を模索していた。彼らの擁護をするつもりはなかったが、今、彼らを憎むことが出来なかった。千夏は腹の傷を縫い合わせ終えると、肩口の傷を縫い始めた。腹の傷には布が当てられ、その上からきつく縛られた。肩口の傷は貫通しているから、前と背部と縫い合わせていった。

「春市、私はね誰も死なせたくないの。それは、義藤も春市も秋幸も冬彦も、そして紅も……。私は紅のことを知らないけれど、あの義藤がこれほどまでに尽くす存在よ。紅の人となりは容易く想像できるとは」

彼らが義藤のことを信頼しているのだと分かった。

「義藤は、大丈夫なのか？」

春市は千夏に尋ねていた。義藤の傷は深く、医師が診療しても助かる保証は無いだろう。こんな地下牢で、こんな素人の治療で、義藤が助かるとは思えなかった。それに、義藤の生還が彼らの敗北と死にかかっているとすれば、彼らの心情はかなり複雑なはずだ。

「言っただけよ。少しの間、永らえば」

千夏が反論したとき、都南は強く床を叩いた。

「違う、そんなことじゃない。千夏、言っていたら。石の力の応用について。試せるんじゃないのか？」

悠真は春市と千夏が何を考えているのか分からない。確かなことは、彼らが力を持っているということだ。

「馬鹿言わないで。そんな、何の確証もないこと出来るわけないでしょ」

春市は一つ息を吐いた。

「だが、千夏。理論上は可能なんだから。何があっても義藤を死なせてはならない。……紅がなかなか助けに来なければ、頼んで良いか

？」

「最悪の場合はね」

千夏は春市の肩を叩いた。

丁寧に布が巻かれた後、春市は階段から上に出て行き、戻って来たとき小さな桶と布を持っていた。千夏が悠真を縛っている縄を切ると、言った。

「きつと熱が出てくるから、冷やすのよ」

桶が悠真の前に置かれ、悠真は頷いた。そんな悠真を春市が一瞥した。

「明日また来る。おとなしくしている」

春市はそう言い捨てると、千夏と一緒に出て行った。

残された悠真は、恐る恐る義藤に近づいた。顔色の悪い義藤は、昏々と眠り、義藤の手に触れると驚くほど冷たかった。悠真は赤い羽織を義藤の上にかけた。悠真に出来ることは、祈ることだけ。義藤が助かるように祈り、紅が狙われないように祈る。佐久が石の痕跡からこの場を突き止めてくれることを祈り、都南と野江が助けに来てくれることを祈る。水に浸した布を、義藤の額に乗せた。義藤の身体は冷たい。悠真はあまりに無力だった。

——どうか、義藤が助かりますように……

無力な悠真は地下牢の天井を見上げた。天井は低く、地下牢は狭い。身動き一つとれず、気持ちの悪いほどの閉塞感があった。今まで感じたことのない閉塞感。まるで、自分の限界を突きつけられたようだった。故郷で過ごしていたころは、悠真は自分には無限の可能性があると思っていた。術士になること以外は、何にでもなれると思っていた。何でも出来ると思っていた。努力すれば何でも手に入ると、何でもすることが出来ると、信じていた。けれども、今の悠真は無力だ。紅城に足を踏み入れても、悠真の先に道は現れない。

悠真の先に道はなく、悠真の頭の上には大きな天井が覆いかぶさっている。これ以上は手を伸ばせない。もっと上に、もっと上に、と手を伸ばすけれども手が届かない。

無限の可能性があるのなら。悠真は願った。一人孤独になると、

悠真は寂しくなった。辛くなった。

「赤」

悠真は赤を呼んだ。悠真に色を貸してくれた赤は、悠真の前から姿を消してしまった。何にでも染まれると思った悠真は、何にもなれないのだ。

「赤」

呼んでも赤はここに姿を見せない。悠真に無限の可能性などなく、悠真に染まることが出来ないのだ。

——悠真、あなたは無力などではないのよ。

無色な声が悠真に言ったが、悠真はその声を無視した。

敵である春市、千夏、秋幸、冬彦は、本当に赤の敵なのだろうか。彼らは敵なのだろうか。

何が敵で、何が味方なのだろうか。

彼らは悪なのだろうか。

何が正義なのだろうか。

悠真は分からなかった。

赤の囚人（１）

暗い地下牢の中で、悠真は故郷の海を思い出した。青く広がる海面を、煌く水面を、青い空を、白い雲を、赤い太陽を、悠真は思い出した。潮の匂い、さざめく波の音、海鳥の泣き声、悠真の五感を刺激していく。海は広大で美しい。美しい海。ここが悠真の生きるべき場所だ。

（おい、悠真。海に潜るときは気をつけろ）

祖父の声が悠真の耳に響く。

（じっちゃん、心配するなよ）

悠真は軽快に答え、頬を撫でる潮風に目を細めた。

祖父が船を操り、網を手繰り寄せる。網には生きた魚が絡まり尾びれを動かしていた。

（今日は大漁、大漁）

祖父が上機嫌に禿げた頭を撫でていた。

悠真は祖父を見て笑うと、銚を片手に海へ飛び込み、深く、深く潜っていく。太陽の光は徐々に遠のき、暗くなっていく。

冷たく透き通った海の中は無音の世界だ。何の音もせず、自分の心音だけが高く響いていく。魚の群れが目の前を横切り、海底の岩には海草が生え、貝が岩につく。地上の生き物である悠真の身体は空気を求めてもがき始める。一秒を争う時間。思考を無駄に回転させれば、さらに空気を欲してしまう。心を平静にして、落ち着いて、悠真は海の中で目を見開く。海中で気配を消せば、目の前の岩の陰に大物の魚を見つけた。魚は自分の命が狙われていることも知らずに、岩陰の王者を気取っている。悠真は高鳴る心臓と空気を欲する身体。獲物を目の前にする興奮。悠真は銚をかまえた。

魚の目は悠真と違ふところを見ている。よくよく見れば、魚は己の獲物を探している。小魚を狙う大魚。そして大魚を狙う悠真。こ

れが自然の連鎖だ。

時として海は残酷だが、多くの恵みを与えてくれる。術士の才覚に見放された悠真も、祖父の後を継いで漁師として生きるはずだった。嵐に吞まれて死ぬのも、鯨に食われて死ぬのも、それも漁師の運命だ。

これが悠真の生きる世界。悠真は海に抱かれ、海に守られていた。海の恵みで育ち、海を遊び場として育ち、海で多くのことを学んだ。命のやり取りも、自然の残酷さも、全て海が教えてくれた。

今日一日で悠真が目の当たりにしたことは、海が教えてくれたこととは異なる。悠真は過酷だが恵まれた自然の中で、紅の石に支えられて生活してきたのだ。紅の石を生み出す色神がどのような人なのかも知らず、紅の石をめぐって多くの攻防が行われていることも知らず、紅を守るために、戦う人がいることも知らず生きてきた。

——自分を信じる

自分が、どうしようもなく無力で情けない存在だと感じた時、悠真の脳裏に義藤の言葉が響いた。義藤は一言たりとも悠真を責めなかった。悠真がわがままを言ったからこのようになったのに、義藤は一言たりとも悠真を責めなかった。ただ一言、悠真に「自分を信じる」と言ったのだ。悠真は手を伸ばし、そつと義藤の頬に触れた。義藤の頬は少し熱を持っていた。悠真は義藤の額に乗せた布を取り、再び桶に浸した。

——自分を信じる

何を信じれば良いのだろうか。無力な小猿は、山と海を求めて泣いている。

——なあ、義藤。一体俺は何を信じればいいんだ？

気づけば悠真は眠っていた。現実から逃げるように、恐ろしいことから目を背けるように、悠真は眠りへ落ちていった。

朝日の光も差し込まず、時計もなく、悠真は今が朝なのか、昼なのか、夜明け前なのかさえ分からなかった。硬い床の上で眠っていた悠真は体中が痛んだ。

「起きろ、朝だぞ」

入ってきた男がそう言うから、悠真は今が朝なのだと思った。義藤に目を向けると、義藤は小さな息を立てながら動く様子はなかった。「義藤の様子はどうか？」

悠真より少し年上だろう男がそう言った。声が若い。気の良さそうな男。それは昨夜の優男の声だった。つまり、秋幸。秋幸の顔を見た第一印象は「平凡」に尽きる。悠真は、どうして秋幸が義藤の様子を気にするのか分からなかった。春市と千夏と同じように、秋幸も義藤を気にかけているのだから。

「あんたは？」

悠真は男に尋ねた。すると、秋幸は笑った。

「あんたが紅だと思ったんだけどな。朝飯だ、食べているよ。千夏呼んでくるから。義藤、しっかりしろよ」

秋幸はそう言うと、牢の前に握り飯と水を置いていった。平凡そうな優男の秋幸が、昨日恐ろしいほどの力を見せ付けたのだ。佐久と同じ、様々な色との相性が良い存在。秋幸は間違いなく佐久と同様の天才だ。

赤の囚人（2）

黒服の敵である春市、千夏、秋幸、冬彦は義藤を助けようとしてくれている。それは、義藤と面識があるからなのか、義藤が朱護だからなのか分からない。ただ、彼らが敵でないということは分かった。悠真は空腹だったから、握り飯に手を伸ばしたが、それを口にする勇氣はなかった。悠真は彼らの囚人だから。自由を奪われて、閉じ込められて、それで彼らの道具になる。

「俺はどうしたら良いんだ」

悠真は思わず呟いた。自分の行動で誰かが傷つく。その愚だけは犯したくない。それでも、悠真は何が正解なのか分からない。

義藤に答えを求めても無駄だ。昏々と眠る義藤は命を削りながら生きている。今にも消えそうな義藤の命。今にも消えそうな義藤の色。一刻も早く手当てをしなければ、義藤は命を失ってしまう。

——義藤……

悠真は義藤を思った。彼は生きなくてはならない。悠真は心配をするしか出来なかった。

「心配しなくていいのよ。私たちは、これ以上、義藤を傷つけるつもりはないから」

悠真の独り言に返事をしたのは、女の声。見上げると、粗末な着物を身に付けた若い女性が立っていた。黒く長い髪を後ろに束ね、強い眼差しが印象的だ。声からすると、千夏。その後ろには握り飯を持ってきた秋幸もいた。

「あんたは？」

悠真は尋ねた。彼女は千夏のはずだ。

「昨日会ったでしょ。私は千夏。後ろにいるのは秋幸」

間違いない。やはり、彼らは黒服の敵だ。悠真は身を固めて、警戒

した。彼らが義藤に危害を加えるつもりがないとしても、紅の敵であることは真実なのだ。

「警戒したところで無駄よ。命を奪われないように、慎重に行動することね」

千夏は言った。それは、敵が味方から分らない発言だった。

「一体何なんだ？ あんたたちは何なんだ。一体、何が起こっているんだ？」

悠真は尋ねた。彼らが味方なのか、敵なのか。味方ならば、悠真と義藤が助かる可能性は大きくなる。しかし、彼らは紅の敵だ。紅を守る義藤の敵だ。

「紅は官吏に命を狙われている。きっと、官吏であるあいつにとって紅は気に食わない存在なのよ。今の紅が誕生して十年。紅は官府に吞まれなかった。官府の思い通りに動かず、優れた術士たちに恵まれて、命を狙うにも容易く出来ない。一部の官吏は、それが気に食わないの。私たちは、火の国で最も愚かな男に利用される、生きる価値のない存在よ。それでも、義藤を死なせたりしない。私たちが義藤を殺したとなったら、ばば様への裏切りになるから」

千夏は牢の鍵を開けた。なぜ彼らが義藤にこだわるのか、そしてばば様が誰なのかも分からない。それでも、尋ねることが出来なかった。

「秋幸、小猿が暴れないように見張るのよ」

千夏はそう言うのと、牢の中に入り義藤の横に膝をつくと、そつと義藤の頬に手を触れた。

「熱が出てきている。白の石が必要かもしれない」

言うのと、千夏は持っていた箱を開いた。義藤に巻いていた布を解き、傷口を確認すると箱の中から薬を出した。

「義藤は小さい頃から怪我ばかり。義藤だけじゃないけれど、義藤が一番怪我をしていた。いつも無茶をするんだから」

その声に義藤に対する敵意はなく、むしろ慈しみを感じた。悠真は間を計りながら千夏に尋ねた。

「義藤の知り合いなのか？義藤を助けてくれるのか？」

すると千夏は苦笑した。

「私たちは義藤の幼馴染よ。私たち四人は、義藤が八歳のころまで一緒に育った。義藤が、街にもらわれていくまでね。――義藤が術士になり、紅を守っていると知って驚いたよ。義藤は誰よりも紅を憎んでいると思っていたから。私たちが義藤と別れて四年後、つまり十年前に先代の紅が死んで、今の紅が誕生したことが義藤の気持ちを变えたのかもしれないね。せつかく選別をかいぐって普通の生活を送る権利を得たのに、それを捨てて。馬鹿な義藤。紅を憎んでいたはずが、今や紅を守るために命をかけているんだから。だから、あんたを紅だと間違えたのよ。義藤が身を犠牲にして守るから」

千夏は手馴れた手つきで義藤の傷を確認し、手当てをした。悠真は千夏たちが悪い人だと思えなかった。それは、義藤と彼らが友達だから。彼らは友達である義藤を殺す覚悟を決めて、友達である義藤に殺される覚悟を決めて、一体彼らは何のために戦ったのだろうか。彼らは紅や義藤を真に憎んでいるわけではない。なのに、彼らは義藤と紅に牙を向けた。

「どうして、紅の命を狙ったんだ？」

悠真が尋ねると、千夏は手を止め悠真を見上げた。その目はとても強かった。

赤の囚人（3）

なぜ、愚かな男に仕えるのか。殺されることも覚悟して、紅に刃を向けるのか、その理由を悠真が尋ねると、強い目を見せた後、千夏は哀しそうに微笑んで答えた。

「私たちは、選別をかくぐり、普通の人として生活をしていた。捨て子の私たちは戸籍を持たず、選別を受ける必要がないから。なのに、私たちが術士の力を持っていることが知られてしまったのよ。私たちは存在しない存在。紅の庇護の下にいないから、利用されるしかない。例え、火の国一の愚かな男に利用されると分かっているても、大切な人たちを守るには、それしかないから」

悠真はようやく分かった。千夏たちは大切な人を人質に捕られ、従うしかなかったのだ。だから、義藤とも戦った。己が殺されることも覚悟して、義藤を殺すことも覚悟して、紅に刃を向けたのだ。

戦ったのに、義藤を助けようとしている。彼らは義藤を助けようとしている。しかし、助けるならば、ここに連れてくるべきではなかった。こんな牢の中では助かる命も助からない。

「ねえ、どうして義藤を連れてきたんだ？もし本当に助けたいのなら、連れてこずに紅城に残すべきだった」

悠真が言くと、秋幸が笑った。

「俺たちは囚人なんだ。だから、自分たちが解放されるために義藤を連れてきたんだ」

悠真は秋幸の言葉の意味が分からなかった。

「はあ？」

素っ頓狂に返した悠真に秋幸は笑い、膝を折ると義藤の手をとった。

「ごめんね、義藤。ごめんね」

秋幸は義藤の手を握ると答えた。

「分からない？俺たちはね、自由にしてもらうために義藤を連れてきたんだ。自分たちを自由にしてもらうためにね。もしかしたら、

義藤が身を犠牲にして守った紅が偽者かもしれない。そんな想像、簡単にできたよ。俺たちと比べて、紅はとても優れた存在なんだから、自分を暗殺しようとしている犯人が近づいていることに気づいても当然だよ。ならば、ここに紅はいなくて、偽者かもしれない。第一、本物の紅ならば、俺たち隠れ術士より遥かに強い力を持っていて、簡単に勝てるはずだからね。俺たちは、あんたが偽者である可能性も考慮して、義藤を連れてきたんだ」

「え？」

悠真は、ますます意味が分からなかった。秋幸は笑った。

「もし、ね。あんたが偽者だとするよ。ならば、あんたを連れてきても、紅は俺たちを追わないかもしれない。俺たちを負わずに、暗殺しようとした犯人も、犯人が駒に使った隠れ術士も探さないかもしれない。それだと困るんだ。探してもらわないと困るんだ。探して、あの腐った官吏に勝って、俺たちを解放してもらわないと困るんだ。——だから義藤を連れてきた。もし、偽者の紅を捕らえたとしても、本物紅は義藤を助けに必ず来る。義藤は紅を守る最強の盾だろ。それに、色神を心から憎んでいた義藤が正規の術士となり、その上朱護頭になるんだから、義藤は紅と何かしらの関係があるんだ。だから紅は義藤を見捨てたりしない。義藤を助けるためにこの場所を突き止め、義藤を助けるために、あの腐った官吏とも戦い、俺たち隠れ術士を殺しに来る。それでいいんだ。紅がここを探し出すためには義藤を連れてくる必要で、紅がここを突き止めてくれれば俺たちは自由になれる」

秋幸はそこまで考えているのだ。紅にこの場所を突き止めてもらって、紅に解放してもらったために義藤を連れてきたのだ。万一、悠真が偽者であったとき、紅が犯人を捜すことを諦めないように。

そんなことしなくても、紅はきっと犯人を探し出すはずだ。ここに義藤がいなくても、悠真がいれば助けに来てくれるはずだ、と。それは紅の人柄を知っている悠真だから断言できる、畏れ多いことだ。自分をどれほど高貴な存在だと思っっているのだと、非難される

だろうが、悠真は断言できた。紅は誰であつても命を見捨てたりしない。

「義藤がいなくても、紅はここを突き止めるよ。紅はとても素敵な人なんだ。紅だけじゃない。陽緋の野江や朱将の都南、そして佐久に鶴蔵、延次も赤の仲間たちは素晴らしい人たちだ。官府や官吏の思つようにさせたりしない。義藤を連れてくる必要はなかったんだ」悠真が断言すると、千夏が苦笑した。

「随分、紅を信じているのね。本当に奇妙な小猿ね。何を後悔しても、もう遅いの。私たちは前に進み続けるしかできないのだから。後は殺されるのを待つだけ」

千夏は何も後悔をしていない。紅に刃を向けたことも、おそらくこれから殺されるということも。

「ごめんね、義藤。もう少し頑張つてちょうだい」

千夏の言葉は偽りを含んでいない。悠真は千夏たちを信じようと思った。信じるしか、生き残る道は無い。

「とにかく、私たちが紅の命を狙うのも、義藤と戦うのも、朱軍と戦うのも本意じゃないことは確か。それだけは忘れないで」

千夏の目が義藤を愛しそうに見つめていた。そして最後にゆつくりと付け加えた。

「もし、小猿と義藤が生き残ったのなら、決して私たちのことは義藤に伝えないで。赤い夜に戦った相手が、同じ山で育った仲間だと義藤は知らなくていい。知っちゃいけないの」

彼らが死ぬことを覚悟しているから、とても悲しく感じた。

赤の囚人（４）

四人の敵は全てを覚悟して紅に刃を向けたのだ。それは大きな決断だったに違いない。何が大切なのか、何を守るのか、彼らは選択したのだ。友人、義藤と戦うことになってもた。悠真が千夏と秋幸を見比べていると、地下牢の扉が開き、光が差し込んだ。ゆつくりと響く足音は悠真たちに向かって近づいている。

「千夏、秋幸」

言って入ってきたのは、背の高い男。鋭い目はどこか都南と似ていたが、都南よりも威圧的な雰囲気を持っていた。声からすると、春市。

「春市、どうかした？」

目の前にいるのは春市だ。秋幸が春市に尋ねていた。

「春市、何かあったんだね」

千夏が言った。春市はひどく肩を落とし、深く息を吐いていた。何かがあったのだと、分かるほどだ。

「奴が呼んでいる。再び紅に攻撃を仕掛けるつもりだ」

春市が言い、その言葉に千夏が苛立った。悠真も戸惑った。四人の隠れ術士を利用する官吏は、再び紅に戦いを挑もうとしている。紅は義藤を人質にとられ、彼らは紅に殺される時を待っている。紅が四人の隠れ術士を許すか分からない。けれども、悠真は四人の隠れ術士たちに命を落として欲しくなかった。大切な人を守るために紅に刃を向ける決意をし、こうやって義藤の身を案じている。己が殺されることも視野に入れ、それでも未来を模索している。彼らが死ぬ必要はない。死さえ覚悟していても、彼らは無謀なことをするつもりはないらしい。千夏が苛立ちを露に春市に言った。

「冬彦抜きでするつもり？今度は向こうも警戒している。義藤が負けた相手だからね。冬彦は一番の力の持ち主よ。冬彦が抜きで、朱将と陽緋が動けば私たちに勝ち目はない。今も、赤影が動いている

かもしれない。下手な殺され方をしたら、みんな奴に殺されてしまふ。殺されるなら、うまく殺されなくちゃ……。今、行くべきじゃない」

千夏が義藤の傷を布で巻きながら言った。弱気な千夏を叱咤するように春市は言った。

「そんなことは分かっている。それでも、俺たちは紅に牙を向けた。いかなる理由があろうとも、色神に牙を向けた。覚悟を決めただろ。俺たちはもう、戻れないところに足を踏み入れているんだ」

春市は壁にもたれかかり、腕を組んでいた。そして、一つ溜め息をついた。

「千夏、今度は俺と千夏の二人で行こう。秋幸は冬彦と残る。それで良いだろ」

悠真は春市と千夏を見ていた。紅の命を狙うことは、彼らの意に反している。そして、彼らは都南や野江に殺されるかもしれない。悠真は混乱した。悠真の復讐相手は春市たちだ。都南と野江が復讐を果たしてくれるが、それは春市たちが死ぬことを意味する。悠真の中にそれで良いのかと躊躇が生まれた。春市たちの行動には理由がある。悠真の故郷を破壊した彼らを悪とするのなら、彼らを殺す紅たちは正義なのか？悠真には分からない。

春市たちは理由があって行動している。本意でなく、彼らの理由があつて。死なせたくない。殺すことは何の解決にもならない。なぜ、このようなことが生じたのか。彼らを殺すだけでは意味が無い。「秋幸、ここで小猿の相手をしてろ。千夏と俺は奴のところへ行く」春市は秋幸に命じた。

「秋幸、何かあれば義藤と冬彦を連れて逃げろ。朱軍がここへ攻めてくるかもしれない。赤影が来るかもしれない。その時は、自分が生き残ることだけを考える」

春市は秋幸へ歩み寄り、そっと秋幸の肩を叩いた。春市の一挙手一同が兄弟への慈しみを示していた。

「必ず、生き残れ」

言って、春市は秋幸の肩を叩き、身を翻した。千夏も立ち上がり、秋幸に囁いた。

「落ち着いて、仲間を信じて。自分を信じて」

言い残して、千夏も立ち去った。悠真はその言葉に聞き覚えがあった。それは、義藤が悠真に告げた言葉と同じだ。千夏は秋幸に鍵を渡した。逃げるなら今しかない。それでも、逃げたところで義藤を連れて行けない。悠真は行動することが出来なかった。

赤の迷い（１）

秋幸は眉間に深くしわを刻みながら、一つ息を吐いた。残された悠真は動けず、この場を動かす権利は秋幸が持っている。悠真は何の力も持っておらず、秋幸に逆らうつもりもなかった。それは、秋幸たちの強い意志を知り彼らの邪魔をしたくない気持ちがあるからだ。秋幸が鍵を持ち、悠真たちの命を持っている。

「ここにいろ。鍵はかけないから。何かあったら、義藤を連れて逃げる。義藤はこんなところで命を落として良い人じゃないんだ」
秋幸はそう言い残した。

秋幸は悠真を信じた。

そういうことだろうか。信じたから、悠真を残して、鍵もかけずにここを去った。

それとも、悠真が義藤を連れて逃げる事が出来ない、悠真にはそんな力がない、と思っているのだろうか。

それとも、秋幸が不在の間に何かが生じる危険性があり、万一の時を想定して鍵をかけなかったのだろうか。

想像することは容易いが、真の理由は分からない。確かなことは、今、牢の鍵は開いており、自由に逃げる事が出来るということだ。悠真は開いた牢の扉と義藤を見比べた。義藤は細身だが、意識を失った人間は想像以上に重たい。また、傷の深い義藤を安易に動かして良いものか判断がつかない。万一、義藤を背負って悠真が飛び出したとして、ここはどこなのか、どのようにすれば紅城へ戻れるのか、悠真には想像もつかない。

――逃げるべきか。
――残るべきか。

何が最善の策なのか、悠真は決めることが出来ずにいた。

逃げるなら今しかない。鍵は開けられ、見張りもいない。しかし、動く勇気がない。

「紅、俺たちはここにいるんだ」
悠真は呟いた。

「紅、義藤はここにいるんだ」
悠真は牢の低い天井を見上げて、紅の鮮烈な赤を思い出した。今、紅はどんな気持ちでいるのだろうか。義藤を血眼になって探しているのだろうか。義藤を心配し、涙を流しているのだろうか。

「紅、今は何をしているんだ？」
紅の心を思うと、悠真は罪悪感で押しつぶされそうになった。弱さを見せるのが苦手な紅は、今も平然とした姿を見せているに違いない。どのようにすれば皆が傷つかずに済むのか、答えを知る者がいるならば、答えを教えて欲しかった。悠真は二度と愚を犯したくなかったのだ。

この状況から助けしてくれる者がいるのなら、悠真はその手にするだろう。義藤は青白い顔で、懇々と眠っている。

「紅、助けてくれ」

義藤を見ると、一刻の猶予もないことは明らかだ。紅に義藤を助けて欲してもらいたかった。

同時に悠真に生じるのは彼らを死なせたくない、という紅と義藤を裏切るような気持ち。春市、千夏、秋幸、冬彦。彼らは悪い人でない。彼らは、紅に殺されるを覚悟で戦いを挑んだのだ。彼ら四人を助けて欲しいと願う気持ちは、紅を裏切るような行為だろう。官吏に逆らうことが出来ない隠れ術士とは言え、彼らが紅に刃を向け

たのは事実で、紅の信頼している義藤が深い傷を負ってここで眠っているのも事実。色神紅の権限があれば、彼らに釈明の機会を与えずに捕らえることも、暗に殺害することも可能なはずだ。暗に殺害することに野江たち赤の仲間是否と云うだろうが、赤丸は何も言わないだろう。赤丸は紅の刃なのだから。紅が声を発すれば、赤丸は四人を殺しに来る。思えば、彼ら四人も赤影と赤丸のことを恐れていた。

悠真がすぎるのは紅の、敵の官吏がとかげの尻尾きりをしないように証拠を掴む、という言葉だけだ。証拠があれば、紅は四人の隠れ術士の真実を知るはずだ。真実を知れば、きっと紅は四人の隠れ術士を助ける。悠真は紅を信じたかった。

彼らの命は紅に掛かっている。

義藤の命は紅に掛かっている。

どうすれば、皆が助かるのだろうか。

紅が四人を暗に殺害するはずがない。紅と出会い、紅と言葉を交わした悠真はそのことを理解していた。紅の人柄を知っているからだ。しかし、義藤を傷つけられた紅がどのような行動に出るか分らず、このまま義藤が命を失えば紅は心を乱すだろう。

「紅、俺はどうしたらいいんだ？」

悠真は誰もいない低い天井に問いかけた。もちろん返答などあるはずがない。全ては己で決めるしかないのだ。

迷った末、悠真は動かなかった。動かないことも、一つの選択肢だ。

赤の迷い（2）

しばらくして足音が響き、戻ってきた秋幸の背には、少年が背負われていた。おそらく、その少年は冬彦だ。

「逃げなかったんだな」

秋幸は悠真を見て、呆れたように言った。そして、背負っている少年を指し示した。

「義藤に斬られた冬彦だ」

秋幸はそう言っていると、開け放した牢の向かいの通路に冬彦を寝かせ、彼自身も腰を下ろした。

冬彦は小柄だったが、思ったより子供ではなさそうだった。眠っている顔立ちが出来上がりつつあるからだ。この冬彦は色の力を引き出す強大な力を持っている。色を引き出す力は野江に並ぶだろう。冬彦が赤色の相性が良ければ、と考えると恐ろしい。赤色との相性が良く、正規の術士ならば、野江を超えるまではいかずとも、相当の力を引き出せるはずだ。恐ろしい才能。恐ろしいが、悠真はどこか羨ましかった。

「大丈夫なのか？」

悠真は冬彦の身を案じた。優しい義藤は人を殺したりしないはずだけれども、冬彦を傷つけている。それだけ余裕がなかったということだろう。

「それは冬彦のこと？」

秋幸が悠真に問い返し、悠真は頷いた。すると秋幸は可笑しいものでも見つけた可能のように小さく笑ったのだ。平凡な印象の秋幸が一瞬高貴な存在に見える。そんな、穏やかな笑いだ。

「あんたさ、相当変わっているな」

秋幸は笑い、冬彦に目を向けた。

「大丈夫さ。義藤は優しいから命を奪うようなことを避けている。

千夏が薬を使つて強制的に眠らせているんだよ。そうしないと、冬彦は休んだりしないから」

悠真は目を細めた。

「なんで、そこまで？」

仲間を薬で眠らせるといふことは常軌を逸しているように思えたのだ。

「守るためだよ。春市と千夏は紅に刃を向けて、己が殺されることを覚悟しているのに、どうやら俺たちを守りたいみたいなんだ。だから、冬彦を眠らせて、俺を残して二人で向かった。優しいんだよ。春市と千夏は。年上だからと、冬彦と俺を守ろうとしているんだから」

秋幸は笑い、続けた。

「本当はね、俺だつて二人と一緒に went たかつたさ。でも、二人の気持ちを踏みにじることが出来ないだろ。それに、眠る冬彦を一人残すことは出来ないから。とても迷つたけれど、ここに残つたんだ。春市と千夏と一緒に行けば、俺は多少なりとも二人の力になれるかもしれないけれど。同じ殺される道しか残されていないのなら、二人の優しさを拒絶する理由は無いから」

悠真は秋幸と冬彦を見比べた。秋幸は普通だ。普通で平凡。そういう印象なのに、どこか高いところから物事を考えているように思えた。秋幸が悠真の立場にいたら、より良い道を探し出して行動できるだろう。そう思えるほどだ。一緒に行きたいという気持ちを持ちながら、年上の二人のためにこの場に残る。二人の考えを知り、己の行動を決めている。それが秋幸。

「なんで、生き残る道を探さないんだ？」

悠真は秋幸に問うた。まるで、諦めたような秋幸の発言が信じられず、そのような発言をする秋幸が許せなかったのだ。

「紅は何も思わず人を殺すような人じゃない。なんで、生きようとしないんだ！」

声が裏返るほど荒立つたのは、悠真と年齢の変わらないだろう秋幸

が落ち着いているからだ。年齢の近い人から、生きること諦めたような発言を落ち着いて聞けるほど、悠真は大人でなかった。

「落ち着けよ。紅が優しい人だとか、紅が人を殺すような人じゃないとか、そういうのはあまり関係ないんだ。紅は俺たちを殺さなくちゃいけないんだ。立場上、俺たちを殺さなくちゃいけない。それが、紅の意に反していてもね」

悠真は秋幸の言葉の意味が分からなかった。悠真が戸惑うのが分かったのか、秋幸はゆっくりと続けた。

「紅は俺たちを殺さなくちゃいけない。それは、紅が色神だからだよ。己に刃を向けた人間を生かす。それは許されるようなことじゃない。厳格に罰を下すのも、紅の威厳と権威を保つためには必要なんだ」

悠真には秋幸の言葉の意味が分からなかった。威厳の意味も分からなかった。権威の意味も分からなかった。

「紅はそんな人じゃないんだ。俺は、紅と出会って紅の本当の姿を見たんだ。色神である前に、紅は一人の人間だから、紅の全ての行動に紅の人柄が出るんだ。紅はそんな人じゃない。そんな人じゃないんだ」

悠真が断言するのが可笑しいのか、義藤は更に小さく笑った。

「そうだね。義藤が信じるくらいだ。そんな変な人だったら、一直線に走り続ける義藤と一緒にいれるはずがないから。——それに、戸籍のはつきりしない義藤を、才能だけで朱護頭に起用することは並大抵の決断力じゃない」

悠真は秋幸の考えが変わったように思えて嬉しかった。

「そうなんだよ。紅は優しい人なんだ」

悠真は嬉しかった。秋幸が生きること諦めないことは、四人の隠れ術士が生き残ることに繋がるように思えたから。秋幸に生きること迷わないで欲しかった。

赤の迷い（3）

悠真は秋幸に親しみを覚えつつあった。秋幸を初めとした四人の隠れ術士に生きて欲しいという願いは、時が経つごとに強まった。

「なあ、秋幸。分からないんだ。秋幸たちと義藤はどんな関係なんだ。同じ山で育ったって言っていたけれど、本当はどういうことなんだ？俺は、信じたいんだ。秋幸たち隠れ術士のことを」

失礼かもしれないが、悠真は秋幸に尋ねた。すると秋幸は柔らかに微笑んだ。

「確かに、話していても良いかもしれないな。俺たちの信念と覚悟をね」

秋幸はゆっくりと話した。彼らの生い立ちと、義藤との関係。そして、なぜ、奴らに手を貸すのか。

春市、千夏、秋幸、冬彦の四人は本当の兄弟でない。皆、路上で生まれた。親の顔も名前も知らず、己の出生の理由も知らない。そのまま路上で死ぬ運命だった。

最初に出会ったのは、春市と千夏だった。二人は気づいたときから一緒だった。捨て子を拾い奴隷として使う組織に拾われていたのだ。そんな春市が五歳、千夏が四歳のころ組織の壊滅に術士が乱入してきた。名も分からない、女術士だった。大半の子供は孤児を扱う施設に入れられ、相応の戸籍を与えられたが、春市と千夏はそうしなかった。女術士が施設に入れなかったのだ。

二人は術士の才覚を有していた。孤児を扱う施設で、術士が現れたら必然的に隠れ術士にさせられてしまう。隠れ術士として、奴隷にさせられてしまうのだ。女術士はそれを避けるために、二人を山

に連れて行った。

その山にいたのが、義藤と忠藤であった。

女術士はその後秋幸を連れてきた。秋幸も術士としての才覚を有していたからだ。

忠藤と義藤を育てていたのは「ばば様」だった。ばば様も術士であつたが、現役を退いているらしい。それに、ばば様も隠れ術士であつた。どうやら、ばば様は女術士と関係のある人らしいが、女術士のことを一言も話さなかつた。

ばば様は年齢不詳。戸籍もないらしい。不思議な人だったが、秋幸たちにとっては親だった。春市、千夏、秋幸という名をつけたのも、ばば様だった。組織にいた頃、春市と千夏に名はなかつたらしい。

忠藤と義藤は女術士のことを知らず、秋幸も姿を見たことはない。存在するが、存在していない。そんな人のようであつた。

女術士が最後に連れてきたのが冬彦だった。もちろん、冬彦の名をつけたのも、ばば様だった。ばば様は、冬彦にも名を与えた。（ちようど、四人揃つて、季節が一年終わって気持ちが良いもんだ）ばば様は春、夏、秋、冬、の四人が揃つたことに嬉しそうに笑つていた。

四人の隠れ術士と忠藤、そして義藤の六人は一緒に暮らした。秋幸はまだまだ子供だったが、年齢の近い春市、千夏、忠藤、義藤の四人は、剣術を競い互いに力を高めていた。秋幸の記憶では、もっとも強いのは忠藤であつた。それでいて忠藤は優しく、秋幸は忠藤に懐いていた。

余談であるが現在、春市は二十三歳、千夏は二十二歳、秋幸は十八歳、冬彦は十五歳。千夏と義藤は同じ二十二歳だ。

戸籍の無い六人は術士としての才覚を有していたが、戸籍がないため選別を免れ、術士に匹敵する剣技と体術を学んだ。教えたのは、ばば様だ。

最も強い忠藤であつても、ばば様には手も足も出なかつたのだ。幼い秋幸は忠藤の後を追いつながら、そのような生活が永遠に続くと思つていた。親のいない術士でありながら、ここまで幸せに過ごすことが出来る者は滅多にいないだろう。

秋幸の幸せな生活が終つたのは、今から十四年前のことだ。当時、秋幸は四歳であつた。忠藤が大好きな子供だ。春市が九歳、千夏が八歳、冬彦は一歳だつた。幼い頃の話なのに、秋幸が過去のことを鮮明に覚えているのは、決して秋幸が賢いからではなく、その日々がとても幸福だつたからだ。春市、忠藤、義藤は秋幸の兄であり、千夏は姉であつた。ばば様の死は、秋幸の幸せな生活に終止符を打ち、全てが変わつたことを秋幸も感じていた。

ばば様の死と同時に、忠藤と義藤は山から離れて街へもらわれていった。ばば様は死の間際に、義藤と義藤の兄を守るために街へと隠したのだ。秋幸は泣きながら忠藤の服にすがり、それでも諦めるしかなかった。

忠藤と義藤は自分たちと違う。

二人は誰にも存在を知られてはならない。

死んで良い人ではなく、誰にも存在を知られてはならない。

守らなくてはならない存在。

特別な存在。

秋幸はそれを感じていた。あの女術士は、ばば様が命を失つても、姿を見せることをしなかつた。もしかしたら、来ていたのかもしれない。

ないが、秋幸たちに姿を見せることはなかった。

残された秋幸たちは、ばば様を山に埋葬し年長だった春市を筆頭に山での生活を続けてた。生活の方法はばば様が教えてくれていた上に、正体の分からない誰かが生活を支えてくれていたのだ。おそらく、あの女術士だと秋幸は考えていた。秋幸たちはある程度大きくなると、自分たちの存在理由を考えた。そして、孤児を育てることにしたのだ。その中に隠れ術士がいるかもしれない。運よく助けられた自分たちの恩を、誰かに返さなくてはならないから。秋幸たちは約三十人の子供たちを育てていた。山で暮らす日々。この日々が続くと思っていた。

平和は突然終わった。

子供たちは人質に捕られた。人質にとつたには大きな権力を持つ官吏であった。四人は術士としての才覚を持っていたが、石を持っていない。戦えない。子供たちがどこに捕らえられているのかわからない。下手をすれば、殺されてしまう。

四人は迷った。大切なものは何か、何を守るべきか。迷って、迷って、——そして、紅と対峙することを決めたのだ。

赤の迷い（４）

悠真は義藤の生い立ちを知った。そして、秋幸たちと義藤の関係を知った。それらを知って思うことは、彼らを死なせたくないということだ。

彼らは自分たちの存在が義藤に知られることを避けようとしている。今、義藤は眠っている。このまま彼らが敗れ命を落とせば、義藤はあの夜に戦った四人の隠れ術士の正体を生涯知ることはいないだろう。万一、知ってしまえば、優しい義藤のことだ。どれほど悲しむか目に見えて想像できる。だから彼らは己の存在を隠そうとしているのだ。

「術士つて、もつと素敵なものだと思っていた」

思わず悠真は呟いた。術士の才覚があれば、世界は変わるだろう。術士として生きることが出来れば、世界は輝くだろう。悠真は漠然とそのようなことを考えていたが、現実が違う。

術士の才覚を持つことで戦いを強要される。

術士の才覚を持つことで権力者に利用される。

術士として生きるとは辛いことばかりだ。秋幸たちの存在がそれを示していた。彼らは強く、そして残酷な現実と向き合っている。謎の女術士が秋幸たちを山へ隠した理由が分かった。孤児であり、戸籍を持たない彼らが、隠れ術士として利用されることを防ごうとしたのだ。なのに、結局利用されている。

皮肉なことに、色神紅と敵対する官吏に利用されているのだ。そして、色神紅を守る義藤と刃を交えることになったのだ。

皮肉なことだ。

悠真は秋幸を見た。秋幸は気の良さそうな人だ。年は悠真より二つ上なのに、同じくらいに見える。それだけ気さくで穏やかだ。彼らは大切な者を守るために戦っている。それが意に反していても、自分たちの命を失うことに繋がるとしても。悠真には出来ない決断だ。無力な悠真は、故郷を破壊した復讐をすると息巻くだけで、何も出来ず結局のところ義藤を傷つけてしまった。今の状況を作り出してしまった。誰かが守ってくれなければ、何も出来ない。

悠真のことを祖父が守ってくれていた。惣次が守ってくれていた。村の人が守ってくれていた。そして火の国という国家が守ってくれていた。けれども、彼らは違う。国から存在を認められず、家族もおらず、四人で身を寄り添って生きて生きたのだ。

秋幸は悠真に笑いかけた。その微笑みは術士に憧れを抱く悠真をたしなめるようで、術士の現実を悠真に伝えるようであった。

「そりゃあね、術を使えない人が術士を見たら、とてもうらやましく感じるだろうね。無限の可能性を持つ色の石を使い、強大な力を作り出す。術士として火の国から立場を保障され、生活に困らない——けれども、現実とは違うものだよ。そうだね、でも、矛盾しているかもしれないけれども、俺は術が使えて良かったかな。今日、紅に殺されるとしても、術士だから俺は俺らしく生きることが出来た。春市や千夏、冬彦と出会えた。この力がなければ、俺はとくに路上で死んでいたかもしれない。力があるから、女術士に拾われたんだからね。この力が俺を生かし、俺を殺す。そういうことだね。無防備な力は、何よりも危ういものなんだから」

秋幸の言葉は悠真の中に秋幸という存在を大きく存在付けるのだ。

「火の国は平和な国だと思っていた。生活に困窮すれば近所の人帮助てくれる。それでもどうにもならなければ、火の国が助けられる。術士が助けしてくれる。そう思っていたのに」

悠真は火の国のことを何も知らなかったのだ。火の国の真の姿は温

かいものではない。これまで知っていたのは、色神紅が守る火の国の一部の姿でしかないのだ。秋幸は眠る義藤に目を向けて優しく笑った。

「どうかな。基本的に火の国は平和だと思うよ。民を巻き込んだ大きな戦があるわけじゃない。物資に困窮して餓死する民が大勢いるわけじゃない。治安が悪く悪行が横行するわけじゃない。悪政なわけじゃない。色神紅が守り、官府が政治を行う。色神と官府の二重政治は事実だけでも、それが民に悪影響を与えているわけじゃない。今以上の平和を望んじゃいけない。これ以上、紅に負担をかけちゃいけない。そしてこれ以上官府に負担をかけちゃいけない」
悠真の頭に疑問符が並んだ。なぜ、秋幸は官府の心配をしているのだ？ 紅と出会った悠真にとって、官府は悪でしかない。

「官府に負担？」

思わず問い返した悠真に秋幸はゆっくりと答えた。

「官府で働く官吏であつたって、あいつのような悪い奴だけじゃない。火の国を支えるために、必死で働いている者もいるんだ。——もつとね、寄り添えばいいのに。っていつも思うよ。紅と官府は寄り添って、人事の交換をしてみてもいいと思う。紅が官府に術士を派遣し、官府は紅に官吏を派遣する。興味があつてね、官府の中には紅に寄り添おうとしている派閥もある。もちろん、小さな弱小派閥だけれども。紅はその派閥を見つけられないんだ。そして、自分の信頼する術士を簡単に派遣することも出来ない。今紅が持っている信頼できる術士は少ないし、その術士は紅を守るのに必要な力だからね。紅と官府が寄り添うことが出来れば、もつと紅は生きやすくなる」

悠真は目を見開くことしか出来なかった。秋幸は官府に侵入して、内情を探り、そして解決策を探している。

赤の迷い（5）

秋幸は平凡なのに、悠真には分からないほど深いところで物事を考えている。

「紅が信賴している術士は少ないのは事実。おそらく、陽緋の野江、朱将の都南、朱護頭の義藤、そして先の朱護頭の佐久。紅を支える遠次。からくり師の鶴蔵。そして加工師の柴。赤丸と赤丸率いる赤影。俺が見つけ出したのは、それくらいだけれども、おそらく間違いないでしょ」

悠真は秋幸に尋ねられ、うなづいてしまった。それは紅の内情を伝えることになるが、秋幸は全てを知っているように思えたのだ。

「紅の手駒は少ない。もつと増やさなきゃいけないけれども、そう簡単にはいかない。それに、二年前の戦いで紅の仲間が失ったものは大きい。それでも紅を守るために戦ってくれる、そんな存在は容易く現れない」

また、二年前の戦いだ。と悠真は思った。昨日の昼も、二年前の戦いのことを話していた。その戦いが大きなものであることは分かっていたが、野江が話そうとしなかった。悠真がずっと気になっていたことだ。赤の仲間たちが二年前の戦いで負った傷だ。それは赤の仲間たちが秘密にしたい個人的なことであるが、悠真はそれが気になっていた。

——二年前。

その言葉が呪文のように悠真の中で広がるのだ。佐久が先の朱護頭ということも気になる。日常生活で支障が出るほど佐久は身体を動かすことが苦手だ。いつも誰かが佐久を支えていた。そんな佐久が朱護頭として戦えるとは思えなかった。少なくとも、刀を持ったときに倒れてしまいそうであった。紅がそんな無茶苦茶な任命をす

るとは思えない。全ては二年前に関係している。悠真はそうに思った。

「ねえ、二年前の戦いつて？」

すると秋幸は首をかしげた。

「二年前の戦いを知らない？それはどういうこと？」

秋幸の言葉に悠真はたじろいだ。平凡な印象の秋幸に全てを見透かされているように思えたのだ。そもそも、秋幸の見た目は平凡だがその実は違う。佐久と同様の天才だ。二年前のことを知らないことを話すのは、悠真の正体を伝えるようなことだ。それは避けなくてはならない。なぜか、そう思った。

秋幸はそんな悠真の心情さえ見抜いているように、小さく呟いた。「良いんだ、二年前の戦いの戦いを知らなかったって、もうすぐ死ぬだろう俺には関係の無いことなんだ。ただ、伝えておきたかったんだ。紅に、伝えて欲しいんだ。官府と寄り添うための方法をね。無理なことだとは理解している。だって、紅には手駒が少ないから。信頼できる術士を一人でも遠くに置くことは、紅自身を危険にさらすことだから。それに、役職を得ている野江、都南、義藤の三人を官府に派遣することは出来ない。一人に複数の役職を任せることは可能だが、現状では負担が大きすぎる。そして、年齢を経た遠次が官府に行くことも、日常生活に支障が出るほど身体を動かすことが苦手な佐久が行くことも不可能だろ。でも、一つ案として知って欲しいんだ。義藤が命を惜しまず守る存在が、少しでも生きることが出来るように。伝えてくれないか？俺たちが殺された後、紅と再会を果たせたのなら」

悠真は混乱していた。秋幸は紅を守るための手段を知っている。紅城の中にいたら気づかないことに、外部にいるから気づいているのだ。秋幸は誰かに守られる存在でなく、わずか四人で戦って生き抜いている。だから気づくのだ。外から見て、気づくのだ。

それは紅だつて同じこと。無知な悠真を守るために案を講じてく
れていたのだ。術士の世界は辛く悲しい。隠れ術士の秋幸を通じて
隠れ術士の立場を知り、秋幸の話で正規の術士の立場を知った。そ
して、秋幸の話で紅が生きるための道を知った。

悠真は紅たちに守られていた。

紅が悠真に惣次の石を渡したのは、悠真が自分の身を守ることが
出来るように。

完全な術士にして、悠真の未来を奪わないように。

野江が最初、悠真を紅城へ招くことを拒んだのは悠真を術士にし
ないために。

それでも、しぶしぶながら紅城へ招いたのは、力のある悠真が悪
用されるのを防ぎ、悠真を守るため。

紅城へ行けなければ、悠真は手当たりしだい紅の石で己の力を暴
走させていただろう。それは、瞬く間に悠真の名を世間に知らしめ、
悠真は何者かに利用されていた。都南が悠真を自分の下へ預けるよ
うに言ったのは、悠真に正しい力の使い方を教えるため。佐久が悠
真に義藤と一緒にいるように言ったのは、義藤が悠真に近い立場
だから。義藤が瀕死の重傷を負ったのは、悠真を守るため。悠真は
皆に守られていたことに、ようやく気づいたのだ。気づかなかった
悠真はとても無知で、気づかなかったが故に悠真は幸せだった。紅
たちは復讐に息巻く悠真をどのような目で見ていたのだろうか。愚
かだと思ったのか、是非もないことだと思ったのか、悠真に図り知
ることは出来ない。悠真は紅城で何の不自由も無く、気遣いもなく
過ごすことが出来た。義藤の石を使って力を暴走させても、紅は一
言も怒らなかった。むしろ、笑っていたくらいだ。悠真は紅たちに
守られていた。

悠真も紅の力になりたい。この秋幸の言葉を紅に届けたい。秋幸のためにも、届けたい。悠真はそれを願った。願いをかなえるためには、自らが生き残り、そして四人の隠れ術士も生き残らなくてはならない。官府にある派閥を知っているのは秋幸だ。だから、四人の隠れ術士も生き残らなくてはならないのだ。

それは、義藤を傷つけた隠れ術士を憎む気持ちと相反する気持ち。二つの気持ちの迷いの中で悠真は足を進める覚悟を決めた。

赤の迷い（6）

紅に生きて欲しい。

四人の隠れ術士に生きて欲しい。

二つの相反する願いの中で迷いながら、悠真は答えを探し、紅を思った。

悠真の迷いに気づいているのか、秋幸はそつと話題を変えた。義藤のようなぎこちない話題転換でなく、秋幸らしい話題の切り替えだった。

「それにしても驚いたな。噂には聞いていたけれど、本当に義藤が朱護をしているんだから。昔の義藤は紅を心から憎んでいたから。先代が死ねば、色神も別人か。それとも、今の紅に義藤の個人的な感情があるのか分からないけれどね。俺たちが知っているのは、もられていく前の義藤だから」

秋幸は義藤に目を向けて小さく笑った。

「義藤と一緒に育ったのは、本当に子供の頃だけだけど、俺は義藤に鍛えられたな。そのたびに、忠藤が助けてくれていたよ」

悠真は首をかしげた。義藤に兄がいた。死んだ兄だ。義藤が忠藤の死に対し、深い後悔の念を抱いていることは知っていた。

「忠藤？」

悠真が尋ねると、秋幸は苦いものでも噛み潰したような表情をした。「忠藤は落ち着いた、とても優しい人だった。死んだらしいけどね。分かりやすいだろ。忠藤と義藤の二人合わせて忠義になるんだから。義藤は嫌っていたよ。何に忠義を尽くすんだって」

秋幸は義藤をじつと見つめていた。それは、義藤自身も話していたことだ。秋幸と義藤に面識があることは紛れも無い事実であった。

「今でも信じられない。忠藤が死んだなんて。俺は忠藤が大好きだったんだ。子供の頃の俺は、とても寂しがり屋だったから、忠藤はいつも一緒にいて、助けてくれていた。俺が事故に巻き込まれたとき、庇ってくれた。本当に信じられない。死んでしまったなんて。それでも、義藤が生きていてくれただけで良かった。だからね、死なせたりしないよ。義藤はこんなところで命を落としちゃいけない存在なんだ」

悠真は思った。彼らは本当に義藤の子供の頃を知っているのだ。一緒に育ったのだ。秋幸が辛そうな表情をするから、悠真は話題を変えようと考えた。けれども、不器用な悠真は、秋幸のように普通のことを言えない。

「俺は悠真だ。言っておくが、小猿じゃない」

悠真が頭を捻らせて考えた言葉に秋幸は笑った。

「俺は秋幸。知っているだろうけど」

秋幸は人の好きそうな笑みを浮かべた。

「秋幸たちは殺されるのか？」

悠真は恐る恐る尋ねた。秋幸はそんな悠真を見て笑った。

「きつとね。何度も言ったとおり、俺たちは紅の命を狙った。朱軍や陽緋、赤影に殺されても文句は言えない」

悠真は、秋幸のことが分からなかった。どうして、自分たちが殺されると簡単に言えるのだろうか。

悠真と年齢の近い秋幸は、とても話しやすく、悠真の中ではばらだつた物が一つにつながり始めた。義藤のことが分かり始めた。理解すれば理解するほど、悠真はこの状況を打開するために頭を働かせた。二つの相反する願いをかなえるために、どうすれば良いのか、悠真は必死で考えた。どうすれば秋幸たちも、紅たちも助かるのか。一体誰が悪いのか、なぜ悠真の故郷は滅びなければいけないのか、なぜ祖父と惣次は死ななくてはならなかったのか。何もかもが変だった。秋幸たち隠れ術士も、紅も、もちろん死んだ祖父

や惣次も悪い人で無いのに、なぜこのようなことになったのだろうか。悠真には分からない。理解できない。なぜ、秋幸たちが紅に刃を向けたことは事実だ。けれども、秋幸たちが死ぬことには反対だった。

「誰もがおかしい」

悠真は言った。秋幸が不思議そうに悠真を見ていた。

「思うんだ。紅たちと、秋幸たちが敵対する必要はないんだ」

秋幸は言った。

「許せるのか？俺たちは大切な人を守るために、紅を殺そうとした。

……それに、他にも多くの人を殺したんだ。村を滅ぼしたんだ」

秋幸は目を伏せ、とても苦しそうな表情を見せた。悠真の故郷を滅ぼした秋幸たちは、罪を負った。決して逃げる事が出来ない罪を負ったのだ。滅ぼした村のことで苦しむ秋幸は、そのなかの生き残りが悠真だと知らない。悠真が復讐をするために紅城まで足を運んだことを知らない。復讐のために紅城に来たから、二年前の戦いのことを知らないという事実を知らない。

大切な人を殺された悠真の傷

罪の無い人を意に反して殺した秋幸たちの傷

どちらも大きな傷だ。秋幸は平凡な天才だからこそ、大きな罪悪感を覚えているのだ。何が悪いのか。秋幸たちを殺せば解決するのか。悠真は何も分からなかった。

赤の迷い（7）

秋幸は大きな後悔をしている。一緒に山で暮らしていた大切な子供たちを守るために、腐った官吏の言いなりになり、一つの村を滅ぼした。命は平等だと、火の国の民は口をそろえて言う。それが事実であるか、実際にそのように扱われているのか悠真は分からないが、命は平等だと言うことは周知の事実だ。その周知の事実が、秋幸を苦しめていた。同時に秋幸が真面目で優しいからこそ苦しむのが術士としての力の使い方だ。

「俺たちは許されないことをした。力を持っている以上、その力を正しく使わなくてはならない。いかなる理由があろうとも、俺たちは力の使い方を間違えた。間違っていると分かっている、こうするしか無いんだ」

悠真は、諦めたような秋幸の言葉が心に残った。秋幸は生きることが諦めている。四人の隠れ術士は、優れた力を持っている。もし、彼らと紅が手を取り合うことが出来れば、全ての問題が解決するように思えるのだ。彼らは悪い人で無い。紅を助けることが出来る力を持つ存在だ。

同時に、悠真を悩ませるのは故郷のことだ。失った故郷、そこで死んだ人々。生き残ったわずかな者。彼らは悠真を見て、何と云うだろうか。

復讐しろ。

もし、そのような願いがあつたら、悠真は彼らを裏切ることになるのだ。

ここで悠真が彼らを許せば、死んだ村の人に、祖父と惣次に顔を

合わせられない。それでも、悠真は憎むことが出来ない。彼らは許されないことをしたが、悪人でないのだ。

復讐に息巻いていた自分が恥ずかしい。あの時の絶望はすぐそこにある。あの時の悲しみもすぐそこにある。それでも、悠真は目の前にいる気の良い人を憎めない。

どうして良いのか分からず、感情の整理が出来ない。何を選んでも、きっと悠真は後悔するのだ。

なぜ復讐しなかったのか。

なぜ復讐したのか。

どちらにしても、その決断は悠真を苦しめるのだ。悠真は秋幸を見て、このまま秋幸が殺される場面を想像した。紅は残酷な殺し方をするような人ではない。しかし、他の目もある。紅に刃を向けたことは許される罪ではない。罪を明らかにして、処罰を下し、紅の権威を示さなくてはならない。そのために、首をさらすことさえ厭わないかもしれない。

さらされた四人の隠れ術士の首。空虚な目がひたと悠真を見つめる。動かないはずの口が開き、言うのだ。

——それでいい。

——死ぬことを覚悟していた。

彼らは恨んだりしないだろう。きっと、殺されても今の状況を肯定する。それでも悠真は苦しかった。彼らの内実を知っているのは悠真だけなのだ。紅は知らない。野江も、都南も佐久も知らない。

——それでいい。

——これが隠れ術士の運命だ。

——力の使い方を間違えたのだから。

そもそも、隠れ術士を作り出したのは誰なのか。なぜ、四人は隠れ術士にならなくてはならなかったのか。彼らには、正規の術士にな

る選択肢が無かったのだ。孤児として生まれ、火の国から存在を認められず、その力を強者に利用される道しか残されていなかった。利用されるしか残されていない道に立たせたのは火の国だ。そ利用されるしか残されていない道の上で、力の使い方を考える、と説くことが果たして可能だろうか。

——それでいい。

——子供たちを助けたかったんだ。

彼らは子供たちのために利用される道を選んだ。果たして、このまま彼らが紅に殺されて、人質は救われるのだろうか。救われる前に殺されるかもしれない。生き残ったとして、心に深い傷を残すに違いない。当然だ。親のように慕っていた者が、処刑されたとなれば、紅に対する憎しみさえ芽生える可能性がある。

何が正義なのか。何が悪なのか。

何が正解なのか。何が間違いなのか。

果てしない迷いの中、悠真は決断した。今、この追い詰められた状況で全てを判断するのは難しい。

だから、判断を先送りにしたのだ。

悠真は秋幸に言った。

「今は、生き残ることだけを考えるんだ。紅たちは悪い人じゃない。紅も野江も都南も佐久も、本当に火の国のことを、火の国で生きる民のことを考えてくれている。紅が許さないのなら、その時に罪を償えばいい。今すぐに諦めなくていい。生きることが諦めないで欲しいんだ」

判断を先送りにして、結果が変わるとは限らない。ここで生き残っても、紅が罪を申し渡せば、簡単に秋幸たちの命は奪われる。紅が命じれば、野江たちは命を奪うことを躊躇わない。野江たちが躊躇って、義藤が反対しても、赤丸が命を奪うだろう。

それでも、秋幸たちが許される可能性は皆無ではない。そして悠真自身も、時間がたってから、気持ちを整理してから、彼らに復讐を果たすべきか考えたかったのだ。一時の感情で、愚かな決断をしなく区内のだ。

秋幸たちがこのような行動をとったのは、己の大切な人を守ろうとしただけのこと。確かに秋幸たちは利用されることを拒むことが出来た。しかし、拒めば秋幸たちの大切な人の命を奪うことにつながる。もし、悠真だったらどんな行動をとるのか。それは想像するに容易い。悠真も祖父を守るためなら、見ず知らずの人の命を奪うことを選ぶ。今は、この場から生き残ることだけを考えればいいのだ。判断は紅に任せればいい。

「どうやって生き残るんだ？俺たちは人質を捕られている。自由が利かない。人質を見捨てるのなら、とっくに見捨てている。見捨てることが出来ないから、俺たちは愚かな官吏に利用されて紅に刃を向ける故ことを覚悟したんだ」

秋幸が悠真に言った。つまり、人質がいなければ、秋幸たちは紅に敵対する理由はない。全ての鍵はそこにある。

赤の手紙（１）

人質がいなければ、秋幸たちは紅に敵対する理由はない。人質を助
けなければ、秋幸たちは紅に刃を向け続ける。半ば意地のように、
秋幸たちは紅と戦い続けるのだ。

——人質を助けるしかない。

秋幸たちは人質という牢獄に囚われているのだ。

秋幸たちを救うには、人質を助けることが秋幸たちの解放につなが
るのだ。

「人質を助けるんだ」

悠真は言い放ち、悠真の言葉に秋幸は立ち上がった。秋幸は苛立ち
を見せていた。

「それが出来ないから、俺たちは紅と敵対することになったんだ」
秋幸の言葉はもっともな事。賢い秋幸が解決策を見出せなかったか
ら、このような状況が生じたのだ。

悠真は考えた。どのようにすれば、秋幸たちが自由に動けるのか。

考えると、紅の姿が悠真の脳裏に浮かんだ。紅が悠真に手を差し
伸べている。紅はきつと、秋幸たちにも手を差し伸べてくれる。

「助けを求めるんだ。野江たちに助けを。秋幸たちが自由に動けな
いのなら、野江たちに助けてもらおう」

無謀なことかもしれない。けれども、野江たち外部の人が人質を助
けてくれれば、秋幸たちは自由になれる。それに、まさか野江たち
が人質を助けるとは、誰も予想していなかった。野江の強大な力
があれば、人質救出も可能なこと。予想していないところから攻め
入られれば、動揺し、勝利の色は薄くなる。

秋幸が再び腰を下ろして言った。秋幸の声は、未だに諦めの色が強い。

「だから、どうやって助けを求めるんだ。それに、陽緋たちが動く保障もない。俺たちは敵なんだ」

何を言っても負の言葉で返す秋幸に、悠真はいらだった。

「もつと前向きに考えろよ。大丈夫、野江たちが助けてくれる。紅はそういう人なんだ。秋幸だって言っていただろ。義藤が信頼する紅のことを。信じるんだ。紅のことを」

秋幸は深く溜息をついた。

「どうやって、紅に知らせるつもりだ？」

悠真は無知な小猿だ。石の力を使えば良いと漠然と思っていた。

「石の力で何とかならないの？」
すると秋幸は息を吐いた。

「確かに、出来なくはないけれども、紅に連絡をするのは無理だね。相手が同じ石の破片を持っていないといけないから。それに、俺たちは自由に石を使えるんじゃない。石はあいつが管理しているから」
悠真の浅はかな考えは、すぐに底をついた。しかしすぐに、新しい考えが浮かんだのだ。

「俺が手紙を書くよ。それを届けばいい」

単純な悠真は、単純な答えしか見出せない。そして秋幸は悠真よりさらに深いところで物事を考えているのだ。だから躊躇う。

「誰がそれを真の手紙だと信じる？悠真が俺たちに脅されて書いた偽物だと考えるのが普通だ。それに、畏かもしれないと警戒する」

秋幸は平凡な印象なのに、冷静で頭が回る。だから、躊躇うのだ。

「俺と紅たちしか知らないような内容を入れて。それを届けばいいんだ」

悠真は誰が届ける、どのように行く、などの細かいことを悠真は考えていない。それでも、何とかなると信じていた。悠真の前向きさを支えているのは、紅に寄せる大きな信頼。紅の赤色を、赤い声を、赤い空気を信じていたのだ。今は突き進むしかない。この状況を打

開するために、この状況から先に進むために、今は突き進むしかないのだ。

「――俺が行くよ」

根拠も方法も定かでない悠真の作戦に、誰かが声を発した。悠真が声の主に目を向けると、それは眠っていると思っていた冬彦の言葉だった。

「冬彦、気がついていたのか？」

秋幸が言った。

「まったく、千夏も酷いよな。無理矢理眠らせるんだから。目が覚めたら、秋幸と小猿が話しているんだ。少し気になって、盗み聞きしていたんだ。良いじゃないか。俺が行く」

冬彦は答えて、まっすぐに悠真を見た。悠真より年下であろう冬彦は、小柄だが気の強そうな顔立ちをしていた。快活で、幼さのこる仕草。その幼さは前向きさを作り出す。

「俺が行く。俺が紅のところへ行く。奴に俺は動けないと思われているから、俺が行くのがいい。秋幸、俺に任せろ」

冬彦は壁にすがりながら立ち上がった。義藤に斬られたのは昨夜のこと。満足に動ける状態でないことはあきらかだが、それでも冬彦は行くと言い放った。そして立ち上がって、冬彦は言った。

「心配するな。俺が紅のところへ行く。紅が皆を助けてくれれば、春市や千夏が従う必要もないだろ。その後、紅が俺たちに罰を下すのなら、甘んじて受け入れればいい」

冬彦はとても強い存在だ。悠真より年下だとは侮れない。戸惑う悠真に冬彦は言った。

「早く用意しろ。俺は、紅を信じる。俺は、義藤とは面識がほとんどないけれど、春市や千夏、秋幸も義藤のことを信頼していたんだろ。その義藤が命を賭して守ろうとした存在が紅だ。皆が信じる義藤が信頼するんだ。紅を信じてもいいだろ」

秋幸は何も言わなかった。しばらくした後、秋幸は何かを決心したかのように言った。

「こちらの方は上手く誤魔化しておく。悠真、紙と筆を用意するか
ら手紙を書いてくれ。もし、冬彦が紅に殺されるようなことがあれ
ば、俺は悠真を恨むからな」

秋幸の言葉に躊躇いはない。彼ら兄弟は深い絆で結ばれ、己の命よ
りも兄弟の命を優先する。義藤や野江たち赤い羽織の人が、己の命
よりも紅を優先するように、紅が己の命よりも火の国の安寧を優先
するように。

赤の手紙（２）

紅へ手紙を書いてこの現状を伝える。それは突拍子もない作戦だ。紅が信じる保障は無い。それでも悠真は紅を信じることにしたのだ。野江と都南の力を信じることにしたのだ。

この手紙を届ける冬彦にも大きな危険が伴う。問答無用で斬られる可能性もある。相手は、村を一つ滅ぼし、義藤を追い詰めて勝った存在。とても危険な存在だ。そして、紅であれば冬彦が持つ才能に気づくはずだ。白に愛された、恐ろしいほどの才能に……。

悠真は秋幸が用意してくれた紙と筆で紅に手紙を書いた。

紅へ

義藤と俺はここにいます。俺に詳しい地理は分からないから、どこかは、手紙を持っていた冬彦に聞いて欲しい。俺は無事だし、義藤も彼らが助けてくれた。一応助けてくれた、という表現が正しいのかもしれない。義藤は愚かな俺を庇って深い傷を負い、手当てをしてもらったが白の石が必要な状況だ。そう彼らが言っていた。

彼らというのは、義藤と戦った四人の隠れ術士で、春市、千夏、秋幸、そして冬彦。

四人が義藤と戦って、俺たちをここに連れてきた。けれども、義藤を助けてくれている。彼らは義藤の幼馴染だから。紅と戦うのも義藤と戦うのも、彼らの本意じゃない。四人とも優れた才能を持って、四人ともとても優しい人だ。紅に刃を向けることの危険性も、この先に生じるだろう自らの死も全て覚悟している。隠れ術士として、利用されるしか選択肢が無かったんだ。

隠れ術士の四人は人質を捕られている。大切な、一緒に生活している子供たちを人質に捕られて、彼らは戦っている。それが間違いだと知っていても、紅たちが自分たちを殺すと知っていても、彼らは人質を助けるために戦っている。

紅、聞いて欲しい。人質さえなければ、彼らは自由だ。その後、紅に罰を受ける覚悟もしている。紅が死を申し渡すなら、甘んじて受け入れる覚悟をしている。それだけ必死なんだ。人質を助けるために。

今なら分かるんだ。俺が復讐を果たすと息巻いて、野江と一緒に紅城へ足を運んだときから、俺は紅たちに守られていた。俺はどうしようもない田舎者で、皆が考えているようなことが分からなかった。そんな俺が言うのは間違っているかもしれない。彼らは紅に刃を向けて、そして義藤を傷つけた。俺の村を壊滅に追い込んだ。それでも、助けて欲しい。

俺はずっと分からなかったんだ。一体、何が正解で、何が間違いなのか。無知で無力な俺は何も出来ず、この状況に巻き込まれた傍観者でしかない。紅がくれた惣次の石を使えば、こんなことにならなかったかもしれない。そもそも、紅城へ足を運ばなければ、あの夜、囹となる義藤と一緒に行かなければこのような事にならなかったかもしれない。俺は過ちを犯し、紅たちに大きな迷惑をかけた。今度は迷惑をかけたくないんだ。

彼らを殺さないで欲しい。

彼らは隠れ術士として戦ったんだ。隠れ術士として、選択肢が無かったんだ。彼らは優れた術士で、きつと紅の力になってくれる。俺は、信じているんだ。

助けて欲しい。彼らは悪い人じゃないんだ。紅や野江、都南、佐久が少しでも労を割いてくれるのなら、彼らは自分で踏みとどまることが出来る。今、彼らを罰しても何にもならない。彼らの上に立つ存在を捕らえなければ何にもならない。だから、助けて欲しい。

俺は分かったんだ。

俺は無力で無知だ。

厳しい鍛錬を積んだ義藤でさえ、その勝利は万全ではない。都南と義藤の鍛錬を見たけれど、実際の戦いは甘いものじゃない。紅の石だけじゃなくて、色の石は強大な力を持っているんだ。俺はようやくそれが分かったんだ。

石の力は、術を使う人間に左右されるんだと、俺はようやく分かったんだ。

四人の隠れ術士は、優れた力を持った術士だ。それは、紅たちを支えてくれる力になるはずなんだ。助けて欲しい、と願うことは間違っているかもしれない。けれども、俺は助けて欲しいと紅に泣きついたいんだ。四人の隠れ術士の真意を知ったから、俺は彼らに復讐しようと思わないんだ。助けて欲しい。紅、助けて欲しいんだ。

愚かな小猿 悠真

紅の元へこの手紙が届くことを悠真は願っていた。手紙が届けば、紅は必ず動いてくれる。そう信じていた。悠真が知る紅は、様々な顔を持つ存在だ。けれども、その正体は、色神になってしまった普通の女性。歴代最強の陽緋である野江も、普通の女性だ。朱将の都南も、佐久も普通の人だ。決して神ではない。邪でもない。動いてくれる。助けてくれる。悠真は信じて、紙を折った。

「頼む」

悠真は冬彦に手紙を渡した。問答無用で近づいてくる冬彦を斬り捨てる可能性もある。それでも悠真は信じていた。紅を、紅の仲間たちを。よろめきながらも、立ち上がる冬彦を秋幸が支えたが、冬彦はそれを振り払い足を進めた。

「秋幸、お前も死ぬなよ」

冬彦が年上であるはずの秋幸に上から目線で口にした。

「当然だよ」

秋幸は苦笑し、悠真は立ち去る冬彦を見送った。

赤の幻覚（1）

ただ待つことしか出来ない悠真は、一人地下牢の隅に蹲った。秋幸は立ち去った冬彦がいるように誤魔化すために上へと戻り、その他、春市や千夏の動きを探っていた。悠真は何も出来ない。

「義藤、これでいいんだよな」

眠る義藤に声をかけても返答は得られない。義藤に一刻も早く適切な治療が必要なことは明らかだ。燃えるように熱い義藤の身体を冷やすため、悠真は桶の水に布を浸した。先ほどまで聞こえるほど荒かった義藤の呼吸音は、とても静かになっていた。今にも消えそうな義藤の呼吸音が、悠真に一抹の不安を覚えさせた。

「義藤、紅が助けてくれるから。それまで、頑張ってくれ」

悠真は義藤に言った。悠真を庇い、傷を負った友に言った。悠真は大きな罪を背負って生きていけるほど強くなかった。春市、千夏、秋幸、冬彦の四人が罪を負うことも嫌だった。

「義藤……」

悠真は祈った。祈ると同時に、自分に何が出来るのか考えた。自分出来ることがないか、自分しか出来ることがないか、必死に考えた。それしか出来ないのだ。悠真は頭を使うのが苦手なのに、今大きなことを考えている。頭が割れそうなほど疲れていた。その疲れが引き金となり、ゆっくりと眠気が悠真を誘った。

それは、唐突な眠気。

辺りが煙で覆われたように見えた。

悠真の視界は白い煙で満たされ、悠真の瞼はゆっくりと重くなっていた。現実と幻覚の間で、悠真は義藤の姿を見た。そして、安堵した。

義藤がそこに立っていたのだ。

血で汚れた服を着ていない。そこには元気な義藤が立っていた。

「義藤……」

悠真は義藤を呼び、立つ義藤に手を伸ばした。すると義藤は静かに膝を折り、悠真の頭に義藤の手が乗せられた。横たわる悠真に、義藤は微笑んだ。

「よく頑張ったな」

義藤の手は温かく、悠真は安堵した。

「良かった、義藤。無事だったんだね」

夢と現実の狭間にまどろみながら、悠真は義藤に言った。すると義藤はいつもと変わらない笑みを悠真に向けたのだ。

「案ずるな。まもなく紅が助けに来る」

義藤はいつもと変わらない。幻覚の中であつても同じだ。

「ごめんね、義藤」

悠真はそれ以上言えなかった。悠真よりも、義藤の方が辛そうな表情をしているからだ。

「大丈夫だ。小猿が気にするようなことじゃない」

辛そうな表情をした義藤は、一つ息を吐いた。悠真の身体の内は、どんどん奪われていく。重たい身体。激しい眠気。これが夢なのか、現実なのか分からなかった。

「ねえ義藤。秋幸たち、助かるよな」

悠真は義藤に尋ねた。義藤と四人の隠れ術士は幼馴染だ。義藤なら、彼らを助けるために何をするだろうか。

「紅への裏切りかもしれないけど、俺は秋幸たちに生きて欲しいんだ」

義藤に問うのは、自分の行動を正当化するためだ。義藤が可と言えば、許されるように思えたのだ。義藤は困ったように微笑んだ。

「大丈夫、大丈夫だ。春市、千夏、秋幸、冬彦がどのような人なのか、俺は良く知っている。——まさか、官吏に利用されていたなんて、想像もしていなかった。一步間違えば、俺も彼らと同じ道を歩

んでいた。大丈夫、紅は助けてくれる」

義藤の言葉は温かい。声は優しい。悠真は嬉しかった。身体が重く、悠真は地下牢の床に横たわった。床の冷たさも感じない、穏やかなまどろみの中に悠真はいた。

「義藤、俺は」

横たわる悠真は義藤を見上げた。そこには、抜き身の刃のようで作り物のような義藤がいた。優しい義藤がいた。

「俺は、義藤のことが苦手だったんだ。だって、義藤強いだろ。それが怖かった。でも、間違っていたんだ。義藤はこんなに温かく、こんなに優しいんだ。だから義藤。無事で良かった。本当に良かった」

悠真は義藤の無事に喜んだ。嬉しくて、これまでの不安が消えたように思えた。

「簡単に死んだりしないさ。紅が簡単に死なせたりしない。大丈夫。そばにいる」

義藤は笑った。すこし、寂しげな義藤の笑いだった。

全ては幻想の中のこと。悠真は義藤のことが気になりすぎて、そのような夢を見たのかもしれない。

「少し休め」

義藤の声が悠真の中で響いた。そして悠真は眠りに落ちていく。ゆっくりと、ゆっくりと眠りの中へ落ちていくのだ。

赤の幻覚（2）

夢を見た。

白い煙の中の義藤は徐々に消え、悠真の目の前から全てが消えた。

夢の中に色は存在しなかった。色の無い世界は、何も無い透明な空間が永遠と広がっているのだ。白かと思えば、黒になる。黒かと思えば青になる。色が無いということは、見方によっていろんな色に見えるということだ。そこは不思議な世界。

——悠真

夢の中で紅が悠真を呼んだ。そこは色の無い世界。

聞こえる声が赤の声かと思って、悠真は目を凝らした。鮮烈な赤を、高圧的な言葉を、悠真は待った。義藤を守るために叫んだ赤は、今何をしているのだろうか。

「赤？」

赤い髪を、赤い唇を、赤い瞳を、悠真は待った。赤い声を、赤い空気を待った。高圧的で、強い力を持った赤が現れることを待った。

——あなたは赤に染まりすぎている。駄目よ。赤だけに染まっては駄目よ。赤は常に悠真を狙っている。それでも、一つの色を選んで駄目。力を貸してくれるというのは今だけのこと。聞いてちょうだい。

それは紅の声だが、紅でない。悠真はすぐに分かった。それは無色な声。

「誰なんだ？」

誰か分かっているけれど悠真は無色な声に尋ねた。

——大丈夫よ。全ての色があなたを狙い、あなたに従うわ。あなた

は私が選んだ、私の色を司る人間。また、会いましょう。
色の無い無色な世界は、無色な声の世界だ。

悠真は色の世界を思った。赤を思った。

「待てよ！」

呼び止めたのは無色のことだ。

「待てよ。あの時、俺が赤に染まることを拒んだのは、あんたなんだな。あんたが、義藤を！」

悠真に赤に染まるな、という声。その声が赤を拒んだのはあきらかだった。

——おだまりなさい。

声が悠真に言った。

——あなたは、何も知らないの。

姿も見せない声が悠真を叱責した。

——あなたは自分のことを知らない。

姿も見せない声が悠真に告げた。

——はつきり言って、私にとって紅や義藤はさして興味もない存在なのよ。今の紅は良い子だと知っているけれども、あなたと比較するのなら、私はあなたを選ぶ。分かってちょうだい。

悠真は愕然とした。この声の主が誰なのか、皆目検討もつかない。

ただ、悠真にとって好意的であることは事実だ。

「分かんないよ。一体、何がどうしたっていうんだ？」

何も無い空間。様々な色がめぐる場所で、悠真は声に問うた。声は姿も見せずに答えた。

——私を狙う色は多いわ。赤もその一人。けれども、私が赤の国にある火の国に姿を見せたのは、どこかで赤を信頼してるかもしれないわね。分かってちょうだい。あなたは存在を知られたの。赤だけじゃなく、全ての色にね。このような危機は序の口よ。私はあたなを気に入っているの。簡単には手放したくないのよ。
悠真は理解できなかった。

「どうということなんだ？」

問うた悠真に声は笑った。

——私は他の色に捕まるわけにはいかないの。赤が気に食わない紅を殺したように、私もあなたを殺すかもしれないわよ。

悠真の思考を言葉が飛び交った。己が殺される。この声の主に殺される。

——私はあなたの色。そして、あなたは私の色を司る人間。気をつけなさい。

悠真は声に尋ねた。

「俺は術士にもなれない存在だ。何がどうなっただったんだ？」
悠真は赤の術士に憧れていた。自らに術士の才覚がないと知った時が、悠真にとって最初の挫折だといえるだろう。

——姿を見せるつもりは無かったわ。本来なら、私の色を持つ人間は普通の人間として生涯を終えるのよ。けれども今回は仕方なかったの。あなたを助けるために、私は姿を見せ、赤に染まった。あなたの感情を抑えるために、赤に染まり紅の石を暴走させた。それでも、私は赤に染まっただけ駄目なのよ。

「何で、赤を嫌うんだ？」

声は悠真に教えた。

——赤を嫌っているのではないのよ。私は何色にも染まることは許されないの。何色にも覇権を握らせることは出来ない。赤は、強い色だという人もいるけれども、本当は違うのよ。赤は愛情深い色。だから、義藤を守ろうとするの。愛情深い赤が選んだ色神紅だから、あなたを助けてくれるのよ。

「赤を嫌っていないのに、どうして赤を拒むんだ？赤はあんなに叫んでいた。泣いていた。義藤を守ってくれと叫んでいた。なのに、なのにどうして？」

悠真の言葉に声は黙った。そして、しばらくしてゆっくりと口を開いたのだ。

——あの時、義藤を犠牲にしてここに來たから、敵の正体が分かつ

たでしよ。敵の正体が分かり、紅は官吏を追い詰めることが出来る……。なんて言うのは、後からつけた口実ね。さつきも言ったでしょ。私は義藤よりもあなたを選んだ。あの時、赤に染まっては、あなたは赤から本来の色に戻れなくなる。だから、私は義藤を見捨てたの。私のことを蔑むのなら、好きになさい。私は、何も後悔をしていないのだから。

声はそう言い、存在感を消した。

夢は恐ろしいほどの現実味を持っている。

これが悠真の妄想だとしたら、それは恐れ多いことだろう。まるで、自分が紅に匹敵する存在。悠真は妄想の中でそのように思っているのだ。

赤と友（1）

固い床の上で骨がきしんだ。身体が驚くほど冷たくなって、灯りは燃え尽き、地下牢の中は暗闇が深く、天井の木枠の窓からこぼれるか僅かな光では、かろうじて義藤の顔が見える程度だった。

「俺、寝てたのか……」

悠真は夢と現実の狭間で見た幻覚を思い出していた。

義藤の幻。

夢の中の声。

全てが幻覚の中へと消えて行き、少しも現実と思えなかった。悠真は思わず自分の頭に手を伸ばした。義藤の手のぬくもりが、今もそこにあるように思えたのだ。義藤の声が今でも胸の中で響いている。義藤の笑顔が目には焼きついている。

悠真は身体を起こした。そして、このような状況でも眠れる自分に、思わず苦笑した。田舎者の自分は、鈍感なのかもしれない。疲れているとはいえ、急激な眠気に負けて眠ってしまうなど、ありえないことだ。秋幸たちが敵で無いと分かってても、ここは官吏の屋敷だ。官吏は紅に敵対し、紅の命を狙っている。素性の定かでない義藤を見下し、紅を無能な色神だとしている。ここは紅の敵の屋敷。気を抜いてよい場所ではない。現実、状況は何も好転していないのだから。

この場に、野江や都南、佐久がいたら、何と言っだろうか。都南は悠真のことを小猿と笑っだろう。野江は庇ってくれるだろうか。佐久は共感してくれるだろうか。悠真は赤の仲間を思い出し、義藤に目を向けた。

「義藤」

悠真は四つ這いで義藤に近づいた。

幻覚の中で義藤は笑っていた。悠真の頭を義藤は撫でた。

——案ずるな。

幻覚の中の義藤は笑い、悠真を気にかけていた。まるで、義藤が最期の別れを告げたように思えたのだ。

「義藤！」

悠真は不安に襲われ、義藤にすがった。

義藤は悠真が寝入ったときと同じ姿勢で横たわっていた。汚れて切れた赤い羽織を上からかけて、ござの上で眠っていた。

何も変わっていない。

はだけた着物の間から見える包帯は、血で汚れていた。顔も血で汚れている。静かに動く胸は、彼が生きていることを示していた。

何も変わっていない。

悠真は義藤の額に乗せた布に手を伸ばした。布を桶の中の水に浸して、絞った。

「良かった、俺、義藤が……」

死んでしまったかと思った。という言葉を悠真は飲み込んだ。義藤は死んでいないが、辛うじて生きているという状況から何も変わっていない。

（義藤が死ぬ）

その言葉は、口にしてしまっただけで現実になってしまうように思えたのだ。

「大丈夫だよな。義藤。俺は何も出来ないけど、これで大丈夫なんだよな」

悠真は眠り続ける義藤に尋ねた。返事はないのは分かっている。ただ、悠真は自分自身に言い聞かせるように言ったのだ。

「大丈夫だよな」

悠真は念を込めて、もう一度言い聞かせた。

布を再び義藤の額に乗せたとき、悠真は義藤の頬の熱が引いていることに気がついた。悠真が眠るまで、燃えるように熱かった義藤の身体の熱が下がっている。

「義藤？」

思わず悠真は義藤の手首をつかんだ。何が生じたのか、悠真は理解できないのだ。手首をつかんだ指の先から、義藤の心臓の鼓動を感じた。

「良かった……」

最悪の事態でないことに、悠真は安堵した。依然として義藤は目覚めていないのに、最悪の事態でないことに安堵した。紅たちが助けに来てくれるまで、それまで耐え抜かなければならない。

義藤はまだ生きている。危険な状態であっても、まだ生きている。それだけが救いだっただけだ。

「義藤、俺、頑張るから。頑張るからさ」

悠真は義藤に言った。それは自分への戒めの言葉。逃げないように立ち向かうように、義藤に誓うのだ。

「俺、何も出来ない小猿だけど、全力を尽くして頑張るよ。だから、だからさ、一緒にいてくれよ。紅が助けに来てくれて、ここから脱出したら、俺に教えてくれよ。いろんなことを。俺が、一人前の大人になれるように、教えてくれよ」

悠真は義藤の手を握った。眠り続ける義藤が消えてしまわないように、悠真は祈っていた。もうすぐなのだ。もうすぐ、紅が助けに来てくれる。悠真は信じていた。

大切な友、義藤が命を失うことが無いように、悠真は祈っていた。

赤と友（2）

階段から灯りを持った人が降りてきて、悠真は義藤の前で身構えた。敵だと感じたのは、最初のこと。意識の無い義藤を守りたいという願いからの行動だ。

「大丈夫か？」

その声に安心して、悠真は息を吐いた。それは、秋幸だった。秋幸は消えた灯りに再び火をつけ、牢の扉を開いた。普通の印象の秋幸の言動は、どこかで悠真を安心させるのだ。

「義藤は？」

秋幸は一番に義藤の心配をした。

「大丈夫みたい」

悠真が応えようと、秋幸は牢に入り、腰を下ろした。

「良かった。千夏がいなきゃ、義藤の身に何かあったときに対応できないから」

秋幸は安心したようだった。幼馴染という理由で、秋幸は義藤を思ってくれている。敵が彼ら四人でなければ、義藤は苦戦することは無かっただろう。彼らはそれほど優れた実力者なのだから。しかし、敵が彼らでなければ、義藤は敵から助けられることは無かっただろう。義藤が四人と戦ったことが幸運なのか、不運なのか悠真には分からなかった。

「二人は？」

悠真が尋ねた。春市と千夏は、紅たちに殺されるのを覚悟で行動している。年長である二人だからかもしれない。悠真はそんな二人が心配だった。春市と千夏は、秋幸と冬彦を助けようとしている。そして、秋幸は彼らの意思を尊重しつつも、自らの死を予測している。すれ違う思いやりであった。

「春市と千夏はもう一度、紅の暗殺に繰り出している。既に、暗殺

とはいえないな。だって、俺たちが紅の命を狙っていることが紅に知られてしまっているんだから。知られてしまえば、紅も警戒する。一度目よりも、二度目の方が成功率は低い。例えば紅の前に義藤がいなくても、陽緋や朱将が警護に当たるはずだから。そんな中で、再び攻撃を仕掛けたところで負けるのは明らかだ」

秋幸はゆっくりと息を吐いた。その目が空を見ていて、悠真は悲しかった。秋幸は何を思っているのだろうか、そう考えるだけで辛かった。

「春市と千夏はすぐに動いているわけじゃないと思う。きっと二人は今頃準備をしている」

秋幸は言った。そして、少し間をおいて続けたのだ。

「それで、どうして昨日の夜に紅はいなかったんだ？俺たちの計画は外部に漏れていなかったはずだ。もしかして、知っていたのか？だから、紅は隠れていたのか？なら、何で義藤はいたんだ？危険だと知っていて……もし、それが本当なら、紅は全てに覚悟を持ち、己の役割と、敵を追い詰める術を知っている」

悠真は秋幸を見て、彼が頭の良い人だと分かった。秋幸は、紅たちの本心を見抜いているのだ。

悠真は兄弟を見て、それぞれの雰囲気を感じていた。彼らは異なる性格をしている。だからこそ、上手くいくのだ。互いに互いが足りない所を補いあっている。

長男の春市は、兄弟から信頼を集めている。長兄という単純な理由だけでなく、表に出さない不器用な優しさがあるから。武将らしい性格で、最も強い力を持つ。

兄弟のうちで紅一点の千夏は、医学の知識を持つ。春市の隣で、春市とともに兄弟を見守り、親のいない弟たちにとって母のような存在だ。時に厳しく意見を言い、時に包み込むような大きさを持つ。春市も、千夏をとっても信頼している。

秋幸は普通だ。普通という表現が最も正しい。特殊な力を持っていると思えないくらい普通で、悠真よりも年上なのにとても気さくだ。言葉も普通。態度も普通。なのに、時折、驚くほど深い場所で物事を考えている。今回の紅の件もそうだ。そして、春市と千夏の覚悟を分かっているから、悠真と共に残った。

冬彦と悠真はほとんど言葉を交わしていないが、冬彦が紅の元へ行ったことで彼の人となりが分かる。末の弟だからかもしれない。無茶をする性格。無鉄砲とも思える行動は、時に固まった兄たちの足を動かす力を持つ。一直線で、感情に正直。そんな印象。

悠真は秋幸に目を向けた。秋幸は悠真の目の前にいる。年は悠真の二つ上で、十八のはずだ。秋幸と親しくなりたい、秋幸の友になりたい、そう願うのは悠真の本心だった。故郷にいたころは、誰かと友になることに躊躇うことなど無かった。なのに、悠真は躊躇っていた。

——秋幸がもうすぐ命を落とすかもしれないから？

——秋幸が故郷を破壊したから？

——秋幸が紅の敵だから？

いずれにしても、臆病者の悠真は踏み出すことが出来なかった。

赤と友（3）

これまでの悠真は、友となることに理由を求めてはいなかった。友とは、利益抜きにして必要な存在なのだ。今、悠真の目の前には秋幸がいる。故郷を滅ぼした秋幸だ。

悠真は深い信頼で結ばれている紅や野江たちが羨ましい。彼らは深い絆で結ばれている。その紅の真の強さを秋幸は知らない。だから、赤い夜の戦いの時に、紅が義藤と共にいないことが理解できないのだ。紅が強いのは、紅の石を使う力でない。悠真は歴代の紅を知らないが、おそらく今の紅のように優れた力を持っていたはずだ。ならば、今の紅の力とは何なのか……。

陽緋 野江

朱将 都南

朱護頭 義藤

学者 佐久

師 遠次

からくり師 鶴蔵

加工師 柴

紅は多くの仲間を持つ。あの時、敵の襲来に気づいた紅を守るため、赤の仲間たちは最善の策を練った。紅の強さは、多くの仲間にあえられること。多くの仲間にあまれたこと。彼らを友と呼べる気さくさ。人柄。それが紅の強さなのだ。

悠真は紅の強さを知らない秋幸に言った。

「紅は強いよ。俺は、紅のことを、ほとんど知らないけれど、紅がとても強い存在だって知っている」

秋幸は悠真を見た。その目は疑念に満ちていた。

「そういえば、悠真は何者なんだ？どうして、義藤と一緒にいたんだ？」

悠真も無知でない。容易く紅のことを口にしてはならないことくらい分かつていた。紅の所在や人柄は、全て紅を守るための内密情報だ。けれども、悠真自身のことならば構わないだろう。そう思った。「俺が紅城へ足を運んだのは、昨日の朝のことだ。俺は陽緋野江に懇願し、紅城へ足を運ぶことを願ったんだ。野江は反対したさ。

俺は選別で術士の才覚を見出されなかった凡人だったし、野江は紅の周囲や術士の世界がいかに関心な世界だと知っていたから。けれども、俺は懇願した。だって俺は、故郷を失ったんだ。俺の故郷は、豊かな海に面した自然豊かな場所だった。そんな故郷に、異常なほど何日も雨が降り続き、裏の山が崩れて故郷は滅びたんだ。俺は嵐が人の手によるものだと思いき、なんとしてでも復讐をしたかったんだ。俺の唯一の家族だったじっちゃんも、大好きだった惣次も、あの嵐のせいで死んでしまったから。あの嵐を巻き起こした人に殺されてしまったから」

悠真は、秋幸の表情が固まっていくことに気づいた。表情は陰り固くなっていく。秋幸の目は動揺のあまり泳いでいた。

秋幸も、悠真の故郷を破壊した犯人の一人なのだ。

あの嵐の生存者が目の前にいることを、秋幸はどのように感じるだろうか。

犯人として、どのような気持ちで被害者に会うのだろうか。

悠真は語った。惣次のこと、祖父のこと、村のこと、雨が降り続き、故郷が滅びたこと。そして、紅城へ行き復讐を果たすために義藤と一緒にいたことを。

秋幸の表情が陰しくなっていた。とても辛そうな表情だ。秋幸

は泣いたりしない。しかし、その唇は小さく震えていた。

「あの村の生き残りなのか……」

全てを語り終えた後、秋幸が低く言った。自らの罪を明らかにすること、自らの業を背負うこと、それはとても難しいことだ。自分自身を冷静に見つめなくてはならないから。

己の罪を認める潔さを秋幸は持っている。

「俺たちだ」

短く呟いた秋幸の言葉は、何の飾りもいいわけも含まれていない。

「知っていたよ」

悠真は秋幸に言った。故郷を滅ぼした犯人が来ると分かっていたから、悠真は義藤と共にあの場所にいたのだ。悠真は自分が混乱したことを思い出した。秋幸たちを憎む気持ちと、許す気持ちが交錯し、自分の感情が分からなくなったこと。そして今、秋幸も同じように混乱している。

「——俺たちが滅ぼした。憎くないのか？どうして、俺たち助かるように協力するんだ？俺たちは、自分たちの大切な人たちを救うために、他人を殺したんだ。なのに、どうして……」

秋幸は言った。悠真も心の整理はついていない。敵を憎むことが出来なくなった今、どうすればいいのかわからない。けれども、秋幸と友達になりたいという気持ちに偽りは無い。

「そんなこと、俺だって分かっている。俺は秋幸たちを憎んでいたんだ。とても、とても憎んでいた。俺にとつて、村は全てだったから。けど、今は秋幸たちを憎むことが出来ないんだ。秋幸を、春市を、千夏を、冬彦を、俺は憎むことが出来ない。許すとか、許さなとか、そんなのじゃない。逃げて、考えることを後回して、今は助かることだけを考えたんだ。俺は死にたくない。義藤にも死んで欲しくない。そして、秋幸たちには生きて欲しいんだ」

俺たちは、友達になれるはずなんだ。悠真は断言した。

赤と友（4）

悠真は秋幸と友達になりたい。悠真の一方的な願いに困惑したのか、秋幸が頭を抱えた。秋幸は何も言わない。俯いて、何かを考えるかのように息を吐いた。

そして、頭をぐしゃぐしゃにした後、に再び顔を上げた。

その目はとても強い。秋幸の中の何かが切り替わったようであった。秋幸の強い目はしかと悠真を捉え、秋幸の瞳が鏡のように悠真の顔を映していた。

「考えよう。紅に助けを求めるだけじゃ駄目だ。春市と千夏も戦っている。危険と隣りあわせで、今も奴のために戦っている。俺たちは冬彦が紅の下にたどり着くのを、待つだけじゃ駄目なんだ。この時間を無駄に過ごすことは出来ない。俺たちには何か出来るはずだ。何か……」

そして秋幸は言った。

「紅は義藤を残した。危険だと分かって、義藤が殺される可能性を知りながら。義藤を生かしたいなら、そこに行かせるべきではなかっただろう。なぜ、紅は義藤を危険だと知っている場所に行かせたんだ？悠真の復讐に義藤をつき合わせたのか？俺たちが攻め入るという確証が無かったのか？」

悠真は頷いた。紅たちは、敵の正体を突き止め、敵を追い込むために義藤を囷にしたのだ。尻尾切りにならないように、証拠を掴むために義藤を行かせたのだ。

——危険を恐れていては、何も手にすることは出来ない。

紅はそう言った。紅たちは渴望しているのだ。敵の正体を知り、

敵を追い込む一手を渴望しているのだ。もし、ここに悠真が捕らえられていると知っても、敵が白を切ったらどうなるのだ。否定するのは当然のことだ。闇に乗じて悠真と義藤と悠真を殺して捨ててしまえば、悠真たちがここに捕らえられていた証拠は失われる。

敵が奴であるという証拠も失う。それに、豪華な屋敷が物語るように、敵は官府の高官。紅に要求を出せる存在。紅は証拠無しに朱軍を動かすことが出来ない。冬彦が運んだ手紙は事実を伝えても証拠にならない。偽りの手紙として、処分されてしまうだろう。紅は探しているのだ。敵を追い込む一手を。ここに義藤が捕らわれ、敵がここにいて、この主が隠れ術士に石を与え、駒として利用しているという証拠を探しているのだ。真の敵を追い詰めるための証拠が必要なのだ。悠真は秋幸に言った。

「紅たちは探していたんだ。危険を承知で、敵を追い込む一手を」
悠真の言葉に秋幸は苦笑した。

「なるほど、証拠を探すために義藤を行かせたか……。ここに悠真がいるという証拠。ここに義藤がいるという証拠。紅がここに攻め入るに足る証拠。証拠があれば、紅はここに攻め入り、義藤を救うことが出来る」

何が証拠になるのか、悠真は思考を働かせた。何をすれば、紅たちへの手助けが出来るのか。ここにいる悠真は何をするべきなのか。悠真は考えた。そして秋幸は低く呟いた。

「悠真と義藤がここにいる。それが明らかになれば、紅たちがここへ突入する証拠になる。まずは、義藤たちがここにいる証拠を紅たちに送る。手紙のようなものじゃなくて、もっとしつかりとした証拠を。冬彦は手紙を届けてくれる。その手紙で、紅たちは助けてくれるはずだ。俺たちの大切な人たちを。そうすれば、俺たちは紅に従う」

秋幸は悠真に手を差し出し、悠真は秋幸の手を取った。握り合った手から、秋幸の温もりが伝わってくる。

「問題は、どうやって、悠真がここにいるという証拠を紅に手渡すのか、ということだ」

秋幸が言った。簡単なのは、悠真が脱出して、この位置を伝えることだろうが、下手をすれば義藤が殺される。悠真は考えた。紅の言葉を、野江の言葉を、辿った。

——己が生み出した全ての石を監視することが出来る。

紅が誕生して最初に生み出す石は、監視する力を手にする。いつ、どこで、どの石が使われたのか監視することが出来る。そもそも、官府は紅に石の監視を止めるように要求し、紅はその要求を跳ね除けたのだ。悠真は考えた。紅は今も石の監視をしているはずだ。そして、石は本人しか使用できない。本人用に加工されているから。つまり、ここで義藤の石を使えば、義藤がここにいる証拠だ。しかし、義藤の石は限界を超えて碎けている。ならば、悠真が持っていた惣次の石はどうだ。惣次の石を使えば、悠真がここにいる証拠となり、紅は朱軍を動かすことが出来るはずだ。

悠真の中に一筋の希望が差し込んだ。

赤と友(5)

——紅の石

全ての鍵を握るのは紅の石だ。

「紅の石だ」

悠真は言った。不思議そうに秋幸が首をかしげた。悠真は続けた。

「紅は石を監視することが出来るんだ。紅の石がいつ、どこで使われたのか監視している。俺が持っていた石。惣次の石を使えば、俺がここにいる証拠となり、朱軍が動くことができる。ここで、惣次の石が使われるということは、ここに俺がいるという証拠なんだ。惣次の石がここにあるということは、あの時、義藤と戦った者がここにいるという証拠なんだ。そして朱軍が動いてここを攻めれば、全ての罪は明らかにする」

秋幸が頷き、悠真の肩を叩いた。

「そうだな……でも、他人の石を使うことは出来ない」

悠真は秋幸の手を振り払った。

「俺は使える。俺は、惣次の石を使って生き残ったんだ。それに、義藤の石を使ったこともある。俺が持っていたのは惣次の石。俺が持っているはずの石。その石が使われれば、俺がここにいる証拠になるはずだ。石はどこにあるんだ？それを使うだけなんだ。それだけで、証拠になる。紅が朱軍を動かすことが出来る」

秋幸は目を閉じていた。何かを深く考えていた。そして、一つ息を吐いていった。

「分かった、悠真から奪った石は奴が持っている。他人の石を使うことは出来ない。だから、俺たちが持っても無駄だ。だから、奴が持っている。本当に紅が石の監視をしているのなら、石さえ手にすれば、俺たちの勝ちだ。義藤も助かる」

秋幸は立ち上がった。

「石を盗んでみる。もし、戻って来ることが出来なければ、諦めてくれ」

秋幸の覚悟が伝わった。その覚悟が悠真を不安にさせた。秋幸は普通だが強い。普通だから、時に尋常じゃないほどの覚悟を持っている。その覚悟が、秋幸を儚い存在へと見せるのだ。紅城で囷となつた義藤と似ている部分があつた。悠真は秋幸の友でありたいから、彼を一人にしたくなかつた。

「俺も一緒に行く。そのほうが、すぐに石を使うことが出来るから」
悠真は秋幸を一人で行動させることが心配だつた。兄弟の気持ちを
知る秋幸は、兄弟のために戦うはずだ。一人にすることは出来ない。
けれども悠真の申し出を秋幸は断つた。

「義藤はどうする？こんな状態で残していけない」

言つて、秋幸は義藤の顔を覗き込んだ。悠真は秋幸の肩をつかみ、
自分の方を向けた。優しい秋幸が、間違つた方向に進まないように。
「分かつている。でも、見つけてその場で使うことが出来れば、失
敗する確率は減る。いや、殺されるかもしれないけど、紅たちに証
拠を届けることは出来る」

秋幸は悠真の手を振り払つた。

「義藤を残してはいけない。義藤を死なせたりしない。悠真。俺を
信じてくれ。必ず、石を盗んで戻ってくるから」

秋幸は必ず戻るといふ。しかし、その言葉に確証は無い。

「大丈夫。義藤は大丈夫だ」

「なぜ、そんなことが言い切れる？」

秋幸の言葉は最もだ。それでも、悠真の根拠の無い自信は揺るがな
かつた。ここで秋幸を一人にさせるべきではない。義藤は大丈夫だ。
根拠の無い自信が、悠真の背を押していた。

「大丈夫だ。義藤は大丈夫。そう、思えるんだ」

悠真が言い切ると、秋幸は再び義藤を覗き込んだ。そして、秋幸は
義藤の手をつかみ、右手を見た。

「どうして……義藤……そっか……さすが紅だ……」

秋幸は何かを呟いていた。悠真は秋幸が自分の訴えを聞いていないことに苛立った。

「聞けよ」

悠真は再び秋幸の肩をつかみ、自分の方へ向けた。

「義藤にも時間はない。だから……」

悠真は言った。秋幸と一緒にいく必要があると思ったのだ。秋幸が拒めば、隠れてでもついていくつもりだった。すると、秋幸は悠真の言葉を遮って言ったのだ。

「分かった。義藤はきつと大丈夫だ」

秋幸の言葉に不安は含まれていなかった。何かが秋幸を決意させたのだ。何が秋幸の考えを返させたのか、悠真には分からない。悠真は秋幸の考えの変化に不信感を抱いたが、秋幸が悠真の同行を受け入れただけで十分だった。

「一緒に行こう」

悠真の申し出に秋幸は頷いた。

「義藤、必ず戻るから」

悠真は横たわる義藤に言った。

悠真にとって、義藤は生きていて欲しい存在だ。義藤は、悠真より年上だけれども、とても親しみやすく大切な友だから。義藤は意識を失っている。この状況で一人にすることは、とても危険なことだと理解していた。しかし、それ以上に秋幸のことが心配だったのだ。義藤は大丈夫だという根拠の無い自信。そして、秋幸が消えてしまうという不安。

それは、幻覚のためだった。あの時、幻覚の中で義藤と話をしたから、悠真は根拠の無い自信を手にしたのだ。

——義藤、必ず戻るから。

悠真は心の中で義藤に語りかけた。

赤の消えた屋敷（１）

皆が生き残る道を信じて、悠真は義藤を残して牢から外へ出た。

悠真は秋幸と一緒に、外へと出る階段を上った。久しぶりに吸い込んだ外の空気は、地下牢の中のように淀んだ空気ではなく、風が頬を撫でた。

「悠真、こっちだ」

秋幸が悠真を手招き、どこに何があるのか分からない悠真は、秋幸の後を追った。

隠れながら廊下を歩いた。廊下を歩くだけで、とても広い屋敷だと分かる。権威を誇示するかのように庭は手入れされ、 unnecessary 飾りがされていた。庭が手入れされているのは、紅城と同じだった。都南と義藤が手合わせをした中庭も、美しく手入れがされていた。しかし、紅城とこの屋敷は違う。悠真は二つの違いを感覚で感じていた。

時が流れるのは早く、外は赤い夕日に包まれていた。赤の色神紅に守られる火の国で生きる悠真にとって、赤は特別な色だ。赤は時として残酷な色に豹変するが、火の国で生きる悠真にとって赤はそれ以上の存在なのだ。赤があるから命は息吹を持ち、愛を象徴する色は赤だ。赤が熱を持ち、赤が光を灯す。闇夜に輝く赤い炎は、人々から闇への恐怖を消し去る。凍える冬には赤く燃える炎は欠かせない。

「もう、こんな時間だったんだ……」

悠真は一日近く地下牢にいたのだ。眠っていたこともあるだろうが、時間の感覚がおかしくなったように感じた。

「もし、冬彦がすぐに紅の下へたどり着き、紅がすぐに朱軍を動か

したのなら、とつくに人質たちは救われているはずだ」
秋幸が赤い夕日を見上げて言った。それは秋幸の願いなのかもしれない。

失敗すれば、人質を失う。

けれども、悠真たちが動かなくては紅が動けない。

時間的に、今動くのが一番なのだ。悠真たちの失敗は、人質の命に直結しない。悠真は自分に言い聞かせて、己を奮い立たせた。

——大丈夫。

——俺なら出来る。

時に、根拠の無い自信は必要なのだ。踏み出せない自分が情けないと後悔しないように、悠真は先に進むのだ。

悠真は屋敷を見て、空気が濁っているように感じた。何か穢れたものが辺りを覆い、色を濁している。

「嫌な屋敷だ」

悠真はとても小さな声で思わず呟いた。紅城とは異なる。豪華さは似ているのに、紅城とは違う。

——赤が消えた。

火の国では赤が満ちているのに、この屋敷からは赤が消えている。高貴な色の赤が飾られているとか、いないとか、そんなことは関係ない。この屋敷の空気から赤が消えているのだ。

ここは嫌な雰囲気。嫌な色。寒気のような物も感じる。なぜ、この屋敷からは赤が消えたのか、その理由は分からないが、この屋敷から赤が消えていることは事実だ。悠真の目が赤を見出せないのだ

から。赤だけでない。色が薄いのだ。人の心を支える色が希薄で、命があるように思えないのだ。植物が放つ緑は弱く、池に満ちる水の青は消えそうだ。

——色が消えた。

色が消えるということはありません。世界は色で満ちているのだから。しかし、色が消えようとしているように思えるのだ。

「代々続く権力者という証拠だ。醜い屋敷だ。この屋敷の下には多くの屍があるんだ。赤から見放された屋敷だよ」

秋幸が小さく呟いた。おそらく、秋幸が指した「赤」は、紅たちの事だ。赤の仲間たちから見捨てられた、色神紅が手を出すことが出来ない屋敷。そう指したはずだ。しかし悠真には違うように見えるのだ。

——赤は美しい色じゃ。

赤い唇が放つ赤い声を悠真は思い出した。赤の色神。高圧的で、美しい赤はこの屋敷を見捨てた。義藤を助けるために叫んだ赤は、この屋敷を見捨てたのだ。

赤を知っている悠真だから分かるのだ。この屋敷の空気は、赤が嫌う空気だ。だからかもしれないが、悠真は、赤い夜の戦い以来、赤の姿を一度も見えていないのだ。

赤が消えた屋敷は冷たく、孤独だ。火の国から切り離されているように感じるのだ。

「血統官吏なんて、こんなもんだよ。真面目に火の国を思っている官吏もいるのに、一方で紅を裏切る官吏もいる。平和に見える火の国も、実際は戦いの火種を多く抱えているんだ」

秋幸が赤の消えた屋敷を見渡していた。悠真よりずっと深いところ

で物事を考えている秋幸らしい。悠真は赤の消えた屋敷を見渡すたびに、赤と紅の姿を思い出すのだ。

「大丈夫だよ。紅が助けてくれる。紅がこの屋敷に来る。そうすれば、必然的にこの屋敷にも赤が満たされるんだ。鮮烈な赤色がね」悠真たちにとって、赤は希望なのだ。悠真は赤の消えた屋敷で、紅が放つ鮮烈な赤に焦がれた。

赤の消えた屋敷（2）

赤の消えた屋敷。

悠真は濁った空気の中、秋幸と共に足を進めた。豪勢な屋敷には人の気配が少ないが、秋幸は常に気を張っていた。誰にも会わないように警戒しているのだ。

「悠真！」

秋幸の声が小さく響いたかと思うと、秋幸は強く悠真の腕を引いた。物陰に隠れるように秋幸は悠真の腕を引っ張り、秋幸は悠真を手近な部屋に押し込んで隠した。

人が来たのだ。

障子一枚を挟んで声が聞こえ、自然と悠真の心臓が高鳴った。誰が来たのか分からない。ただ、秋幸が警戒していることは事実だ。悠真が気づくより早く秋幸は人の存在に気づき、こつやって悠真を隠したのだから。

——このまま秋幸の裏切りが発覚したら？

——秋幸はどうなる？

——悠真はどうなる？

——義藤はどうなる？

——人質にとられている子供はどうなる？

——春市、千夏、冬彦はどうなる？

このまま秋幸の裏切りが発覚し、秋幸も、悠真も、そして義藤も殺されてしまいかもしれない。一つの失敗が、皆の命を奪うのだ。
「何をしているのですか？」

その声は女性のもの。おそらく、使用人か何かの声だ。彼女が秋幸の裏切りに、隠れている悠真の存在に気づいているのか分からない。気づかれてはいけない。悠真は、息を殺した。

「いや、別に何も」

秋幸が答えると女性は言った。

「昨日の作戦に失敗したとか？」

女性の声は障子越しに凜と響いた。

「負けたわけじゃない。ただ、紅が身代わりを立てていただけだ。俺たちは紅の側近、朱護頭義藤を捕らえたのだから」

秋幸は冷静だった。悠真を隠しながら、その場をやり過ごそうとしているのだ。

「それで、今度は勝てるって言うの？」

女性は敵なのか、味方なのか、障子越しの悠真には判断できない。

「春市と千夏が準備をしている。勝てるとかそんなこと関係ないんだ。俺たちは、するしかないんだから」

秋幸の言葉に偽りは無い。

「それはそうね。皮肉なものよね。術士という類稀な才能を持ちながら、結局は私利私欲のために利用される道具でしかないのだから。あなたたちなら、いけたんじゃないの？陽緋や朱将たちの近くへ。彼らと同じ土俵で、紅を護り、彼らの仲間として戦うことが出来たんじゃないの？朱護頭を捕らえることが出来る力を持っている、ということとは、そういうことじゃないの？」

秋幸たち、四人の隠れ術士は才能に恵まれている。しかし、戸籍を

持っていないということだけで、隠れ術士になるしかなかったのだ。
「そんなこと、嘆いたって何にもならない。だって、親のいない俺が術士の才覚を手にしたら、歩むべき道は限られているのだから。己の境遇を言い訳にするのは、間違っている。俺は、何も後悔したりしない」

秋幸は強い。当たり前のように、当たり前前に考えられないことを口にするのだ。

「それで、あなたはどこにいてここにいますのかしら？二人と共に行かないのかしら？」

女性は秋幸に問うた。

「俺が一緒に行つて、未来が変わると思えないから。俺は、ここに残つて地下牢の見張りでもするだけだ。だって、相手は術士なんだから」

秋幸の返答に女性が笑うのが分かった。

「勝手な行動は慎みますように。裏切るようなことがあれば、私の娘も死ぬのだから」

女性の声は強い。

「分かっているさ。奴が俺たちを捕らえるのは人という牢獄。看守さえも、囚人なんだから。誰もが最愛の人を見捨てる事が出来ないから、従うしかない。裏切りれば人質は殺され、裏切りを見逃せば人質を殺さる。決して逃げる事の出来ない牢獄の中に、俺たちはいるのだから。逃げるには、人質を捕らえない第三者の介入が必要だ。そんな人、どこにいる？紅さえも手が出ない、この屋敷の中。誰が助けてくれるって言うんだ？ただ、生き残ることを願うだけだ」

悠真はその言葉で全てを知った。奴は、使用人全ての人質を捕り自分に従わせているのだ。それが無性に腹立たしい。人質がいるから勝手に動けない。裏切りを見過ごせば、己の人質を失う。使用人同士が監視し合う。決して逃れることの出来ない牢。この人たちは、牢獄の中にいるのだ。

――赤。

悠真は赤を願った。この屋敷を鮮烈な赤が救ってくれるように。赤が救ってくれるように。願うだけだ。息を殺し、気配を消し、存在を悟られないように。秋幸の人質が殺されないように、願って己の存在全てを消し去るために悠真は息を殺した。

秋幸が苦笑交じりに言った。

「分かっている。俺だって、人質を捕られているんだ。気安い行動をとったりしない」

秋幸が言い、女性が続けた。

「気をつけて下さい。私たちには、従うことしか出来ないのですから」

足音が遠ざかる音が響いた。そこで、ようやく悠真は息を吐くことが出来た。息すら出来ないほど、悠真は身を固めていたのだ。自分が生きている証を、自分が人であることを消し去り、ただの物になるうとしたのだ。無駄かもしれないが、悠真は必死だった。背中が汗で濡れている事に気づき、自分がとても緊張していたのだと気づいた。

赤の消えた屋敷（3）

遠ざかる足音。

遠ざかる危機。

足音が遠ざかるのを確認すると、悠真は深く息を吐いた。無意識のうちに呼吸を止めていたため、心臓は驚くほど速く脈打ち、自然と呼吸は荒くなった。息を吐いて、悠真はようやく部屋の中を見る余裕が出来た。薄暗い部屋の中は、空気がよどんでいた。

背中に流れる汗は、秋幸の裏切りが発覚しないかと、強い緊張を強いられていたからだ。

（良かった）

悠真は心底安堵した。惣次の石を探しに、秋幸と共に行く。そんな悠真の意見が通り、今に至る。ここで悠真がしてきたために失敗してしまった、人質が殺されてしまった、それだけは避けたかったのだ。悠真は今以上に罪を負って生きて行けるほど強くないのだから。

秋幸が咄嗟に悠真を押し込めた部屋は、どうやら物入れらしい。締め切られた部屋には埃が満ちて、長い年月換気が行われていないようだった。締め切られた部屋は障子越しの薄明かりしか届かず、それゆえ湿気がこもりかび臭かった。

異様な部屋だった。

——赤が消えた。

この部屋には、色が無かった。色が見捨てた部屋だった。

（ここは……）

悠真は辺りを見渡した。

部屋を見て、悠真は屋敷の異常さをまざまざと感じさせられた。
「何で、何で……」

先ほどとは異なる意味で心臓が高鳴った。目の前にある光景を否定したかったのだ。

恐ろしい。

恐ろしい。

恐ろしい。

恐ろしい。

悠真は目の前の全てを否定した。これは夢だ。現実ではない。

なぜ。

なぜ。

なぜ。

目の前の光景を否定した。

ここが火の国のはずが無い。色神紅と赤がいる火の国は、小さな島国だが平和な国だ。もちろん、一般市民の手の届かないところで、色神と官府が争っているが、それは術士の世界のこと。火の国は小さな島国だが平和だ。自然が豊かで人々は温かい。

有り得ない。

悠真は現実を否定した。部屋の中の光景を否定して、これが夢だと信じていたのだ。

有り得ない。

悠真の心臓が強く、速く脈打った。先の緊張以上だ。

有り得ない。

悠真は呼吸をすることが出来なかった。この部屋で、呼吸をして酸素を体に取り込む。それが汚らわしく、一つ息をするたびに、己が内部から腐っていくように思えたのだ。

憎しみの声が、部屋の色を消していく。呪いの声が、色の輝きを消していく。命の息吹を消していく。火の国を憎む声。生きる者を呪う声。

有り得ない。

有り得ない。

悠真の膝が震えた。

悠真の唇が震えた。

人骨。

部屋の中は、無数の人骨が転がっていた。頭蓋骨、肋骨、骨盤、大腿骨、上腕骨、すべてが無造作に転がっていた。一人や二人分ではなく、数え切れないほどの骨が転がっているのだ。

部屋の中に転がる骨。

「どうして……」

それは作り物でない。大きさが異なるのだ。子供と思えるほどの大

きさのものもあつた。あまりに残酷で、悠真は息をすることを忘れた。息をすることを忘れるほどの衝撃だった。悠真は田舎者だから、街のことは分からない。街でこの光景が当然なのなら、悠真は田舎者でありたかった。田舎者で十分だった。

「じつちゃん、帰りたい」

悠真は床に座り込んだ。

「じつちゃん。惣次。俺、帰りたい」

平静を保つため、悠真は故郷を思い出した。故郷を思い出さなければ、悠真の心が砕けてしまいそうだった。

「じつちゃん」

無造作に転がる髑髏のいくつかが、悠真を見ていた。虚ろに空いた穴には、かつて目があったはずだ。黒い穴がじつと悠真を見ているのだ。

——許さない。

かたかた。かたかた。髑髏の口が動いた。

——殺してやる。

かたかた。かたかた。髑髏の口が動き、歯が音を立てた。手がもかくように動き、悠真に近づいてきた。

この場所からは色が消えている。憎しみが、世界の輝きの源である色を打ち消しているのだ。

ここは、普通の人が生きるべき場所ではない。

田舎者の悠真の正直な気持ちだ。

赤の消えた屋敷（４）

色をかき消す呪いの声。

憎しみの声。

髑髏が悠真を見つめ、髑髏が悠真に語りかけた。

永遠に続く、苦しみの声を。

永遠に続く、憎しみの声を。

逃がすな。

捕らえろ。

さあ、地獄へ。

悠真は耳を塞いで蹲った。固く目を閉じると、世界は黒で塗りつぶされる。目を閉じて、黒い世界に故郷の様子を描く。黒い世界に紅城の様子を描く。笑っている祖父。笑っている惣次。笑っている紅。笑っている赤の仲間。

「何も見ない」

悠真は呪文のように呟いた。

「何も聞こえない。大丈夫、大丈夫」

悠真は自分の世界に閉じこもった。色を思い描いた。色があれば、世界は輝くのだ。

「大丈夫、大丈夫」

心を閉ざせば大丈夫。何も感じなければ大丈夫。

蹲る悠真の肩に温かな手が乗せられた。

障子が開き、閉ざされた部屋に光が差した。

「大丈夫か？」

秋幸が声を発すると、色の消えた世界に色が指した。

秋幸の声はとても落ち着いている。どうして、落ち着いていられるのか、悠真には分からなかった。この異常な状況下で落ち着いていられるはずが無いのだ。

「どうして、どうして……」

悠真は座り込み、人骨を指差した。秋幸は悠真の肩を叩いた。そしてゆっくりと膝を折り、床に座り込む悠真の横に座った。

「見せしめだ」

秋幸は言った。人骨を見て、そして低く続けた。

「使用人たちが裏切らないように、今まで殺した人たちを、こうやって置いてあるんだ。使用人同士に見張りをさせ、それぞれから人質をとる。妻を、子供を、夫を、兄弟を、親を……。誰も逃げられない。誰かが逃げることを見逃せば、自分の人質を殺される。そして、自分自身も、殺されるんだ。この見せしめの骨が、俺たちの自由をさらに奪う」

悠真は底知れぬ不安を覚えた。深い、深い闇の中にいるようだった。そこは冷たい場所で寒さと孤独が悠真を襲う。誰も脱出できない牢の中で、互いに互いを監視しあっている。そんな中で、悠真と行動を共にする秋幸も、わずかな隙間から秋幸たちを逃がそうとした春市と千夏も、一人脱出に成功した冬彦も、悠真より遥かに強い。悠真では出来ない決断と行動。今まで感じたことがない不安と恐怖に教われ。悠真の身体は震えた。

「大丈夫、大丈夫だ」

秋幸は障子を閉め、不安に襲われる悠真の隣に秋幸がいる。それだけで悠真は安心できた。

「異常な世界なんだ」

秋幸の横顔が悠真の隣にあった。

「でも、恐れちゃいけない。彼らは皆、生きていたんだ。生きて、未来を願っていたのに、不条理に奪われたんだ」

秋幸は悠真と二つしか年齢が変わらないのに、悠真よりずっと大人だ。秋幸は座ったまま手を伸ばし、一つの髑髏を手に取った。少し小さな髑髏。前歯が二本欠けている。

「これは、伊汰の骨だ。伊汰は八歳だった。乳歯が抜けてね、歯抜けだった時に殺されたんだ。伊汰の母が逃げようとした仲間を見逃してね、それで巻き添えだ。死ぬときまで、歯抜けの顔で笑っていたよ。俺は、何とかして伊汰を助けたかったけれど、その力が無かったんだ」

秋幸は愛しそうに髑髏を撫でた。

「最期の言葉はね、饅頭が食べたい。そんな言葉だったよ。伊汰は可愛い子だった。俺は、助けることが出来なかったんだ。どんなに悔やんでも、伊汰は生き返らない。自然に帰ることもなく、永遠にこの屋敷に捕らわれるんだ。大丈夫だよ、伊汰。解放してあげるから。伊汰が好きだった青空を見せてあげるからね」

髑髏を手に持つ秋幸は、神秘めいて、人間離れしているようであった。平凡なのに、悠真とは生きる世界が違う。そう教えられる姿だ。悠真の故郷では、死した者は荼毘された後、海に流される。墓として骨壺に入れる風習が火の国では一般的だが、他にも様々な埋葬方法がある。山に戻し、その上から木を植えることもある。悠真の故郷が海に骨を流すのは、命は海から生まれるという考えに基づくものだ。

悠真の父は海で死んだから、死した後は海に帰った。母も死した後は海に帰った。そして、祖父は故郷と共に海に流された。海は命を生み出し、命は海に帰る。

この屋敷で殺された者は、海に帰ることが出来ない。自然に帰ることが出来ない。墓で眠ることも出来ない。この屋敷の主は、生きている間だけでなく、死した後も捕らえているのだ。

全てが恐ろしかった。

赤の消えた屋敷（5）

秋幸は教えてくれた。

その声には怒りが満ちていた。平凡な秋幸が怒りをあらわにしているのだ。

奴の名前は「下村登一」という。奴とは、この屋敷の主のことだ。苗字があるのは、彼が代々高官であることを示している。火の国で苗字を持つものは半分にも満たない。田舎者の悠真にも苗字は無く、悠真の故郷で苗字を持っているのは名主や医師など権力を持ったものだけだ。苗字を持つ者は親から子へと権力が譲渡され、将来が保障されている。

苗字を手にするには、苗字のある家に生まれるか、養子に貰われるか、己が出世して権威をてにするしかない。例えば、術士として名を上げるか、官吏として雇用されて立場ある地位まで出世するか。いずれにせよ、苗字を得る道は限られている。

つまり、地位のある者は苗字を得る権利を手にし、その繁栄を子孫に残すことが出来る。逆に、親が有能であっても、子が無能であれば家が取り潰されることもある。陽緋である野江や、朱将の都南、そして佐久や義藤にも苗字はあるはずだが、彼らは苗字を名乗らない。それは、己の繁栄を子供たちに継がせない決意でもあるのだ。苗字を使用するのは、豪商や地主たち。己の繁栄を子孫に継がせる存在たち。

下村登一もそうだ。親から、祖父母から、先祖代々繁栄を受け継いでいる。この屋敷も建てたのは先祖だろう。登一は、誰よりも紅を崇拜していた。そして、紅になりたいと願っていた。なぜなら、紅は色神だから。火の国の頂点に立つ存在だから。しかし、赤は登

一を選ばず、登一は色神になれなかった。己が色神になれないことへの不満が、紅へと向けられた。そして、紅を超える存在になろうと考えたのだ。紅は、民からの信頼で成り立っている。登一は信頼を集められない。だから、人を使つたのだ。人の心を使つたのだ。そして、力を使える四兄弟を利用し、紅の暗殺を図った。

悠真は心の奥から怒りが湧き上がってくるのを感じた。なぜ、このようなことが生じるのか。悠真には分からなかったし、分かりたくなかった。怒りは悠真に決意を固めさせた。

——止めなくてはいけない。
復讐心でなく、決意が悠真を突き動かした。この状況を見過ごすことは出来ない。

「許せない」

自然と悠真の口から言葉がこぼれた。田舎者の悠真が固執するものは何もない。権力にも興味は無かった。生活が出来て、笑って生きることが出来れば十分だ。秋幸が伊汰の髑髏を撫でながら言った。「人は誰しもが、手にしたものを手放したくないと思うものかもしれない。だから人は自分の力で物を手にしなければならない。自分の力で手にした物は、自分の力量の範囲内の物だから、手放さないように苦戦することも無い。俺だって、手にした物を手放したくないよ。孤児だった俺は、義兄弟と呼べる仲間を得て、二度と一人に戻りたくないと思っている。家族と呼べる子供たちを失いたくないと願っている。登一は、多くを手にしすぎたんだ。先祖が登一の許容量を超えた物を与えすぎたんだ。だから、登一は苦労した。手放さないように、家の顔を潰さないように、そして、己が潰れていった。——そういう事だよ」

秋幸の言葉で悠真は己を振り返った。悠真は何を持っているのだろうか。これまでだったら、悠真が持っているのは故郷だった。しかし、故郷は破壊された。残された悠真は、何も持っていないのだろうか。否。悠真は持っているのだ。赤の仲間との絆を、紅への気持ち、友を。悠真はそれを手放したくない。そのために、登一を憎

む。

悠真が抱いている気持ちは、これまでとは違う。奪われた物の復讐ではなく、己の大切な物を守る為の敵対心なのだ。

「大丈夫」

悠真が言つと、秋幸は不思議そうに悠真に目を向けた。どういうわけか、悠真は笑いたたい気持ちだった。不思議そうな秋幸がおかしいのか、自分がおかしいのか、理由は分からないけれども笑いたたい気持ちだった。

「登一は、多くの物を持っていると思うんだ。でも、それは物ではない。俺なんて田舎者だから、そういう物は何も持っていないよ。でも、俺は登一より多くの物を持っていると思うんだ。人との繋がりが、人との繋がりが、何よりも大切な物だと、俺は思うんだ。だから大丈夫。俺たちは登一より多くの物を持っているから、負けるはずがないんだ」

小さく、秋幸が笑った。

「悠真は、面白いな。悠真が一緒だと、負ける気がしない」

苦笑した秋幸の表情が柔らかく崩れ、緊張の糸がほぐれていく。悠真以上に秋幸は緊張していたのだ。秋幸が大人だから、表情に出さないだけなのだ。悠真は立ち上がった。

「許せない。必ず、必ず止めよう」

悠真が言つと、秋幸は微笑んだ。

「もちろん。一緒に、こんな支配を終わらせよう」

秋幸が言つて、悠真に手を差し出し、悠真は迷うことなくその手を取った。

赤の消えた屋敷（6）

庭園に面した廊下を歩きながら、悠真は辺りの様子を探った。静寂と気持ちの悪い色が辺りを包む。先ほどの人骨の光景が、悠真の脳裏をよぎり、再び悠真を恐怖と不安に落とそうとしていた。その不安を覚えるたび、心を落ち着かせるため悠真は故郷の海を思い出した。

海の中の静寂は心地よい。海は人を喰うのに、少しも不安を感じさせない。海の水はとても冷たいのに、身体は熱を帯びたように熱くなり、心音と息継ぎの呼吸音が響く。苦しさを覚えるたび、海面に顔を出し、肺に酸素を取り込む。全ての命は海から生まれる。祖父がそんな話をしていた。だから、父は命の生まれる海に帰るだけだ。母が死した後も、村の風習で燃やした骨を海に流した。弔い、祈りを海へと捧げる。海へ帰ることもなく、汚い部屋に押し込められた遺体が無残だった。赤い色を失い死に、青い海に帰ることも出来ない。それはとても辛いことだ。

「登一は、鍵をかけた部屋に自分のものを入れている。手にしたものは二度と離さない。石もきつとそこにある」

秋幸が歩きながら言った。複雑に入り組んだ屋敷は、まるで迷路のよう。途中、人とすれ違うたびに、秋幸は悠真を部屋に押し込んで隠し、隠れながらも悠真と秋幸は確実に石へと向かった。もちろん、人骨のある部屋は、先ほどの一室だけではない。

「俺も数えたことは無いけれどね。全部で十数部屋はあるはずだ」
秋幸は人骨の部屋に出会うたびに、苦笑していた。これだけの人がこの赤の消えた屋敷で命を落としている。

身を隠しながらだから、少し進むのに時間がかかる。悠真たちは慎重に、それでも確実に目的の石に近づいていた。

「待つて」

唐突に、秋幸が悠真を止めた。

「どうかしたのか？」

辺りに人はいない。なのに、どうして秋幸が止まったのか分からない。秋幸は辺りを見渡して、そして言った。

「いつもと違う気がする。どこかが違う」

悠真には分からない。先ほどの静寂と何も変わらない。不審な人影もない。なぜ秋幸が止まるのか分からなかった。

「何が違うんだ？」

悠真は尋ねた。

「分からない、でも、何かが違うんだ。嫌な予感がする。俺は、こういう勘は当たるんだ」

秋幸は躊躇って動こうとしなかった。

「どうするんだ？」

悠真は秋幸に尋ねた。悠真は分からない。どうすれば良いのか分からないのだ。秋幸は危険だと言う。裏切りが発覚することの代償を悠真は知っているつもりだ。だから秋幸が恐れる気持ちも分かる。

どうすれば良いのか、ここで悠真が決めることは出来ない。代償を支払うのは悠真でなく、秋幸なのだから。

「分からない。でも、戻ることも出来ない」

秋幸は顔を覆った。迷っているのだ。悠真は紅の言葉を思い出した。

——危険を恐れていては、何も手にすることは出来ない。

今、悠真たちは選択を迫られている。義藤は、危険を承知で証拠を手にするために動いた。義藤は選択したのだ。悠真はどうすべきなのか。悠真は秋幸のことを疑うつもりはない。秋幸が危険を感じているのなら、危険なのかもしれない。それでも、逃げるわけには行かないのだ。故郷を失った絶望をぶつけるために、殺された人たちの復讐をするために。今、悠真は復讐に息巻いているのではな

い。感情は荒立たず、自分でも驚くほど冷静だった。冷静だからこそ、悠真は後悔しない選択が取れるのだ。

裏切りが発覚した際の代償を支払うのは秋幸だ。もちろん、悠真も支払わなくてはならないだろう。吉藤が殺されてしまつかもされない。己が殺されるかもしれない。しかし、この裏切りに対して大きな恐怖を抱いているのは、秋幸の方が悠真より大きいはずだ。

——危険を恐れていては何も出来ない。

悠真は自分に言い聞かせた。ここで引き返すことは出来ない。秋幸に、後悔の無い選択をして欲しいと願いつつ、間違った選択をして欲しくない、と強く思うのだ。

悠真は秋幸に言った。

「秋幸が危険を感じるのなら、本当に危険なんだと思う。でも、紅は言った。危険を恐れているのは、何も手にすることは出来ない。だから義藤は、あの場にいたんだ。危険を知っていても、大切なものを手にするために。敵の正体を突き止めるために。秋幸、俺は危険でも行きたい。紅たちが動けないのなら、俺は危険でも行きたい」

秋幸は振り返り、悠真を見た。秋幸の表情には戸惑いの色が強い。悠真よりも二歳年上の秋幸は、戸惑い、そして目を細めていた。

秋幸は悠真と辺りを何度も見比べて、そして言った。

「分かった、行こう」

秋幸は足を進めた。

秋幸の行動が人質の解放と、牢の崩壊につながると願って、悠真は秋幸とともに行動をした。

赤の焦り（１）

庭園の中にある離れが登一の自室だった。そこは鉄製の扉が付けられ、南京錠で固定されていた。鎖で嚴重に固定された扉が登一の疑り深い性格を表していた。排他的で他者を信頼しない。そういう存在。

「どうやって入るんだ？」

悠真は尋ねた。すると、秋幸は答えた。

「侮るなよ、俺は隠れ術士だ。大丈夫。下村登一は慎重な性格。己が俺たち隠れ術士に貸し与えた石を必ず回収する。これは、俺が盗んだ石だよ。官府に潜入して内情を探っていたとき、色神紅派の派閥から盗んだんだ。紅派は、官吏が溜め込んだ石を回収して回っている。加工されていないから使いにくいけれど、多少は役に立つだろう」

秋幸は紅の石を出した。その石を鎖に当てると、紅の石が僅かに輝いた。すると、鉄が赤くなり、ぐにやりと溶けて切れたのだ。

「紅の石の基本の力は熱だ。だから簡単なこと。術士は紅の石の様々な力を生み出す。熱量を変化させて刃物にかたどったり、大切な者を守る盾となったりする。風を生み出し、波をうねらせることも可能だ。石は色によって力が異なるとされているけれど、紅の石ほど可能性を秘めた石はない。俺たち火の国は、紅の石で守られている。俺たちは誇りに思わなきゃいけないんだ。火の国で生きられることを。色神紅の下で生きられることを」

秋幸の手の中で、加工されていない角ばった紅の石が転がっていた。悠真が見たのは、加工された後の石。形を整えられ、術士に合わせて色を合わせた後の石。今、秋幸の手の中にある石は加工される以前の石だ。

紅の石は、色神紅によって生み出される。どのようにして生み出されるのか、悠真は知らない。知っている者は少ないだろう。

火の国は紅の石を持っているから、豊かなのだ。紅の石が貴重なら、外交面でも役立つ。島国として侵略を防いでいるのも紅の石のおかげなのだ。思うと、紅の石はとても輝いて見えた。赤い色がとても高貴に思えた。そして、紅が大きな重圧の中で生きていることを改めて感じた。紅の石が強い力を持っているのなら、監視を止めることは出来ない。官府の思い通りにさせることは許されない。

進むしかない。進んで、紅の力になりたい。悠真は己を奮い立たせた。

「入ろう」

秋幸は鉄の扉を開いた。すると、鈍く重い音が響いた。

「このままじゃ気づかれる。急ごう」

秋幸は身体を横向きにして鉄の扉の奥へと入っていった。悠真もそれに続いた。

離れ屋敷の部屋の中は異様だった。窓には鉄棒がはめられ、まるで牢獄だ。畳みの上は布団は乱れ、何ヶ月も、何年も掃除をしていないようだった。

「他人を部屋に入れるのを嫌っていたんだ。日々、病的になっていく。今じゃ生きているのか、化け物なのかも分からない。権力や地位が人の心を蝕み、狂わせるのなら、俺はそんなもの欲しくないな。立派な屋敷を持ちながら、戸籍を持たず山で暮らす俺たちより荒んだ暮らしをしているのだから」

秋幸は部屋の中をあさり始めた。悠真もそれに習った。汚い部屋の中、牢獄のような場所で生きていることの気が知れなかった。広い屋敷があるのに、主は自らの部屋の鍵と鉄格子をつける。悠真が登一を見たのは一度だけだ。ほんの一目、春市を殴り蹴る姿を見た。

醜く、愚かな存在。

悠真は部屋をかき回し、一つの箱を見つけた。その箱に呼ばれているような気がしたのだ。

秋幸には見えないかもしれないが、赤い光が箱から零れているのだ。その赤は、惣次の赤と同じ色だ。悠真が故郷で慕っていた下緋

の惣次と同じ赤色を持っている。つまり、惣次に合わせて加工された石があるということだ。

重厚な小さな箱には鍵が掛けられているが、隠れ術士の秋幸の力があれば何の問題もない。秋幸が加工前の紅の石を取り出し、紅の石が赤い光を放つと箱の金具が溶けた。

零れ落ちる赤い光に導かれるように、悠真は箱を開いた。

小さな箱を開くと、そこには紅の石があった。

「これ、惣次の石かな？」

悠真が尋ねると、秋幸は紅の石を手に取った。

「たぶん。ほら、紐の付け根に飾りがついている。俺が悠真から奪った石も同じ飾りがついていた」

秋幸は言うつと、悠真に石を握らせた。悠真の手の中に、紅の石が入った。二年前の戦いで力の大半を失い、悠真の故郷に身分を隠して隠居してきた惣次。その惣次が隠居前に使っていた紅の石は大きな力を有している。

悠真が憧れていた惣次を守り、惣次と共に戦ってきた紅の石。紅の石は歴史を持ち、紅の石は惣次の思いを持っている。惣次と赤い色が同じだから、まるで惣次がそこにいるように感じた。

——惣次。

悠真の脳裏に惣次の姿が浮かんだ。術士の才覚を持たない悠真に、優しく諭してくれた惣次。惣次と共に歩んだ紅の石が今、悠真の手の中にある。それを思うと不思議な気分だった。

「やっと、惣次の石が戻ってきた」

悠真は強く紅の石を握り締めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2341x/>

一色

2011年12月21日01時54分発行